IS〈インフィニット・ストラトス〉　～BLOOM～

Mitsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　～ＢＬＯＯＭ～

【Ｎコード】
Ｎ１２４５Ｒ

【作者名】
Ｍｉｔｓｕ

【あらすじ】
女性にしか動かせない世界最強兵器『インフィニット・ストラトス』こと『ＩＳ』。
しばらくして世界を震撼させる出来事が起こったのだ。なんと一人の男性がＩＳを動かすことに成功してしまったのだ・・・彼の名前は織斑一夏。だが、実はＩＳの発明者である篠ノ之束の傍にもう一人、男性でＩＳを操縦することの出来る人物がいるのだった。これはその男の子が体験する素敵な素敵なお話・・・（素敵でもなんでもありません）

これは二次創作です。原作にそって話は進んでいきますが、その中にオリジナルを組み込んでいく形になっています。

――６００００ＰＶ突破しました！　ご愛読してくださってる方、ありがとう御座います！――

プロローグ（前書き）

初めましての方は始めまして！
そしてなのはシリーズを読んでくださっている方でＩＳに興味がある方は良かったらこちらもよろしくお願いします！

他の作者の方々が書き始めたので、その勢いに乗って書いてしまったって感じです。
ストーリーは原作と同じように進める予定ですが、そこにオリ主とオリＩＳを加える次第でございます。

Q．勢いで書くんだったらオリジナルも何も決まってないんじゃないの？

A．大丈夫です！プロローグを書く前に先にオリ主とオリＩＳの詳細だけ完成させてから書き始めたのでその辺は大丈夫です！

Q．他の作品はどうするの？

A．なのはシリーズの方をメインに書いているので、こちらの方は更新が不定期になるかもです。

それでも大丈夫！という方は、　ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　～ＢＬＯＯＭ～　をこれからよろしくお願いします！

プロローグ

男女の社会のパワーバランスが崩れ、女性の方が力を持った世界……

そのパワーバランスを崩した理由は『インフィニット・ストラトス』通称『ＩＳ』と呼ばれる世界最強の兵器が現れた時代からだ。

『ＩＳ』は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだったがとある女性が引き起こしたある事件によってその圧倒的な性能を見せつけ宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まった。

しかし、そこにはある重大な問題があった。

それは『ＩＳ』は女性にしか動かせないのである。

原因は不明なのだが、なぜか女性にしか動かすことができなかった。

だが、ある日……

女性にしか動かせないことが当たり前になった頃に、有り得ない事が起こったのだ。

ついに現れてしまったのだ。

男性で『ＩＳ』を動かせることの出来る人物が……

織斑一夏、それが彼の名前だ。

この出来事は各国を驚愕させるが……　実はこの世には織斑一夏以外にもう一人『男性』で動かせる人物が居たのだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ふぁぁぁ………、眠いね～」

そう言いながら一人の少年が大型のテントから出てきた。
テントから出るとそこは森と言うより熱帯雨林で、空気が湿っていて野鳥や野生の動物などがいるのが見受けられる。

「しかし、アマゾン川付近での生活にも馴れたらどうってことないね。　最初は食料とかどうしようかと思ったよ～」

「あっ、ハルくん起きた～？　ちょっとコーヒー入れてくれると束さん嬉しいんだよ～」

「ふぁ～い、すぐに持っていきま～す」

テントから少し離れた所でウサミミのカチューシャを着けた女性が顔をモニターに向け、手のひらを揺らしながらコーヒーを所望した。

――――篠ノ之束

恐らくこの世にこの人の名前を知らないと言う人物はいないだろう。
なんせあのＩＳの基礎理論を考案、実証し、全てのＩＳのコアを作った人なのだから。
本人曰く、天才『美少女』科学者と言っているが、確かに天才であるし、それに美人でもある。

ハルくんと呼ばれた少年はテントへと戻り、数分後にコーヒーが入った、ウサギマークの付いている可愛らしいマグカップと共に出てきた。

「束さん、今日だっけ？」

「そうなんだよ～、ちーちゃんにはとっくの前に連絡しておいてあるから大丈夫だと思うよぅ？」

ハルくんからマグカップを受け取りずずずっと音を立ててそれを飲む。

「う～ん、でも僕がいなくなったら束さん一人でちゃんと食べていけるのかな？　掃除もちゃんと出来るのかな？　それでだけが心配だよ」

「む～、私を誰だと思っているのかねハルくん！　誰もが認めるらぶりぃ束さんだよ？」

腰に手を当て怒るフリをする束をあははははっと笑いながら眺める少年。
その光景は本当の姉と弟を見ているかのようだった。
ちなみにこの二人は姉弟ではない。
今言えることは、この少年は束のお蔭で今まで生きてきたと言っても過言ではないという事だけ。

「それじゃあちゃんとご飯も食べてくださいね？　後、こう言ってもだめだと思うけどちゃんと寝てね束さん」

「りょ～か～い。　箒ちゃんといっくん、後ちーちゃんによろしく言っといてね～」

束は少年の頭をわしゃわしゃと雑に撫で回す。
その撫で回し攻撃が止むと、ぐしゃぐしゃになった髪を手で直しながら少年は元気良くこう言った。

「それじゃあ、行ってきます！　束さん！」

突然、少年の首にチェーンを通してぶら下がっている指輪が光だし少年の全身を包み込み空へと飛んでいった。
束はニコニコと笑顔を作りながら、それが見えなくなるまで見送っ

た。

「あはは、少し寂しくなるな～……　っと、早く次の段階に進めないと。　時間はお金では買えないよ～！！」

2，3度その場で飛び上がり穿いているスカートを舞い上がらせた。パンツの色は……　残念ながら見えませんでした。

プロローグ（後書き）

主人公　設定

名前　九曜（くよう）　春樹（はるき）

性別　男

身長　一夏より少し小さいくらい

体重　５８キロ

詳細

髪の毛の色、及び目の色は日本人特有の黒だが髪はほんの少しだけ茶色がかっている。

性格はどこにでもいる元気な男の子で、基本なんでもプラス思考に考え、物事を考えずに行動する子供っぽい一面もある。

しゃべり方は束に少し似ているところがある。

捨て子で、たまたま目の前を通った篠ノ之箒の姉である篠ノ之束の後をついていき、最初は彼女に完璧にスルーされるもののいつの間にか仲の良い姉弟のような関係になる。

風船のように自由気ままに行動する束を後ろから追いかける主人公は、基本彼女の身の回りの世話をする羽目になり気がつくと家事は一通りできるようになった。

身の回りの世話だけでなく、ＩＳの設計さらには開発も手伝うこともあり、本当に基礎知識だけだが理解することができる。

束とジャングルなどで生活していた事もあり、その中を生き抜くためによく狩りをしていたので勝手に運動神経は良くなっていった。

オリジナルＩＳ

名称「唐梅（からうめ）」

世代　第４世代

色　　白、赤

詳細

束が白式と紅椿を設計した後に、その後継機として開発。
対象のエネルギーをすべてを消滅させる白式の能力、そして少ない残量のエネルギーを増幅して一気にフル状態にする紅椿のアビリティーを一つにしたのがこのＩＳ。
ただエネルギー増幅機能は何度もに使用可能ではなく、一回の戦闘に使える回数は１、２回が限度で、それ以上は使用することができないし無理やり使おうとするとＩＳ自体に欠陥を及ぼす。
攻撃力・防御力・機動力及びその他の性能は他の第４世代である白式と紅椿とほぼ同じ。

ワンオフ・アビリティー

「雪消月（ゆきげしづき）」
白式が使用する零落白夜と同じ

「百花繚乱（ひゃっかりょうらん）」
実際はワンオフ・アビリティーでなく、ＩＳ自体に人の手により（束より）取り付けられたもの。
エネルギーを増幅する機能で効果は紅椿が使用する絢爛舞踏とまったく同じで、使用時には展開装甲から白と赤の粒子を散布し機体が赤く染まる。
詳細にも記載した通り一度の戦闘に使用できる回数に制限がある。

武器

「白鷺（しらさぎ）」
刀剣の形のした唐梅の主力武器。　基本は二刀流だが柄を連結させることが可能でさらに連結形態からそれを弓のように使用することができるので運用の幅が広い。
刀身は白一色だが、柄は白と赤の二色。

「紅蓮雷撃（ぐれんらいげき）」
腰の両サイド部分に設置された電磁レール砲で、普段は二つに折られていて小型化されている。
威力はゼロ距離で使えば盾殺し（シールド・ピアース）より若干劣るくらいの威力。

至近距離で使うのがベストだが中距離での使用も可能。

「？？？」

束により改良中

エピソード1　【がっこ～う】（前書き）

とりあえず原作1巻の半分くらいまで更新！

エピソード1　【がっこ～う】

～一夏Ｓｉｄｅ～

う、う～ん……

教科書を開いて朝早くから自主勉をしているのだが、一つだけ問題がある。

ぜんぜんわからない……

元々学費が安く、さらに就職率が高いとされている私立藍越学園に受験するつもりだったが間違えてＩＳ学園の受験会場に向かってしまい、そこでなぜか知らないがＩＳに触れた際に女性にしか反応しないはずのＩＳが起動してしまい、強制的にＩＳ学園に入学させられてしまった。

一体これまでやっていた受験勉強はなんだったのかと、悲しくなってしまう。

そして入学してすぐにさらなる問題が発生してしまったのだ。

再来週行われる、クラス対抗戦に出るクラス代表に俺が推薦されてしまった。

クラス代表　＝　クラス長　のようでそんな面倒なもの誰がするか、と思っていたら俺が推薦され、それに納得がいかないと、とある女子が怒りクラス代表を決める決闘を申し込んできたのだ。

その子の名前はセシリア・オルコット……

本人曰く、イギリスの代表候補生らしい。

まあ、俺も男の子だから逃げるわけには行かないと思いその決闘を

申し込んでしまい、１週間の猶予を貰ったからその間に基礎くらいはマスターできるだろうと考えている俺がいたが、現実はそんなに甘いものではなかった。

――――結論、マスターする以前の問題でした。

そんな中、俺を救ってくれるという救世主が現れた。
その救世主の名前は俺のファースト幼馴染である篠ノ之箒、ＩＳを発明した篠ノ之束の妹だ。
これで何とかなるだろうと安堵を漏らしていた俺だったが……

――――数日間の間剣道しかやっていませんでした。

「これ、やばいよな」

そう言い、机の上に広げてある教科書の上に頭を乗せる。
このＩＳ学園に入ってから周囲がすべて女子でなかなかすぐに心を開ける人物がいなく、ストレスが溜まりっぱなし状態だ。
そんなことを考えながら時計を見るともうすぐＳＨＲの時間だった。

ガラガラッ

案の定扉を開けて先生が入ってきた。

まず最初に入ってきた先生は、副担任である山田先生。
そしてその次に入ってきたのは、

「諸君、おはよう」

我が偉大な姉上である、織斑千冬その人だった。
俺は自主勉のせいで頭が疲れており、机の上で寝そべっていたところを確認した織斑千冬こと千冬姉は俺の机まで来て、

パシィィィン

「痛ッたぁぁぁぁぁぁ！！　千冬姉朝から酷くないッ！？」

「バカ者、シャキっとしろシャキっと。　後、織斑先生と呼ばんかッ！　ったく、今日は諸君らに報告がある。　では山田先生どうぞ」

報告？
ま、まさかクラス代表決定戦が明日になったとかそんなジョークはいやだからな！！
このまま出陣して数秒でやられるなんてことがあったら……

「は、はい！　え、え～と、今日は転校生を紹介します！　こ、こんなこと信じられませんが……」

何が信じられないんだ？

そして転校生という単語が聞こえた瞬間女子達が妙に賑わい始めた。
どんな子かな、可愛い子ならいいね～、ライバルが増えるのか、な
どなどそんなことを言っている。

「みなさん、『彼』が入ってきても静かにしてくださいね？　そ、
それではどうぞ」

彼？　ボーイッシュな女子なのか？

また扉が開き教室の中に入ってきたのは、女子でもなんでもない…
……

『男子』だった

～一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？Ｓｉｄｅ～

「失礼しま～す」

僕はルンルン気分の中教室へと入っていった。
新品の服、と言っても制服だけれども新品って単語は僕は好きだ。
なんだか新品の服を着てるときってテンション上がるよね。

「初めまして、九曜春樹（くようはるき）って言います。　学校というものは初めてなので知らないことが多いと思いますが宜しくして下さいッ！　ブイッ」

そう自己紹介した後に、右手でピースを作りクラスの子達へと向ける。
ざっと眺めた所、若干一名以外はやはり女子ばかりだった。

「あ、あれ？」

束さん曰く、自己紹介をした後には基本拍手がもらえると聞いていたが誰一人として拍手をしてくれない。
どこか間違ったのかなと思っていたときだった。

「き……」

「き？」

「「「「キャアアアアアアアア！！」」」」

急にクラス全体が大きな声に包まれたので、ビックリして足を一歩後ろに下げてしまう。
流石ＩＳ学園、元気な子達が多いなと思ってしまった。

僕の場合先程も言ったように学校という教育機関に入るのは初めてのことなので楽しみにしていたけど学校……
良いものだね！

えっ？　何で小学校とか行ってなかったのって？
色々あったんだよ。
束さんという存在がなかったらこんなところにいるはずがないし、もしかしたらこの世界からも……

「静かにしろ」

教室の端から冷たい声が響き渡った。

その声が聞こえてきた瞬間に先程まで騒いでいた人たちも一斉に静かになり一時の静寂が起こった。

冷たい声の持ち主はちーちゃんだった。

「この学園に男が来たのは初めてのことではないんだ、二度目のことで騒いでどうするバカ共が」

「九曜君に質問が「「はいは～～～～い！！」」最後まで話聞いてください、うぅぅ」

山田先生が最後まで文章を言い切る前に質問タイムが始まりそうになってしまう。

先生はみんなが最後まで聞いてくれなかったので半泣き状態になってしまっている。

御愁傷様です、山田先生。

そして山田先生の代わりにある人物が立ち上がった。

もちろん、担任のちーちゃんだ。

「質問時間なんてものこの私が与えると思っているのか？　九曜、お前はあの席に座れ」

ちーちゃんが指差した先は一番後ろの窓際というポジションだった。

「わかったよ、ちーちゃん」

「「「ち、ちーちゃん……」」」

皆の驚きの声と共に脳天に向けてチョークが飛んで来て、それを紙一重で避ける。

チョークを投げたのはちーちゃんだった。

実は教室に来る前に一度黒い板（出席簿）で叩かれそうになったがそれも何とか（偶然）避けていた。

チョークを投げたフォームむのまま固まり、舌打ちをされるがそれに気付かず指定された自分の席へと向かい着席した。

「ちっ、それではホームルームを始める」

～春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

一夏Ｓｉｄｅ

「いや～、やっぱり転校生は人気だな」

「一夏そんなことより行かなくて良いのか？　一応お前もあいつを知ってるんだろう？」

俺の席に来たのはファースト幼馴染、篠ノ之箒。

まあ、知っていると言えば知ってるし、知らないと言えば知らない。どうしてかっていうと、時たま束さんから送られてくる画像に彼の姿が映っているからだ。

なんでも途中で拾ったとかなんやら……

と言うよりどうやってしたら拾うのか……

「あぁぁぁぁぁぁ！！」

「ど、どうした急に大きな声出して」

俺はあることが頭の中で閃き、立ち上がった。

そうだ・・・

箒が訓練してくれないのなら、彼に教えてもらえばいいんだ！

「ちょっと話してくる！」

「わ、私も行こう」

そう言い箒も俺の後に続く。
俺と箒はその転校生の周りに群がっている女子達の間を掻き分け、正面へ行くことに成功した。

「あっ、いっくんと箒ちゃん！　やっと来てくれた」

「お、俺のこと知ってるのか？」

「わ、私のこともか？」

「束さんからいろいろ聞いてるよ。　それよりいっくんイギリスの代表候補生と勝負するんだって？」

どうやらもうクラスの女子からそのことについては聞いていたみたいだ。
そっちの方が話が早いから個人的にはとても助かる。
俺はドンッと大きな音を立てながら九曜の机を叩いて、顔を机の上に押し付けた。

「い、一夏!?」

「ど、どうしたのいっくん」

「頼みがあるんだ・・・」

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

いっくんは教室では話しにくいからと言ったので廊下へと移動した。
顔を机の上に押し付けて頼むくらい重要なことなのだろう。

僕と箒ちゃんはいっくんの後に続いて教室を出た。

「それで頼みごとって?」

「ＩＳ・・・　ＩＳのことについて教えて欲しいんだ。　束さんの傍についていた九曜ならいろいろと知っていると思って」

「ＩＳの何を教えればいいのかな？」

「え～と、知識とか基礎的なこと、なんでもいいんだ！」

なるほどね～。
あのイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットさんとの決闘を了承するまでは良かったもののそこから先のことをいっくんはまったく考えてもいなかったんだ。
それに確か決闘の日まで時間がないらしいしね。

「箒が教えてくれるって言ってたんだけど、剣道しかやってくれなくれなくてさ」

「し、仕方がないだろッ！　お前の場合はＩＳ以前の問題だと何度も何度も・・・」

顔を真っ赤にして急に愚痴をもらし始める箒ちゃん。

どうしようかな、束さんからはいっくんのＩＳを届けるまで僕のＩＳは見せたらだめって言われてるし・・・

かといって、見捨てることも出来ないし・・・　こうなったら。

「だ、だめか？」

不安そうな顔になるいっくんの両手を僕は掴んだ。
そして、

「いっくんなら大丈夫！　ぶっつけ本番で行っちゃえ！！」

これで大丈夫なはず。
よく僕も束さんにこう言われてすべてやりこなせて来たんだから。
それにＩＳの勝負だったら生命維持装置が付けられてるし、僕みたいにジャングルの中で肉直動物と食べ物の争いをするよりぜんぜん安全だしね。

「・・・最後の希望が朽ちてしまった」

いっくんはその場で倒れこみ、暗いオーラを放出し始めた。

あ、あれ？　僕何か間違えたのかな？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

そしてそれから何もないままクラス代表決定戦当日。

結局いっくんは箒ちゃんにはＩＳの知識ではなく、６日間の間ずっと剣道の稽古をするだけで終わったらしい。

目の前には顔を青ざめたいっくんと、そっぽを向いた箒ちゃんがいる。

今第三アリーナ・Ａピットにて未だに届いていないいっくんの専用ＩＳを待っている最中だ。

た、束さん大丈夫なのかな～・・・

「「「・・・・・・」」」

僕、いっくん、箒ちゃんの沈黙。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんッ！！」

そう何度も名前を呼んで駆け足でやってきたのは副担任の山田先生だった。

ユラユラと足をもたつきさせながら走ってきていっくんの目の前で

止まった。

「や、山田先生、深呼吸深呼吸」

「は、はひ！　す～～は～～・・・　す～～は～～・・・」

いっくんが山田先生に深呼吸するように言ってそのとおりにする山田先生。
数回深呼吸を繰り返し・・・

「はい、そこで止めて」

「んっ・・・」

いやいや、深呼吸の途中で止めるって聞いたことがないよいっくん？
ほらほら、早く呼吸させてあげないと先生の顔がタコみたいに真っ赤だよ！！

「・・・ぷはぁぁぁ！　ま、まだですか？」

ついに我慢できなくなり大きく息を吐き、スポーツ後のように息を切らせながら呼吸を荒くする。

先生も先生ですよ！　律儀に止める必要なんてまったくなかったのに！

「目の上の人には敬意を払え、馬鹿者」

パッシィィィン！

とてもいい音と共にいっくんが頭を抑えながら屈み込む。
我らがちーちゃんの登場だ。

「ち、千冬姉」

「ちーちゃん」

パァン、パァァァンッ！

「「ッたぁぁぁぁ！！」」

「織斑先生と呼べ。学習しろ、さもなくば死ね。　お前もだぞ九曜」

今まで偶然避けていたから、今回初めて織斑先生ことちーちゃんに

一発貰ってしまった。
これ・・・かなり痛いよ。

「ち、ちーちゃん、束さんと話していたときと全然違うような・・・」

パッシィィィン!!

さらにもう一発天の鉄槌を喰らってしまい、今度は声も出ずにそのまましゃがんで自分で頭を撫でる。
これ、将来ハゲないかな？　大丈夫かな？

「そ、それでですねっ！　来ましたっ！　織斑君の専用ＩＳ！」

僕は少し腫れ上がった頭を撫でながらそのことを聞き内心ほっとした。
良かった、間に合ったみたいで。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。　本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ、一夏」

「えっ？　えっ？　なん・・・」

「「「早く！！」」」

ちーちゃん、箒ちゃん、山田先生の言葉が重なった。

「大丈夫。　いっくんなら行けるよ！」

うん、大丈夫な・・・はず・・・　テヘッ

ごごごんッ

鈍い音と共にピットの搬入口が開いていき、ゆっくりとその向こう側にある物体を晒していく。
そこにはいっくんのＩＳ。　束さん特製のＩＳ『白式』が置いてあった。
少しだけ開発を手伝ったから僕もこのＩＳのことは良く知っている。

「これが・・・」

「はいっ！　織斑君専用のＩＳ『白式』です！」

いっくんはその真っ白な物体にゆっくりと近づいていき、その外見を目を大きく開きながら観察する。

「急いで装着しろ。　時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。　出来なければ負けるだけだ。　いいな」

そうちーちゃんに急かされながらＩＳを身につけていく。
その動作を見る限りＩＳを使うのは数回というくらい初心者の動作だった。
実際はホントに数回しか使っていないらしいけどね。

「九曜」

ちーちゃんが突然話しかけてきた。

「何かなちーちゃん？」

「本当に束の性格に似ているやつだ。　織斑先生と言っているだろう馬鹿者が。　お前はどうするんだ？」

「なんのことかな？」

僕は何も知らないかのようなセリフを返した。
ちーちゃんは人の心を見抜かすのが相当得意なようだね。　気をつけないと。

「・・・ふっ、私はてっきりお前も『唐梅』に乗って今日の勝負に参戦するのかと思っていたのだが・・・」

あははは、どうやら気がついたらしい。
画面越しでしか、それも束さんが話している時に数回覗いたくらいで僕の心の中を読めるようになってしまっている。
確かに気分によっては参戦するつもりだけど、いっくんと候補生の勝負の内容によるかな？

「いっくんが変な負け方をしなかったら今日は我慢するつもり・・・じゃだめですか？」

「好きにしろ」

担任の許可も貰えた事だし、割り込み全然オッケーだね。
後はいっくんがどれくらい頑張ってくれるかによるだけだ。

ちーちゃんとそんなことを話している間にいっくんはオルコットさんの専用ＩＳのデータを何度も見返していた。

さあ、つまらない勝負だけはやめてね？　いっくん。

エピソード1　【がっこ～う】（後書き）

春樹「初めまして！　九曜春樹です！」

Ｍｉｔｓｕ「う～ん、テンション上げ上げの主人公大好きだよ」

春樹「あははは。　そういえば今回の話の最後らへん見てみると僕のＩＳは次に出る感じなのかな？」

Ｍｉｔｓｕ「だね～。　実力見せてもらうよ春樹」

春樹「僕に任せておきなさい！　ブイブイッ」

Ｍｉｔｓｕ「それでは感想、誤字の報告待ってます！」

～～～～～～～～～～～～～～～

追記　４／３

Ｋｕｒｏうささん（作者の妹）がＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉～ＢＬＯＯＭ～の主人公、九曜春樹を書いてくれました。

アホ毛がついていますが、妹の想像で春樹はこれらしいですｗ

たしかに春樹のセリフは子供っぽい（実際精神年齢は低いのかな？）ので雰囲気はこんな感じですね。

＞ｉ２０８８１－２８５５＜

エピソード2　【専用ＩＳ起動】（前書き）

最近スランプになってきたような気がします。
どうしましょう・・・

エピソード2　【専用ＩＳ起動】

いっくんなかなか・・・

リアルモニター越しでいっくんは次々と敵のＩＳの攻撃を避けていく。

イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。
金髪に透き通った碧眼が特徴で、聞いたところイギリスの名門貴族のお嬢様とのこと。
そして彼女が操る鮮やかな青色の機体、『ブルー・ティアーズ』。
第3世代型ＩＳで射撃を主体とした機体で、それを駆るオルコットさんの手には2メートル強ある長大な銃器・・・　六七口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ?》が握られている。

そして今いっくんを狙っているのはそのレーザーライフルではない。
狙っているのは４つの自立機動兵器、《ブルー・ティアーズ》

ＩＳ本体と同じ名前でとてもややこしいが、機体の名前がこのビット型の武器からの由来らしい。

今のいっくんの状況を説明するとそのビット型武器　《ブルー・ティアーズ》に四方八方から狙い撃ちをされているのだ。
彼が操っているＩＳ『白式』の持つ武器は長大な名前もない刀のみ。
射撃型　対　近接戦闘型　と言えば近距離にさえ入られなければ、射撃型、つまりオルコットさんがかなり有利ということになる。
それにオルコットさんの武器がライフルだけならまだしも、自立機動兵器での攻撃で敵を自分の範囲（パーソナルエリア）に入れさせないのだからさらに彼女にとっては有利だ。

ビット型武器　《ブルー・ティアーズ》の銃口から光が放たれる毎に、いっくんのシールドバリアのエネルギーの数値が見る見るうちに減っていく。

シールドバリアとは操縦者を守るためにそのＩＳの周囲に張り巡らされる目では見ることが出来ないシールドのことなのだが、攻撃を受けるたびにそのシールドのエネルギーは消耗して行き、エネルギー残量がさきに０になったほうが負けである。
要するにゲームで言うＨＰ（ヒット・ポイント）のことだ。

「左足、いただきますわ！」

隙を見つけたオルコットさんはいっくんに向けてライフルを構える。
いっくんのシールドエネルギー残量は残り二桁、あれを喰らえばシールドエネルギーがなくなり負け確定である。
どうするのかと思いきや、

「ぜあああああああっ！！」

いっくんの武器である、名前もない長大な刀でオルコットさんの持つライフルの銃身に自分でぶつかりに行った。
ガキンッと派手な金属音が剃れる音が聞こえ、ライフルの銃口が逸れ、止めを刺されることを免れる。

「なっ！？　無茶苦茶なことしますわね。　けれど、それも無駄な足掻きですわよっ！！」

オルコットさんはすぐさまその場所から離れ距離をとる。
そして、周囲に待機させていたビットをいっくんの方へと向かわせた。

その瞬間いっくんの目は何か希望に溢れたような光り輝く目に変わった。
どうやら何かに気がついたようだ。

次々と放たれるレーザーから避け、一閃、近づいてきたビットを真っ二つに切り裂いた。
二つに斬られたビットは青い電撃を走らせながら、爆発した。

「なんですって！？」

驚愕したオルコットさんに焦りが見え始める。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！　しかも！！」

さらに違う空中で飛んでいたビットを真横から一閃をいれ、爆沈させた。

「お前はその間制御に意識を集中させてるからそれ以外に攻撃ができないっ！！」

「ッ！」

いっくんがそう言った直後にオルコットさんの目尻が引きつった。
モニターからでもその表情からわかることがある。
いっくんが言ったことは『正解』だ。

「箒ちゃん本当に何も教えてないんだよね？」

「あ、ああ」

リアルタイムで流されている映像を見ながら箒ちゃんに話しかける。

「はぁぁぁ・・・　すごいですね織斑君」

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。　あれは、あいつの昔からのクセだ。　あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

確かにさっきからいっくんの左手は閉じたり開いたり、その動作を何度も続けていた。
流石は兄弟！
なんでもわかりあっているって感じだね！

でも浮かれてもいいと思うんだ。
なんせまだいっくんのＩＳは初期設定のままなんだから。
初期設定の状態でここまで戦えるなんて、流石第１回ＩＳ世界大会モンド・グロッソ総合優勝および格闘部門優勝者ちーちゃんの弟だね！

自分の弟であるいっくんの話をしているちーちゃんはどこかうれしそうな表情をしていた。

一方箒ちゃんはどこか険しい表情をしている。
彼女がほんのわずかだけ唇を噛んだとき、試合は大きく動いた。

一夏Ｓｉｄｅ

「獲ったぁぁぁぁ！！」

セシリアの間合いに入った俺は、刀を振り下ろし３つ目のビットを破壊、そしてそのままＩＳ独自の無重力機動で４つ目を蹴り飛ばす。さっきからずっと俺を苦しめてきた兵器４つすべてを撃墜させた。

彼女が持つライフルの砲口は間に合わない。

一撃を入れることの出来る最大のチャンスだった、が・・・

「――――かかりましたわ」

セシリアの口元がにやり、と歪み、笑うのが見えた。

――――まずいっ！

俺の中で反射的にそう思い距離を置こうとするが、逆に俺のほうが間に合わなかった。

ヴゥゥンッ

電子機械が起動する音が耳に入り、セリシアの腰部から広がるように付いているスカート状のアーマーから、部分的に何かが外れて動き出す。

「ブルー・ティアーズは４機だけではありませんのよっ！！」

二つのビットが俺に向けて照準を定める。
回避行動が間に合わない。
しかも、そのビットから放たれようとしているのは先ほどのレーザーとは全然違う。

『弾道型（ミサイル）』だ。

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ドガァァァンッ！

「一夏っ！」

赤と白の爆発、そして煙に包まれる姿をモニターで見ていた箒ちゃんが思わず声を上げてしまう。

「――――ふん」

「最適化（フィッティング）・・・間に合って良かったねっ、いっくん」

黒煙が晴れたとき、ちーちゃんは鼻を鳴らし、僕は笑顔でそう言った。

「九曜の言うとおりだ。　機体に救われたな、馬鹿者め」

モニターには今までと違う姿で立っている純白の機体があった。

『初期化（フォーマット）』、そして『最適化（フィッティング）』がようやく終わったのだ。

アーマーのデザインは先ほどと違い中世の鎧をイメージさせるデザインへと変更が加わっていて、何より変わったのが・・・

「――――近接ブレード、《雪片弐型》か～。　いっくん、それを扱うことできるかな？」

「雪片か・・・」

ちーちゃんが細い目でモニター越しに映っているその刀を細い目にしながらじっと見る。

――雪片。

それは、かつてちーちゃんが振るっていた刀と同じ。

つまり雪片弐型はその後継とも言える。

だけど、恐らく白式の能力の説明もまともに受けていないいっくんが使いこなせるとは思えない。

僕はモニターに向けていた体を１８０度回転させた。

「く、九曜、どこへ行く？」

箒ちゃんが振り向きそう質問してきた。

「行くのか、九曜」

「たぶんいっくんはこのままだと負けるよ。　だから・・・　僕が変わりに・・・　ねっ？」

僕は第三アリーナへと足を進めた。

一夏Ｓｉｄｅ

俺は手に持っている刀、雪片弐型を強く握り締めた。
これまで・・・ずっと千冬姉に守られてきた。
でも、もうそろそろ守られるだけの関係は終わりにしよう。　これからは・・・　これからは、

「俺も、俺の家族を守る」

「・・・は？　あなた、何を言って」

俺が何を言っているか理解をしていないセリシア。

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の弟・・・
その弟がこんなことで負けてしまったら格好が付かないじゃないか。
それに俺が負けてしまえば千冬姉の名前にも泥を塗ってしまう。
そんなこと冗談にもならないし、笑うこともできない。

「逆に、笑われてしまうか？」

「だからさっきから何の話を一人で・・・　ああもう、面倒ですわっ！！」

弾頭を再装填してビットが2機セシリアの命令と共にこっちへと向かってきた。
それも先ほど撃墜したレーザーを撃ってくるやつよりも早い。

「だけどっ！！」

両手で《雪片弐型》を握り締め、低い電子音を鳴らし始める。
千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像のお蔭で使い方は前からわかっている。

キィンッ！

俺に向かって飛んできた2機のビットを両断し、それはコントロー

ルを失った戦闘機のように黒い煙を焚きながら墜落していき、粉々に砕け散った。
そのまま今までと段違いのスピードでセシリアに突撃する。

「おおおおっ！！」

セシリアに向かっていっている最中に、だんだんと雪片の刀身が強い光を帯びていき、強い何かが手を通して伝わってくる。

いける・・・
これならっ！

だが、彼女を一刀両断する刹那、俺とセシリアの間に一筋の光が通り過ぎていった。

「なんですのっ！？」

「あれは・・・」

下を見ると白と赤色の今まで見たこともないＩＳが立っていた。

「く、九曜？」

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ふ～、あのまま行っちゃったらいっくんが負けて終わるところだった。
危ない危ない。
僕は手に持っている弓形態にさせている《白鷺》を下げて、２つの長刀へと形態を変更させる。

「あ、あなたなんで邪魔を!!」

「そ、そうだぞ九曜、さっきは勝てそうだったんだぞ!!」

オルコットさんといっくんが近づいてきて怒鳴ってきた。

「まあまあ二人とも、オルコットさんの場合あのまま続けてたらどうなってたかわかるよね？」

「うっ・・・」

「いっくんも自分の残量エネルギー見てみなよ」

疑問に思いながら自分のシールドエネルギーを見て驚くいっくん。
エネルギー残量は残り二桁を丁度下回ったところだった。
まあまだ武器の特性を知らないみたいだから仕方がないかな。

「そ、そんなことよりこの勝負の結果はどうなってしまいますの！？」

「そのことだが・・・」

僕の後ろからちーちゃんが腕を組みながら歩いてきた。

「オルコットが九曜に勝てばお前が代表、負ければ一夏か九曜のどちらかということになる」

「ぼ、僕はやだよちーちゃん！」

バシィィィンッ！

出席簿が高速回転しながら僕の頭を直撃した。
な、ナニコレ・・・

シールド貫通したんだけど、ありえなくない？

「織斑先生と呼べと何度も言っているだろう！」

「は、はい織斑先生」

「織斑はＩＳを解除して私と待機。　オルコットは早く《ブルー・ティアーズ》の換装をして来い。　予備の分は置いておいた」

「「は、はい！」」

セシリアＳｉｄｅ

な、なんなんですのまったく！！

「あの勝負、私の負けでしたわ！」

私はそう言いながら地面大きく蹴った。

もし彼のシールドエネルギーが残っていたら・・・

「それに先ほどのＩＳは・・・？」

九曜春樹が使っていたＩＳ・・・　今まで見たことがないものだった。
白を主体とし、所々紅蓮の赤で塗装されているＩＳ。
あんな機体の情報など聞いたこともないし、見たこともない。

私は予備で用意していただいた《ブルー・ティアーズ》の設定を終え、アリーナへと戻った。

「準備は出来た？　オルコットさん」

彼は笑顔を作りながら、私にそう言って来た。
今までに見たこともないＩＳを目の前にして情報を得ようとしても、結果は全然だめ。

一体、どこの国のＩＳなんでしょうか

「私は今ムシャクシャしてますの！　絶対に勝たせていただきますわっ」

「うんうん、元気のいいことはとても良いことだね」

な、なんて余裕っぷり・・・
許せませんわ、イギリスの代表候補生であるこの私にこんな余裕な態度をするなんて。

「それじゃあそっちのタイミングでいつでも来ていいよ？　こういうのレディーファーストって言うんだよね？」

そう言われた瞬間、思わず眉間にシワを寄せてしまう。

「ああっ、もう！！　今更謝られたって許しませんことよ！」

私は上空へと上がり《スターライトｍｋ？》を構えた。

セシリアＳｉｄｅ　ｏｕｔ

九曜Ｓｉｄｅ

とまあ余裕な態度を取ってみたけど、僕のＩＳもいっくんのＩＳと同じ近接戦闘が主体の機体だから正直な話なんとも言えないんだけど・・・

僕のＩＳ『唐梅』、束さんが僕の専用機として特別に作ってくれた物。
メインウェポンは日本刀の形をした二刀の近接戦闘武器と、腰に付いたレール砲のみ。
後はこの刀を連結形態の状態から弓のように使用できるくらいで、多分戦いは先ほどいっくんがやっていた戦いとほとんど変わりないだろう。

「僕の戦いから何か学んでくれるとうれしいな、いっくん」

空へと上がったオルコットさんはライフルを向けて次々と攻撃を放ってきた。
僕はＩＳの機体を後ろへと傾けスラスターを全開に稼動させ後退する。

「ヒョイヒョイっと」

移動した箇所に次々とオルコットさんの攻撃が着弾し、地面に穴を開ける。
しかし彼女の射撃も的確で、一度移動を止めてしまえば直撃もあり

えるくらい正確だ。

「なぜ当たりませんのっ！？　もういいですわ、一気に勝敗をつけさせていただきます！」

オルコットさんは一度射撃を止め、ビット兵器である《ブルー・ティアーズ》を起動させた。

ライフルでの攻撃が止んだ瞬間、二刀の近接戦闘武器である《白鷺》を連結させ一つの大きな弓を作り出した。

淡い赤色の弦が出現しそこに手を掛けると紅蓮に発光した矢が出現した。

動き出した4機のうちその一つに狙いを定める。

そしてターゲットをロックしたと同時に矢を放った。

放たれた紅蓮の矢は赤い道筋を作りながら目標に命中し爆発した。

「なっ！　で、でもまだ3機ありますわ！」

僕はさらに弦に手を掛け、矢を出現させると瞬時に照準に定めて放つ。

次は1つだけはない・・・　3つの矢を同時に解き放った。

「ありゃ？」

《ブルー・ティアーズ》達はその3本の矢をすべて回避した。

「そうそう同じ手が通るほど現実は甘くなくてよ」

オルコットさんは笑みを浮かべながら自慢げに言って来た。

流石は代表候補生、侮れないっ！

矢の直撃を免れて向かってきたそのすばしっこい兵器達の銃口からレーザーが連射される。

僕は立ち止まって矢を放っていた際に保険でスラスターに圧縮していたエネルギーを放出した。

――――《瞬時加速（イグニッション・ブースト）》

圧縮していたエネルギー量にも比例するが、圧縮して放出することにより爆発的な加速をすることができるのだがそのことを《瞬時加速（イグニッション・ブースト）》と呼ぶ。

僕は一瞬で超高速状態へと入って、レーザービームをすべて回避、さらにオルコットさんから数十センチ離れたところへとやってきた。

「い、瞬時加速!?」

さっきすべての矢を回避させたことで笑みを浮かばせていた顔が一瞬にして変わった。

「これで終わりだよっ！」

腰の両サイドに2つ折して小型化されている武器《紅蓮雷撃（ぐれんらいげき）》を連結させる。

連結することによって先ほどまで５０ｃｍほどだったものが１ｍ半くらいの長さの電磁レール砲へと変わった。

本来近接戦闘の場でしか思う存分に力を使えない『唐梅』の中距離戦闘を予想して付けられたのがこの電磁レール砲。

しかし中距離戦闘を予想され装備されたこの武器の本当の力はゼロ距離からの砲撃。

中距離の場合での威力はそこそこなのだが、ゼロ距離で使った場合は第2世代ＩＳで最強クラスの威力を持つパイルバンカー、《盾殺し（シールド・ピアース）》より若干劣るくらいの威力を誇る。

今回の場合はゼロ距離・・・よって相手のシールドエネルギーを爆発的に減らすことが可能だ。

僕は紅蓮雷撃を発射しようとするが、オルコットさんもまだ負けじと次の手をとる。

「まだこんな所で終わりませんわ！」

「ッ！？」

彼女の機体を良く見てみると、全部で６機ある《ブルー・ティアーズ》・・・

そしてそのうち４機を起動させ、１つは序盤に破壊していて残りは３機のはずなのだけれど、いつの間にか全て起動していた。

も、もしかして誘い込まれてた！？

「こ、これだけでもっ！」

懐に入ったはずが逆に入り込まれてしまった。

左右からはミサイルを装備したビットが僕を狙っていて、レール砲を展開した状態だと回避行動が取りにくい。

だから一発叩き込もうと決断する。

ドガ、ドガァァァン

黒と赤の煙が立ち上がった。

「キャァァァァァァ！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁ」

オルコットさんは紅蓮雷撃を直撃・・・
そして僕もミサイルを直撃してしまった。

春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

セシリアＳｉｄｅ

くっ、ま、まさかあんなことされるなんて。

先ほどの攻撃でシールドエネルギーが一気になくなってしまってしまいかなり危険な状況。
早く・・・早く《ブルー・ティアーズ》を戻さないと・・・

ギギギッと音を立てながら体勢を立て直そうと試みる。

だが、予想もしない出来事が起こった。

突然ブザー音が鳴り響き、

『試合終了、勝者――――セシリア・オルコット』

えっ？　今なんて・・・

私は目を見開き、九曜春樹がいた所を見ると身動きが取れない状態になっている彼が膝を地面に付けていた。

おかしい、私が直撃させたのはさっきのミサイルだけ。　なのに、普通に考えてミサイルだけでシールドエネルギーが０になるなんてこと。

何が起こったのか理解できないまま試合は私の勝利で終わってしまった。

エピソード2　【専用ＩＳ起動】（後書き）

春樹「いや～、オルコットさん強いね～。　良くいっくんもあんな人とあれだけ戦えたよ」

Ｍｉｔｓｕ「何言ってんだか、明らかにミサイルのみでやられるっておかしいだろ」

春樹「気にしない気にしない。　てへっ」

Ｍｉｔｓｕ「ったく・・・　それでは誤字、感想お待ちしております！」

エピソード３　【クラス代表決定】（前書き）

ＩＳの執筆のみかなり進むのですが一体どういうことやら・・・
もう少しでニューヒロインが出てきそうですね～。

エピソード3　【クラス代表決定】

翌日の朝・・・
今、僕の机の周りでいっくんと箒ちゃんと朝の談話をしている。
クラスでは昨日あったクラス代表決定戦の話で盛り上がっていた。

「そういえば九曜、お前も専用機持ちなのか？　あのＩＳ他のやつらとも違うよな？」

「うん、僕のも特別製のＩＳだね。『唐梅』って言うんだ」

首にチェーンで通してある指輪を見せながらそう答えた。

「昨日の試合なぜ九曜のシールドエネルギーがあんなにすぐになくなったんだ？」

箒ちゃんがそう質問してきて、横でいっくんが顔を縦に振る。
オルコットさんの席をチラリと見ると目はこちらに向けてないものの、聞き耳を立てているのでこそこそ話で話すことにした。

「いっくん、箒ちゃん、ちょっと耳かして。　実は――――」

「「な、なんだってぇぇぇぇぇ」」

「ちょ！　二人とも声大きいよ！！」

事実を教えたら二人とも急に大きな声を出したので一気にクラスの視線を浴びてしまう。
二人はそれに気づき、両手で自分の口元を隠した。

昨日僕があんなに早く負けた理由。
それはＩＳのシールドエネルギーの容量を通常の三分の一以下にしていたからだ。
それに僕のＩＳ『唐梅』はまだ完成型ではない。
正確には前は完成していたのだが、束さんといるときに戦闘シュミレーションの際にある問題が発生したのでその問題部分を束さんに改良してもらう必要があった。
こちらに来る前に本人は問題点を解決したかったものの、間に合わなかった。

シールドエネルギーを三分の一以下にしていたのは、束さんに女の子には優しくしなくちゃいけないよと何度も言われてきたからハンデのつもりでしたものの、ハンデをあげる必要がなかったようだ。
お蔭で結果は負けということになってしまった。

「あ～、今更だけど九曜にはちゃんと自己紹介してなかったな～」

突然いっくんがそんなことを言い出した。

「そういえばそうだな」

その隣で箒ちゃんもそれに納得する。

「俺は織斑一夏、よろしくな九曜」

「し、篠ノ之箒だ」

そう自己紹介された瞬間なんともむず痒かった。
ちーちゃんと束さんからはよく二人のことは聞かされていたが、実際にこうやって実際に会って自己紹介したのは今回が初めてなのだ。

「僕の方こそよろしくね。　後、九曜じゃ堅苦しいから春樹でいいよ二人とも」

「んじゃ春樹にするか」

「わかった、私も今後はそうしよう」

そんな感じで朝の談笑を楽しんでいると山田先生が教室に入ってきた。
時間を見ると丁度ＳＨＲの始まる時間だった。
教室で会話していた生徒も先生が入ってくると同時に自分の席へと戻り着席した。

しかし一番後ろ、さらに窓際の席はとてもいいな～。
太陽の光は浴びれるし、何でも隠れて出来るし。
それに、太陽の光を浴びてると光合成したくなってくるんだよね。
　光合成なんて人間はできないけど。

ほんわか気分で外の景色を眺めながら山田先生の話を聞いていると、あり得ないことが耳に飛び込んできた。

「え～とですね。　昨日の代表決定戦の結果なのですが一年一組代表は織斑一夏くん、または九曜春樹くんと言うことになったんですが」

いっくんか～、僕もそれにだいさんせ～い。
ってえぇぇぇ、今僕の名前も言ってたよね！？

体を傾けいっくんの方を見てみると暗い顔をしながら頭を抱えていた。

こ、こうなったら先手必勝！！

僕は先生の許可なしに立ち上がった。

「山田せんせ〜い、僕はいっくんが代表のほうがいいと思いま〜す！！　僕、自己紹介の時も言ったように学校というもの自体が初めてで全然わからないので、いろいろ知ってるいっくんの方がいいと思いま〜す」

「そうですね〜、では織斑くんにやってもらいましょうか」

よしっ！！

いっくんは裏切ったな春樹！、みたいな視線を送ってきたが僕はそれを笑顔で返した。

でも一体どういう経緯でこうなったんだろうか。

昨日の試合では僕が負けたから、てっきりオルコットさんが代表をするのかと思っていたのだけれど。

「先生、質問です」

暗い顔をしながらいっくんが手を上げた。

「はい、織斑くん」

「一体どういう経緯でこうなったんですか？」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

僕の席の真逆の方向で大きな音を立てて立ち上がった人物がいた。
昨日試合で勝ったセシリア・オルコット、その人である。
そして立ち上がると腰に手を当ててポーズを決めているんだけど、
これには意味があるのかな？

それにしても辞退って一体どういうことなんだろう。

急にオルコットさんは僕、そしていっくんの方を交互に見て口を開いた。

「まあ、勝負は私の勝ちでしたが、しかし良く考えてみたのですがそれは当然のこと。　なにせわたくしセリシア・オルコットが相手だったのですから」

ま、まあ確かにそうだけど・・・
余裕の態度を取って勝手にハンデあげて負けたけど・・・
うぅ・・・なんだか悲しくなってきたよ。

「それで昨日の夜、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

うん、それで？（泣）

「この学園で今話題になっている一夏さん、または春樹さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。　クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」

よ、よかった、先手必勝で代表を辞退させてもらって。
いっくん、南無阿弥陀仏だよ。

オルコットさんの口が閉じると周りの女の子達が次々に口を開いた。

「さっすが、セシリアわかってるわね～！」

「そうだよね～、せっかく唯一ＩＳを動かすことの出来る男子が二人もいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねっ！」

「織斑くんも良いけど九曜くんの方が私は良かったな～」

「あっ、私もそう思った！！」

い、いや、僕いやだよ。
クラス代表になったら余計に注目浴びちゃうでしょ？
そんなことになったら僕緊張のしすぎで死んじゃうよ。

「そ、そこでですね」

オルコットさんが人差し指を顎に当てながら顔を少し赤くした。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ・・・」

バンッ！！

突然大きな机を叩いた音が教室に響き渡る。
その音の音源を見てみると箒ちゃんだった。

「生憎だが、一夏と春樹の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

いやいや、いっくんはどうか知らないけど僕は頼んだ覚えはないんだけどな～。
それに直接って・・・　いっくんどれだけＩＳのこと本気で考えているんだろう。

「ぼ、僕そんなこ――――」

キッ

反論しようとすると箒ちゃんがめちゃくちゃ睨んできた。
う、うぅぅ、女の子って恐いな～。

そして次にその殺気の満ちた目でオルコットさんを見た。

オルコットさんはそれに怯える様子もなく、ただただ誇らしげに彼女に視線を返しているだけだ。

「あらあら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。　Ａのわたくしに何か？」

「ら、ランクは関係ない！！　頼まれたのは私なんだ。　一夏と春

樹に土下座までされて頼まれたら仕方がなかろう」

（（いやいや、してないよ～（してね～し）！！））

そういえば僕のランクは何だったかな～？
昔束さんに測ってもらったような気がするけど全然記憶にない。

「座れ馬鹿共が」

どこからもなく現れたちーちゃんがオルコットさんと箒ちゃんの頭を殺人武器である《黒の出席簿（ブラック アテンデンス）》で叩いた。

あの出席簿本当に痛いよ。
いっくんはあれに何度も叩かれてるらしいけどよく今まで我慢できてるな～。

「お前達のランクなんぞゴミ以下だ。　私からしてみれば全員どんなランクでもひよっこにすぎん」

ちーちゃんがみんなを罵った。
オルコットさんは反論もせずに静かに着席した。
どうやらちーちゃんの恐怖にはパーフェクト人間（ヒューマン）でさえ太刀打ちが出来ないみたいだ。

何度も思ったんだけど、ちーちゃんって静かにしていれば・・・それかこれだけ怒らなかったら今よりもっとモテると思うんだけどな～。

バシィィィン！

ついに僕の方にまで《黒の出席簿》が飛んできて、顔面に直撃した。
周りの女子から大丈夫、などの声が聞こえてくるが全然大丈夫じゃないよこれ・・・
かなり痛いよ～。

「今お前失礼なこと考えてただろう」

「な、なんでもないよ」

チラッとだけれどいっくんが爆笑している所が見えた。

あははは、いっくん後から痛い目にあうかもよ？

「クラス代表は九曜とオルコットの辞退により織斑一夏。異存はないな」

「「「は～い」」」

いっくんを除く、クラス全員が返事した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

パン、パン、パパパーーーン

一斉にクラッカーが鳴らされる。
壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と大きく掲げられている。
夕食後の自由時間にいっくんの就任パーティーを祝おうと言うことになり、今みんなで食堂に集合している。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ラッキーだったよね、いっしょのクラスになれて」

「ほんとほんと」

よく周りを見ると見たことのない人もいる。
恐らくは他クラスの人だろう。

というより圧倒的に人数が多いんだよね、軽く一組の人数超えちゃってるよ。

「人気ものだな一夏」

「あはっ、良かったねいっくん」

「お、お前ら・・・」

「ふん」

箒ちゃんが鼻を鳴らした。
う～ん、さっきからこの調子でなぜか機嫌が悪そう。

「はいはーい、新聞部でーす。今話題の織斑一夏くん、そして九曜春樹くんに特別インタビューに来ましたー！」

イェェェイと歓声が上がる。

「私は黛薫子、新聞部の副部長やってま～す。はいこれ名詞」

そう言い黛先輩は僕ら二人に名詞を渡してきた。
難しい苗字だな～。
たぶんこれ発音してもらわないと読めないよ、と言うより僕読めなかったよね。　まゆずみって言うのか～。

「ではまず最初に九曜くん！　クラス代表を辞退したと聞きましたがなぜですか！？」

ボイスレコーダーを僕のほうへグッと向けてそう質問してきた。

「え、え～と・・・　僕は今まで学校って行った事なかったのでいきなりそんな重大な役を任されてもこまるな～って思ってだね」

ふむふむと言いながら何やらメモ用紙に書き取る。
ボイスレコーダーにも記録してるのに書き取る必要あるのかな～、まあいっか。

「後最後に、代表決定戦の時に九曜くんが使っていたＩＳの詳細を！」

その質問が出た瞬間女子達は一斉に僕の方へと向いた。

「え、え～と・・・詳細までは教えれないけど、僕の専用ＩＳで名

前は『唐梅』っていうんだよ」

え～と落胆する声が響き渡る。
どうせすぐに全部ばれちゃうことなんだけどとりあえず今は言わないでおこう、うん。

「それでは次に織斑くん、クラス代表になった感想を～～～、どうぞ！！」

いっくんは僕と箒ちゃんのほうを見てきた。

「え～と、まあ、なんというか・・・　がんばります」

ガクッ！　×２

い、いっくん？　もうちょっとカッコイイこと言うかと思ったのに、それだとやる気があるのかないのかわからないよ～！
箒ちゃんなんてとなりでため息をする始末だよいっくん！

「え～、もっといいコメントちょうだいよ～！　例えば、俺に触れると『ピーー』をなくすぜとか」

「な、な、な／／／」

「そ、それはちょっとぶっ飛びすぎじゃないかな・・・」

重要な単語は規制されちゃってるけど、彼女が言った単語はかなり卑猥だから・・・
う～ん、今の女の子はすごいな～と思わず関心してしまう。

「箒ちゃん大丈夫？」

隣で顔を真っ赤にさせている箒ちゃんに声を掛けるが頭から煙が出ている状態だ。実際に煙なんて出てないけども、まあ出てる感じ。

「そ、その卑猥な単語は置いといて、自分不器用ですから」

「じゃあまあ適当にねつ造しておくからいっか」

いやいや良くないでしょ。

「それじゃあセシリアちゃんもコメント頂戴」

「わたくしこういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

いつの間にかすぐそこに控えていたオルコットさんが立ち上がった。
ああ言ったけど、内心満更ではなさそうだ。
それもなんだか髪のセットがいつも以上に丁寧にしているのは気のせいなのかな。

「コホン、ではまず、どうして私がこの二人に代表を譲ったかというと、つまりはですね――――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけとるね」

「さ、最後まで聞きな「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑くんと九曜くんに惚れたからってことで」

「なっ、な、な、な、なっ！！」

箒ちゃんよりも真っ赤に顔を染めるオルコットさん。

「ふぇ？　そうなのオルコットさん」

「んなバカなことあるわけないだろ春樹」

「そ、そうかなー？」

「そ、そうですわ！　適当なこと言うのも限度と言うものがありますわ！」

そしてなぜかキッと冷たい視線を僕といっくんに向けるトゲトゲの一輪の花。
なぜ花かって？　顔が赤色のバラみたいに真っ赤だからだよ。

「大体あなた達は」

「はいはい、とりあえず並んでね。　写真撮るから」

「えっ？」

気の抜けた声を漏らすオルコットさん。
しかしどこかうれしそうな表情を見せている。

「今注目の専用機持ちだからね～。　ほらほら三人とも並んで。
三人で握手してる感じがいいかも」

「そんなものなのかな？　じゃあ・・・はい、いっくん」

「おう」

僕といっくんは握手をした。

「そ、それではわたくしが入れませんわ！」

「大丈夫だよオルコットさん。　ほら、僕といっくんの真ん中にきて手を乗せるだけでそれっぽいから」

そういうと、なるほどみたいな顔をしモジモジしながら僕らの間にやってきた。
そして少し手を震わせながらゆっくり、ゆっくりと僕らの手の上に手を乗せる。
乗せた瞬間オルコットさんは頬を赤くそめた。

「・・・・・」

「？　なんだよ？」

「気分でも悪いのオルコットさん？」

「別に、何でもありませんわ！」

突然黙ってちらちらと僕といっくんの方を見てくるから何かあったのかと心配したのに怒鳴られてしまう。
なんだか良くわからないな～。

「・・・・・・」

「・・・なんだよ、箒」

「なんでもない」

箒ちゃんもじろじろと・・・・・　もう訳がわからないよ。
僕といっくんは目を合わせて首をかしげた。

「それじゃあ撮るよ～。　２８０９８３×３０２の３乗は～？」

「「「はい？」」」

「答えは・・・　わからないんだよね～」

いやいや、調べてきてよ。

そう言いながらデジカメのシャッターを切られる・・・が

「なんでみんな入ってるの（なんで全員入ってるんだ）？」

シャッターを切るその一瞬に他の女子が一斉にわんさかと僕らの周りに集結したのだ。

箒ちゃんなんてオルコットさんの前に立っている。

オルコットさんはぎりぎりの所で顔を横に退かし写真には写ったみたいだ。

「あ、あなたたちね～！」

「あはははは、みんな行動力早いね」

僕は思わずみんなの行動力の素早さに笑ってしまう。

「セシリアだけ抜け駆けなんてさせるわけないでしょ！」

「クラスのおっもいで～、おっもいで～」

「そうそう」

口々にオルコットさんに言葉のミサイルを飛ばし彼女を丸め込む。

この後もこのパーティーは続いた・・・それも十時過ぎまでね。

いや～本当に疲れたよ。

そして自分の部屋へと戻る間、

「今日は楽しかっただろう。良かったな」

なぜか箒ちゃんが嫌味口調でそう言って来た。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ふ～、疲れた～」

僕は部屋に戻りベッドの上に転がった。
しかしあんなに大勢で騒いだのは初めてだったな～。
束さんとは毎日のように騒いでたけど、今回は人数が人数だった。

あっ、ちなみに僕の部屋は僕一人だけ。
いっくんは箒ちゃんと同室みたいで、先生の間では男女が一緒の部屋なんてありえないなどの声が上がっているらしいが現状はこのまま維持で行くらしい。
部屋の変更などいろいろ手続きがあるらしいからね。

「まあ僕の場合一人でも問題はないけどね～」

部屋の天井を見ながらぼ～っとしていると急に眠気が襲ってきた。
だめだ・・・シャワーも浴びて、ない、の、に。

僕はそのまま夢の世界へと落ちていった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

セシリアＳｉｄｅ

ザァァァァ・・・

シャワーからはお湯が出てきていてバスルームが湯気でいっぱいになる。

織斑一夏・・・　それに九曜春樹・・・

先ほど彼らに触った手を何度も見つめる。

「・・・」

セシリアは千冬から春樹のＩＳのシールドエネルギーがなぜあんなに早くなくなった理由をこっそりとだが聞いていた。
今セリシアの頭の中は二人の顔がぐるぐると回っている状態だった。

理想の男性に出会ってしまった。
絶望的な状況下に置かれても、強い瞳を忘れなかった男、織斑一夏・・・

そして何も言わずに無邪気な笑顔を振りまきながら紳士的な行動をとる、九曜春樹・・・

頬に両手を当てて二人の顔を懸命に思い出そうと試みる。

知りたい・・・もっと・・・もっと・・・彼らのことを

エピソード４　【中国からの転校生】（前書き）

ついに登場、ツンデレっ子！
いや、り〇はツンデレなのか？

とりあえず、行ってみよう～！

エピソード４　【中国からの転校生】

「ふぁ～・・・　眠い～」

たくさん・・・いや必要以上に睡眠を取ったのだけれど、眠い。
僕は昔から朝は弱いのだけれど、今日は一段と眠かった。

「あっ、九曜くんおはよ～。　聞いた聞いた？　転校生の噂聞いた～？」

朝、自分の席でテンションが上がらないまま寝かけている所をクラスメイトに話しかけられた。
転校から数日でこれだけ話かけられるということはかなりいい感じにクラスに馴染め込んでいると言うことなのかな？

「う～、転校生？　聞いてないな～」

目をごしごしと擦りながらそう答えた。
転校生か～、一体どんな子なんだろうか。
友達になれるといいな。

「なんだかね、中国の代表候補生らしいよ？」

「代表候補生？　ということは専用ＩＳ持ちなのかな～」

「お、春樹もその噂聞いたみたいだな。　俺もさっき聞いたとこだ」

どうやら先ほどいっくんがやってきたみたいで僕達の会話に入ってきた。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。
腰に手を当てるポーズは相変わらずのようだ。　悪い意味で言っているのではなく、良く似合っている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　ならば気にするほどのことではあるまい」

クラスの最前列（正確には僕が座っている列の一番前）にいたはずの箒ちゃんがいっくんの隣へと来た。
しかしこんな噂は一体どこから手に入れてくるのだろうと思う。
アニメの世界とかでも転校生がやってくるぞって言ってクラスの子が大急ぎで教室に入ってくるシーンとか多いけど、その情報源が職員室からこっそり聞こえたとかそんな理由だ。
もしかしてこの情報源もそんな感じなのかなと思ってしまう。

「どんなやつなんだろうな」

「中国の代表候補生か～。　たしかに気になるね」

もう僕の中では代表候補生　＝　強い　という概念がついてしまったので少し気が引ける。
もちろんいっくんは例外的に強いんだけれども。
それにしてもその代表候補生はオルコットさんみたいな人なのかな。
別にどんな人でも、友達になれればそれでいいかな？　なんて甘い考えを持っている自分がいた。

「む・・・気になるのか、一夏、春樹」

「ん？　ああ、少しは」

「転校生といわれて気にならない人はそうそういないと思うよ箒ちゃん」

「ふん・・・」

正直に答えただけなのになぜか機嫌が悪くなる箒ちゃん。

僕といっくんはその態度に首を傾げるしかなかった。
いっくん曰く、最近自室に戻ってもこんな感じだという。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？　来月にはクラス対抗戦があると言うのに」

「そう！　そうですわ、一夏さん。　クラス対抗戦に向けて、訓練をしましょう。　ああ、相手ならこのセシリ「そうだな、春樹付き合ってくれるか？」・・・あ、あの一夏さん？」

「うん、僕で良ければ喜んで付き合うよ？　でも僕だけよりも箒ちゃんとオルコットさんにも手伝ってもらったほうが効率よく進むんじゃないかな？」

「わたくしはまだしも篠ノ之さんは難しいと思いますわよ」

いっくんがオルコットさんの会話を遮断してしまったから暗い表情になってしまったので、僕が変わりに振ってあげた所なんとか立て直し会話に戻る。
しかし箒ちゃんが難しいってどういうことだろう。

「訓練機の場合申請と許可、そして整備に丸一日を要するんだ。
くっ・・・私にも専用機があれば・・・」

なるほど。
手っ取り早く訓練をしたいなら専用機持ちの僕かオルコットさんということになるのか。
箒ちゃん、もうちょっと専用機の件は我慢してね？　束さんが頑張ってくれてると思うんだ。

「まあ、やれるだけやってみるか」

いっくんのなんとかなるだろう的な発言がクラスの女の子達の気に触れたらしく、口々に周りにいた女の子の口が開いた。
もちろんその中には箒ちゃん、そしてオルコットさんもいる。

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。　男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ！　デザート、デザート。　わ～いわ～い」

ちなみにデザートというのはこのクラス対抗戦の一位のクラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが貰えるとのこと。
たしかにいいよねデザート！

男だけど、デザート大好きだよ、デザート！

「織斑くん頑張ってね！」

「九曜くんも織斑くんが優勝できるように手伝ってあげて！　ねっ？　ねっ？」

僕といっくんの周りはひとり、ふたりと次々に人が集まってきてあっという間に埋め尽くされてしまった。
僕は座っている状態から立ち上がり、顔を縦に振りながら後ろへと下がっていくが窓際だったせいで背中が窓にぶつかってしまった。
それでも次々に押し寄せてくるクラスの女の子達。
助けを呼ぼうといっくんの方を見てみるが、向こうも僕の方を見て助けを呼んでいる状態だったのでどうにもならない。

「織斑くんなら大丈夫！絶対いけるって！」

「それに専用機を持ってるクラス代表は一組と四組だけだから余裕だよ。　一組なんて3人もいるんだし」

そうなんだよね～。　よくよく考えてみれば一組には僕、いっくん、オルコットさんの三人の専用機持ちがいるんだよね。
これ、ある意味すごいんじゃないかな？
世界で数え切れるくらいのＩＳの中、そのうちの三機はここに集結

してるわけだし。

「――――その情報、古いよ」

突然教室の入り口から声が聞こえた。
誰なんだろうと思い入り口のほうを見てみるとツインテールを揺らしている女の子が立っていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

その子は腕を組み、教室のドアにもたれかかる。

「鈴・・・？　お前、鈴か？」

りん？
いっくんが少し驚いた顔をしながらそう言ったから恐らく彼女の名前は『りん』という名前なのだろう。
どうやら知り合いらしい。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

せ、宣戦布告って・・・
女の子が宣戦布告って言葉使うとなんだか違和感マックスだな～。

「何格好つけてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

なんだかものすごいツッコミを入れるいっくんに僕はくすっと思わず笑ってしまった。
いくらなんでもわざわざ大きな声で言わなくても。

「んなっ！？　なんてこと言うのよ、アンタは！　それにそこの話題の男子も、何影に隠れて笑ってんのよ！」

鈴音さんは僕の方を指差し、怒鳴ってきた。
いや～、だって普段からさっきみたいにクールなのかなと思っていたところにいっくんがツッコミを入れた瞬間に早変わりしちゃうんだもん。
でも、たしかに笑ったのは悪かったから謝っておかないと。

「ご、ごめん」

「おい」

「なによ！？」

あっ・・・その人に向かってその言い方は・・・

バシンッ！

手遅れだった。
鈴音さんに強烈な《黒の出席簿》攻撃が炸裂してしまった。
そう、彼女が聞き返した相手、それはちーちゃんだ。

「ＳＨＲの時間だ。　教室に戻らんか馬鹿者」

「千冬さん・・・」

「織斑先生だ。　さっさと戻れ、邪魔だ」

「すみません・・・」

先ほどの元気が良かった鈴音さんもやはり《黒の出席簿》を操るミス・ちーちゃんには頭が上がらないらしい。
さすがちーちゃんというほかない。

「また後で来るから、逃げないでよ一夏！　あとそこのも！」

ぼ、僕も！？

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

駆け足で自分のクラスへと戻っていってしまった。

「・・・一夏、今のは誰だ？　知り合いか？　えらく親しそうだったな？　後春樹も一夏ほどではないが親しそうだったな」

「一夏さん、春樹さん！？　一体どうなってますの！？」

また、一斉にクラスの子に囲まれて質問の集中砲火に合ってしまう。

ぼ、僕が聞きたいよ！

僕じゃなくていっくんに！　いっくんに聞いてよ～！

バシンバシンバシンバシン！

「早く席に着けひよっこども」

ちーちゃんの愛刀、いや刀ではないけど《黒の出席簿（ブラック アテンデンス）》が噴火した火山の如く火を噴いた。

しかしあの出席簿あれだけ叩かれて痛まないなんてどれだけ頑丈なんだろうか。

新たな疑問が僕の頭の中をよぎった。

一夏Ｓｉｄｅ

「お前達のせいだ！」

「あなた達のせいですわ！」

「と、とりあえず、いっくんのせい？」

昼休み、箒、セシリア、春樹が文句を言ってきた。

いや、春樹の場合文句というのだろうか？

「意味がわからん」

春樹を除くこの二人、午前の授業だけで山田先生に五回、千冬姉に三回も叩かれている。
春樹はいつもの通り普通であったが、この二人だけは授業に集中出来ていなかったようだ。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。　とりあえず学食行こうぜ」

「む・・・　ま、まあいいだろう」

「そ、そうですわね。　そこまで・・・　そこまで言うのであれば言って差し上げないこともなくてよ」

「がっくしょく！　学食～！」

もう訳がわからん。
春樹が俺の横に並び、後ろに箒とセシリア、そのまた後ろにクラスメイトが付いて来ていてまるでアヒルの子供が親についてきている光景に似ている。
食堂に着くと俺はいつもと同じ日替わりランチの食券を買った。
春樹はカレー、箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた。

「待っていたわよ、一夏！　そしてＩＳを動かせる男ナンバー2、九曜春樹！」

大の字になって俺達の前に立ちふさがったボス・・・
いや、先ほど噂になっていた転入生、凰鈴音だった。
後、俺は略して鈴と呼んでいる。

「とりあえずそこ退いてくれ。　食券出せないし、邪魔だぞ？」

「う、うるさいわね！　わかってるわよ」

鈴の手にはお盆があり、その上にラーメンが乗っている。

「いっくん先に行くね？」

「おう。　あっ、俺のも渡しといてくれ」

「わかった」

流石に俺もここで立っていたら邪魔になると思い俺の食券を春樹に渡していっしょに出してもらう。
すぐに春樹のカレーが用意され、目がキラキラと輝いていた。

む、カレーもうまそうだな、俺もそっちにしとけばよかったか。

「それにしても久しぶりだな。丁度丸一年くらいか、元気にしてたか？」

「げ、元気にしすぎてて逆に困ったわよ！」

そ、そうか。
まあ元気なことは良い事だ。
ただ有り余りすぎるのもどうかと思うが・・・

「いっくん先に席取っておくね？　向こう空いてるし」

「おっ、悪い、自分の分は自分で持つわ」

「そう？」

春樹から日替わりランチの乗ったお盆を受け取る。
ちなみに今日の日替わりは鯖の塩焼きだ。

とりあえず春樹が行ったテーブルへと向かい、春樹が座る隣の席へと座った。

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

カレーを食べながら話を聞いている所どうやら彼女はいっくんの幼馴染らしい。
付き合っているわけでもなく、本人曰く箒ちゃんに続く幼馴染、セカンド幼馴染とのこと。

「アンタ、クラス代表になったんだって？」

「ん？　お、おう。　まぁ半分強制的のような気もしないこともないが、そんな感じだ」

「ふーん・・・　あ、あのさぁ。　ＩＳの操縦、見てあげても良い

けど？」

いっくんから顔を逸らし、視線だけを向ける鈴音さん。

「悪いけど春樹がいるからな～」

ダンッ！

「うわっ」

急にテーブルが揺れた。
僕はその反動で飛び上がったまだカレーの乗ったお皿を急いでキャッチする。
だ、誰が・・・？

テーブルを叩いたのは箒ちゃん、オルコットさん、そして鈴音さんだった。

「九曜春樹・・・　アンタは・・・」

ぼ、僕何もしてないよね鈴音さんっ！？
いっくんの練習に付き合うだけで何が悪いの！？

「一夏に教えるのは私と春樹の役目だ！」

「あなたは二組でしょう！？　敵の施しなど・・・」

「関係ない人は引っ込んでてよ」

「なっ・・・」

「関係ない人・・・ですって・・・？」

お、女の子って恐い・・・
目から火花を散らし始め、ついには口論になった。
となりでいっくんはため息をつき、僕のほうを見て「悪いなこんなことになって」と両手を合わせて謝ってきた。
そして時間が立つごとに口論が激しくなってきてしまい・・・

「いっくん、移動しようか」

「そうするか」

僕といっくんは空になったお皿をまとめ、返却し、その場を後にした。

それにしても、いっくんには頑張ってもらわないとな～、クラス対抗戦。

少しずつ戦闘に馴れていってもらうしかないかな？

エピソード４　【中国からの転校生】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

ということで今回から始まりました～ＢＬＯＯＭ～フラグ情報局！
作者、およびこのコーナーのアナウンサーを勤めさせていただくＭｉｔｓｕです！

それでは現状どうなっているのかを・・・

箒　＝　春樹は弟のような感じ？　見た感じ恋心を持っているようには・・・　みえないねえ～

セシリア　＝　◎　このままどうなるのか期待の所です

鈴　＝　春樹に対して悪意を持っている？　今のところ一番フラグが立ちにくそうですね～

？？？　＝　アンノウン

？？？　＝　アンノウン

以上が現状です。

それでは本日の～ＢＬＯＯＭ～フラグ情報局はこれまで。
次回またお会いできることを楽しみに待ってます！

では誤字、感想おまちしております～す。

エピソード5　【本番に向けて・・・】（前書き）

いやはや、先日のこの小説のＰＶ数が今まで書いてきた小説の中で『最高』でした！
思わず感激してしまい、学校の授業を聞きながらニヤニヤしてしまったのは内緒です・・・

気がつけば原作の1巻の終わりに近づいていますね～。
さぁ！　最後のラストスパート！・・・　と行きたい所なんですが・・・
期末テストが近づいております。
それも今週の水曜日から・・・

いやだぁぁぁぁ！！

エピソード5　【本番に向けて・・・】

放課後第三アリーナにて。

いっくんは今日も僕とオルコットさんといっしょにクラス対抗戦に向けての練習だ。

でもいつもと一つだけ違うことがある。

「なんだその顔は・・・おかしいか？」

「う、ううん。　おかしくはないんだけど・・・」

「ああ、なんで箒が・・・」

「篠ノ之さん！？　ど、どうしてここにいますの！？」

そう、いつもと違うことは箒ちゃんが練習に参加するということ。

彼女はＩＳ『打鉄（うちがね）』を装着している。

『打鉄（うちがね）』は国産ＩＳとして好評のある第二世代ＩＳの量産型だ。

その安定した性能を誇るガード重視のＩＳは初心者にも扱いやすく、

それが理由で数多くの企業ならびに国々、そしてこのＩＳ学園において訓練機として配備されている。

「どうしても何も、練習に参加するためだが？　それに近接格闘戦の訓練が春樹だけでは荷が重いだろう。　私も手伝おうと思う」

たしかに近接戦闘を主（メイン）に出来るのは箒ちゃんを除けば僕だけということになる。

箒ちゃんはそう言いながら腕を回し、『打鉄』に装備されている刀型接近ブレードを素振りしている。

『打鉄』のデザインは鎧武者をイメージさせるような感じで、昔から剣道をやっている箒ちゃんにはぴったしだ。

なんで箒ちゃんが剣道をやっていることを知っているかって？

束さんから聞いているからだよ～。

いや～、何度自分の妹がすごいと自慢されたことか。

「くっ・・・まさかこんなにあっさりと使用許可が下りるなんて」

隠れてオルコットさんが悔しそうな声を静かに漏らす。

「では一夏始めるとしよう。　刀を抜け」

「お、おうっ」

やる気満々の箒ちゃんに対しいっくんはいつもの通りだった。

しかしこの二人、刀を構えてる姿が様になっている。

「では――――参るっ！！」

っと、僕も負けてられないよ！

ガキィィィン！

「僕も入らせてもらうよ、箒ちゃん、いっくん」

箒ちゃんが振るった刀を僕の《白鷺（しらさぎ）》で抑える。
おおっと声を上げるいっくんだが、その一方箒ちゃんは目を丸くして驚いている。

「お待ちなさい！　一夏さんと春樹さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

「い～や、私だ」

一度刀を下げオルコットさんと対峙する箒ちゃん。

ち、ちょっと二人ともそんな熱くならなくても・・・

「ええい、邪魔な！　斬り倒す！」

「訓練機ごときに後れを取るほど、やさしくはなくってよ！」

あ～あ～、始めちゃった。
箒ちゃんが刀で切りかかり、それをあらかじめ展開していたショートブレード《インターセプター》で受け流すオルコットさん。
接近戦が得意でないオルコットさんはもちろんのこと《スターライトｍｋ？》を連射し始めた。
連射というよりも見た感じ乱射といったほうがいいのかもしれない・・・

二人の戦いはすでに止められるようなものではなくなってしまった。
ここで僕まで入ったら巻き添えくらいそうだな～。
それだけは避けたい。

「はあああああ！！」

「甘いですわよ！」

「うわっと」

流れ弾が飛んできて僕といっくんの足元へと着弾する。

ほ、本当に危ない・・・　二人とも完璧にいっくんの訓練を忘れている状態だ。

こうなったら僕だけでも練習に付き合おうと思うが、あの二人がアリーナの全体を占拠してしまっているので端で練習することすら出来ない。

「どうしようか、いっくん」

「と、とりあえず終わるまで見とくか」

この戦い・・・本当に終わるのかな?

「一夏と春樹!」

「何を黙ってみてますの!?」

「「ふぇっ（うえっ）!?」」

「何を黙ってって・・・　どっちかに味方したらお前ら怒るだろ?」

僕は隣でブンブンと顔を縦に振る。

誰が見てもこの状況でどちらかに加勢すれば、必ずどちらかが怒るだろう。

いっくんと僕が片方ずつに分かれればそれで良いのかも知れないけど、どっちか一人ではなく二人とも味方しないと納得はしなそうだ。

「「当然だ（当然ですわ）！！」」

ど、どうしよう・・・

僕といっくんは顔を見合わせどうしようかと沈黙状態になった。

それがいけなかったのかわからないけど、その数分後、僕といっくんは　2対2・・・

つまりは　僕といっくんでチームとなり襲い掛かってきた彼女達とＩＳ戦をさせられた。

僕はまだしもいっくんは大分シンドそうだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ったくあいつら手加減ってものを知らないのか？」

「あはは、でもいっくん逃げるという一種の戦闘方法を学んだんじゃない？」

更衣室で笑い合いながら持参してきたタオルで汗を拭く。
それにしてもあの二人燃え上がりすぎだよ。
怒ったら男よりも女の方が強いと言われているけど、あながち間違っていないかもしれない。

「一夏っ！」

バシュッとスライドドアが開いて鈴音さんが現れる。

「げっ！　九曜春樹・・・」

「り、鈴音さん・・・」

鈴音さんは僕を睨みながらいっくんの方へと行き、無言でタオル、そしてスポーツドリンクの入った入れ物を渡した。
ぼ、僕も飲み物飲みたい・・・　うぅ・・・

「サンキュ。　あー、生き返る・・・」

いっくんは鈴音さんからそれを受け取りタオルを頭に乗せて、スポーツドリンクをゆっくりの飲む。
僕は顔には出しはしなかったけど、その飲み物を奪い取ってでも飲みたかった。
それほど喉が渇いていたけど、自分の唾を飲み込み我慢する。

いっくんのその光景を見ている隣で鈴音さんは僕をずっと睨みつけていた。
こ、恐いよ～。
僕はちゃっちゃと着替え、自室へと戻ることにした。

「い、いっくん、僕もう戻るね？」

「そうか？　わかったじゃあな」

手を振ってきたので、僕も手を振り返す。
更衣室を出るまで鈴音さんのある意味では熱い視線が僕の背中にチクチクと刺さっていた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

同日の夜。
正確には午後八時を過ぎ、夕食を食べ終わりゆっくりとする時間だ。
今回違うのは自分の部屋で過ごすのではなく、いっくんと箒ちゃんの部屋にいること。

まったりムードになっている時に嵐の如くやってきた人物がいた。
今のところ僕の苦手な人・・・　鈴音さん。
部屋に入ってきて第一声は、

「部屋代わって」

「ふざけるなっ！　なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

箒ちゃんが大きな声で反論する。
その声には驚きと怒りが入り混じっているように感じた。

「いやぁ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？　気を遣うし、のんびりも出来ないし・・・」

いやいや、勝手に決め付けるのはどうかと思うな、うん。

「その辺、あたしは平気だから変わってあげようかなって思ってさ」

「べ、別にイヤとは言っていない！　それにだ！　これは私と一夏の問題だ！　部外者には関係ないことだろう」

「大丈夫。あたしも幼馴染だから」

そう言いながら鈴音さんは発展途上中であろう少し膨らみかけている胸元を強調するように胸を張る。
しかし女の子というものはこんなにも喧嘩するものなのだろうか。
束さんの場合もっとほんわかしているような雰囲気の方が多かったような・・・
ただし僕とかちーちゃんと話しているときだけだけどね。

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

ま、まぁ幼馴染と言われれば部外者ではないような気もしないことはないけどな～。
ここで口を挟むと恐いから言わなかった。

いっくんはその二人の口喧嘩を僕と見ていることしか出来なかったが、ついに口を開いた。
この辺は見習わないとと思う。

「鈴」

「うん」

「それ、荷物全部なのか？」

「そうだよ。あたしはボストンバッグひとつあればどこでも行けるからね」

彼女の足元には女の子でも十分に持てそうなほどのバッグが置いてある。
本当にそれだけで良いのかなと思うほどの大きさだ。
だって服、下着、ブラシ、その他もろもろ入れていたら収まりきらない。
それに女の子の場合は男の子よりもたくさん色んな物が必要なイメージがある。
イメージというより実際必要なのだろう。

そういえば一度いっくんとオルコットさんの部屋に呼ばれたときがあったんだけど彼女の部屋は物凄かった。
なんていうんだろう・・・
まるでお城の部屋の一角と言えるくらいゴージャスだったのだ。
ほとんどテントで暮らしていた僕にとっては逆に苦痛で仕方がなかったが、同室の女の子は大丈夫なのかと心配になってしまう。
やっぱり普通が一番だよ、普通がね。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！　出て行け！　ここは私の部屋だ！」

大声で怒鳴り散らかす箒ちゃん。

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？　じゃあ問題ないじゃん」

「ま、まあまあ二人とも落ち着いて・・・」

キッ！

ものすごい睨まれたので止めようと思っていた気持ちもどこかへ吹き飛んでしまった。
まるで肉食動物に睨まれる捕食者のような光景だ。

「いっくん何とかしないと・・・」

「あーあー、何も聞こえないし見えないーー」

な、なんという・・・
手で耳を塞ぎそっぽを向くいっくん。
なんて人任せな。

だめだこれはと思いコップに入れられたお茶を全部飲み干し、自室に戻るために部屋をでた。
そして部屋を出て数秒後、

パァァンッ！！

物凄い良い音が廊下に響き渡った。
どうしたんだろうと思い振り向くと、鈴音さんがボストンバッグを片手に走ってきた・・・僕の方へと・・・

案の定ぶつかってしまい、彼女の体を支えきれなかった僕は彼女を抱きしめ後ろにこけてしまった。

「イタタタタ・・・　だ、大丈夫、鈴音さん？」

「うっ・・・」

えっ？
鈴音さんはすぐに立ち上がりそのまま走っていってしまった。

な、泣いてた？

僕はダッシュでいっくんの部屋へと戻る。
そしてそこで見たのは・・・

ほっぺに手形の真っ赤なマークを付けたいっくんが棒立ちしている姿だった。
箒ちゃんもお怒りのようで、黒いオーラを発している。

「な、何かあったの？」

息を飲みながらいっくんい聞いてみる。

「・・・俺にもさっぱり・・・」

さ、さっぱりって言われても鈴音さん泣いてたんだけどな～。
これは僕はツッコミなしで見守るのが正解なのかな？

「そ、そう・・・　お、お休み・・・」

放心状態のいっくんの姿を見ながらゆっくりのドアを閉めた。
一体何があったんだろう。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

五月。

あれから数週間が経った。

あれ以来というもの、鈴音さんの怒る度合いが前以上にすごいことになっていた。

こう、彼女の目が・・・　キッ！　から　ギリッ！　になった感じだ。

説明しにくいけどとりあえず恐いことには変わりない。

いっくんの場合、前のように廊下や学食で会っても顔を背けられるなど明らかに怒らせてしまっている様子が伺える。

誰が見てもあれは怒っていると言える。

「いっくん、来週からいよいよ本番だね」

「は～・・・　だな～」

大きなため息をつくいっくん。

放課後、今日もまた特訓のためにいつのも場所第三アリーナへと足を進める。

メンバーはいつもどおり、僕、いっくん、箒ちゃん、そしてオルコットさんの四人だ。

「ＩＳ操縦もようやく様になってきたな。　今度こそ・・・」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。　このくらいは出来て当然、出来ないほうが不自然ですわ」

「ふん。　中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか」

「まあまあ、箒ちゃんもオルコットさんも落ち着こう？　ねっ？」

む～・・・　と言ってお互い顔を逸らす。
この二人は相変わらずずっとこんな調子だ。
仲がいいのか悪いのか・・・

「でも確かに良くなってきてると思うよいっくん。　この調子だと優勝も夢じゃないかもね？」

「自分じゃよくわからんが、春樹が言うならそうなのかもな。　ありがとな春樹」

「い、いや～、僕何にもしてないよ～。　あはは」

人に感謝されるほどうれしいことはない。
束さんといた時とか、よく手伝いをしてたんだけどお礼の変わりに良く頭を撫でてくれた。
それがうれしくってうれしくって仕方がなかった。

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回（ゼロリアクト・ターン）のおさらいから始めましょう。
春樹さんも手伝ってくださいな？」

頬を赤くしながら尋ねてきたオルコットさんが無性に可愛かったのは内緒だ。
元から美人とも言えるオルコットさんが頬を赤くして頼んできたら・・・　ねぇ？
きっと世界の男の子は火の中、水の中・・・　だよねきっと。

「ええい、このっ！――――聞け、一夏っ！」

「俺は聞いてるって！」

「ほらほら、箒ちゃんも怒ってばっかりだと可愛い顔が台無しだよ？」

「なっ！？／／／」

「おいおい、春樹それはなんて冗談だ？」

パッシィィィン！

箒ちゃんがどこからか木刀を取り出しいっくんの頭を叩いた。
も、木刀は痛い・・・
流石にそれはやりすぎじゃあ・・・

「ったぁぁぁぁぁ！！　何すんだよ箒！」

「お前が悪い！」

「春樹さん！　私には言ってくださらないのですの？　そ、その・・・　可愛いと・・・／／／」

「あ、あははは・・・」

僕は苦笑いしながら第三アリーナ、Aピットのドアセンサーに触れる。
指紋と静脈認証によって開放許可が下りると、ドアは空気が抜けたような音を立て開いた。

「待っていたわよ、一夏！　そして春樹！！」

そしてその先に待っていたのは、ツインのしっぽ。
つまりはツインテールを揺らしながら腕組みをして不適な笑みを浮かべている鈴音さんだった。

エピソード5　【本番に向けて・・・】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

さぁ、本日もやって参りました～ＢＬＯＯＭ～フラグ情報局コーナー！

いや～、鈴とのフラグが立ち気味？　そして、箒とも？　どうなんだろうか・・・

それでは現状をどうぞ！

箒　＝　△　立ちかけたけど実際のところはどうなんだろうか・・・

セシリア　＝　◎　すでに立てさせたつもりでいる作者です

鈴　＝　△　箒の次に微妙ですね・・・　春樹とこけたときどんな感じだったのか・・・　でもフラグを立たせるならもっとしっかりと立たせたい！

？？？　＝　アンノウン

？？？　＝　アンノウン

しかし　？？？　＝　アンノウン　原作、またはアニメを見ている方ならすぐにわかりますよねｗ

自分はあえて公開させない派でございます。

それでは作者の燃料である感想、そして誤字お待ちしております！

エピソード6　【クラス対抗戦開始】（前書き）

も、もう少しで1巻が・・・
というところで終わってしまいました、はい。

それではどうぞっ！

エピソード6　【クラス対抗戦開始】

「待っていたわよ、一夏！　それに春樹！！」

ピットを開け、中で待機していたのはなんと鈴音さんだった。
腕組をし、不敵な笑みを浮かべている姿を見るといやな予感しかしない。

ついこの間まで怒っていた様子だったが、一体どうなっているんだろう・・・
きっといっくんもそう疑問に思ったに違いない。

箒ちゃんとオルコットさんは僕といっくんの後ろから彼女を睨みつけている。

「貴様どうやってここに・・・」

「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずですわよ！」

そう言われた鈴音さんは挑発的な笑いの後に自信満々に、

「あたしは関係者よ。一夏と春樹関係者。　だから問題なしね！」

いっくんとセカンド幼馴染として関係が成り立っていることに対し

ては否定しないけど、僕は何一つ繋がりがないような気がする。
なんせつい最近であったばかりなのだし、彼女は僕に対して敵意のようなものむき出しだし・・・
そんなことを思っていると後ろから殺気に満ち溢れた何かを感じ取った。
そして急に僕の体に鳥肌が立ち始める。

「ほほう、どういう関係かじっくりと、詳しく聞きたいものだな・・・」

「盗人猛々しいとはまさにこのことですわね！」

その殺気に似たような何かを放っていたのは誰でもなく箒ちゃんとオルコットさんだ。
箒ちゃんなんてヒクヒクと口元が引きつっているから余計に恐ろしい。
この殺気に触れているくらいだったら、さっきのいっくんのように思いっきり木刀で叩かれた方がマシのような気がした。

「はいはい、負け犬の遠吠えは後から聞いてあげるからすっこんでてよ」

「「ま、負け犬っ！？」」

「で、一夏反省した？」

反省ってなんだろう。
あのときの話かな？　ほら僕が駆けつけたときにはいっくんの頬に大きな赤い手形マークが付いてた時の・・・
それに鈴音さん泣いてたし、きっとそうだろう。

「へ？　なにが？」

何のことか理解していないらしいいっくんは首をかしげる。
その普段と同じ表情からして本当に何のことか理解していないみたい。

「だ、か、らっ！　あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか・・・仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われてもな・・・　鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ・・・　じゃあなに？　女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

いっくん！　お願いだからここでそれを否定して！
放っておくわけがないじゃないかとかそんな感じで良いから！

神様お願い、じゃないと・・・

心の中でそう何度も願ったが、

「おう」

無残にその願いは砕け散ってしまった。
ち、ちーちゃんから聞いてはいたけど鈍感差がここまで酷いとは予想外だった。

「なんか変か？」

「・・・ああ、もうっ！」

ついに我慢が切れたらしく突然頭をかく鈴音さん。

「謝りなさいよ！」

「い、いっくん。　本当に覚えてない？」

いっくんにそう問うがこちらもこちらで頭に血が上ってきてしまっ

たらしく僕の質問に答えなかった。
その後ろで箒ちゃんとオルコットさんがぎゃーぎゃーと騒ぎ立てているので余計に収拾がつかない感じだ。
鈴音さんのセリフから察するにいっくんは謝らなければいけないほどの『何か』をやったのだろう。

「だから、なんでだよ！　約束覚えてただろうが！」

「あっきれた！　まだそんなこと言ってんの！？　信じらんないっ！」

いっくん　対　鈴音さんの口喧嘩がさらにヒートアップする。
こうなったら強制的にこのカオスな状況を壊すしかない。
僕は鈴音さんの目の前まで歩いていった。

「春樹、あんた邪魔――――」

ガキィィィン！！

鈴音さんの言葉は金属と金属が擦れあう音で途中でかき消された。
彼女の正面からほんの数センチ離れた所に僕の《白鷺》の一振りが地面に突き刺さっている。
僕は飛び交う《口喧嘩》という弾丸を真っ二つに斬ったのだ。

いきなりのことだったから鈴音さんは目を丸くし、いっくん、そして箒ちゃんとオルコットさんも驚き静かになる。

「突然ごめんね？　でも収拾がつかないからさ、割って入らせてもらうね？」

「なっ・・・　なっ・・・・」

鈴音さんは僕を指差しながら口をパクパクさせた。

「いっくんも少し落ち着こう？」

「あ、ああ」

いっくんの方を振り返り落ち着かせる。
落ち着かせた様子を確認した僕はもう一度鈴音さんに向き直った。

とりあえず、いっくんは何で文句を言われているのかわからないってことを・・・

「え～とね鈴音さん。　いっくんが何で文句を言われているのか全然理解してないのわかってるよね？」

ここでまた怒らせてはいけないと思いやさしく言葉をかける。

「う・・・　うん」

目を下に向けて彼女は顔を縦に振った。
一応そのことは本人も理解はしていたみたいだ。

「だからどのことで鈴音さんが怒ってるのか説明してあげないと、話がまったく進まないよ？」

そういっくんの場合ちゃんと説明しないとことの終結が見えない。
これで鈴音さんが説明して、いっくんが謝れば・・・

だが、なぜか鈴音さんの体はプルプルと震え始めそして、

「説明したくないからこうして来てるんでしょうが！！」

爆発した。

「えぇぇぇぇぇぇ！？」

なんでここでまた怒るの!?
せっかくいいとこまで言ったと思ったのに・・・
僕はどこで何を間違えたんだろう?
ううん、間違ってないよね?　対応はあってたよね?

「こうしましょう!　来週のクラス対抗戦、そこで勝ったほうが負けたほうに何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね!?」

「おう、いいぜ。　俺が勝ったら説明してもらうからな」

な、なんでいっくんもそこで了承しちゃうかな〜・・・
これじゃあ僕が取った行動はまるで意味がなかったみたいじゃない・・・　うぅ・・・

僕は心の中で泣きそうだった、ううん、泣いていた。

「えっ!?　せ、説明は、その・・・」

「なんだ?　やめるならやめてもいいぞ?」

「誰がやめるのよ!　あんたこそ謝る練習しておきなさいよ!」

「なんでだよ馬鹿」

もうまるで第二次災害だ。
例えると台風が日本列島を襲った後に、さらに各地で山が大噴火しているような感じだ。
もう日本終わるんじゃないかな、うん。

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　馬鹿はアンタよ！」

す、すごい言われよう。
一体いっくんは何をやったのか本当に気になってきた。

だがこの鈴音さんの言葉の後にいっくんは弱っている日本列島に最後の一撃を入れた。

「うるさい、『貧乳』」

ドォォォォンと雷の音が現実（リアル）に聞こえてきそうだった。

だ、だめだよいっくんそれを言ったら・・・

僕は頭を抱えながら目を瞑った瞬間、ホントに雷のような地響きが

耳に入ってきた。

ドガァァァンッ！！

突然の爆発音と共にやってきたかすかな揺れ。
内心本当に日本の終わりがやってきたんじゃないかって思った。

ゆっくりと目を開けて見ると、鈴音さんは指先から肩にかけて『部分展開』してＩＳ装甲化していた。

「い、言ったわね・・・　言ってはならないことを・・・　言ったわね！！」

バチチとＩＳ装甲化された部分に紫電がほとばしる。

「い、いや、悪い。　今のは俺が悪かった。　すまん」

うん、さっきのはいっくんが悪い。
ごめんだけどフォローのしようがないよ、流石に・・・

「今の『は』！？　今の『も』よ！　対抗戦でちょっとは手加減しようかと思ったけど・・・　いいわよ、希望通りに全力で叩きのめ

してあげる」

鈴音さんは鬼の形相のままダンダンッと巨人が歩くような大きな足音を立ててピットを出て行った。
僕はただそれを見ていることしか出来なかった。

だってあの状態の鈴音さんに話しかけたら明らかに吹っ飛ばされて僕はお星様になりそうだったんだもん。
まだやりたいことといっぱいあるし、それは勘弁だ。

地面に刺したままでいた白い刀身の刀《白鷺》の展開を解除する。
そしてちらりと壁を見ると、直径３０センチほどの出来立てホヤホヤのクレーターがあった。

「・・・パワータイプですわね。　それも一夏さんと同じ、近接格闘型・・・」

今まで空気のような存在だったオルコットさんが真剣な眼差しで破壊後を見つめ説明した。
そんなことよりも・・・

「いっくん・・・　胸のことはわかってても言っちゃだめだよ」

「あれは俺が悪かった・・・　すまん」

鈴音さんいないのに謝っても・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

試合当日、第二アリーナ第一試合。　組み合わせはいっくんと鈴音さんだ。

新入生　対　この世の男でＩＳを使える２人中の１人　の戦いとあって、アリーナは全席満員状態。

それも席に座れなかった人たちは通路まで立ってみているので、完壁に第二アリーナは観客で埋め尽くされていた。

ちなみに僕は席に座れなかった・・・

だけど学園側もそれを考慮していて会場に入れなかった生徒や関係者のために、リアルタイムでモニターで鑑賞できるようになっている。

「いっくん大丈夫かな」

鈴音さんのＩＳ『甲龍（シェンロン）』。
その機体はオルコットさんの『ブルー・ティアーズ』同様、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的で、肩の横に浮いている棘が付いている装甲が攻撃的なことを象徴している。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが入り、二人は空中に浮きながら移動する。　規定位置に付いた二人にはたった５メートルしかない。

「・・・練習成果、見せてあげなよいっくん」

一夏Ｓｉｄｅ

『それでは両者、試合を開始してください』

ビッーとブザー音が鳴り響き、鳴った瞬間に俺と鈴は動いた。

ブザーが鳴ると同時に俺は《雪片弐型》を展開、そして相手の物理的な攻撃を防ぐ。
鈴が手にしている異形の青竜刀・・・
いやそれよりももっとかけ離れた形状をしている刀のようなものの衝撃を防いだのだ。

「初撃を防ぐなんてやるじゃない。　けど・・・」

両端に刃のついた青竜刀をバトンを扱うように回しながら切り込んできた。
しかも高速回転付きだ。

まずい・・・　このままじゃあ・・・

一度距離を置こうとするが、

「甘いっ！」

鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間に俺は『殴り』飛ばされた。

な、なんださっきのは。　目に見えなかったぞ。

軽く意識が飛びそうになるが慌てて取り直す。

だが、当然ながら鈴の攻勢は止む事がない。

「今のはジャブ」

ドンッ！

「ぐ・・・はっ・・・」

目に見えない何かに殴られ、俺は地面に打ち付けられる。シールドバリアーを貫通して痛みが届いた。
ダメージもまだ始まったばかりと言うのに大きく喰らってしまった。

かなり、まずいっ！

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

「衝撃砲か～・・・　あれはきついね」

会場の外からリアルタイムモニターを見ながら鈴音さんの武器の分析をした。
あれは空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出している。
それにあの武器の特徴は砲弾が向かってくるのがわからない。
つまりは『目に見えない』。
目に見えていたら避けることはまだ出来るが、見えないとなるとまた話は別なんだよね。

「いっくん、ちーちゃんに教えてもらった《雪片弐型》の特殊能力を今使わないで何時使うの？」

春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏Ｓｉｄｅ

俺は何とか勘で衝撃砲を避けながら先週の訓練を思い出していた。

『バリアー無効化攻撃』

前にあったセシリア戦の後、俺と箒はどうして急激にシールドエネルギーが減ったか考えていた。
ＩＳの活動記録を見ても、結論が出ない状況だったがそこに、進歩のなさに焦れた千冬姉、そして春樹がやってきて説明してくれた。

「え～とね、《雪片》の特殊能力が、それなんだよ。　相手のバリアーがどれだけ残っていても、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることが出来るんだよ」

「そうだ。　そうすると、どうなる？　篠ノ之」

「は、はいっ！　ＩＳの『絶対防御』が発動して、大幅にシールドエネルギーを削ることができます」

「その通りだ」

「ちー、じゃなかった織斑先生が世界一に立てたのもその能力があったのが大きかったんだよ」

そう春樹と千冬姉が説明してくれた。

「まあ何が言いたいかっていうと、自分のシールドエネルギーを攻撃に転化してるってこと。　ただその特殊攻撃をするのにかなりの

エネルギーが必要になるのが注意点なんだよ」

春樹　アンド　千冬姉の説明終了

一つのことを極める方が、お前には向いているさ。　なんせ――――私の弟だ。

千冬姉が最後に言ってくれた言葉が頭の中に連呼した。
そうだ・・・
だから今日までの訓練は基礎移動技能のみに時間を費やした。
春樹、箒、セシリアには何度も何度も同じところを注意されようやく基礎が固まってきたんだ。
あいつらの苦労もこんな所で無駄にしたくない。

だが普通に考えればその実力さは歴然としている。
しかもセシリアと違い鈴は戦闘に入ると冷静になるタイプだ。
こういうタイプは基本的に強い。

気持ちで負けないってことくらいか・・・

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ・・・　そんなこと当たり前じゃない・・・　とっ、とにかくあたしとあんたじゃどれくらい格が違うか見せ付けてあげるわよ！」

鈴は両刃青竜刀をバトンのように一回転させてから構えなおす。

俺は春樹に一週間掛けて教えてもらった『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使って距離を詰めようとする。

「うおおおおっ！！」

《雪片弐型》のバリアー無効化を同時に放ちながら突っ込む。

これで半分、いや半分以上削らなければ、じわじわとすり減らされて後は終わりだ。

鈴に突っ込んでいっているその刹那だった。

ズガァァァァンッ！

鈴に刃が届きそうになった瞬間に、大きな衝撃がアリーナ全体に走

った。
これは鈴の衝撃砲ではない。範囲も威力も桁以上に違う。

ステージ中央では砂が混じった煙が上がっている。
どうやらさっきのは『何か』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた時に起こった衝撃はらしい。

「な、何だ？　いったい何が起こって」

『一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！』

混乱していた俺に、鈴から急にプライベート・チャンネルが入ってきた。

一体何を言っているんだと思った瞬間だった。
ＩＳのハイパー・センサーが緊急忠告を行ってきた。

――――ステージ中央に熱源反応。　所属不明のＩＳと断定。　ロックされています

「ッ！？」

思わず息を呑んでしまった。

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られていて、その侵入してきた『何か』はそれを貫通するほどの攻撃力を持ち合わせている機体ということだ。

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだよ！？」

まだ初めての相手との回線の開き方がわかってない俺は、普通にオープン・チャンネルで聞く。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって・・・　馬鹿言えっ！！」

女を置いてそんなこと出来るかっつーの！
しかし、この状況・・・　どうしたものか・・・

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

な、何あれは・・・
リアルモニターを通して侵入してきたものを見つめる。

深い灰色をしたそのＩＳは手が異形に長く、つま先よりも下まで伸びている。
そして何よりの特徴が『全身装甲』なことだ。
ほとんどのＩＳは部分的にしか装甲は必要としない。
なぜなら防御のほとんどがシールドエネルギーによって行われるからだ。
だが肌が一ミリたりとも露出していないＩＳなど見たことも聞いたこともない。

それよりも中にいるいっくんと鈴音さんが危険だ。
何せあのＩＳの力は未知数すぎる。

「やるしか、ないよね・・・　唐梅」

僕はＩＳ『唐梅』を装備、展開する。
そしてそこから飛び立ち、アリーナの上空へと向かった。

「ちー・・・じゃなかった！　織斑先生」

『九曜か、何をしている』

ピットにいるであろうちーちゃんにプライベート・チャンネルを開く。

目的はもちろん遮断シールドの解除だ。

「今すぐにアリーナを覆っている遮断シールドの解除『無理だ。扉も全てロックされ、さらに遮断シールドのレベルは4に設定された。　我々には避難すら救援に向かうことすらできない』問題ないです」

僕がそう答えると、ちーちゃんはふっと鼻を鳴らした。

『使うのか？　《雪消月（ゆきげしづき）》を』

「うん、後オルコットさんいるかな？」

『は、はい！　いますわ！』

よし、これならいける。

僕は遮断フィールドごしにアリーナ内部を見つめていた。

エピソード6　【クラス対抗戦開始】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

はいは～い、アナウンサーのＭｉｔｓｕです！
今回フラグを立ってそうな要素が一つもありませんでしたが・・・
どんな感じなんでしょうか。
ジャン！！

箒　＝　△　進展なし

セシリア　＝　◎　進展なし

鈴　＝　△　若干、春樹のカッコイイシーンは取り入れたのですが・・・　あまり関係なさそうです・・・　残念？

？？？　＝　アンノウン

？？？　＝　アンノウン

といった感じで進展はゼロに近いですね。
なんだよ～と残念がらないでくださいよ～、次回恐らくこのキャラの誰かが少しだけ進展する予定です。
しなかった場合は申し訳ない（オイ

仮に進展した場合誰が進展するか予想できますよね？

作者のテレパシーを感じ取ってください！

それでは感想、誤字お待ちしております！

エピソード7　【アビリティー発動】（前書き）

期末テスト突入してますがどんどん書いてきます！

早く新ヒロインを登場させたい・・・

エピソード7　【アビリティー発動】

一夏Ｓｉｄｅ

「くっそぉぉぉぉぉ！！」

何度も間合いをつめ、《雪片弐型》を振るうがするりと簡単にかわされてしまう。
さっきので合計四回ものチャンスを逃したことになる。
なんなんだこいつは・・・

「一夏っ！　馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

普通ならかわせるはずのない角度、そして速度で攻撃をしている。
だが敵のＩＳは全身につけたスラスターの出力が尋常ではないのだ。

まずいな・・・

シールドエネルギーの残量が６０を切っていた。
バリアー無効化攻撃を出せるのは、よくて後一回。

それにしてもさっきから一つ気になることがある。

「なぁ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？　コマとか言うんじゃないでしょうね」

なぜコマかって言うとでたらめに長い腕をコマのようにぶんぶんと振り回して攻撃してくるからだ。
しかも、その高速回転の状態からビーム砲撃までやってくるので手に負えない。

「いや、なんつーか・・・　機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

あんたついに頭でもイかれたんじゃないの、って顔をしてきた。

「そうじゃなくてだな。　えーと、あれ本当に人が乗ってるのか？」

「は？　人が乗らなきゃＩＳは動かな・・・」

鈴の言葉がそこで止まる。

「そ、そんなはずないわよ。　ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない」

俺もそれは教科書を何度も読んで同じ文章を何回も見た。
しかし、それは本当なのだろうか。
最初は女しか使えないと言われていたＩＳだって、男である俺や春樹が使えているんだ。

「仮に、仮にだ。　無人機だったらどうだ？」

「なに？　無人機だったら勝てるって言うの？」

「ああ、人が乗っていないのなら全力で攻撃しても大丈夫だしな。
それに、『いっくん聞こえる！？』　春樹か？　悪いけど今・・・ってなんでＩＳを展開させてんだ？」

話の途中で春樹がプライベート・チャットで通信してきた。
それもなぜか春樹の専用ＩＳ『唐梅』を展開している。

『僕も今からアリーナ内部に入る』

「春樹、提案がある」

俺が考えた策を春樹に伝える。
鈴の衝撃砲のエネルギーを取り込んで《瞬間加速（イグニッション・ブースト）》に使い、瞬間的に敵ＩＳに接近、そしてシールド無効化攻撃《零落白夜》で、敵ＩＳのシールドバリアーとアリーナの遮断シールドを一緒に切り裂く。恐らくその時点で白式のエネルギーは切れるから、念のために春樹とセシリア敵ＩＳを狙わせておく。
以上が俺の策だ。
そう伝えると春樹は、にっこりと微笑んだ。

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

ま、まさかここまで似たような提案が出るなんて・・・
しかもあのＩＳが無人の可能性があるって発想はなかったな。
しかしいっくんが提案した作戦の最後らへんには納得がいかない。

「いっくん、僕が遮断シールドを壊すよ。　出来たら敵ＩＳのバリアーも剥がすね？」

『遮断シールドを壊す？　どうやって？』

「僕にもあるんだよ。　《零落白夜》と同じ効果を持つ能力がね」

『なっ！？』

あははは、思った通りの反応でうれしいな。
そう、僕のＩＳにもあるんだよ、まったく同じ効果を持つのがね。
《雪消月（ゆきげしづき）》・・・
これで遮断シールドは剥がせれるし、欲を言っちゃうとついでに敵ＩＳのシールドも無効化したいね。

「まあ、変更点はいっくんが突っ込む前に僕が遮断シールドを剥がす。　そして、運がよければバリアーも無効化するから、止めはいっくんとオルコットさんがやる・・・　オッケー？」

『ああ、それで行こう！』

よしっ！
これで後はこの作戦が成功するのを祈るだけだ。

・・・ううん・・・成功させるんだ絶対。

僕は両手に持っていた《白鷺》を連結させ弓形態に移行させた。
弦にそっと手を乗せ、そして意識を集中させた。

――――《雪消月》使用可能。　エネルギー転換率８０％

通常の二倍長い紅蓮の矢が出現し、そのまま僕は狙いを敵ＩＳに向ける。

ちなみにエネルギー残り２０％とは保険だ。
もし何かあったときのために残しておいたんだ。

矢を放とうとしたとき、予定外の出来事が起こった。

「一夏ぁっ！！」

キィィィィィン・・・　突然のハウリングがアリーナ全体に響き渡る。
ちなみに会場の外までその音は漏れてきていた。

その声の主は箒ちゃん・・・

中継室のところを見てみると試合の審判とナレーターがのびていた。
か、可愛そう・・・

「男なら・・・男ならそんな敵に勝てなくてなんとするっ！！」

そして新たなハウリング攻撃が全体に轟く。

あちゃ～・・・　箒ちゃんだけに説明をしてなかったのはまずかったな。

まさかこんな事になるなんて想定外だった。

「・・・まずいっ！」

箒ちゃんの大きな声に敵ＩＳが反応してしまい、彼女にビーム砲撃の照準を合わせている。

僕は予想外の出来事で下げてしまっていた、《白鷺》の弓バージョンを構えなおしてターゲットを捕らえる。

「いっくん！？」

新たな予想外の出来事が起こった、いっくんは鈴音さんから衝撃砲を自ら受け、それを取り込んでいた。

「間に合え！！」

僕はいそいで矢を放った。
放つと同時にいっくんは《瞬時加速》をし、敵ＩＳに突っ込んで行った。
矢は遮断シールドを裂き、そのＩＳの右足に直撃し、そのままバランスを崩す。
よ、良かったよ間に合って・・・　後は止めをさすだけだ。
「いっくん！　オルコットさん！　後はよろしくっ！！」
「任せてくださいな！！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
いっくんの《零落白夜》でバランスの崩した敵ＩＳの片腕を切り落とし、倒れた。
その直後オルコットさんの《ブルー・ティアーズ》４機と《スターライトｍｋ？》による集中砲火が降り注いだ。
ドガァァンと爆弾でも爆発したような音がし、黒い煙が空へと続いた。
「いっくん！！　僕はまだ《雪消月》使ってなかったよね！？　も

うっ！」

僕はアリーナ内部に入り、いっくんに怒鳴った。

「あはははは、悪い悪い。　まあ結果オーライってことでいいじゃん、箒も助かったんだし」

たしかにそうだけど・・・
これもしかしてうまく丸め込まれた？

「もう・・・　オルコットさんもお疲れ。　流石だね」

「あ、当たり前ですわ！／／／」

その場にいた全員が安堵に包まれた。
だがそれも僅か数秒の間だけだった・・・

――――敵ＩＳ再起動確認！　警告！

「ッ！？」

すぐさま《白鷺》を構え攻撃に備えるが・・・
突如光が黒い煙の中から現れた。
その光の進む方向はいっくんだ。

「「「「いっくん（一夏）（一夏さん）！！」」」」

手を伸ばすが届かない・・・
いっくんも避けようとするが回避行動に移るのが数秒遅れたせいで
間に合わない。
ドガァァァン！！
大きな爆発を起こし、アリーナの壁へと吹き飛ばされ背中から追突
してそのままぴくりとも動かなくなる。

「そ、そんな・・・」

僕の中で何かが弾けた。
そう、何かが・・・　頭の中で・・・

――――警告！　新たな熱源反応

そう警告が出た瞬間に第二射目が鈴音さんの方へと放たれた。

鈴Ｓｉｄｅ

「一夏っ！！」

明らかにあれは直撃だった。
それもシールドエネルギー残量が少ない状態であんなの当たったら・・・

私は壁を背中にピクリとも動かなくなってしまった一夏をハイパーセンサーで数十倍に拡大して安否を確認する。
わかる・・・大丈夫・・・
ＩＳに付けられている絶対防御のおかげで気絶してるだけだ。

「よ、よかった・・・」

私が息を漏らした瞬間、

――――警告！　ロックされています！

警告の表示が目の前で点滅し始め、我に返る。

振り返ると、さっきのコマみたいなＩＳが残った片腕を伸ばしあたしにビーム砲撃を放ったところだった。
や、やばい・・・
当たっちゃう！！
そこであたしは反射的に目を閉じてしまう。

「あ、あれ？　痛くない・・・」

そっと目を開くと春樹があたしの前に立っていた。

「は、春樹・・・」

鈴Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

「は、春樹・・・」

「もう、これ以上は『友達』をやらせないから・・・」

僕は強く、強く刀を握った。
神経が研ぎ澄まされ、どこからか力が溢れてくる。

――――《百花繚乱》発動。展開装甲とエネルギーバイパス構築・・・３０％完了

『唐梅』が赤く染まり、機体から白と赤の粒子が散布される。

《百花繚乱》・・・
少なくなった残量エネルギーを増幅して一気にフルの状態に戻す。
だが、今の唐梅ではフルに戻すことが出来ない。
ある主要な部分が欠けているからだ。

だけど・・・３０％も戻れば十分。
保険に残しておいた２０％にそれが上乗せされる。

《瞬時加速》を使い、加速して敵ＩＳを通り過ぎるように瞬間移動した。

通り過ぎた瞬間煙が吹き飛び、そして・・・

ドガァァァンッ

敵ＩＳがまた大きな爆発を引き起こした。

「ふ～。　オルコットさん！　鈴音さん！　早くいっくんを！」

僕が先ほど立っていた所で唖然と僕の姿を見ている二人にそう言い、保健室へと向かわせた。
それにしてもこのＩＳは一体・・・
散乱したＩＳの部品を見つめた。

春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏Ｓｉｄｅ

「うっ・・・？」

全身の痛みに呼び起こされ、目を覚ました。
一体ここはどこなんだろうと周りを見回すと、どうやらここは保健室らしい。

俺が寝ているのはベッドの上だ。

「あっ、いっくん起きた？」

カーテンからひょっこりと顔を出して現れたのは春樹だった。

「お、俺どうなったんだ？　たしか急に再起動したＩＳの攻撃に当たって・・・」

「お前はそこから気絶した」

春樹が顔を出していたシャッと音を立てながらカーテンが引かれ、現れたのは千冬姉だった。

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。　数日は地獄になるだろうが、慣れろ」

「はぁ・・・」

確かに体を起こしているだけで、体全体に痛みが走る。
これ、歩いたらどうなるんだろうかと考えてしまうと本当に地獄が見えるようだった。

「はい、りんご食べる？」

春樹が笑いながら兎の形に切り取ったりんごを渡してきた。

春樹ってたまに女の子っぽいところあるよな。

いや、まあ男がこんなことできるのはおかしいことではないのだが・・・

りんごを受け取り口に含んで、窓から空を眺めた。

外はすでに茜色に染まっていた。

「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、ＩＳの絶対防御をカットしたな？　そして最後に一撃を受けたにも関わらず良く死ななかったものだ」

絶対防御をカット？

そんなことした覚えがないのだが・・・

それに絶対防御ってカットできないシステムだったような。

「まあ、何にせよ無事でよかった。　家族に死なれては寝覚めが悪い」

「本当に良かったよ、これで死んじゃったら僕ちーちゃんに顔向け

できないよ。　あと束さんにもね」

二人はそう言いながらやさしく微笑んだ。
な、なんと珍しい・・・
あの千冬姉がこんなに柔らかく微笑むなんて滅多にないことだ。
それに春樹、お前はもしかしたら女になったほうがいいんじゃないか？　まあ見た感じは守ってあげたくなるような男子そのものだけどな。
まあ、今回の場合守ってもらった側だが。

「千冬姉、春樹」

「「うん？」」

二人してハモった。

「いや、その・・・心配かけて、ごめん」

「ふっ・・・心配などしてないさ。　お前はそう簡単に死なない。なにせ私の弟だからな」

「え～？　ちーちゃん絶対内心かなり心配してたでしょ？　も～、素直になれば良いのに」

バシィィィン！

千冬姉がいつもの如く出席簿で自分の生徒、春樹を叩いた。
春樹は頭を抑えながら地面に屈服してしまう。

「お前は本当に束に似ているやつだな馬鹿者！　後、織斑先生だっ！」

「ふ、ふぁい・・・」

「まったく・・・　私は後片付けがあるので仕事に戻る。　お前も、少し休んだら部屋に戻って良いぞ」

それだけ言い残すと、千冬姉はすたすたと保健室を出て行った。
って、春樹お前大分頭はれてるぞ。

「あれ？　箒ちゃん入ってこないの？」

突然ムクっと起き上がってそう言ったので一瞬心臓が飛び出そうだった。
お前はゾンビか・・・　ビックリするだろういきなり立ち上がった

ら。
てか箒来てたのか。

「あー、ゴホンゴホン！」

わざとらしい咳払いをしながら入ってきた。

「よう箒」

「う、うむ」

「あ～・・・え～と僕は外に出てるね？」

春樹がゆっくりと後ろに下がりながらそう言った。

「いや、別に居てもらってもかまわんぞ？」

「いやいや～、女の子の恋路を邪魔しちゃ悪いでしょ～」

こ、恋路？　箒が誰に恋をしてるんだ？

「なっ・・・なっ・・・なっ・・・／／／」

ボッと顔を赤くし縮こまる箒。
な、何なんだ一体？
春樹は箒のその姿を見てニヤニヤしながら出てくし、訳がわからん

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

箒ちゃんのあの表情笑っちゃったな～。
もしかしてあんな表情したってことは図星だったってことなのかな？
ニヤニヤしながら保健室から数メートル離れた十字路のところで壁に腰を預けながら笑っていた。

「は、春樹」

「うん？　あ、鈴音さん」

後ろから突然鈴音さんに話しかけられた。
両手を前にして何やらモジモジしている。
う～ん、なんだかこうやってモジモジしてるとこ見ると気の強い姿が嘘のようだよ。
ってモジモジ！？

「あ、あのさ・・・」

「う、うん」

僕は唾をゴクンと飲み込んだ。

「あ、ありがとね、助けてくれて」

「ふぇ？」

「だ、だから・・・　その・・・あ、ありがとうって言ってんのよ馬鹿！／／／」

そうお礼言うと後ろを向いて猛ダッシュで走っていってしまった。
ま、まさかあの鈴音さんからお礼を言われるなんて・・・
明日はいいことありそうだな～。

エピソード7　【アビリティー発動】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

自分で書いておきながら最後の鈴に萌えてしまった作者・・・　Ｍｉｔｓｕです。

鈴・・・ツンデレ・・・　エヘッ☆

それではフラグ分析のほうに行って見ましょう！

箒　＝　△　進展なし

セシリア　＝　◎　一言褒め言葉あげましたが、最近空気のような気がします・・・　う～ん

鈴　＝　○前回よりレベルアップ！？　なぜか最後のお礼のセリフで別のアニメのキャラを連想してしまいました。　あ、ありがとね、兄貴・・・　なんて

？？？　＝　アンノウン

？？？　＝　アンノウン

いや～、なんだかんだ言ってまだ一巻が終わっていないという・・・

どうしましょう（泣

エピソード8　【お引越し】（前書き）

1巻の最後らへんです。
この辺はオリジナルでいきま～す。

それでは本編どうぞ！

エピソード8　【お引越し】

春樹Ｓｉｄｅ

食後・・・
夕食を食べ終わった後に僕はいっくんの部屋へと向かった。
もちろん用なんてない。
ただの気まぐれというか、遊びに行くというか、そんな感じだね。

「いっく～ん、お邪魔しまーす」

ノックをせずに部屋へと突入。
部屋へと入った瞬間出来立ての食べ物の匂いが鼻をそそった。
これはチャーハンの匂いだ。
なんだか・・・またお腹が減ってきた。

「おっ、春樹」

「ゴホッゴホッ！！　春樹！？　ち、違う、これは違うんだ！」

部屋に入るとレンゲを咥えたいっくん、そして僕の顔を見た瞬間に咳き込む箒ちゃんがいた。
何が違うんだろうか。

すると顔を赤く染めた箒ちゃんが立ち上がりどこからか木刀を取り出しそして装備、そして僕に向かってきた。

「えええええ!?」

すぐさま唐梅を部分展開してガードする。
部分展開で腕だけ装甲化したところを箒ちゃんはペシペシと弱弱しい攻撃で木刀を振るってきた。

何かあったのと目線でいっくんに問いかけるが、向こうもさぁ～と目線をチャーハンを食べながら送ってきた。
箒ちゃん、体調でも悪いのかな?
いつもと調子が全然違う。

「こ、これは違うんだ春樹!　本来ないらお前の分もあったが失敗して・・・じゃなくてだな!」

なんだか途中だけ良く聞き取れなかった。

「え、え～と箒ちゃん?　僕来ちゃまずかった?」

「そ、そんなことはない!!」

木刀を振るうのをやめ、顔を横にふる箒ちゃん。

「本当ならお前の分もあったんだがちょっとした手違いがあってだな！」

「そ、そうなんだ・・・　僕はもう食堂で食べちゃったし、また今度作ってよ」

そう言うとフンッと鼻を鳴らし腕を組みながらそっぽを向いた。
そして自分が座っていた所へと戻り、またチャーハンに手を付け出した。

僕は部分展開していた所を解除してベッドの上へに腰掛ける。
ベッドの上に座ると無言で箒ちゃんがお茶を渡してきたのでそれを受け取り飲みながら二人がチャーハンを食べる姿を観察した。
それにしてもおいしそうなチャーハンだ。

「ごちそうさま」

二人はチャーハンをきれいに平らげ、レンゲを置いた。

「一夏、あんな約束をして、どう責任を取るつもりだ！？」

突然箒ちゃんが大声を上げた。　いっくんに向かって。

「約束って・・・　鈴のことか？　解決したぞ」

「な、なに・・・？」

約束？
もしかして鈴音さんが怒っていたやつかな。
ほら、前にいっくんが鈴音さんを怒らせてほっぺたを叩かれたやつ。
通称『ほっぺた叩かれ事件』だ。

「どんな約束だったの？」

いっくんのそう質問すると昔話を始めた。
どうやら昔、鈴音さんがいっくんに『料理が上達したら、毎日酢豚を食べてくれる？』と聞き、それをオッケーしてしまったらしい。
なるほどね～、大体読めたよ～。
きっといっくんのことだから別の解釈をしてしまったんだろう。

「まあ、そんな感じだな。　春樹、鈴の約束ってもしかして違う意味なのか？　あいつに聞いたけど、違わないって言ってたけど何かなぁ・・・」

「ま、まぁ～・・・　どうだろうね？」

きっと鈴音さんが言いたかった本当の意味は将来・・・　ううん、言わないでおこう。
これはいっくん自身が気づかなきゃいけないことだろうし。

「話を戻すぞ一夏。　解決したというのはどういうことだ」

箒ちゃんが真剣な表情に戻る。
いつも真剣そうだけど・・・

「俺が謝って許してもらった」

「・・・・」

その言葉を聞いて疑わしそうな顔をする箒ちゃん。

「そのようなことで解決するはずがないだろう！」

「箒ちゃんもう突っ込まないほうが――――」

コンコンッ

僕の言葉はドアのノック音によって遮られた。
一体誰だろう？　オルコットさん？　鈴音さん？
それとも他の生徒？　といろいろな想像をしてみるが・・・

「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」

その声は予想外の人物だった。
がちゃりと音を立てて入ってきたのはおっちょこちょいの山田先生だ。

「あれ？　九曜くんもいたんですか、これはタイミングが良いです」

「どうかしたんですか、先生？」

僕がそう先生に質問する。
どうやら僕にも用事があるみたいだし。

「あ、はい。　お引越しです」

引越し？　誰がするんだろうか。
山田先生がするからその挨拶って・・・　まあそれはないかな。

「・・・先生、主語を入れて喋って下さい」

「は、はいっ！　すみませんっ！」

箒ちゃんが鋭い視線を飛ばすものだから、山田先生はおびえている小動物のように体を震わせながら、身をすくめてしまう。
箒ちゃん、先生に向かってその視線はどうかと思うよ？

「えっと、お引越しをするのは織斑くんです。　部屋の調整がついたので、今日から同居しなくてもすみますよ」

いっくんがお引越しか～。
そういえば僕の部屋は今僕一人だけ・・・ということは僕の部屋へと引越しってことかな？
きっとそうに違いない。

「お引越し先は九曜くんのお部屋ですね」

「おおおお、やったな春樹！」

かなりうれしそうにテンションを上げながら僕に肩を組んできた。
僕もかなりうれしい。
別に一人でも良かったけど、知り合いが来るとなれば大歓迎だ。

「えっと、それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」

「ま、待ってください。　それは今すぐなんですか？」

箒ちゃんの口から意外な言葉が出てきた。
いや、まあ今までのルームメイトがお引越しするのだからさびしいというのもあるかもしれないけど、いっくんに毎回のように当たっていた箒ちゃんがこんなさびしそうな顔をするのは初めて見る。

「それは、まあそうです。　いつまでも年頃の男女が同室で生活するのは問題がありますし・・・」

「い、いや――――私は・・・　春樹っ！　お前はどうなんだ！」

「ぼ、僕っ！？　僕はいっくんが来るのは大歓迎だけど？・・・
箒ちゃんも来る？」

「「「なっ！？」」」

いっくんを歓迎するのは本心だけど、箒ちゃんを誘ったのは冗談だ。
そんなにみんな本気にしなくても・・・
山田先生なんて、「だ、だめですよ！　そんな若いころから、さ、三人でなんて」と何やら別のことを頭から湯気を出しながらブツブツと呟いている。

「そ、そうだな。　うむ、そうしよう」

「いやいや、冗談だよ箒ちゃん！」

「そ、そうなのか・・・」

残念そうな顔をするのでずきりと心が痛んだ。
これは悪いことをしたなと罪悪感に満ち溢れてしまう。

「いつでも来て良いから。　ねっ、箒ちゃん」

箒ちゃんの所へと近づきやさしく抱きしめた。
昔、束さんが僕に良くしてくれたことだ。

「なっ！！　は、春樹！？／／／」

ボッと音を立てる箒ちゃん。

「も、もうだめです・・・　ひゅるるるる」

「「や、山田先生！？」」

隣に立っていたいっくんがうまいこと先生をキャッチ、僕もすぐに山田先生のそばへと直行した。
気絶してるみたいだ。

「ど、どうしよう・・・」

「まあ、とりあえず俺のベッドで寝かしとくか。　それにしても箒、お前がそこまで甘えんぼうなんて知らなかったぞ」

「ッ！　違う！　あれは春樹が勝手に――」

またどこから木刀を取り出しいっくんに襲い掛かる。

やべ、と箒ちゃんから逃げるために駆け足で部屋から出て行った。
あ、あの～一応夜なんだから静かにしないと、と言おうと思ったがすでに部屋からいなくなった後だった。

「だ、だめですよ～、三人でだなんて～」

ベッドの上でクルクルと目を回しながらそんなことを言っている山田先生がいた。

「三人って・・・　先生それどうなのかな」

それからようやく外に飛び出していった二人は疲れ果てながら帰宅。
山田先生も丁度いいタイミングで気がついた。

いっくんの引越し作業は2時間ほどで終わり、僕の部屋に荷物が増え同居人が増えたことを実感させられる。

「おしっ！　寝るか！」

「そうだね。　夜も遅いし」

時計を見ると時刻は12時ちょっと過ぎたころだ。

引越し作業で汗を掻いたから大浴場を使いたかったけど、まだ大浴場は男女別のタイムテーブルの調整中らしい。
山田先生曰く今月中にはなんとかなるみたい。

「しかしなんだか学園が女子だらけって言うこともあって、男子二人だけでこうなるとむず痒いな」

「そうだね～。　でも、これもいいんじゃないかな？　いっくんは箒ちゃんと一緒が良かった？」

「まさか」

あははは と笑いが部屋を包み込んだ。
いや～、本当にルームメイトが増えたことを実感できるよ。

コンコンッ

僕といっくんが丁度布団に入ったころにノックが響く。
い、いっくん出てくれるかな？

どうやら二人で見合いをしていたらしく僕もいっくんも布団から出なかった。

ドンドンッ

丁寧なノックだったのが荒い音に変わった。
僕が出るかな？

布団から出ると、いっくんも同時に布団から出た。
それも飛び出てきたので思わずくすりと笑ってしまった。

「だ、誰だろうな？」

「さ、さぁ・・・　山田先生・・・・ってことはないよね」

僕といっくんは恐る恐るドアへと向かい、

「「はい、どちらさまで――――」」

「・・・」

むすっとした顔で立っていたのは、寝間着に着替えて枕を抱えている箒ちゃんだった。

「なんだ？　春樹の誘いに乗ったのか？」

ドスッ

箒ちゃんの手刀がいっくんの顔面に直撃。
そ、それは痛い・・・
部屋をしばらく痛さを紛らわすために走り回った後に帰還。おかえりいっくん。

「ま、まあとりあえず入りなよ箒ちゃん」

「いや、ここでいい」

「そう？」

「そうだ」

「「「・・・・・」」」

な、なんなんだろう。
いっくん何か話してよって、背中を人差し指でつつくがもう痛い思いをするのはいやだと断った。

だが、しばらくその無言の状態が続いたので、ついに僕の変わりに勇気を出していっくんが動いた。

「・・・箒、用がないなら俺と春樹は寝るぞ？　というか、用は誰にあるんだ？」

「よ、用ならある！　二人にだっ！」

いきなり大きな声を出したので、僕はビックリしてしまう。
い、一応深夜なんだけど・・・
僕はそっと顔を出し、誰もいないことを確認する。

「ら、来月の学年別個トーナメントだが・・・」

学年別個人トーナメントとは、クラス対抗戦と違って完全に自主参加の個人戦。　六月の末に行われるそれは学年で区切られていている以外は特に制限もないみたい。

「わ、私が優勝したら――――」

そこまで言い切って頬を紅潮させ、一度言葉を溜める。

僕の予想では優勝したら駅前のパフェを・・・　違うかな？

噂だと駅前のパフェがおいしいらしい。

しかし、その言葉の続きは予想とは大はずれ・・・
両手で枕をぎゅっと握り締めている箒ちゃんが言ったのは、

「一夏と春樹には、つ、付き合ってもらう！」

「「ふぇ（はい）？」」

僕といっくんは予想外の言葉に気の抜けた返事をしてしまった。

つ、付き合う？
どういう意味の付き合うなんだろうか・・・

廊下で実は僕達の会話を聞いている人たちがいることを、僕達三人は気づかなかった。

エピソード8　【お引越し】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

ほ、箒・・・

君はどれだけ欲張りなんだい？　とＭｉｔｓｕはＭｉｔｓｕは顔を赤くして言ってみる。

どうも皆さん、ラストオーダーことＭｉｔｓｕです（違うか・・・

それではいつも通りフラグ分析のほうに行って見ましょう！

箒　＝　○今回初めてデレを入れてみましたがいかがでしたでしょうか？　う～ん箒のデレが一番難しいかな今のところ・・・

セシリア　＝　◎　今回未登場

鈴　＝　○同じく未登場

？？？　＝　アンノウン

？？？　＝　アンノウン

ようやく・・・　ようやく終わりましたよ1巻が・・・

次回ようやく2巻です～

気張っていきますよ！

エピソード９　【まさかの！？】（前書き）

申し訳ないです！
ちょっと問題が発生しました。
今回で新ヒロイン登場させるつもりだったのですが、この小説を執筆している最中に寝てしまいまして・・・
３／４の夕方・・・大体４時半に寝てしまって、起きたのがみなさんが夕飯を食べ終わっている時間・・・８時前と言う驚きの時間。
大急ぎで執筆したところここまでが限界でした・・・

エピソード9　【まさかの！？】

春樹Ｓｉｄｅ

「学年別個別トーナメント、か～」

僕は壁にかけてあるカレンダーを確認する。
学年別個別トーナメントとは文字通り学年別のＩＳ対決トーナメント戦。
これを一週間かけて行うわけで、その規模は相当大きい。

一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年はそこから訓練した状態での成長能力評価、そして三年はより具体的な実戦評価となっている。

特に三年にもなるとＩＳ関連の企業のスカウトマン、さらには各国のすごい人まで見に来るらしい。

ちなみにこのトーナメントは全員強制参加で参加しないという選択肢はない。

「・・・どうしたもんだろうかね～」

僕が悩んでいる理由・・・
それはいっくんのほかに、男でＩＳが使える人がもう一人いると世界はまだ知らないからだ。
現時点ではちーちゃんが情報を漏らさないように計らってくれてい

るみたいだから何とかなっているけど、このトーナメント・・・
どうしようかな。

「仮に参加するとして、唐梅はまだ全力で戦うことができないし・・
・　束さんから連絡がこないということはまだ出来上がってないん
だろうな～」

そう、束さんが僕の専用機として用意してくれたＩＳ『唐梅』は現
状まだ欠けている部分がある。
唐梅の背中がすっきりしているのは『その部分』がまだ完成してい
ないからだ。

「ただいま。　春樹いるか？」

ドアを開け入ってきたのはいっくん。
今日は知り合いの家に行くとか言ってさっきまで留守にしていたん
だ。
たしか五反田さん・・・って人だったかな？

「あっ、いっくんお帰り」

「おう、夕飯食いに行くけどいっしょに行くか？」

デジタル時計を見ると丁度午後六時になったところだった。
どうりでお腹が空いて来たわけだ。

「そうだね。　行こっか」

僕といっくんは部屋を出る。
すると一人の女の子がやってきた。

「あっ、一夏、春樹」

数少ない専用ＩＳ持ちで中国の代表候補生である鈴音さんだ。

「あっ、鈴音さん。　何かあった？」

「俺らは今から夕飯に行くんだが、鈴は？」

「ふふん。　そうじゃないかと思って誘いに来てあげたのよ。　雨の日に捨てられている犬を思うくらいのやさしさは持ち合わせがあったからね」

い、犬・・・

「そりゃどうも、じゃあ食堂に行こうぜ」

いっくんは鈴音さんの言ったことを軽くスルーして歩き出す。
置いて行かれるわけにはいかないので、いっくんの隣に並び歩く。
すると風船のように頬を膨らませた鈴音さんが僕といっくんの間に入ってきた。

「ちょっと置いてかないでよ」

いや～、だっていっくんが先にテクテク歩いてくんだもん。
そう思いながら廊下を歩いていると、

「ええっ!?　お、織斑君と九曜君!?」

ひとりの女の子が僕といっくんを見つけてブンブンと勢いよく手を振っている。
名前は・・・わからない。
たしかいっくんは『のほほんさん』と呼んでいたけど、明らかにニックネームというか見た目で決めたよね？
ちなみにのほほんさん（いっくん命名）は寮にいるときはどんな時間帯でもダボダボの大きいパジャマを着用している。
袖なんて本当にぶらぶらしてるよ。

「やー、おりむーとくーよ」

「その愛称は決定なのか？」

「『くーよ』か～」

「決定なのだよー。　それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」

のほほんさんはそう言いながらいっくんの体にひっついた。

「残念、一夏と春樹はあたしと夕飯するの」

「わー、りんりんだー。勇気がでそうだね～」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

おりむー、くーよ、そしてそこからのりんりんか。
なかなかすごいセンスの持ち主というかなんというか。

「りんりん・・・　可愛いと思うよ？」

「か、かわい！？」

うん、良いと思うけどな〜。
でも僕はさすがにそう呼べないから鈴音さんって呼ぶけど・・・
そんな感じで僕らは食堂へと向かった。
ちなみにのほほんさんはこの会話の最中にかなりんという子に放って置かれていることに気づきテケテケとその人の後を追っていってしまった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話〜？」

「だからあの九曜君と織斑君の話よ」

「どんな？」

「絶対これは女子にしか教えちゃだめよ？　なんかね、学年別トーナメントでね、――――」

食堂に到着。
そこはいつもどおり女の子たちで埋め尽くされていて、夕飯の時間ということもありとても賑わっている。
そしてその中の一角がそれ以上に賑わっていた。

「ん？　何だそこのテーブル。　えらい人だかりだな」

「トランプでもやってるんじゃないの？　それか占いとか」

「でもそこのテーブルだけじゃないよ？　ほらいろんなところで」

よく見ると各所できゃあきゃあと黄色い声が沸きあがっている。
それに何かのたびにどよめきが起こる。

「大富豪の大会でもやってるんじゃない？」

た、大会って・・・
たしかに大富豪は楽しいと言えば楽しいけど、ここまで盛り上がるなんて相当すごい勝負でもしてるんだろうな～。

「え～！？　そ、それマジで！？」

「マジで！」

「マジなの！？　キャー、どうしよう！」

とそんな感じの声がほとんどすべてのテーブルから聞こえてくる。
今この学園の流行は大富豪なのか・・・
僕はトランプより、チェスとかボードゲームみたいにボードゲームの方がいいな。
まあでも楽しいことは良い事だ。
人間うれしいことがなければやっていけないしね。

「一夏、春樹」

「おう」

「うん」

今日の夕飯は、ラーメン、チャーハン、そしてから揚げだ。
えっ？　カロリー高いよって？
運動もするからそんなの関係ないよ～、あははっ。

テーブルへと座り三人で同時に自分の頼んだ夕飯に手をつける。
ちなみにいっくんはチキンの香草焼きと山芋と野菜の煮物、出し巻き卵、そして赤だしのほうれん草の味噌汁だ。
鈴音さんも同じメニューだけど、あさりの白味噌汁を頼んでいた。

う～ん、チャーハンおいしいっ。

「そういえば、春樹ってニュースで話題にならないよね。　一夏はニュースになったのに」

「あ～、確かにそれは俺も思った」

確かに僕のことはニュースにならない。
女性にしか動かせないはずのＩＳを男性が動かす・・・
いっくんの時はたしかにニュースで報道されて話題になっていた。
だけど僕の場合はテレビにすら出ていない。

理由は簡単だ。
僕の場合いっくんのように受験会場でＩＳを起動させたわけじゃない。
束さんの元でＩＳを動かしたわけだから、ここに来るまでに世界でもう一人男がＩＳを動かせるということを知っていたのは束さんとちーちゃんだけ。
でも・・・

「もう時間の問題だと思うよ？　ニュースで報道されるのは」

そう、時間の問題。
なんせクラス対抗戦で全生徒の前で専用ＩＳ『唐梅』を起動させたし、あの無人ＩＳと戦闘になったしね。
別に世界にバレても問題はないし、困ることはないんだけど。

「あーーーっ！！　織斑君と九曜君だ！」

「えっ、うそっ！？　どこ！？」

僕といっくんが夕飯を食べているところを発見した女の子たちが一斉にこっちに向かってくる。

「ねえねえあの噂ってほん――――もがっ！？」

「ばかっ、言ったそばから！」

噂？　一体どんな噂があるんだろうか。
ま、まさか！
あの噂の駅前のパフェがメニューに加わるとか・・・　それはないか。

「噂って？」

いっくんがその女の子たちに問いかけた。

「う、うん？　なんのことかな～・・・　あはははは」

「「「「あはははは」」」」

その後ろで全員苦笑し始める。
うん？　なんなんだろう。

「もしかして、何か隠し事してるのかな？　僕気になっちゃうな～」

「あるわけっ――――」

「ないよ！？」

僕の問いかけでも苦笑い。
なんだかますます怪しくなってきた。

「お☆し☆え☆てっ？」

僕は手をワキワキと動かしながら近づく。
だけど向こうは、これだけは九曜君でも教えられないと言って撤退していった。

まあ、噂ならいつかは耳にくるかな？

「なに？　あんた達何かやらかしたの？」

「鈴音さん・・・　僕はいたって優等生のつもりなんだけど」

「そうだぞ。　なんで問題児扱いなんだよ」

「春樹はどうかわからないけど。　あんたは問題児じゃないつもり

なの？」

「・・・・・・・」

いっくんが黙り、ずずずっとお茶を飲んだ。
そして何事もなかったかのように僕に話しかけてくる。

「なあ春樹、明日のことなんだけどさぁ――――――」

「逃げたわね」

「あ、あははは・・・　あっ！」

「あ」

「あ」

上から僕、いっくん、そして箒ちゃんだ。
そう、あの箒ちゃん。
夕飯と食べにきたのであろう彼女とばったり出くわしたのだ。

「よ、よお、箒」

「ほ、箒ちゃん元気してた？」

「う、うむ」

「「「・・・・・」」」

何、この気まずい空気！？
なんせあの先月の謎の件以来、箒ちゃんと会うたびにこの気まずい雰囲気になるのだ。
あの後いっくんと徹夜して箒ちゃんの言った意味を検討したけど、ラチがあかなかった。

「何、あんた達なんかあったわけ？」

「いやね鈴音さん、話のネタが・・・　ねっ？」

「「いや！　別になにも！」」

いっくんと箒ちゃん二人が同時にそういった。
は～、そんな感じに言っちゃうと何かありましたって言っている様

な気がするのは僕だけかな？
ううん、みんなもたぶんそう思うよね。
せっかく僕が何もなかったかのように見せかけようと思ったのに・・・
ばれちゃってるかな？

「なにその『明らかに何かありました』って反応。　春樹のボケが全部無駄になってるじゃない」

うん、ばれてました。

「そんなわけないだろ・・・」

ジト目で鈴音さんを見るいっくん。

まあ、いっか。　あははは

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

翌日・・・
緊急事態が発生した。
と言っても悪い意味の緊急事態ではない。

『良い』意味での緊急事態だ。
それは朝のＳＨＲのことだ。

「ええとですね、今日は何と転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「「「「「えええええええっ！？」」」」」

そう、いきなりの山田先生の転校生来ました発言にクラス中がいっきにざわつく。
噂好きの十代の乙女・・・その情報網をかいくぐって転校生が現れたんだから驚きもする。
しかも二人もいるという『緊急事態』だ。

どんな女の子なのかな～。
周りが積極的な子とかユニークな子が多いから、少し大人しめの子とか・・・

そんなことを考えていると教室のドアが開いた。

「失礼します」

「・・・・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

周りはみんな驚きの表情を顔に出している。

正直なこと言うと僕も驚いた。

内心、「これありえないんじゃ・・・」って思った。

なぜかというと・・・

二人のうち一人が――――――　僕やいっくんと同じ男の子だったんだから。

エピソード9　【まさかの！？】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

は本日はお休みさせていただきます。　本当に申し訳ない。

今から期末テストの勉強だぁぁぁぁ！！

時間がやばいぃぃ！！（現在３／４　２０：１０）

あっ、後、総合ＰＶ数が早くも５００００ＰＶ突破いたしました！

感謝です！

エピソード１０　【三人目のボーイ?】（前書き）

す、すごい・・・
一日のアクセス数が他の小説を含めても過去最高になりました・・・
小計　１１，０２７アクセス　　ユニーク１，２６１人　・・・

アクセス数が１万超えるなんて信じられません・・・
みなさん本当にありがとうございます！

そして今回は・・・　ようやく新ヒロインの登場です！　イェイ

エピソード１０　【三人目のボーイ？】

教室に入ってきた二人の転校生。
てっきり女の子が転校してくるのかと思っていた僕はその二人のうちの一人を見た瞬間度肝を抜かれた。
なぜかと言うとＩＳは女性しか動かすことができない、したがってこのＩＳ学園には女の子しか入ってこない。
だけどその子は女の子ではなく『男の子』だったからだ。

「シャルル・デュノアです。　フランスから来ました。　この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

その男の子・・・デュノアくんはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

「お、男・・・？」

誰かがそうつぶやくのが聞こえた。

「こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

人懐っこそうな顔。そして礼儀正しい立ち居振る舞いと整った顔立ち。
髪は金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。

「きゃ・・・」

「はい？」

あ～、来るよ～。
僕のときと同じ状況が・・・

「「「「「きゃあああああああああああ！！」」」」」

黄色い歓声が教室を覆い、一瞬そのあまりもの大きな音でガラスが割れるのではないかと思うほどだった。実際その声でガラスが超高速で振動していたから本当に心配していた、なんせ窓側で座ってるからね。

それにしても僕といっくん以外に男の子がＩＳを動かすなんて・・・これでこの世に男性でＩＳが動かせる人が３人になった。
いや～、どうなってるんだろうね。

「男子！　三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　また九曜君と違った感じの守ってあげたくなる系の！」

ぼ、僕も守ってあげたくなる系なんだ・・・
それは男の子としてなんだか変な気分だな～。

でもこれだけ大きな声を上げたんだから他のクラスにもニュー生徒が男の子と言う情報は伝わったと考えたほうがいいね。
まだＨＲ中だから来てないだけで、休み時間になったら津波のように押しかけてくるだろうな～。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。　転校生はもう一人いるんだ」

ちーちゃんこと織斑先生が面倒くさそうにぼやいた。

「み、皆さんお静かに。　織斑先生が仰ったようにまだ自己紹介が終わってませんから～！」

そうなんだよね。
もう一人の転校生・・・
シャルルくんに一気に株を持っていかれた所為でほとんど忘れかけていた・・・と言ったら悪い印象もたれるからやめておこう。　そ

れはあまりにも失礼すぎる。

もう一人の転校生は輝くような銀髪で、白に近いそれを腰まで長くおろしている。

ちなみにこの子は女の子だ。

印象付けられるのが左目につけられた医療用ではない黒眼帯。

そして下はみんなみたいにスカートではなく、軍人が履いているようなズボンみたいな感じのもの。

「・・・・・」

き、緊張してるのかな？

それにしては彼女の周辺だけ空気が冷たいような・・・

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官・・・

たしかちーちゃんはドイツで１年くらいＩＳ操縦者を育成する教官を務めたと聞いている。

姿勢を直して素直に返事をする転校生――――ラウラさん？　にクラス一同がポカンとする。

「ここではそう呼ぶな。　もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒」

「了解しました」

そう答える彼女はぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしているところを見る限りやはり軍人のような感じがする。
さらに彼女が言っていた『教官』ということからドイツ出身と言うことがわかる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「「「「・・・・・」」」」

シャルルくんの時とは違い沈黙。
続く言葉をみんな待つが、名前以外は口からでなかった。

そして急にキョロキョロしだし誰かを探し出す。
誰を探しているのだろうかと思いきや、ボーデヴィッヒさんはある人物に目を向けた。

「！　貴様が――――」

その目に付けた人物・・・　それはいっくんだった。
なんだか殺気に似たようなものを体全体から出してるし、かなりやばい感じがする。

ボーデヴィッヒさんは手を振り上げた、もちろん相手はいっくんに向かって。

僕は立ち上がり、ボールペンを取り出しいっくんとボーデヴィッヒさんの間に向かってその取り出したボールペンを投げた。

「ッ！」

ボールペンは誰にも直撃することなくそのまま床へ着地。
ボーデヴィッヒさんはこちらを見て舌打ちをしてきた。
ふぇ～～、ドイツの人って怖い・・・

「転校初日から乱暴はいけないと思うな。　ボーデヴィッヒさん」

「ちっ・・・」

彼女は僕に向けていた視線をいっくんに戻して、

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そういい残しすたすたといっくんの前から立ち去っていくボーデヴィッヒさん。

空いている席に座ると腕を組み目を閉じて、微動だにしなくなる。

僕も彼女同様着席したが、座る際に箒ちゃんが安堵のため息をしているのが見えた。

いや～、正直僕も怖かったよ。

でも友達が危ない目にあっているのを見過ごせないよ。

「あ～、ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。　各人は着替えて第二グラウンドに集合。　今日はＩＳ模擬戦を行う」

模擬戦か～。

なんだかいろんな意味ですごいことになりそうだ。

「おい織斑、九曜。　デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「わかってるよ、ちーちゃん」

ガスッ！

出席簿の角が僕の額に直撃・・・
か、角って・・・　痛すぎるよ・・・

「織斑先生、だっ！」

「は、はい・・・」

「お前も懲りないな春樹」

隣でいっくんがにしし と笑みを浮かべる。
人の不幸を喜ぶなんてひどいよいっくん。
僕が額を撫でているとデュノアくんがやってきた。
いや～、近くで見ると本当にまぶしい・・・　もう本当に貴公子・・・いや王子様って感じがする。

「君が織斑君と九曜君？　初めまして、僕は――」

「ああ、いいから。　とにかく移動が先だ。　女子が着替え始めるから」

いっくんが説明すると同時に僕とデュノアくんの手を取って走り出す。
そう、僕たちは男子、周りのみんなは女子・・・　よって早く教室から出て行かなければいけない。
「く、九曜くんだったら・・・」とか「お、織斑君と九曜君にだったら私のすべてを見せて、あ・げ・る」　など言っているがそんなことできるはずもないし、見てしまったら変態じゃないか。
まあ僕も男の子だから見たくないってわけじゃないけど・・・

教室を出て、僕たちはアリーナ更衣室に向かうために階段を駆け下りる。
なんで駆け下りるかって？

「ああっ！　転校生発見！」

「しかも織斑君と九曜君も一緒だ～！」

階段の下では女の子たちが群がっていた。
そう、ＨＲが終わってしまったので各学年各クラスから情報先取のための尖兵がかけだしてきているのだ。
あの女の子と言う名の波にのまれてしまえば最後・・・
質問攻めにあい授業に完全に遅刻・・・いや、たぶんさぼりになってしまう。
先生がちーちゃんだけにそうなってしまえば、あの出席簿が火を噴いてしまうからそれだけは絶対に避けなければいけない。

「さきに行くぞ、春樹！」

「えぇぇぇ！？　ったく、じゃあデュノアくんちょっ～と失礼！」

「えっ？　きゃっ！」

現状を説明しよう。
僕がデュノアくんをお姫様抱っこしているのだ。　ううん？　お姫様じゃなくて王子様だから『王子様抱っこ』になってしまうのかな？

いっくんは階段を大きく蹴って女の子たちの波を飛び越えた。
僕もそれに続こうとするが今回は人、一人を抱えているために助走をつけていても超えるのは難しい。
だから階段の手すりに足をかけて力いっぱい手すりを蹴った。

いっくん、そして僕と抱っこされたデュノアくんが女の子の大群の頭上を超え無事に着地。
そして着地すると同時にデュノアくんをいっくんにパス。
あわわわわと言いながらデュノアくんはキャッチされてそのまま突っ走る。

「きゃ～～～！！　お姫様だっこよ！！」

「私もされたい！　でもあの絵を見てるのもいいわ～～！！」

「男×男×男・・・　だめ、もう私耐えられない・・・」

後ろからそんな台詞が聞こえてきた。

そして、それからいくつもの難所を潜り抜けなんとか無事に更衣室に到着。

「危なかったな」

「いっくんひどいよ。　勝手に一人で飛び越えていくなんて」

「あははは、悪い悪い」

「ごめんね、デュノアくん。　驚いたよね？」

僕は謝りながら、デュノアくんにそう言った。

いっくんも謝りながら彼を降ろすが顔が赤い、熱でもあるのだろうか？

「デュノアくん？」

「――ルル」

「えっ？」

「シャルルで・・・いいよ？／／／」

「シャルルか、わかった。　俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「僕は九曜春樹。　春樹って呼んでね、シャルルくん？」

互いに自己紹介が済み、僕たちは急いで着替えた。
そう『急いで』ね！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「遅いっ！」

第二グラウンドに無事に到着とはいかなかった。
到着すると腕を組んでちーちゃんが待っている姿が遠くからでも見えたから、思わずその瞬間サボろうかと思ってしまったけど、そんなことをできるはずがない。

僕たちはぺこぺこ頭を下げながら列に並んだ。

「ずいぶんゆっくりでしたのね、スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「だって・・・　ねえ？」

僕はいっくんの方を見る。

ＩＳスーツというのは一般的に女性専用なんだ。
見た目はワンピース水着やレオタードに近い。
だけど、僕、いっくん、シャルルくんのＩＳスーツは通常のものとはまた違う。

全身すっぽり、首のところまである。
もう見た感じはスキューバダイビングの全身水着のようで、かなり着づらいと言うのが本音。

「スーツの所為もあるけど、今回の原因は道が込んでたんだ」

「うそおっしゃい。　いつも間に合うくせに」

ギッとオルコットさんが僕といっくんをにらんできた。
いや～、この視線懐かしいと言うか何と言うか。
決して僕はＭと言うわけじゃないんだよ？　うん。

「なに？アンタ達またなんかやったの？」

後ろを見ると鈴音さんが腕を組んで立っていた。
『また』って・・・　そんなにトラブルは起こしてないんだけどな～。
それより今日のＩＳ模擬戦授業は二組と合同なんだ。　今知ったよ。

「なあ春樹、鈴の声が聞こえないか？」

「後ろにいるわよ、バカ！」

「聞いてくださいな。　この一夏さん。　今日来た転校生にはたかれそうになりましたのよ？」

「はあ！？　あんたいつもどおりバカみたいなことしてたんでしょ？」

い、いや・・・
いっくん何もしてないんだけどな～・・・
その光景を苦笑いしながら眺めていると鬼がやってきた。
僕はあえて話しに参加してないように見せかける。

「――――――安心しろ。　バカは私の目の前にも二人いる」

ぎぎぎっ・・・ときしむブリキおもちゃの音を立てながら首を回転させるオルコットさんと鈴音さん。
その先にはもちろんちーちゃんが待ち構えていた。
二人とも・・・　ご愁傷様です。
そう思った直後、青空の下で出席簿で叩かれる痛そうなハーモニーを奏でるのであった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「専用機持ちは織斑、九曜、オルコット、デュノア、ボーデヴィッ

ヒ、凰だな。　ではグループになって実習を行う。　各グループリーダーは専用機持ちがやること。　いいな？　では分かれろ」

そうちーちゃんが言うと同時に予想通りの展開が起こる。
僕、いっくん、シャルルくんの元へと一気に二クラス分の女の子が詰め寄ってきたのだ。

「九曜君、私・・・ぜんぜんわからないから、手取り足取り教えて！」

「織斑君、がんばろうねっ！」

「デュノア君の操縦技術見たいなぁ～」

「あ～、ずるいよ。　私も私も～」

う、う～ん。
教えるのはいいんだけどさすがにこの人数は無理があるかな？
どうすればいいのかわからず、男性陣はただただ立ち尽くすだけだった。

「この馬鹿者どもが・・・　出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　もし出来ないなら今日は全員ＩＳを背負ってグラウンド百周・

・・　いや千周させるからな！」

せ、千周って・・・
それ普通に考えて無理じゃないかな？　でもちーちゃんのことだから冗談じゃすまなさそうだ。

ちーちゃんのその言葉によってわらわら群がっていた女の子達は、出席番号順にそれぞれの専用機持ちのグループに分かれていった。

「よかった～。　織斑君といっしょのグループだよぉ～」

「わ、私なんて・・・　うっ・・・」

そう影で泣きかけている子はボーデヴィッヒさんのグループだった。
なんて言葉をかけていいのか・・・

「ええと、いいですかーみなさん。　これから訓練機を一班一体取りに来て下さい。　数は『打鉄』が四機、『リヴァイヴ』が二機です。　好きなほうを班で決め手くださいね」

山田先生が珍しく堂々とした態度をとっている。

「え～と、それじゃあとりあえず『打鉄』か『リヴァイヴ』どっち

がいいか決めようか？　早いもの勝ちみたいだしね」

自分の班にそう問いかけるが返ってきたのはある意味『その他』の返答だった。

「私は九曜君に乗りたい！」

「あはははは、それナイスアイデア」

ナイスじゃないよ！？

この班大丈夫かな～・・・

思わず頭を抱えてしまった。

エピソード１０　【三人目のボーイ？】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

さあ、ようやく？？？欄が減りました！

それではフラグ分析行ってみましょう！　オー　イェア

箒　＝　○　進展なし

セシリア　＝　◎　進展なし

鈴　＝　○進展なし

ラウラ・ボーデヴィッヒ　＝　×　まあ、まだアニメのようにはいきませんよね・・・

？？？　＝　アンノウン

あれ？　まだ　？？？　欄が残ってるよ～と思われる方がいらっしゃると思いますが、まだ・・・ねっ？　とりあえずは　？？？　です！

さぁ最後の欄はいつ開放されるのか・・・

エピソード１１　【屋上での昼食】（前書き）

こんな人たちからお弁当もらいたい・・・

それでは本編に　ＤＩＶＥ　ＩＮ！

エピソード１１　【屋上での昼食】

「では午前の実習はここまでだ」

ちーちゃんの号令により午前の部の実習は終了した。
僕らの班はたまにジョークやおふざけがあったものの、他の班と比べて早く終わらせることが出来た。
そして格納庫にＩＳを移しにいっていたいっくんが帰ってきた。

「あー・・・　あんなに重いとは・・・」

「お疲れ、いっくん。　いや～、よく運んだよね」

訓練機はＩＳ専用カートで運ぶのだがここまで科学が発展しておきながら、自動ではなく自力で運んでいかないといけない。
そして僕の班の場合「九曜君はいいよ、私たちがやるから！」と僕抜きで運んでいこうとしていたが、いっくんの班は「力仕事は男がして当然！」と言っていっくんがメインになって運んでいた。
どうやらシャルルくんの班も僕と同じような感じになっていたらしい。

「比べて春樹とシャルルは楽そうだったな」

「「あ、あはははは」」

「まあ、いいや。　とりあえず着替えに行こうぜ。　俺たちはまたアリーナの更衣室にまで行かないといけないしよ」

そう、僕たちはまたアリーナの更衣室まで戻らないといけない。
いや～、これだけ走れば今日も油っこいの食べても問題ないね。
戻ろうとしたとき、シャルルくんが突然立ち止まった。

「え、えええっと・・・　僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行って着替えててよ」

「それくらいだったら待つよシャルルくん」

「春樹が言うとおり待っててても平気――――」

「いいからいいから！　僕が平気じゃないから！　ね？　先に教室に戻っててね？」

両手を前に出し慌てるシャルルくん。
妙な気迫に押されて、僕といっくんはうなずいてしまう。
なんでここまで必死なんだろうか。

「じ、じゃあ先に行くね？」

シャルルくんに見送られながらその場を後にした。

～～～

昼休み、僕たちは屋上にいた。

普通、高校の屋上と言えば立ち入り禁止が多いらしいけど、ここIS学園は立ち入り自由なんだ。

それもきれいな花壇が配置されているし、円テーブルが設置してありその周りにイスが用意してあるなど明らか普通の学校じゃない。

まあ、普通じゃないんだけども。

いつもなら女の子たちで賑わう所が今日はとても静かだ。

きっとみんなシャルルくん目当てで食堂に向かったんだろう。

まあ当本人がここにいるんだけども。

そう、シャルルくんは僕らと一緒に屋上にいるわけで、学食へと向かった女の子たちは無駄骨ということになる。

そう考えながら朝作ってお弁当に入れてきたエビフライを口の中へと放り込んだ。

「・・・どういうことだ？」

箒ちゃんが横・・・いっくんに視線をやる。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ？　それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが・・・」

ぐぬぬ・・・となんだか納得がいかなそうな箒ちゃん。
そして拳を握り締め、どすっと床を殴った。
き、機嫌悪そう・・・　いや悪いよ！

その箒ちゃんの手にはお弁当が握られている。
ＩＳ学園はお弁当を持参したい生徒のために早朝にキッチンが使えるようになっている。
ちなみにその厨房を今朝使ったんだけど、ものすごかったよ・・・
今まで小型のガスコンロとかしか使った事のない僕にとっては「何これ・・・」の一言だった。
つまりはものすごかったのだ。　もう三ツ星マークのシェフさんが

使いそうなキッチンだったんだ。

「はい一夏。　アンタの分」

タッパーをじゃじゃじゃーんと言いながら大きく開ける鈴音さん。

「おお、酢豚だ！」

「鈴音さんの酢豚？　僕、興味あるな～」

「今朝作ったのよ。　春樹の分ちゃんと用意してあるから」

鈴音さんはそういいながら小さめのタッパーを取り出し僕にも渡してきた。
お願いもしてないのに用意してくれるなんて・・・　僕感激のあまり涙でそうだよ。
うん、おいし。

「コホンコホン。　――――私も今朝はたまたま偶然何かの因果か早く目が覚めまして、こういうのも用意してみましたの。　よければお二人ともどうぞ？」

その隣でバスケットを開けるオルコットさん。
そこにはサンドイッチがきれいに並んでいる・・・　だけど・・・

一夏Ｓｉｄｅ

「お、おう。　あとでもらうよ」

「あ、あははは。　僕もとりあえず自分のを先に食べるね」

俺と春樹の声はいささか・・・　いや正直のところ、内心かなり引いている。
鈴なんてうわあ・・・って顔をしていた。

くっ・・・　どうする春樹

目線を使ってテレパシーを送る。

返答（これ食べたら、生きて帰ってこれないよいっくん）

そうなんだよな～・・・

「？　どうかしまして？」

「「いや！　なんもない（何もないよ）！！」」

・・・はっきりと言おう。
このすばらしきイギリス代表候補生セシリア・オルコットの料理の腕は壊滅的なのだ。
見た目は誰が見ても普通じゃんと言うだろうが、味がすさまじい。
もう・・・　何？　説明できない味がするのだ。
なぜこうも自分の知らない調味料を入れるのかわからない。

そして俺と春樹は後で食べると言ったものの、フランスのブロンド貴公子ことシャルルは、丁寧に二乗したような対応で回避していた。
くっ・・・　お、俺にはそんな対応できん！

「そ、それにしても僕も同席させてもらって本当によかったのかな？」

シャルルがそんなことをつぶやいた。

「ぜんぜん良いぜ、シャルル。　なっ？　春樹」

「うん、むしろ来てもらってこっちが感謝だよ」

「・・・／／／」

そのまま無言になり赤くなる。
ん？　転入初日やはりまだ緊張してるのだろうか。

「そういえば一夏さん、春樹さん、部屋割りはどうなるのでしょう？」

「どうだろうね？　僕らの部屋ってことでもいいけど、狭くなっちゃうからな～」

「俺は別にそれでもいいぜ？　ルームメイトが増えれば楽しくなりそうだ」

そんな会話をしながら昼食が進む。
俺と鈴は酢豚、春樹は酢豚と持参の弁当、シャルルは購買のパン、セシリアはなぜか持参してきたサンドイッチではなく購買で買って

きたパン。
しかしこのサンドイッチ・・・　誰か一つだけでもいいから食べてくれ。
俺と春樹だけだと荷が重過ぎる。

ほら、春樹なんて涙ぐみそうになってるだろ！
俺も泣きたくなってきた・・・

そんな中、さっきから俺の隣でちっとも箸を動かしていない・・・
いや、弁当の包みすら開いていない箒は黙ったままだ。

「どうした？　腹でも痛いのか？」

「違う・・・」

「そうか。　ところで箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが――」

そう、予定だと箒が俺に弁当をくれることになっているのだ。
箒は無言で弁当を差し出してきたので、返事に困ってしまう。

「じ、じゃあ、早速・・・おおっ！！」

「す、すごい・・・これ箒ちゃんが？」

「う、うむ」

弁当を開けると、鮭の塩焼きに鶏肉のから揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えというバランスオッケー、見た目抜群の料理の数々だった。

いや～、うまそうだ。

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

お、おいしそう・・・

僕は勢いに乗って自分のお弁当、そして鈴音さんからおすそ分けしてもらった酢豚を口に運んでいった。

そして、

「あっ・・・」

気がつくとお弁当の中、タッパーの中は空になっていた。
ま、まずい・・・このままだとあの地獄のようなサンドイッチを食べないといけないことに。
冷や汗が出て来て、鳥肌が立ち始める。
それほどあのサンドイッチは強烈なんだ。

「・・・」

「えっ？　これ僕の？」

無言のまま包みを渡してきた箒ちゃん。
それを受け取り包みを開けてみるとお弁当だった。
お弁当の蓋を開けてみると、中身はいっくんと同じ料理が入っていた。

「こ、これは・・・」

「一夏だけだと不公平だからな。　お前の分も作ってきた」

こ、こんなおいしそうなお弁当をもらえるなんて・・・
僕はカタカタとうれしさのあまりに箸を揺らしながらから揚げに手をつけて口に運ぶ・・・
いっくんも僕と同時にから揚げをほおばった。

パクッ

「おお、うまいっ！」

「お、おいしいよっ！箒ちゃん！」

お弁当に入っているから揚げと言えば水分を吸っていてしなしなになっているイメージがあるけど、箒ちゃんのは違った。
衣がぱりっとしていてベタついていない。
口の中に広がる肉の旨みは、冷めていながらその本来の旨みを出していてとてもおいしい。

「これって結構仕込みに時間がかかってないか？　混ぜてるのはしょうがと醤油と・・・」

「なんだろうねこれ？　食べたことある味なんだけど・・・」

「おろしニンニクだ。　あとコショウも少々混ぜてある」

「へえ！　それはいいな」

今回思ったことは箒ちゃんは料理上手だったこと。
前にいっくんの部屋に行った時に食べていたチャーハンもきっとお

いしかったんだろうな～。

「そういえば箒、なんでそっちにはから揚げがないんだ？」

「！　こ、これは・・・そう！　ダイエット中なのだ！」

ダイエット中・・・
運動をたくさんやってるから気にしなくてもいいと思うのは僕だけの考えなのかな？
いや、女の子だから話は別なのだろう。

「箒、食べなくていいのか？」

「大丈夫だ。　まあ、その、なんだ・・・　おいしかったのなら、いい」

「本当にうまいから食べてみろってほら」

いっくんは一口サイズにから揚げを切り、箸でそれを箒ちゃんの口元まで運んでいく。
い、いや・・・　いっくん？　無理やりすぎるきもするんだけど・・・

「な、なに？」

「ほら、食ってみろって」

「い、いや、その、だな・・・」

ほら・・・どうすればいいか迷っちゃってるじゃん。
相変わらずいっくんは、うといと言うかなんというか・・・

「「「「「・・・・・・・」」」」」

二人のその姿をじとーと見る人物がいた。
そう、鈴音さんとオルコットさんが睨み付けているんだ。
そのとき僕はシャルルくんと目が合い、二人で苦笑いしてしまった。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？　仲睦まじいね」

「し、シャルルくんそれ言っちゃだめだよ」

シャルルが突然そんなことを言って納得したように微笑んだので驚

いた。

「だ、誰がっ！　なんでこいつらが仲いいのよ！？」

「そっ、そうですわ！やり直しを要求します！」

貴公子シャルルに食って掛かる鈴音さんとオルコットさん。
そんな状況下に置かれても笑顔を忘れないのはさすがは王子様といったところだろうか。

「ほらほら、二人とも。　僕だったら変わりにやってあげるから」

僕はそういいながらから揚げを箸を使って二人に差し出す。

「「！？」」

二人はその行動に驚くが、

「し、仕方ありませんわね」

「べ、別にやってほしいなんて言ってないんだからねっ！」

「まあまあ、はい」

そう強がっている二人に順番にから揚げを口の中に入れてあげた。
入れてあげると同時に口をもごもごさせながら頬を赤く染めてそっぽを向いた。

「あっ、シャルルくんもいる？」

「えっ？　ぼ、僕！？」

「うん、はいっ」

さすがに一人だけあげないのは不公平。
しかもこのから揚げおいしいんだしおすそ分けしないのはもったいない。
僕は鈴音さんやオルコットさんにしたようにシャルルくんの口元のから揚げを持っていった。

「じ、じゃあ・・・　あ、あーん」

ぎこちないながら可愛く口を開け、から揚げをほおばるシャルルく

ん。
うんこれでみんな公平だね。

「で、では私はこのサンドイッチを・・・」

「へっ？　い、いやっ・・・」

「ち、ちょっと待てセシリア」

「遠慮することありませんわ」

無事に箒ちゃんに食べさせたいっくんと顔を青くする。
あ、あれを食べてしまえば最後・・・
今日一日トイレで過ごす可能性もないとも言えない・・・

「はい、口を開けてくださいな」

う、うぅ・・・

いっくんと目を合わせてうなずき覚悟を決める。

ゆっくりとサンドイッチが近づいてきて口の中にそれが入る。

う、うわあ・・・
なんだろう・・・　この・・・　味・・・
無茶苦茶甘い？　辛い？　酸っぱい？　もう味覚がわからなくなってきた。

僕といっくんは涙目になりながらそのサンドイッチを食べた。　全部ね！
しかし、一体何を入れたのだろうか・・・　材料を聞くのが怖い。

エピソード１１　【屋上での昼食】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

いやはや、進むテンポが遅くて申し訳ないです。
期末テスト（数学）のことで頭がいっぱいでなかなか進まなかったのです・・・
それではいつもどおりフラグ分析のほうに行ってみましょう！

箒　＝　〇　一夏と春樹のためにお弁当！？　これは今後に期待できますね。

セシリア　＝　◎　謎のサンドイッチ　ｆｏｒ　一夏　アンド　春樹

鈴　＝　〇こちらも他の二人に負けじと酢豚をおすそ分け。　そういえばこの前の夜ご飯酢豚だったな～

ラウラ・ボーデヴィッヒ　＝　×　今回未登場

？？？　＝　アンノウン

原作でもセシリアのサンドイッチの材料の詳細が書いてありませんでしたが、実際どんな材料が入っているのか気になりますね。
原作の場合滅茶苦茶甘かったらしいです。
砂糖、黒砂糖、水あめ、そしてそこにバニラエッセンス・・・
など変な想像が出来ますが、実際何を入れたのか。
食べてない側は材料を聞いて思いっきり笑うこと出来ますねｗｗ

しかし箒が作った唐揚げ食べてみたいですね～。
ニンニク、コショウ、あと大根おろしを適量か・・・　ゴクッ
如何にもおいしそうではないか、うむ。
ぜひ食べてみたいものです。

それではまた次回このコーナーでお会いいたしましょう！

感想、誤字報告お待ちしております！

エピソード１２　【誰なんだろうこの子・・・】（前書き）

タイトルで予想できるかもしれませんね・・・
ついに・・・ついに・・・

それでは本編へＤＩＶＥ　ＩＮ！

エピソード12　【誰なんだろうこの子・・・】

「ほ、本当に3人部屋になっちゃったね。　あははは」

「春樹はホントによかったの？　ベッド取っちゃたけど」

「俺でも良かったんだぞ？　床で寝るのは」

夜、夕飯を食べ終わった僕たちは部屋に戻ってきた。
何と僕たちは3人とも同じ部屋になった。
問題なのは一部屋に2つしかないベッドに誰が寝るかということで、流石にシャルルくんに床で寝てもらうのはだめだと思い僕が床で寝ることになった。
いっくんが床で寝るって最初は言ってたんだけど、僕の頼みと言うことにして結果的にいっくんとシャルルくんがベッドで寝ることになり問題は解決。

「まあまあ、僕は床で寝たい気分だから本当に気にしないで？　それよりシャワーどうする？」

「春樹が最初でいいと僕は思うかな。　ベッドの代わりって言っちゃなんだけど」

「俺もそれで良いと思うぜ。　流石にベッドまで取ってシャワーまで後回しとかにしたら不公平だからな」

「そう？　じゃあそうさせてもらうかな」

正直な話僕が最後でも良かったんだけどね。
べつに男同士だし一緒に入ってもって・・・　それはないかな。
僕ＢＬじゃないし・・・

「あっ、そういえば一夏と春樹って放課後にＩＳの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「うん。いっくんは他のみんなに比べて遅れてるからね」

「遅れてるからこそ、地道に訓練時間を重ねるしかないんだよな」

そう、普段は放課後にいっくんのＩＳ訓練をしているんだ。
だけど今日はシャルルくんの引越しがあったので、放課後の訓練は休みになったんだ。
引越しといってもシャルルくんの荷物がぜんぜん無かったから言うほど何もしなかったんだけどね。
しかし、今日は休みだったけど明日からは学年別トーナメントに向けて再開しないといけない。

「僕もその訓練に加わっていいかな？　専用機もあるから少しくらいは役にてると思うんだ」

「本当！？」

「おお、それはありがたい話だ。　ぜひ頼む」

僕はシャルルくんの手を握ってお礼を言う。
やっぱり人数がいたほうが訓練もはかどるし、大助かりだ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

シャルルくんが転校してきてから五日が経って、今日は土曜日。
この五日間すごかったよ本当にね。
一部屋に男が三人も集まってるから女の子たちがその姿を拝みたいとかなんとかで強行突破してきたり、シャワー浴びてる時とかに侵入してきて盗撮とかホントにすごかった。
ちなみにその盗撮写真はちーちゃんにより消去。
その盗撮した子たちは、噂だと本当で１００週くらいグラウンドを走らされたらしい・・・

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？　春樹にも前に言われてわかっているつもりだったんだが・・・」

「う～ん・・・　僕もいっくんと同じ近接戦闘がメインだからね～。でもシャルルくんが射撃型みたいだから良かった」

ＩＳ学園では土曜日も学校があって、午前は理論学習、そして午後は完全に自由時間になっている。
さらに土曜日はアリーナが全開放なのでほとんどの生徒が実習に使う。
今日もいつものとおり練習中だけど、この前からシャルルくんはこの練習に参加してくれているので助かっている。

「春樹はまだ中距離武器があるとして、一夏は間合いを詰められなかったよね？」

「うっ・・・『瞬時加速』も読まれてたしな・・・」

「いっくんのＩＳの武器は『雪片弐型』だけだからね～。　難しい

とは思うけど、深く射撃武器の特性を把握しないとだめなんじゃないかな？」

「うん。　特に一夏の瞬時加速って直線的だから軌道予測で攻撃ができちゃうんだよね」

「直線的か・・・　うーん」

まあでも瞬時加速しているときに無理やり軌道を変えようとすると、いろいろな関係で機体に付加がかかるからよくないんだよね。
だから基本瞬時加速は直線でしか使えない。

「しかしシャルルの説明と言い、春樹の説明といいわかりやすいな」

「僕の説明は普通だと思うけどな？　でもシャルルくんのはたしかにわかりやすいね」

「そ、そうかな～？／／／」

シャルルくんが照れながら顔を背ける。

う～ん、僕の場合はたいした説明してないような気がするんだけどな～・・・

それにしても確かにシャルルくんの説明はわかりやすいと思う。
箒ちゃん、鈴音さんとかオルコットさんの説明はすごかった。
なんせ箒ちゃんの場合はずばーっとか、がきんっ！とか音しか聞こえてこなかったし、鈴音さんは感覚と言い張ってるし、オルコットさんは数学的理論みたいな感じで説明してたしね。
正直横でいっくんといっしょに説明聞いてたけどぜんぜんわからなかった。

ちなみにいっくん専属コーチは後ろでぶつくさ言っている。

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ・・・」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不安だと言うのかしら」

いやね、あのね・・・
正直に言っちゃうとぜんぜんわからなかったよ三人とも・・・

「「「春樹（春樹さん）！」」」

「は、はいっ！！」

「「「わからないとはどういうことだ（どういうこと）（どういうことですの）！！」」」

こ、こころの中を読むことが出来るようになったなんて・・・

思わずシャルルくんと苦笑いしてしまった。

「シャルルくん、危ないよ」

シャルルくん目掛けて流れ弾が飛んできたので、機体をひっぱり直撃を回避する。

そのままシャルルくんはさらにバランスを崩しそうになったので抱きとめてしまった。

「わっ！？　わ！　わわわわっ！　ご、ごめん、春樹！」

「ん、大丈夫？」

「う、うん」

慌てて僕から離れて距離をとる。

しかし流石土曜日、人が多い。

さっきも言ったとおり土曜の午後はアリーナが全開放されるので、ここ第三アリーナでも多くの生徒がせっせと自分の訓練に励んでいる。
しかし、学園で三人しかいない男子が全員いるせいか、いつもより人数が非常に多い。
かなり過密な状況だった。
だからさっきみたいに流れ弾が飛んでくるなんて当たり前である意味ではかなり危険だ。

「そ、そういえば一夏の『白式』って後付武装（イコライザ）がないんだよね？」

顔を赤くして胸を抑えながらいっくんにそう質問する。

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、拡張領域（パススロット）が空いてないらしい。　だから量子変換（インストール）は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの容量を使っているからだよ」

そう、シャルルくんの言うとおりいっくんの専用ＩＳ『白式』に拡張領域が空いていないのはワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだ。
ワンオフ・アビリティー、漢字に直すと『唯一使用の特殊才能』。
各ＩＳが操縦者と最高状態の愛称になったときに自然に発生する能力のことをそう言う。

「でも、普通は第二形態から発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型ＩＳ。　オルコットさんのブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「第一形態で『零落白夜』が使える白式は異常だけどね」

「春樹が言ってるとおり異常事態だよ。　前例がまったく無いからね」

まあ僕の唐梅も本当のことといっちゃうと第一形態で使えてたんだけどね。
ちなみに今は第二形態になってるけど。

「そういえば、そのシャルルのＩＳは？・・・」

シャルルくんの専用ＩＳ・・・
見た感じは『ラファール・リヴァイヴ』（通称リヴァイヴ）に似た感じなんだけど、カラーだけでなく全体のフォルムがそれとは異なっている。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの

子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。　基本装備をいくつかはずして、その上で拡張領域を倍にしてある」

倍・・・
うらやましいな・・・
倍と言う単語にとても魅力を感じてしまった。

「春樹のＩＳはどこの国が作ったやつなの？　見たこと無いやつだけど」

「僕のは束さんが作ってくれたんだよ」

「束さんって・・・　あの？」

「うん。　ＩＳのお母さんって言っていい存在・・・　篠ノ之束さんだね」

そんな会話をしていると急にアリーナ内がざわつきはじめて、僕たちはそっちに目を向けた。
そこにいたのは、もう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒさんだった。
クラスの誰ともつるもうとしないし、会話さえしないらしい。
するといっくんの方にオープンチャンネルで声が飛んでいった。

もちろんその声はボーデヴィッヒさんの声だ。

「貴様も専用機持ちだそうだな。　ならば話が早い。　私と戦え」

「イヤだ。　理由がねえよ」

突然の宣戦布告にいっくんはそれを拒否する。

「貴様には無くても私にはある」

ボーデヴィッヒさんにはある？
ドイツ、ちーちゃん、いっくんと来て思いつくのは一つしかない。
前にちーちゃんに聞いた第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』
の決勝戦で――――――

いっくんは誘拐された。

それが原因で二連覇が果せなかったと聞いている。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは用意に想像できる。　だから私は貴様を、貴様の存在を認めない」

たしかに二連覇は出来たかもしれない。

でも・・・　それでも・・・

「また今度な」

いっくんは戦いの申し込みを再度断る。

「そうか、ならば――――戦わざるを得ないようにしてやる！」

ボーデヴィッヒさんはその漆黒のＩＳを戦闘状態へと移行させる。
刹那、その左肩に装備されている大型の実弾砲がいっくんに向けて照準を定め、発射した。

「シャルルくん」

「うんっ！」

僕とシャルルくんは横合いから割り込みシャルルくんはシールドで実弾を弾き、僕は無駄な動き無く距離を縮め腰につけられている『紅蓮雷撃』をボーデヴィッヒさんの懐へと潜り込ませた。

「貴様ら・・・」

「・・・こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸騰が低いんだね。　ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

シャルルくんが挑発する。

「人が大勢いるのに、さすがにどうかと思うな？」

ゼロ距離の状態でボーデヴィッヒさんに『紅蓮雷撃』を構えながらそう言う。
だが彼女はそれにひるむことなく、鼻で笑うだけだった。

「ふんっ、それが唐梅か。　そのオリジナルＩＳと第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「いまだに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型よりは動けるだろうからね」

シャルルくんが涼しい顔をしながら睨み付ける。
一方僕も警戒心を解くことなくレール砲を下げない。

「１度ならず２度までも友達に手を出すんだったら、いくら僕でも

黙ってられなからねボーデヴィッヒさん」

紅蓮雷撃から赤い閃光が薄っすらと現れ始める。
これは警告、もし何かヘタな事をするといつでもこっちは撃つ事ができるというね。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。
きっと騒ぎを聞きつけてやってきた先生だろう。

僕もこれ以上騒ぎを大きくしたくないので、紅蓮雷撃を下げて待機させる。
それから後ろを少し向き、シャルルくんにも一度手に持っている六一口径アサルトカノンを下げるように合図を送った。

「・・・ふん。　今日は引こう、興が削がれたのでな」

そういいながら不敵な笑みを浮かべると、ボーデヴィッヒさんは戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去って行った。

「ふ～・・・　いっくん、シャルルくん怪我は？」

「僕は大丈夫だよ、一夏は？」

「あ、ああ。　助かったよ」

さっきまで鋭い眼差しを向けながら対峙していたシャルルくんはいつもどおりの表情に戻っていた。

もちろん僕も同じようにいつもの感じに戻る。

ボーデヴィッヒさんが乗っていた漆黒の機体・・・

あれがドイツが製作した第三世代型ＩＳ、『シュヴァルツェア・レーゲン』、か・・・。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ボーデヴィッヒさんとの睨み合いの後、僕たちは今日の練習を終了した。

アリーナの閉館時間も近かったから丁度いいタイミングだった。

それにしてもシャルルくん、いつも僕たちと着替えようとしないけど何かあるのかな？

「はー、風呂に入りてえ・・・」

「お風呂か～。　僕も久しぶりに入りたいな～。　そういえば山田先生が大浴場のタイムテーブルを組みなおしてくれてるらしいよ？」

「ああ、それ俺も聞いた。　楽しみだな」

「そうだね。　なんせ大浴場だしね」

僕は持参してきたスポーツドリンクを飲みながらタオルで頭を拭いている。
さっきからいっくんがお風呂に入りたい、お風呂に入りたいと連呼しているけど、実際僕も入りたい。
いくらＩＳのスーツが汗を吸収してくれてるとしても汗をかいたことには変わりないからね。
シャワーもいいけどたまには大浴場で大きな湯船に浸かりながらゆっくりしたのが僕たちの本音だ。

「よし、着替え終わり」

「ぼ、く、も・・・っと」

ズボンを履き、ベルトを締める。

「あのー、織斑君と九曜君とデュノア君はいますかー？」

ドア越しから山田先生の声が聞こえる。
一体何のようだろうか。
もしかしていよいよ僕たちの大浴場が？・・・
そんな期待の中いっくんが返事を返す。

「はい。　えーと、織斑と九曜だけいます」

「入っても大丈夫ですかー？　まだ着替え中だったりしますー？」

いっくんは一度僕の方に振り向き大丈夫かどうか視線を送る。
上はシャツの状態だけど、別に問題ないかな。
裸じゃないし・・・　大丈夫だよね？
僕は少し考えた末に、顔を立てに振った。

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ失礼しますねー」

パシュッとドアがオープンし山田先生が更衣室に入ってくる。
それにしてもこのドアが開くときの音を聞くと炭酸が飲みたくなるのは僕だけなんだろうか。
あの炭酸ジュースを開けるときの快感・・・　ん～、だんだん飲みたくなってきたよ。

「デュノア君は一緒ではないんですか？」

「シャルルくんはたぶんアリーナの方だと思いますよ？」

「そうですか、では二人から伝えておいてください。　ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。　結局時間帯別にすると問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

ビンゴっ！！
きたよ！　来ちゃったよ男の時代が！！
長い間お風呂に入ってなかったけどようやく入れるよ～。

「ありがとう山田先生！！」

「お、おいっ春樹！」

僕はいっくんの静止を聞かずに山田先生の手を握り、思いっきりブンブンと縦に振る。

いや～、だっていっくんお風呂だよ！？　お・ふ・ろ！！

週に二回だけだけどそれでもいいよ～。

「く、九曜君、お、落ち着いてください」

「山田先生、あ・り・が・と～～～！！」

「・・・春樹？　何してるの？」

「ん？　ああシャルルくん！　聞いて聞いて、ついに男も大浴場使えるようになったんだよ！」

「それはいいお知らせだけど、なんで手を握ってるの？」

シャルルくんが僕と山田先生の手を見て少し威圧を飛ばす。

山田先生も何かに気がついたように、ハッといいながら急いで手を離し、１８０度回転して背中を向けた。

「先に戻ってって言ったよね？」

たしかに僕たちは分かれる際にそう言ってたけど・・・
なんだか今のシャルルくんの発する言葉全部に小さいながらも棘がついているような気がするのは僕だけだろうか。

「ま、まあシャルル、ついに俺らも大浴場使えるようになったんだ。うれしくないか？」

「うれしいですよ～」

僕よりマシだけど、やや興奮状態だったいっくんもシャルルくんの反応に少し戸惑いを見せる。
いっくんは苦笑いしながら僕の肩をとり、部屋の隅へと移動。

「なんかシャルルの機嫌悪くないか？」

「悪いってレベルじゃないかも？　あはっ」

「笑い事じゃないぞあれは・・・　大浴場で喜ばないなんて・・・
春樹なんか別れるときにしたのか？」

別れるとき・・・ね～・・・
特に何もしてないし、いつもどおりだったと思うけど・・・

「「う～ん」」

僕たち二人は腕を組みながら何かシャルルくんの気に触ったことしてないか考えたが何も思いつかない。
いや、だって本当に何もしてないんだもの。
テンションが上がって山田先生の手を握って・・・　シャルルくんが入ってきて・・・　それから？
まさか僕が山田先生の手を握っていたからってことは・・・　流石にないか

「ああ、織斑君にはもう一件用事があるんです。　白式の正式な登録に関する書類を書いてもらいたいんですけど」

「あっ、はい、わかりました。　ん？　登録って春樹の唐梅はしてあるのか？」

「うん、僕は転入する前に先に登録だけ済ましたんだよ」

「なるほど、じゃあちょっと行って来る」

僕と若干機嫌が悪い（若干じゃないかも）シャルルくんはいっくんと山田先生を見送った。
しかし、どうしたものかなシャルルくん・・・

数十分後、僕らの部屋にて・・・
部屋に戻ってからは、たいした会話はなく沈黙状態が続いていた。
早くいっくんは帰ってこないのかなと何度も何度も願うがいつになっても帰ってこないのが現状だ。

（どうしよう・・・　何か切り出さないと・・・）

「・・・」

無言のままぼーとしているシャルルくんをチラッと見て何を言うか頭の中で思考錯誤する。
そして思いついたのが・・

「し、シャルルくん！　シャワー先に浴びて？　ぼ、僕今日は気分で最後に入りたいな～・・・なんて」

ぼ、僕は何を言っているんだ～～！

思考錯誤して出た結果がこれなんて・・・
うぅ・・・　なんだか情けない。

「う、うん。　そう・・・しようかな？」

「うん！　そうして！　ぜひっ！！　あは、あははは」

もう明らか何かおかしいでしょ僕の言い方。
何？　この僕は何か隠してますよ～って感じのセリフは。

シャルルくんはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。

シャルルＳｉｄｅ

「・・・はぁ」

ドアを閉めて、シャワールームの中はザァーっという音と、湯気が

立ち込める。
頭からお湯をかぶり、今日かいたいやな汗をすべて落とす。

「何をイライラしてるんだろう」

思い浮かぶのは春樹が先生の手を握っている姿。
そして喜んでいる彼の笑顔・・・
喜んでいるのはもちろん別の理由とわかっているけど・・・

「一夏も一夏だよっ。　どうして止めなかったかな～・・・」

プクーと風船のように頬を膨らませる。

「春樹・・・　大きい胸の方が好きなのかな？」

そう言いながら両手で自分の胸を包み込むシャルルがいた。
そう・・・男のように板みたいな胸でなく『膨らみがある胸』を。

シャルルＳｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

「あっ！　そ、そう言えばシャンプー切れてたんだ」

突然思い出したのが、シャンプーが切れていたことだった。
実は昨日、僕は最後にシャワーを浴びていて、そのときにシャンプーが切れたことを今思い出してしまう。

「ど、どうしようかな・・・」

どうしようも何も渡しにいかないとシャルルくんも困っているはず。
それに汗をかいた後だし余計に頭をきれいに洗いたいはずだ。
ここは腹をくくって渡しに行くしかない。

クローゼットからシャンプーを取り出し、シャワールームへと向かう。
シャワールームは洗面所件脱衣所とドアで区切られているから、とりあえず脱衣所まで行って、そこから声をかければいいかな。
そう思い、一度深呼吸をしてから洗面所へと入ろうとするが、

ガチャ

「はひ！」

ドアが開いた。
でも洗面所の方のドアではなく、『この部屋』のドアだ。
そして部屋に入ってきたのは職員室で書類を書き終えてきたいっくんだった。

「も、も～！！　いっくん！」

「な、なんだ？　どうしたんだ片手にシャンプーなんか持って・・・
ああ、そう言えば昨日切れたって言ってたな」

「そうだよ。　洗面所のドア開けようとしたらいっくんが入ってきたから心臓止まるかと思ったよ！」

悪い悪いと笑いながら僕の隣へとやってくる。
そしていっくんは洗面所のドアに手をかけて、思いっきり、豪快に、そして全開にドアを開けた。

「シャルル、春樹が予備のシャンプー持って、き・・・た・・・」

「えっ・・・？」

「い、一夏と・・・は・・・る・・・き？」

向こうも同時にシャワールームのドアを開けたらしく、洗面所で鉢合わせした。
まだそこまでなら良いんだ。
あははは、ごめんね、はいシャンプーで終わるだろうけど、そんな感じで終わるわけが無い状況になっている。
なんせシャワールームから出てきたのは、ブロンドヘアーの『女の子』だったんだ。

えっ？　どうして見ただけで女の子ってわかったかって？
だって・・・『膨らんだ胸』があるんだもの・・・

僕、いっくん、そしてシャルル・・・くん？　はその場で怪物でも見たかのように固まった。
さっきシャワーを浴びに行ったのはシャルルくんで、ドア開けたら女の子がいて、シャルルちゃんみたいな・・・　あ～、もう！　わけがわからないよ！！

「え、えっとだな・・・　そのだな・・・」

「あ、あのね？　その・・・なんというかね・・・　あはは？」

もう訳がわからなくなって思考回路がおかしくなってしまった。
何人もの僕が、頭の中で必死にデータの処理を頑張っているが、処理が追いつかない。
もっとハイテクな処理機能がいるよ～！！

「きゃあ！？」

その声にはっと我に返り、そのブロンドヘアーの女の子がシャワールームに大事な部分を隠しながら逃げ込む。
あれ・・・　シャルルくん・・・　であってるんだよね？　ブロンドヘアーだったし。

僕といっくんは互いに顔を見合わせて、笑ってしまった。
いや、だって笑うしかないんじゃないかな？　もう状況の整理がつかないよ今！

「えーと・・・」

「・・・・・・・・・」

ドアの向こうから言葉は無い。
たぶん向こうもものすごいパニック状態になっているのだろう。

「し、シャンプーここに・・・置いておくから」

「う、うん」

僕はシャンプーのボトルをシャワールームから目を離さずにゆっくりとドア前に置いた。
そしていっくんといっしょに脱衣所から撤退。
それから二人で情報処理を行った。

「あ、あれって・・・」

「春樹、お前シャルルが入ってるの見送ったんだよな？　ちゃんと、入っていくのまで、か・く・に・んしたんだよな？」

念を押していっくんが問い詰めてくる。

「う、うん。　シャンプーに気がついたのはシャルルくんがシャワールームに入っていってから5分も掛かってなかったし・・・　あれってやっぱり・・・」

「「シャルル（シャルルくん）？」」

二人の高性能情報処理機（実際高性能かは不明）を使用した結果、さっきの女の子はシャルルくんだろうという結論がでた。
だけどやっぱり納得できない。

「いやでもおかしいだろ。　なんでシャルルに胸があるんだ？　そう、胸が！　胸がっ！！」

「胸が、胸が連呼しなくていいよいっくん！！　隣の部屋の人に変なこと思われたくないよ！」

そう、胸がね・・・　胸がね・・・　きれいな胸がね・・・
僕の頭の中は先ほどちらっと、いや、じっくりと見えてしまったキレイな胸が焼きついてしまっていてなかなか離れない。
だ、だめだ！　だんだんいっくんと同じように頭の中が・・・

「そ、そうだな・・・　落ち着こう。　こういうときはまず深呼吸だ」

「「すー・・・はー・・・すー・・・はー・・・」」

ガチャ

「「！？」」

響く脱衣所のドアが開く音。
同時にホラー映画で流れているような音楽が頭の中をよぎる。

「あ、上がったよ・・・」

「お、おう」

「う、うん」

僕といっくんは、ギギギッと壊れかけのロボットのように首を回転させながらその声の聞こえたほうへと振り向く。真夜中の墓場で急に後ろから声をかけられて振り向くような感じでまさにホラー映画を実際に味わっているようだった。

そしてゆっくりと振り向いて立っていたのは、髪をながしているシャルルくんだった。
いつもと違うのは服の上から胸があることが確認できること。
もう一年間分のドッキリを味わった気分だ。

エピソード１２　【誰なんだろうこの子・・・】（後書き）

～ＢＬＯＯＭ（開花）～フラグ情報局からの現状報告！

に行きたいところなのですが、新ヒロインが正式に登場するまでお休みにさせていただきます。

特に理由はありませんが、最近になって箒、鈴、セシリアが空気になってしまっているので書けても　『未登場』となってしまうのでそれではあまり意味が無いと思い新ヒロイン登場までお待ちを・・・そんなこと言ってたら、リーグ戦まで行っちゃいそうです・・・

しかしシャルル・・・　うむ・・・　テヘッ（訳がわからん

それでは感想お待ちしております！

エピソード１３　【とある事実】（前書き）

来週まで更新が遅れそうです。

それでは本編どうぞ！

エピソード13　【とある事実】

「「「・・・・・・・」」」

かれこれ一時間くらいこうしているだろうか。
それぞれ自分のベッドの上に座り沈黙状態が続いている。
僕といっくんの目の前にいる女の子・・・
たぶんシャルルくんであろう人物が座っている。

「あー、その・・・　お茶でも飲むか」

「う、うん、もらおうかな」

「僕もお願い」

いっくんは立ち上がりお茶葉が入った急須の中に電気ケトルからお湯を注ぐ。
お茶葉が広がるのに時間が掛かるのでまたその間に静寂が巻き起こり、さっきと同じ雰囲気に戻ってしまう。
それから数分後、いっくんが湯飲みにお茶を移して僕らに渡した。

「もう大丈夫だろ、ほい」

「う、うん」

「あ、ありがと――――きゃっ」

いっくんが湯飲みを渡すときに指先が当たり、シャルルくんが慌てて手を引っ込める。
その所為で落としそうになった湯飲みをいっくんが握りなおしたために、反動で熱いお茶が手にかかってしまう。
しかもその反動で跳ねたお茶が僕のほうにも思いっきり飛んできて、足に直撃。

「あちちっ！　水っ！　水っ！」

「あつっ！　これめちゃくちゃ熱いよっ！」

バタバタと大きな音を立てながら洗面所まで移動。
いっくんは手だから洗面所で良かったものの、僕がかかったのは足だから洗面台に上がるわけにもいかないのでシャワールームに飛び入り即行水を出す。
服も脱がずにシャワーを出したからジャージなんてビチャビチャだ。

「ご、ごめん！　二人とも大丈夫!?」

後からシャルルくんが慌ててやってきた。

「ま、まあ、たぶん。　すぐに冷やしたし火傷にはならないだろう」

「ぼ、僕もたぶん大丈夫かな？」

「ちょ、ちょっと見せて。　・・・ああ、赤くなってる。　ごめんね」

シャルルくんはいっくんの手を見てどうなっているか確認する。
僕も自分で足を確認したら、赤くなっていた。
ま、まあ赤いだけだから良かった。
皮までとれてきたら本格的に危なかったかもしれないけど、赤くなるくらいだったらぜんぜん問題ない。
でもとりあえず冷やすだけ冷やしておこう。

「春樹は？」

「僕も同じかな、って！！　何してるの！」

気がついたらシャルルくんがシャワーの水に当たりながらでも僕の足の状態を確認しに来ていた。

服が濡れて、服が体にへばりつきなんだかとてもイヤらしいというかなんというか・・・

「春樹も赤くなってる・・・　ごめんね、二人とも」

「まあ、誰にでもあるって。　気にするなシャルルそんなことよりさ・・・」

「う、うん。　早く服着替えてくれないと見るところに困ると言うか・・・」

そう、今のシャルルくん・・・いや、シャルルさんの方が良いのかな？
たぶん僕たちにバレてしまったからだろうか、胸を隠すためのコルセットをしていないせいで濡れたジャージがへばりつき、形の整った・・・　その・・・　胸が、ねっ？

「！！」

自分の現状の格好を理解したらしいシャルルさんは両手で胸を隠すように立ち上がって出て行った。
そして少し顔を出し、

「心配してるのに・・・　一夏と春樹のえっち・・・」

ええ～・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ここまで冷やしたらもう大丈夫かな。　とりあえず」

「じゃあ、まあ、改めて」

「う、うん」

濡れた服を着替え、みんなでさっきみたいにベッドの上（僕の場合は床に敷いてある布団の上）に座る。
いっくんが改めてシャルルさんに湯飲みを渡し、今度はちゃんと受け取った。

「それで・・・　なんで男のフリをしてたんだ？」

いっくんがそう問う。

とりあえず僕といっくんの中ではそれが一番疑問に思っていた。

「それは、その・・・　実家のほうからそうしろって・・・」

「実家って・・・　シャルルさんの実家ってたしかデュノア社の・・・」

デュノア社は量産機ＩＳのシェアが世界第3位の大企業であり、プロフィール上そのデュノア社の社長の息子ということらしいが、その現時点だとそのプロフィールと矛盾している箇所がある。

『息子』・・・そう、そこの箇所だけ矛盾しているのだ。

「そう。　父がそこの社長。　その人からの直接の命令なんだよ」

いっくんと顔を合わせ首をかしげる。

「命令って・・・　どんな命令がでたのかな？」

「僕はね・・・　愛人の子なんだよ」

その言葉を聞いた瞬間絶句してしまう。

愛人の子・・・　ドラマとかでは出そうな単語だけど、今実際愛人

の子なんだよと現実で聞いた。
この先シャルルさんが話すことを聞いてもいいのか迷うが、シャルルさんはそのまま話を続ける。

「引き取られたのがね、二年前でちょうどお母さんが亡くなった時・・・　それから父の部下がやってきたの。　それで色々検査してＩＳ適応が高いことがわかって、非公式だけどシャルル社のテストパイロットをすることになってね」

顔を暗くしながらもシャルルさんは健気に喋ってくれた。
僕といっくんは一字一句聞き逃しがないように真剣に話を聞く。

「父にあったのは二回くらい。　会話は数回くらいだったかな？
普段は別邸で生活しているんだけど一度だけ本邸に呼ばれてね。
あの時はひどかったなぁ。　本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って言われて殴られたよ」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルさん。
そのとき思わず自分の過去と比べてしまった。
僕の場合は束さんがいたから良かった。
だけど、シャルルさんの場合は・・・

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？　だってデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界で第三位だろ？」

いっくんが世界第三位の実力を誇るが経営危機に陥ることに疑問に思う。

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ一夏」

「いっくん、ＩＳの開発にはねものすごい莫大な費用がかかるんだよ。ほとんどの企業は国からの支援があってこそ成り立っているところが多いんだ」

「そう。　それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。　第三世代型の開発は急務なの。資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

第三世代型の開発・・・

第三次イグニッション・プランの時期主力機はまだ決まっていなくて、トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズモデル、つまりはオルコットさんの専用機である『ブルー・ティアーズ』類。

そしてこの間のボーデヴィッヒさんが扱っていた『シュヴァルツェア・レーゲン』と同じタイプのレーゲンモデル。

最後に、実物はまだ見たことはないけどイタリアのテンペスタ？型のみ。

今のところはイギリスが一歩リードしていると聞いているけど、状況的にはほぼどの国も遅れを取っていないとのこと。
そのために各国からセシリアさんたちのようにデータ収集のためにＩＳ学園へと送られる人たちがいる。
おそらくはボーデヴィッヒさんもその中の一人と考えられる。

「データ取りのために来たってことはなんとなく予想できるけど・・・だけど何で男装になるの？」

「簡単だよ。　注目を浴びるための広告塔。　それに――」

僕が男装の理由を聞くと、シャルルさんは目線を逸らしその理由を口にした。

「同じ男子なら・・・その・・・異例の男性でＩＳを動かせる人物、一夏と春樹に接触しやすい。　可能であれば使用機体とデータを取れるだろう・・・って」

やはり僕の情報はもうほとんど各国に知れわたってしまっている。
ただデータを『盗め』だなんてそんなことを・・・

「なんだか話したら楽になったよ。　聞いてくれてありがとう二人とも。　後、ウソついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルルさん。
気がつくといっくんはシャルルさんの肩を、僕は手を握り締めていた。

「いいのか、それで」

「シャルルさんが仮にそれで良いって言っても、僕は納得がいかないよ」

「えっ？」

「親が何だって言うんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。　おかしいだろう！」

「愛人の子供だなんて関係ないよ。　愛人の子供だとしても、親が子供に何をしてもいいなんて、非常識なこと許していいはずが無いよ。　生き方は自分が選ぶんだよ、シャルルさん。　僕だって・・・僕だって・・・」

シャルルさんの手を握り締めながら過去の自分を思い出す。
親の顔も知らず・・・　何も知らない自分・・・
そして突然現れた束さんと言う存在のことを・・・

「ど、どうしたの？二人とも？」

「ご、ごめん」

「悪い、つい熱くなってしまって」

僕といっくんは冷静になり、シャルルさんから離れる。

「いいけど・・・本当にどうしたの？」

「俺は――――俺と千冬姉は両親に捨てられてから」

「いっくんもそうだったね・・・　僕もそんな感じ」

「あ・・・その、ゴメン」

おそらくは資料で知っていたであろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルさんは申し訳なさそうに顔を伏せる。
僕も『両親不在』と記されているが、保護人として束さんの名前が書いてある。

「大丈夫だよ。　シャルルさんも僕たちに本当のこと話してくれたわけだし。　ねっ、いっくん？」

「おう、気にしなくていい。　それより、これからどうするんだよ？」

「どうって・・・時間の問題じゃないかな？　フランス政府もことの真相を知ったらだまっていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな？」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。　僕には選ぶ権利が無いから、仕方が無いよ」

そういってシャルルさんは微笑む。
ただそれはうれしいという意味の微笑じゃなくとても痛々しいもののように感じ取れた。

「「・・・だったら、ここにいなよ（ここにいろ）」」

「えっ？」

いっくんと僕の考えは同じ。

「「特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない　本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」」

二人の声はシンクロし、一字一句間違えず同じ内容を口にした。

「さすがいっくん、覚えてたんだね」

「自分でも驚いてる」

そうだ、これがある限り三年間は大丈夫。
これだけの時間があればなんとか方法を考えれるはず。

「だからそれまで、いっしょに良い方法を考えよう？　シャルルさん」

「ああ、まだ時間はあるんだ。　シャルル」

「春樹・・・一夏・・・・」

この時やっと彼女は心のそこから笑ってくれた。
その表情は１５歳の女の子そのものだった。
そう、まだ時間がある。

コンコン

突然のノック音。

「「「！？」」」

「春樹さん、一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

ノック音の次に聞こえてきたのは、オルコットさんの声だった。

「入りますわよ？」

ま、まずいよこの状況。
今のシャルルさんの姿を見られでもしたら・・・

「い、いっくん」

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れろ」

三人で姿勢を低くしながら小声でやりとりをする。
男装してくれるのが一番の安全策かもしれないが、そこまで時間が無い。
危険はもうすぐそばまで迫っている。

「わ、わかったよ」

そういいながらクローゼットへと隠れようとするシャルルさん。

「だめだよ！　こっちこっち！」

僕はベッドのほうへと手招きをし、その上へと寝かし布団をかける。
ドタドタと部屋を走り回る音を立てながらあわただしく動く男の子2人と女の子1人。
もし誰かがこの光景を見ているとすれば明らかに怪しいと思うだろ

う。

「よ、よおセシリア！　なんだ？　どうした？」

「お、オルコットさん？　元気してる？」

「・・・何をしてますの？」

どんな感じになっているかと言うと、ベッドへと飛び込んだシャルルさんに僕といっくんが両側から布団をかけている形だ。
でも僕の場合なぜか布団をかけた後にその上に全身を乗せている。
な、何をしてるんだろう僕は・・・

「い、いや～。　なんかシャルルさ・・・じゃなくて！　シャルルくんが体調悪いみたいだからさ」

「そ、そうそう。　だから布団をかけてただけだぞ？　ははは・・・」

「・・・一夏さんはまだしも、日本では病人の上に覆いかぶさる治療法でもあるのかしら？」

ないです・・・はい・・・

「と、とにかく、あれだ！　シャルルは具合悪いらしいから、俺が面倒見ようと思ってさ」

「う、うん。　それで僕が一人で夕食食べに行って、ついでに二人分の夕食を持っていこうかって話してたところなんだ」

「そ、そうそう」

明らかに違和感のある返答のしかた。
もう違和感がマックスだ。

「ごほっごほっ」

そして追い討ちをかけるようなわざとらしい咳。
こ、これもう終わったんじゃないかな？　あは、あははは・・・

「あ、あら？　そうですの？　では春樹さんご一緒しましょう」

ば、ばれてない・・・？
どうやらばれずにすんだらしく安堵のため息をつく僕といっくん。

「そ、それじゃあ行って来るよ、いっくん、シャルルくん」

「お、おう」

「ごほっごほっ、ご、ごゆっくり」

「デュノアさん、お大事に。　一夏さんはきちんと看病いたしますのよ？　さあ春樹さん、参りましょうか」

ぐいっと腕をとられてそのまま連行。
それにしても腕を組む必要があるのかどうか・・・
ついでに胸が僕の腕に密着してるし、今日はいわゆる『胸デイ』なのかな？
だ、だめだ・・・　こんなこと考えちゃ・・・　うんっ。

そのまま部屋を出て廊下へ。食堂に向かうために廊下を歩いていると、

「な、な、なっ！！　何をしている！？」

廊下の端から何度も聞いたことある声が聞こえ、その人は早足でや

ってくる。
うん、箒ちゃんだ。

「あら、箒さん。　これからわたくしたち一緒に夕食ですの」

そ、そんな言い方したらなんだか勘違いしそう・・・
僕いやだよ、いっくんみたいに木刀で頭を叩かれるのだけは・・・
あれ、ちーちゃんの出席簿並に痛そうなんだもん。

「それと腕を組むのとどう関係がある!?」

「あら、春樹さんがして欲しいとおっしゃたので・・・」

「な、なんだと!?　春樹!!」

狼が獲物を狙うかのように睨む箒ちゃん。

言ってないよ!!
僕がそんなこと言うわけがないよ箒ちゃん!
それに僕そこまで女の子に飢えてないから!

「ともかく、わたくしたちはこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待て！　それなら私も同席しよう」

そう言うと僕の空いているほうの腕を取る。
そして僕を間ににらみ合う二匹の黒狼と白狼・・・
これ、僕がシャルルさんの傍にいていっくんを行かせた方がよかったんじゃあ・・・

後悔してもすでに遅かった。

エピソード14 【Active Inertial Canceller（ア

今日地震が起きましたね。
皆さん大丈夫でしょうか・・・

必要とあれば作者が春樹にＩＳを貸してもらって・・・
ってそんなわけにはいかないか

それでは本番どうぞです

エピソード14 【Active Inertial Canceller（

月曜の朝。
いつもどおりの時間に教室に向かっていた僕たちはいたるところで僕といっくんの名前が聞こえてくるのに気がついた。

「聞いた聞いた？　学年別トーナメントで優勝すると織斑君と九曜君と――――」
「え～！？　それやっぱりホントなの？」
「それうちも聞いたわ。　あの噂だと二人と――――」

とまあ、こんな感じだ。
それを聞きながら僕、いっくん、そしてシャルルさん（男装バージョン）が首をかしげながら教室へと向かう。

「なんだ？」

「いっくんと僕の名前が聞こえるような・・・」

「うん、僕も春樹と一夏の名前しか聞こえないな」

教室に到着してまず最初に目にしたのはクラスの女の子全員が固まり騒いでいる光景だった。

そしてその中心にはオルコットさんと鈴音さんがいる。
一体何事だろうか。

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなのよ？　学年別トーナメントで優勝したら――――」

「優勝したらどうなるの、鈴音さん？」

「「「きゃあああああ！？」」」

な、何？話しかけただけなのにこの反応は酷いよ・・・

「で、なんの話だったんだ？　俺と春樹の名前が出てたみたいだけど」

「う、うん？　そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

いっくんの問いかけにも答えない鈴音さんとオルコットさん、そしてその後ろではクラスの女の子が顔を縦に振り二人に賛同する。
見た感じ何か隠してます雰囲気をマックスにかもし出しているけど

あえてそこにはツッこまない。
いっくんも何も追求しなかった。

「じ、じゃあ私はクラスに戻るから」

「わ、わたくしも自分の席につきませんと」

そういいながら行動に移る二人。
その流れに乗っかって周りの女の子全員同じように自分のクラス・
または席に戻っていった。

「・・・なんなんだ？」

「「さぁ・・・？」」

いっくんの質問に僕とシャルルさんはそう答えるしかなかった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

その日の放課後、僕たちはいつも通り練習の為にアリーナに行く。
今日使えるのは第三アリーナ。
そこへ向かう為に廊下をいっくんとシャルルさんと並んで歩いていると、

「「「わぁっ！？」」」

角から急に箒ちゃんが現れ僕たち三人は同時に飛び上がる。

「・・・何をそんなに驚いている。　失礼だぞ」

「ご、ごめん箒ちゃん」

「お、おう。　すまん」

「ごめんなさい。　急に現れたからびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが・・・　まあいい、早く第三アリーナに向かうぞ。　特訓スペースを早く確保しなくては」

箒ちゃんが先導し、僕たちはその後を追う。

でも確かに今日は急いだほうが良い。
何せ、本日のアリーナの使用人数が少ないと聞いているから大きなスペースがとれれば模擬戦もできる。

僕たちがアリーナに近づくたびに何やら慌しい様子が伝わってくる。
廊下を第三アリーナに向かって走っていっている生徒が多いからだ。

「なんだろう・・・　なんだかいやな予感がするよ」

「何だ？」

「こっちで先に様子を見ていく？」

そういってシャルルさんは観客席のゲートを指差す。
確かに普通にピットに入るよりも早く様子を見ることが出来るけど・・・

「ごめん、僕はちょっと先にピット行くよ」

そういい残し、本当は走ってはいけない廊下を全速力で走りぬけピットへと向かった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ピットゲートへと到着し、どうなっているのか見てみると・・・

ドゴォンッ！　ガンッ！　ガンッ！　ドガァァンッ！

爆発音とともに地響きがやってきた。
アリーナでは今壮絶な戦いが繰り広げられている。

「鈴音さん、オルコットさん？　それに・・・」

巻き上がっている煙の中からそれを切ってるように黒い漆黒の機体が現れる。
ドイツが作った『シュヴァルツェア・レーゲン』・・・　そしてそれを駆るボーデヴィッヒさんの姿。
オルコットさんと鈴音さんはその煙から軽い損傷で現れたボーデヴィッヒさんに向かって苦い表情のまま視線を向ける。
鈴音さんとオルコットさんが何か相談をしている仕草から見て２対１の模擬戦だろう。
だが、軽い損傷の漆黒のＩＳに対し、二人のＩＳはかなり損傷が大きい。
明らかに追い込まれているのはこの二人のほうだ。

「くらえっ！！」

ジャカッと鈴音さんのＩＳ『甲龍』の両肩が開き、そこに搭載されている衝撃砲《龍砲》がボーデヴィッヒさんに向かって火を噴く。
が、それに対しボーデヴィッヒさんは回避運動を取らない。
ただ、棒立ちのまま右手を突き出し、

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

目で確認することの出来ない弾丸がボーデヴィッヒさんに向かって迫るがそれはどれだけ経っても届くことは無かった。

「あれは・・・ＡＩＣ・・・かな」

Ａｃｔｉｖｅ（アクティブ）　Ｉｎｅｒｔｉａｌ（イナーシャル）　Ｃａｎｃｅｌｌｅｒ（キャンセラー）。
略称ＡＩＣ、そして日本語訳は慣性停止結界。
すべてのＩＳはＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）により浮遊、加速、停止をしているのだがこれを発展させた形態だ。
彼女は右手を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化・・・　停止させられる。

「あそこまで完成度が高いなんて・・・」

シュヴァルツェア・レーゲンに搭載された刃が射出され、甲龍へと飛翔する。
それは本体とワイヤーで接続されている為に、複雑な軌道を描きながら、鈴音さんの右足を捕らえる。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

援護のために射撃をするオルコットさん。
ライフルでの射撃と同時にビットを展開、そして対象に向かわせる。

「ふん・・・　理論値最大稼動のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせるな」

ボーデヴィッヒさんは精密射撃とビットによる視界外攻撃の両方をかわしながら、また同じように腕を突き出す。
今度は左右同時、交差させた腕の先でオルコットさんのビットが見えない何かに捕らわれたかのように動きを止める。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな！」

オルコットさんによる狙い澄まされた狙撃が発射されるが、ボーデヴィッヒさんも大型カノンによる砲撃で相殺。
すぐさま連続射撃をしようとするオルコットさんだが、先ほど捕まえた鈴音さんをぶつけて阻害する。

「「きゃあああ！」」

二人はぶつかり、もつれ合いながら地上に落下・・・　大きな煙を上げる。
煙が晴れ、現れたのは身動きが取りにくくなっている二人だった。

「これで・・・終わりだ」

瞬時加速で地上へと移動、それから二人に近距離の砲撃を与える。
さらに煙が舞い上がるが、すぐさまその煙が吹き飛びボーデヴィッヒさんが現れる。
現れたと同時にワイヤーブレードを射出してオルコットさんをたぐり寄せた。
そしてそこから始まったのは一方的な暴力。

「きゃあああああっ！！」

体のいたるところ・・・　全身にボーデヴィッヒさんは自分の拳を

叩き込む。
シールドエネルギーはあっという間に削られ、機体維持警告（レッドゾーン）を超えて操縦者危険域（デッド・ゾーン）へと達する。
これ以上ダメージを負った場合、ＩＳが解除され・・・
だがボーデヴィッヒさんはその拳を止めることはなかった。
ただ黙々とオルコットさんを殴り、蹴り、アーマーを次々に壊していく。

ザァァァ・・・

僕の頭の中で何かが砂のように消えていくのがわかった。
この感じ・・・　あの無人ＩＳが現れていっくんを吹き飛ばしたときと同じ感覚・・

「唐梅・・・」

首からチェーンに通してぶら下げてあるリングが光り、唐梅を展開、そして《白鷺》を構築してボーデヴィッヒさんに突っ込む。

「おおおおおっ！」

怒声と共にアリーナを取り囲んでいるバリアーが消滅し、飛び込んできたのは白式を展開したいっくんだった。
その手には《雪片弐型》があり、『零落白夜』が発動している。

僕といっくんは瞬時加速を行い、ボーデヴィッヒさんの元へと向かう。

「その手を離せ！！」

「前にも言ったよね・・・　これで3度目だよ・・・」

僕は二刀の《白鷺》による斬撃、いっくんは零落白夜が発動している状態の《雪片弐型》を振り下ろす。

「ふん・・・　感情的で直線的・・・　貴様らはやはり愚図だ」

「な、なんだ!?　くそっ、体がっ・・・」

ＡＩＣか・・・
だけど・・・

「・・・」

またボーデヴィッヒさんは右手を突き出しＡＩＣを発動し、いっくんのエネルギー刃が届くその寸前で、動きが止まる。
だけど僕は無言のまま一度瞬時移動を停止、スラスター全開で彼女

の視界外へと移動し斬撃を繰り出そうとするが、

「ふんっ・・・」

鼻を鳴らし、ＡＩＣの範囲を広げられた所為で僕の動きも止められてしまう。

「邪魔だね本当に・・・」

完成度がここまで高いＡＩＣを搭載していると、こんなに苦戦するなんて。

「やはり敵ではないな。　この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様らも有象無象の一つでしかない。　――――消えろ」

シュヴァルツェア・レーゲンの肩の大型カノンが回転し、僕でなくいっくんへと砲口を向ける。
無理やりにでも体を動かそうとするが、ビクともしない。

「一夏っ、春樹っ、離れて！！」

シャルルさんからプライベートチャンネルが開き、同時に空から二

丁のアサルトライフルによる弾丸の雨が降り注ぐ。

「ちっ・・・　雑魚がわらわらと・・・」

「いっくん！！」

「わかってる！」

目に見えない力が解ると同時に拘束されている体の自由が戻ってくる。
僕は地上で横たわっている鈴音さん、そしていっくんはボーデヴィッヒさんが話したオルコットさんを救出、後退する。

「ふたりは！？」

カバーにシャルルさんが入り、ボーデヴィッヒさんに射撃を続けながら聞いてくる。
連射性能が高いアサルトライフル、さらにシャルルさんの高速武装切り替えのお陰で玉切れを起こしても即、銃を切り替えそして再度攻撃、それを繰り返す。

「は、春樹・・・」

「鈴音さん、話はあと。　今はしゃべらないで」

「い、一夏さん・・・　無様な姿をお見せしましたわね」

「セシリアもしゃべるな。・・・　シャルル大丈夫だ。二人とも意識はある」

「よかった」

わずかに安堵を見せるシャルルさんだが、銃による攻撃は止む事が無い。
何度も武器を切り替えているが、銃弾はずっとボーデヴィッヒさんに降り注いでいた。

「面白い、世代差というものをみせつけてやろう」

今まで足を止めていたボーデヴィッヒさんが銃弾の雨を避け、反撃に移ろうとする。

ここで反撃されたら流石にまずい。
鈴音さんとオルコットさんの二人で抑えきれなかったのをシャルルさんだけだと・・・

僕は鈴音さんをいっくんに渡し、《白鷺》をまた構築、戦闘態勢に入る。

「「春樹!?」」

「ここは僕が抑える」

「ふん、行くぞ・・・」

僕は二刀の《白鷺》を連結、そして『雪消月』を発動させる。

ヴゥゥン

紅蓮の光を連結した刀が帯び、通常よりも二倍ほどの長さの刀に変貌する。

そしてボーデヴィッヒさんがまさに飛び出そうとしてきたその瞬間、間に影が割り入ってきた。

ガギィンッ!

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、ボーデヴィッヒさんはその影に加速することを中断させられる。

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。　九曜、お前も面倒になる前に本気を出せ」

「千冬姉！？」

その影は、ちーちゃんだった。
しかもその姿は普段と同じスーツ姿で、ＩＳどころかＩＳスーツさえ装着していないのが驚きだ。
そしてさらに驚くことはその手に持っているのは刀なのだが、普通の刀ではない。
ＩＳ用近接ブレードであり、１メートル強ある長大なそれをＩＳの助けなしで軽々と扱っている。

「ごめんちーちゃん。　ちょっと色々余裕無かったんだ」

「ふんっ、まあいい。　模擬戦をやるのは構わん。　が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。　聞いてるか馬鹿者」

あ、あははと後ろで苦笑いをするいっくんに鋭い視線を送るちーちゃん。

「この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直にうなずいて、ボーデヴィッヒさんはＩＳの武装状態を解除する

「織斑、九曜、デュノア、お前たちもそれでいいな」

「あ、ああ」

「望むところだね」

「僕もそれで構いません」

僕もうなずくと同時に唐梅を解除し、じかに足を地面につける。
そしてボーデヴィッヒさんに威圧を目線で送るが、それを無視してテケテケとその場を後にした。

二人の代表候補生相手に圧勝する実力を持つボーデヴィッヒさんと反則的に面倒なＡＩＣ・・・
今の状態の唐梅でどこまでやっていけるか・・・　いろいろ対策を練る必要があるみたいだね。

エピソード１５　【３ｏｎ３始まる】（前書き）

日本で地震が起こって大変な被害になりました。
どうか・・・どうか、自分の小説で読んで気が紛れてもらえれば・・・

今回はいよいよトーナメント開催です。
原作では２対２のところをオリジナルに変更して『３対３』にしてみました。

そして対戦相手に意外な人が・・・？

それでは本編にＤｉｖｅ　ＩＮ！

エピソード15　【3on3始まる】

時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していて、今保健室にいる。
ベッドの上では怪我を負って包帯を巻いている鈴音さんとオルコットさんが不機嫌な顔をしながら視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に・・・助けてくれなくてよかったのに・・・」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

いやいや、あんなに一方的にやられてたのにそれはどうかと・・・

「お前らなあ・・・　はぁ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

ＩＳの生命維持装置のおかげで打撲程度で済んだのが不幸中の幸いだった。
もしあのままデッドゾーンを越えてＩＳが解除されていたら今頃、鈴音さんとオルコットさんは名も亡き人となっていたかもしれない。

「本当だよ二人とも。　僕かなり心配したんだから」

「こんなの怪我のうちに入らないわよ！　いたたたたっ」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味・・・　つうっ・・・」

無理やりベッドから起き上がろうとする二人は少しでも体を動かしただけで痛がりだし、またベッドに体を預けるさまになっている。その姿を見て思わず苦笑いをしてしまい、いっくんなんて隣でため息をついている。

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

「シャルルくん、好きな人って？」

シャルルくん・・・いや性格にはシャルルさんなのだが、何本もの飲み物を両手で抱えてやってきた。

それにしても、部屋に入るときに言ってた好きな人ってどういう意味なんだろうか。

この二人いっくんのことが好きなのかな？

「なななな何を言っているのか、全っ然っわかんないわね！」

「だだだだ誰も好きな人だなんて言ってませんわっ！」

二人とも顔を赤くしながらまたベッドから体を起こす。

うん？　体の痛みはどこに行ったんだろうか。

「はい、ウーロン茶と紅茶。　とりあえず飲んで落ち着いて、ねっ？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましょうっ！」

それを受け取った二人は、ペットボトルに口をつけて一気にごくごくと飲み始める。

ちなみに激しい運動をした後に体を急激に冷やすのは良くないからみんなはやったらだめだよ？　うん。

「落ち着いたら帰ってもいいって先生が言ってたから、とりあえず今は体を休めーーーー」

ドドドドッ！！

僕が話している途中に突然大きな音が・・・
なんだろうこのゾウか何かの大群が一斉に迫ってきているような音は・・・

「な、なんだ？　何の音だ？」

いっくんがその音が聞こえてくる方面に視線を移す。
廊下からこの地響きみたいな音が聞こえてきているみたいだ。
しかもさっきも言ったように、迫ってきているような・・・

ドッガァァァン！！

保健室のバリケート（ただのドア）が破られ、敵ＩＳ（同学年の女の子たち）が突撃してきた。
ドア大丈夫なのかな？　破られたと言うより、吹き飛んで行ってそれをいっくんがうまいこと避けてたんだけど・・・

「織斑君！」

「九曜君！」

「デュノア君！」

侵入してきたくらいならまだいいんだけど、ただの侵入じゃなかった。
雪山を登山中に突然雪崩が発生したみたいな感じで、女の子たちがなだれ込んできた。
そしてあっという間に広かった保健室が女の子たちで埋め尽くされる。

「ち、ちょっとみんな落ち着いて？　ねっ？　ねっ？」

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな・・・」

「「「「これっ！！」」」」

一体どうなっているのか状況がつかめない中、バンッ！　と　一斉に取り出してきたのは一枚の紙。

「え、え～と・・・　なになに？　『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うために、三人一組での参加

を必須とする。　なお、ペアが出来なかった者は抽選により・・・」

「と言うことで私と組もう、九曜君!!」

学園の緊急告知文が書かれた紙を声を出して呼んでいる最中に、一斉に僕の目の前に手が伸びてきた。
いっくんとシャルルさんを確認できないけど、きっと僕と同じような状況に追い込まれているに違いない。

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

どこからかそんな声が聞こえてくるところから察するにやっぱり僕と同じ状況みたいだ。
それにしてもなんで急に仕様変更があったんだろう。

「う、う〜んとね・・・　あははは。　ごめん実は僕いっくんとシャルルくんとチーム組む約束しちゃってて・・・　ごめんね?」

たった今そう決めた。
みんなには流石に申し訳ないけど、シャルルさんが女の子ってばれる可能性もある。

僕の声を聞いてなのか、いっくん、そしてシャルルさんも僕と同じような説明をみんなにする。
すると、

「まあ、そういうことなら・・・」
「他の女子と組まれるよりはいいし・・・」
「お、男が三人・・・　えへへへへ」

みんなとりあえず納得してくれたみたいで、各々が仕方ないかと口にしながら、一人また一人と保健室を去っていく。

「良かった・・・　とりあえずあの場は凌げた・・・」

「ナイスアイデアだ春樹」

「あ、あの、春樹――」

「「春樹っ（春樹さんっ）！」」

シャルルさんが何かを話しかけたところで鈴音さんとオルコットさんがベッドから飛び出してきた。
いや、だから今日は安静にしてないと・・・

「ペ、ペアは私と一夏、後はアンタの予定だったのにっ！」

「ち、違いますわっ！　春樹さんと一夏さんはわたくしと――――――」

「お、おいおい二人とも、怪我人なんだから落ち着けって・・・」

「「一夏は黙っててくださいなっ）！！」」

うわ～・・・
いっくん可愛そう・・・
しかし、この二人にはどうやって説明したものか。

「駄目ですよ」

突然の声。
その持ち主は我がクラスの副担任、山田先生だった。

「おふたりのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ」

ダメージレベルC・・・
ＩＳは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させるんだ。
だけどその蓄積経験には損傷時の稼動も含まれていて、ＩＳのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築し、それは逆に稼動の際に悪影響を及ぼす可能性がでてくる。
つまりは今は修理を第一優先事項としないと、後々大事なＩＳに支障を及ぼすからだめということだ。

そのことを理解している鈴音さんとオルコットさんはしぶしぶ先生の言うことに納得し潔く引き下がった。

「しかし、何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

話がまとまったところでいっくんが、二人に質問する。
『なぜ、ボーデヴィッヒさんと戦闘』をするハメになったのか・・・
何せ僕たちがアリーナに向かっている最中に戦闘になったみたいだから、何があったのかその辺をまったくしらない。

「え、いや、それは・・・」

「ま、まあ、なんと言いますか・・・　女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

僕といっくんは何のことかさっぱり理解できず、眉間にしわを寄せながら首をかしげる。

「ああ、もしかして一夏と春樹のことを――――」

「あああっ！　デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！　まったくです！！」

またもやベッドから飛び出してシャルルさんの口元を抑える。
だから、安静にしてないと・・・って何度言ってもこの二人は聞かなそうだな～・・・

しかし、3オン3か・・・
1オン1より戦略が広がるけど、同時に一人を倒すのにも相当のプレッシャーを与える必要がある。
僕、いっくん、シャルルさんだと、ポジション的には僕といっくんが前衛でアタッカー、シャルルさんが後衛からの支援になるんだろうな～。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

そして、ついに六月の最終週。
ＩＳ学園は学年別トーナメント一色と変わっていた。
全生徒が雑務や会場の整理、そして来賓の誘導を行っていてとても忙しかったが、それから開放されると同時に生徒は急いで更衣室へと走る。
きっと女の子たちの更衣室は今頃大混雑してるだろう。
一方男子組はその逆でめちゃくちゃ広い更衣室を三人占めの状況。
う～ん、なんて贅沢なんだろう。

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

いっくんが感嘆の声をもらす。
更衣室のモニターから観客席の様子を確認することができるんだけど、そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々のすごい人たちが特別席に着席している。

「ちーちゃんに聞いたんだけど、三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認――」

「一年はあんまり関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

僕とシャルルさんが交互にいっくんに説明する。

だけどいっくんは何やら別のことに意識が言っているみたいだった。

「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦だけが気になる？　春樹は大分落ち着いているみたいだけど」

「まあ、な」

「今はね。　でも本番はどうかわからないけど、あははは」

「感情的にならないでね。　彼女はおそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

最強・・・か。
確かにもしかしたら『シングル』だけなら最強かもしれない。
だけど今回は『チーム戦の３オン３』。
単独行動でどうにかなるわけじゃない。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。
そして僕たちは表示される文字を食い入るように見つめる。
僕たちのは一年の部、Ａブロックの一回戦一組目・・・
つまり本当に一番最初に試合を行う。

「「「――――――え・・・？」」」

出てきた文字を見て、僕たちはぽかんとした声を挙げた。
一回戦目の対戦相手・・・　それは箒ちゃん、のほほんさん、そしてあのボーデヴィッヒさんだったのだ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「一回戦目で当たるなんてね。　好都合だったよボーデヴィッヒさん」

「ふんっ、それは私のセリフだ」

「そりゃあなによりだ。　俺も今、春樹と同じ気持ちだぜ」

彼女が正面にたった瞬間僕はすでに少しだけ熱くなっていた。
だめだ、だめだ・・・
一回気持ちを落ち着けよう。
何度も自分を言い聞かせ、高ぶり始めそうだった気持ちを落ち着か

せる。

試合開始まであと5秒。　4，3，2，1――――――スタート。

「「叩きのめす」」

いっくんとボーデヴィッヒさんの声がシンクロし、いっくんが同時に瞬時加速を行い彼女に向かう。

「シャルルくん、いっくんが突っ込んだよ！　援護射撃は任せるね。僕は箒ちゃんとのほほんさんの方を」

「了解！」

僕は瞬時加速し、打鉄を纏った箒ちゃんとのほほんさんの方へと向かう。

白鷺を構築し、二人に襲い掛かる。

「くっ・・・　春樹っ！！」

「うわ～～、くーよがきたよ～！！」

僕の接近に慌て始めるのほほんさんだったが、その一方で冷静に箒ちゃんが対応してくる。
互いの近接ブレードが交差し、火花を散らす。

「流石だね箒ちゃん」

「ふっ・・・　この程度のこと」

そのまま刀を振るうけどやっぱり刀の技能は全国大会で優勝しただけあって箒ちゃんの方が上で、僕が押され始める。
この状況を打破するしかないと思い、ウエストの両サイドに装備してあるレール砲、紅蓮雷撃を放つが、

「くーよ、私もいるんだよ～」

「なっ！？」

防御型に特化されているＩＳ、打鉄の証明と言えるべき実体シールドを展開し、砲撃を間に入ってきたのほほんさんが防ぐ。
うっ・・・　テンパっていたさっきの状況から見て動けないと思っていたのがまずかった。

「隙ありっ！！」

「とりゃぁ！」

二人の斬撃が振り下ろされるが、それを連結させた白鷺で受け流す。
のほほんさんはバランスを崩すが、箒ちゃんの場合やはり剣道全国優勝者だけあってこれくらいじゃあバランスを崩さなかった、――が、

「ほら、箒ちゃんも！」

「何っ！？」

彼女の足を掴み無理やりにでもバランスを崩させる。
そして崩れたと同時に背後から紅蓮雷撃を放つ。

ドガァン、ドガァン

一人一発づつ砲撃を直撃させた。
これでしばらくは動けないはず。

一夏Ｓｉｄｅ

試合開始と共に瞬時加速を行う。この先手が通れしてこの試合の流れを一気にこっちに向けるためだ。

「おおおおおっ！」

「ふん・・・」

ラウラはあのときのように右手を突き出す。

来る・・・　ＡＩＣが！

前に春樹、箒、鈴、セシリア、シャルルでこのＡＩＣの対策を練ろうとしたが結局破る方法が思いつかなかった。

と言うわけで結論！　――意外性で攻める！

「くっ・・・」

しかしその程度の戦略でどうこうなるわけがなく、俺の体は腕を始め、体全体がＡＩＣの網に捕まる。

何をやろうとしてもビクとも動かなく、まるで見えない何本の腕に

体をがっちりとつかまれているようだ。

「開幕直後の先制攻撃か。　わかりやすいな」

「・・・そりゃあどうも。　以心伝心で何よりだ」

「ならば次に私がどうするかわかるだろう」

わかりたくないけどな・・・

ガキンッ！

シュヴァルツェア・レーゲンの肩に搭載されている巨大なリボルバーの回転音が響くと同時に白式のハイパーセンサーが警告音を鳴らす。

――――――警告！　敵ＩＳの大型レールカノンの安全装置解除を確認、初弾装填――――　ロックオンを確認、警告、警告

わかってる。

俺は試合開始前に春樹に言われた言葉を思い出す。

『これはチーム戦。　勝負の分かれ目は自分のチームメイトをどれだけ信頼できるか。　僕はみんなを信じる、だからみんなも信じて。ねっ？』

そうこれはチーム戦なんだ。
1対1じゃないんだよ。――――――だろ？　シャルル。

「させないよ」

シャルルが俺の頭上を飛び越え、同時に六一口径アサルトカノン《ガルム》による爆破弾をラウラに浴びせた。

「ちっ・・・」

俺に照準を合わせていたカノンが射撃によりずらされ、放たれた砲弾は明後日のほうへと飛んでいく。
そしてシャルルは連続射撃を行い、ラウラを後退させる。

「大丈夫、一夏？」

「おう、何とかな。　春樹は？」

「春樹なら、ほら」

シャルルが視線を向けるほうを見てみると春樹が箒とのほほんさん相手に攻撃を加えていた。

それにしてもあの箒と刀でやりあうなんて、なかなかやるな春樹。
だが余所見をしている俺が甘かった。

「余所見をしている余裕があるのか？」

ラウラからワイヤーブレードが俺とシャルルの足に伸びてきて捕獲される。

「うわっ！！」

「一夏っ！　あっ！！」

俺とシャルルは足を引っ張らた所為で転倒、そしてずるずると引っ張られる。
流石にまずいと思った俺たちは、ワイヤーに攻撃を加えようとするが新たにワイヤーが俺たちの体に巻きつき腕が動かせなくなる。
万事休すかっ・・・

ドガァァァァン

ラウラが立っていたところに黒煙が舞い上がり、同時にワイヤーから開放される。

「大丈夫いっくん、シャルルくん？」

「「春樹っ！」」

危機一髪のところ春樹が救出してくれた。
箒とのほほんさんは地面で這い蹲り、起き上がるのに時間が掛かっている。

「ごめん、箒ちゃんが手ごわくて」

「俺は信じてたぜ。春樹」

「うんっ！　僕もだよ春樹」

「よしっ・・・　これからが本番だね」

俺たちは春樹の声と共に頷いた。

エピソード１６　【勝利の女神は誰に微笑む？】（前書き）

ついにここまで・・・
今回は視点変更が多めです。

それでは本編へ　Ｄｉｖｅ　ＩＮ！

エピソード１６　【勝利の女神は誰に微笑む？】

春樹Ｓｉｄｅ

「シャルルくん予定通りよろしくっ！」

「うん、わかった！」

後衛で支援だけだったシャルルさんが両手に銃を装備し、ボーデヴィッヒさんに対し攻撃を仕掛けに行く。
銃を構えて発砲しようとしたときだった。

「まだ私は終わってないぞ！」

「やられてないんだよ～」

さっきまで身動きが取りにくくなっていたはずの箒ちゃんとのほほんさんが間に割って入った。
二人とも近接ブレードを構えていて徹底交戦をする気満々でいる。
予想より少し復帰が早かったけど、仕方が無い。

「んじゃ行ってくるぜ春樹」

「それじゃあ僕は・・・っと」

いっくんは瞬時加速する。それも移動先はシャルルくんの背中だ。
それに対して僕は二刀の白鷺を連結、そして弓バージョンへと移行させる。
そして紅蓮の光の矢を出現させ、『ある』タイミングを待つ。

「シャルル！」

いっくんが背中にぶつかる瞬間、シャルルさんは空中へ宙返りをしてお互いの場所を入れ替えた。

春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏Ｓｉｄｅ

お互いの場所を入れ替え、

ガキンッ！

俺　ＶＳ　箒アンドのほほんさん　で互いの近接ブレードがぶつかり合う。
だがやはり１対２、それも相手の一人は箒だから流石に無理がある・・・が。

「これで終わりだ」

「何？　っ！？」

「うわっ！」

俺がそう二人に言い、急に姿勢を低くすると同時に後ろから春樹の援護が入った。
２本の紅蓮の矢・・・
それが箒とのほほんさんに直撃し、シールドエネルギーが削られる。
そしてこの一閃が決まれば二人はっ！！

雪片弐型を強く握りしめ怯んだ二人に、最後の一撃を与えようとするが、ふっと突然目の前にいた筈の箒とのほほんさんが消えた。

何が・・・起きたんだ？

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。ワイヤーブレードが二人の足へとつながっていて、遠心力でアリーナの脇まで投げ飛ばしてた。くっ・・・もう少しで一気に二人を倒せてたのに。

「なっ、何をする！」

「視界がぐるんぐるんしてるよ～！？」

あの二人の様子からするにラウラが助けたとは言い難い。どうやら本当に邪魔だったようだ。
ってこんなこと考えてる場合じゃない！

ラウラはプラズマ手刀を展開し、左右から連続で斬りかかってくる。それを斬撃と突撃を駆使して応戦するが、流石はおそらく1年最強・・・　あっという間に俺が不利になり始めた。

「一夏！」

シャルルは援護のために六二口径連装ショットガン《ライン・オブ・サタディ》二丁、それを使いラウラのサイドから近距離の射撃をするが、それもあっさりと回避されてしまう。

『いっくん、シャルルくん！　すぐにサポートに入るから待ってて！』

春樹からプライベート・チャンネルを通して通信がきた。

『いや、いい。　このままあの作戦で行こう』

『春樹、僕と一夏がここを出来るだけ長く持たせるから・・・　早く帰ってきてね』

『・・・わかった。　やられちゃだめだよ！！』

春樹はしぶしぶ了承すると、チャンネルを切った。

頼むぞ春樹。

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

僕は通信を切った後に目指したのは、アリーナ脇に投げ飛ばされたあの二人。
今の状況から考えるに、確実に勝つにはまず3対3の状態から3対1まで持っていくしかない。
箒ちゃんとのほほんさんはなんだかんだ言って途中で戦闘に割り込んできているので、予想外の事態が起こりやすい。

「と言うわけだから、すぐに終わらせてもらうからね二人とも」

「やれるものならな・・・」

「まっけないよ～、くーよ」

早くしないといけない・・・
二人が・・・いっくんとシャルルさんが待っているからね。
だから、今回ばかりは本気を出させてもらうよ。

「「はぁぁぁぁぁぁ」」

箒ちゃんとのほほんさんは声を合わせ向かってきた。
僕は白鷺の連結を解き、両手にそれを装備し構える。
そして、目を閉じた。

落ち着いて、気配だけ・・・　二人の気配だけを・・・

気持ちを落ち着かせ、周囲の気配だけを探ろうと試みるが、ここはアリーナ・・・
よって大人数の気配が感じ取れてしまう。

必要なのは箒ちゃんとのほほんさんだけ。

意識を研ぎ澄ませ、二人だけの気配を感じ取ろうとする。

ふと、現れた二人の気配。
目を閉じながらでもわかる。
こっちにどんどんと近づいてきているのが・・・

まだ・・・もうちょっと接近させてから・・・　ここだっ！！

カッ！と目を開かせ、スラスター全開。

「これで――――――終わり！　だよっ？」

僕は真横に振られた二人の近接ブレードをスラスターを全開にしたスライディングで回避する。
そしてすれ違う瞬間に二人の体に一閃ずつ白鷺で斬撃を加えた。

ヒュウウウ・・・　ガシンッ、ガシンッ

背後からＩＳが停止した音が聞こえる。
一応念のためにハイパーセンサーで完璧に停止したかどうか確認したけど、完璧に機能が停止してるみたいだ。

「くっ・・・」

「あ～・・・　負けちゃった。　くーよ、手加減してよ～」

「あははは、ごめんね。　でもいっくんとシャルルくんが待ってるから」

二人にそういい残し大急ぎで、僕が戻ってくることを信じて戦ってくれている人のところへと戻る。

春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏Ｓｉｄｅ

「・・・そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除する。――――――――これは・・・まずい！！
シャルルも何かを感じ取ったかのように一度後退しようとするが、
その刹那、俺たちの体は何かに捕らわれたかのように止まった。
いや、実際に捕らわれたんだ。
ラウラは両手を交差して、その手のひらを向けている。
十八番である、ＡＩＣだ。

「くそっ！！」

「くっ・・・　本当に体が」

「では――――消え失せろ」

６つのワイヤーブレードが一斉に射出、軌道を読むことが困難な移動をしながら次々に俺とシャルル目掛けて突き進んでくる。

「くそおおおおお！！」

悔しさのあまりに叫ぶが、その叫びもむなしくワイヤーブレードにより俺たちは全身を切り刻まれる。
ＩＳの装甲と共にシールドエネルギーまで半分近く失った。
さらにラウラは俺の両手、そしてシャルルの両足を拘束、そのまま地面に俺たちを叩きつけた。

「「がはっ！」」

衝撃が背中からつきぬけ、一瞬にして肺の中の酸素が全部外に出て行く。

「ふん・・・とどめだ」

歯を食いしばりながらラウラの位置を確認すると、いつの間にか目の前にいた。
ラウラの大型レールカノンの砲口が俺とシャルルの目の前に置かれ、照準をあわせ終えたところだった。

キィィィィィン・・・　ドガァァァァン

突然の金属がこすれあう音の後に爆発音。
目を閉じていた俺はすぐさま目を開き状況を確認する。

「さっきのは流石に危なかったぞ、春樹」

「もうだめかと思ったよ」

「あははは、ごめん」

そう春樹がラウラが放った砲弾を真っ二つに斬っていたのだ。
そして春樹は俺とシャルルを拘束していたワイヤーを刀で切断、一度その場を離脱する。

「箒とのほほんさんは？」

「真っ二つ！　ブイブイッ」

ま、真っ二つ！？
そう言ってＶ字型にした指を向けている先を見ると箒とのほほんさんがシールドエネルギー残量０、ＩＳの各部損傷でひざをついてた。

箒なんて何だがぶつくさ春樹に向かって文句を言っているように見える。

「これで予定通りだね、３対１。　僕らの練習成果を見せるときだよ、一夏、春樹」

「「おう（うん）」」

一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春樹Ｓｉｄｅ

ワァァァァァァ

いっくんが零落白夜、僕が雪消月を発動し会場が一気に盛り上がる。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・・・　あたらなければ問題ない」

ボーデヴィッヒさんのＡＩＣによる拘束攻撃が僕らを襲うが、加速、

急停止、反転などを繰り返し使いかわす。

「ちょろちょろと目障りな・・・」

「なら僕が行ってあげるよ」

ＡＩＣから避けることをやめて、フェイントをかけながらボーデヴィッヒさんに接近する。

「ふん、そうこないとな」

ワイヤーブレードが射出されて、僕のほうに向かってくるがそれを何とか白鷺で全部防ぐ。
だけどこの防ぐときに一度足を止めたのが不味かった。
足を止めた所為でＡＩＣに捕まり身動きが取れなくなる。

「しまった！　体が！！」

「春樹っ！　うおおおおお」

いっくんが僕を助けるために瞬時加速で助けに来るように見せかけて・・・

「なんてな・・・　シャルル！」

ドガガガガガッ・・・！

シャルルさんが僕を遠距離からの援護射撃で助ける。
それと同時にＡＩＣの拘束から解かれた。

「くっ・・・貴様ら」

ボーデヴィッヒさんのＡＩＣの弱点、それは停止させる対象物に意識を集中してないと効果を維持できない。
現に拘束していた僕の体はシャルルさんの射撃により集中力が削がれ、開放された。

「まだ終わってないよ！」

シャルルさんは高速で武器をショットガン《レイン・オブ・サタディ》に変更。
しかしシャルルさんはやっぱりすごい。
射撃の印象が強いけど、格闘も人並み以上にこなし、そしてそこへ『高速切替（ラピッド・スイッチ）』で武器の切り替えが早いんだからすごいというほか無い。

さらにシャルルさんはここで新しい能力を披露した。
これはいつもいっしょに練習していた、僕やいっくんですら見たことが無かった。

「なっ!?　瞬時加速だと!」

初めてボーデヴィッヒさんの表情がゆがむ。
なんせ事前のデータにもなかったんだから当たり前と言えば当たり前だろう。
僕といっくんだった知らなかったんだしね。

「初めて使ったからね」

「なに・・・　まさか・・・この戦いで覚えたというのか!?」

シャルルさんがゼロ距離でボーデヴィッヒさんにショットガンを構える。

「すごいね、シャルルくん。　本当に驚かされるよ」

僕もボーデヴィッヒさんの後ろからレール砲《紅蓮雷撃》の照準を合わせる。

「いっくん、準備は～？」

「出来てるぜ！　いつでも来い！」

僕らの遥か上空に、いっくんが待機。
理由は・・・ホームランを一発かますためだ。

ドガンドガンドガンッ！

いっくんの準備できてる宣言と同時に僕とシャルルくんは一斉に発射し、至近距離から全弾直撃させる。
そのあまりに強い威力の所為でボーデヴィッヒさんは空へ・・・
もちろんその方向はいっくんがいる方だ。
いっくんは大きく雪片弐型を構えて、飛んでくるボーデヴィッヒさんに向かって全力でそれを振るう。
零落白夜も発動させているためにその威力は絶大。

ガンッ！

ボーデヴィッヒさんはいっくんというバットに打たれたせいで、そのままアリーナの壁に直撃。
彼女の体はその壁に叩きつけられ、ごっそりとシールドエネルギーが減らされる。

だけど、序盤にまともにダメージをもらっていなかった所為でまだシールドエネルギーが残っていた。

「ぐううう・・・」

フラフラになりながらでも立ち上がるが、そこに待っていたのはオレンジ色のＩＳ・・・『ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ』つまりはシャルルさんだ。

「この距離なら外さない」

リヴァイヴの盾の装甲がはじけ飛び、中から出てきたのはリボルバーと杭が融合した兵器・・・

そう今までシャルルさんは隠していたんだ、その盾の中にね。

六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレースケール）》。通称・・・

「《盾殺し（シールドピアース）》だと・・・」

ラウラの表情に苦し紛れの焦りが見え始める。

「くそがぁぁぁぁぁ！！」

「おおおおおっ！」

シャルルさんは左手の拳を強く強く握り締め、叩き込むように突き出す。

ＡＩＣでピンポイントでパイルバンカーを静止させなければ、直撃、そして負け確定である。

「！！」

ボーデヴィッヒさんは目を集中させ一点に狙いを定めるが・・・外した。

ズガンッ！

腹部に、パイルバンカーによる一撃が叩き込まれ、ボーデヴィッヒさんの体ががくんと大きく跳ねる。

残り少ないＩＳのシールドエネルギーが稼動よりも絶対防御の方に働くが、さすがに無理があった。

第二世代型最強と謳われた装備　《シールドピアース》には残量エネルギーが少ない状態で、もつはずが無い。

案の定立て続けに2発連続打ち込まれた時点で、ＩＳ強制解除の兆候を見せ始める。

「終わりだね・・・」

そう勝利を確信した僕だったけど・・・　次の瞬間に、異変が起きた。

エピソード17　【ＶＴ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｃｔｉｖｅ　（ＶＴシステム　アクティブ）】

ついにあれが・・・始動しました。
そして明かされるラウラの過去。
原作を知っている人は、もう知ってますよね？

それでは本編へＤｉｖｅ　ＩＮ

エピソード17　【ＶＴ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｃｔｉｖｅ　（ＶＴシステム　アクティブ）】

～ラウラＳｉｄｅ～

（こ、こんな・・・・　こんなところで私は負けるのか・・・）

ドガンッドガンッ！

懐に《盾殺し（シールドアース）》のパイルバンカーが直撃する。
確かに相手の力を見誤った。それは紛れもない事実であり、私のミスだ。
しかし・・・　しかし、それでも・・・

（負けられない・・・負けるわけにはいかない！）

私はラウラ・ボーデヴィッヒ。　それは私の名前であり、識別上の記号。
一番最初につけられた記号は、　――――遺伝子強化試験体Ｃ－００３７。
人口合成された遺伝子から作られ、そして『鉄の子宮』から生まれた。

――――常に・・・常に私は暗い闇の中だった。

生まれてから学んだもの、それは戦闘訓練のみ。
どのように人体を攻撃するか、敵軍に対しどのようにダメージを与えれるかという戦略知識。
格闘、銃の扱い、各種兵器の操縦方法を体得した。
そして私は優秀であった。常に最高レベルの記録を出し続け、本当に私は優秀だった。
そう、これが私・・・　私の、生まれてきた理由であると共に存在理由。

しかし世界最強兵器　――――――――ＩＳにより世界は一変してしまった。
適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれてしまったのだ。
『ヴォーダン・オージェ』、それはＩＳにも搭載されているハイパーセンサーを人間に取り込んだようなもの。
その擬似ハイパーセンサーにより、脳へと伝達される視覚信号の爆発的な速度上昇と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした。
肉眼へのナノマシン移植処理でこのような力を得ることができ、そしてこの処理を施した目のことを『越界の瞳（ヴォーダン　オージェ）』と呼ぶ。

理論上ではこれを施すことに危険性やリスクはまったくなく、不適合も起きない　――――――――はず、だった・・・

この処理により私の左目は金色へと変色し、常にそれを起動状態の

ままオフにできない、つまりは制御不能状態に陥ってしまった。
この所為で私は所属していた部隊の中でもＩＳ訓練にて遅れを取ることになってしまったのだ。
常にトップでい続けていた私はその座から転落していき、待っていたのは嘲笑、侮蔑、そして『出来損ない』という烙印の象徴となってしまった。

世界はその一つの出来事で一変してしまった。　闇の中にいた私は、さらに深い・・・深い闇の中をただ突き進むだけだった。

しかしある日、そんな暗い闇の中でも一筋の光が差し込んだ。
その光、教官との・・・織斑千冬と私の出会いだった。

「なに心配するな。　一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。
なんせ私が教えるのだからな」

その言葉に半信半疑だったが、偽りではなかった。
特別な訓練もなく、ただただあの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨することができた。

そしてそれから私はあの人に憧れという感情を抱くようになった。
それも普通の憧れでなく、強烈に・・・そして深く・・・
その強さに、凛々しさに、堂々とした様。　そして自らを信じる姿に・・・

――――いつの日か、私もこうなりたい。

そう思った私は、教官が帰国するまでの半年間の間に時間を作り訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば教官のように強くなれますか？」

その時――――そうその時だった。　鬼のような厳しさをもつ教官が、やさしい笑みを浮かべたのだ。

「私には弟がいる」

「弟・・・ですか？」

「ああ、あいつを見ているとわかるときがある。　強さとはどういうものなのか・・・」

「・・・私にはよくわかりません」

「今はそれでもいいさ。　いつか日本に来ることが会ったら会ってみるといい。　ただ忠告しておくぞ――――――」

教官は優しい笑みを浮かべつつどこか恥ずかしそうな表情を浮かべる。

（違う・・・　違う・・・　私が憧れるあなたではない。　強く、凛々しく、そして堂々としているのがあなたなのに。　こんな・・・　こんな・・・）

だから――――――許すことが出来なかったのだ。　教官をそのような表情に変える弟という存在が。
だから認めない、認れるはずがない、いや・・・　認めるわけにはいかない。

（敗北させる・・・そう、決めたのだ。　あの男を・・・完膚なきまでに）

ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、あれは、まだ動いているのだぞ。

（力が・・・力が・・・）

『・・・願うか？　汝、自らの変革を望むか・・・？　より強い力を欲するか？』

私の中でうごめく何かがそう言った。

変革？　言うまでもなかろう。　力が、あの男を潰せる力が得れるのなら・・・　私は・・・　私のすべてをくれてやる！！

力を・・・最強を、あの男を叩きのめすほどの唯一無二の絶対的力を――――――よこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ　・・・・Ｄ
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　・・・・Ｕｐｌｉｆｔ
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｉｔｉｏｎ　・・・・Ｃｌｅａｒ

Ｅｘｐａｎｄｉｎｇ　Ｆｏｌｄｅｒ　・・・・Ｆｉｎｉｓｈｅｄ

Ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｕｐ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　Ｓｙｓｔｅｍ・・・
Ｎａｍｅ　《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》　・・・・　Ｂｏｏｔ・・・

～ラウラＳｉｄｅ　ｏｕｔ～

「あああああああっ！！！」

突然のボーデヴィッヒさんによる悲痛の叫びがアリーナ全体を覆う。
そして彼女のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃がほと走り始める。
ゼロ距離でパイルバンカーを放っていた、シャルルさんの体は吹き飛ばされる。

「ぐっ！　一体何が・・・　――――――！？」

「なっ！？」

空へと上がっていたいっくんは僕の隣に並び立ち、シャルルさんと同様に驚きの表情を顔に表す。
僕も険しい表情をしながらそれを見ていた。　視線の先では・・・ＩＳが変形していた。
実際は変形というほど生易しいものではなく、装甲自体がスライムのように解け、硬いはずのものがどろどろに物質変化を遂げ、ボーデヴィッヒさんを飲み込んでいく。

「なんなんだよ・・・　あれは」

いっくんがそうつぶやく。
アリーナの観客席でもざわざわと声が上がり始める。

僕は・・・　知っている。
詳細まではわからないけど、束さんから聞いたことがある。
きっとあれはヴァルキュリー・トレース・システムだろう。
束さんが「ＶＴシステム、あれは不細工なシロモノなんだよ」と言っていた。

ＩＳは原則として変形をしない。厳密に言ってしまうと出来ないんだ。

形状を変えるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』の２パターンのみ。

とにかく言いたいのは、今目の前で起こっていることは普通に考えたらありえない。
シュヴァルツェア・レーゲンだったものは一度ぐちゃぐちゃになり、再度作り直す粘土のように思えた。
そしてその粘土のようなものはボーデヴィッヒさんの体を全て包み込み、心臓のように脈打ちながらゆっくりと地面へと降りていく。
それが地面に足をつけると、ぶるんぶるんと犬が自分の体についた水を落とすかのようにいきなり高速で全身を震わせさらに形状を変える。

形状の再構成が終了し、立っていたのは全身装甲のＩＳ。
だけどこの前の襲撃者とはぜんぜん違う。

ボーデヴィッヒさんの体を巨大化、そして最小限に必要なアーマーがつけられている。

そしてその手には一つの刀があった。
そう、今まで何度も何度も見たことがあるもの、それがそこにはあった。

「いっくん・・・あれって・・・」

「ああ・・・《雪片》」

ちーちゃんが振るっていた刀。それにとても似ていたのだ。
似ているというよりほとんど復元したようなものがそこにはあった。

（これが・・・ＶＴシステム）

僕は《白鷺》を、いっくんは《雪片弐型》を構える。

そしてその刹那、黒いＩＳがいっくんの懐に飛び込み、中腰に引いて構えてその間合いから放たれる一撃。

「ぐうっ！」

いっくんが構えていた《雪片弐型》が弾かれる。そして敵はそのまま上段の構えへと移る。

「させないっ！」

ガギンッ！

二刀の《白鷺》を交差させその斬撃を受ける。
それにしても鋭い・・・　こんなに一撃が重いなんて。
ぎぎぎと軋む音を立てながら左足が、その重さに耐えられずに曲がっていく。

「うっ・・・　くっ・・・・」

だめか・・・

ついには唐梅から警告の表示が現れ、目の前に、警告、警告、警告・・・といくつもの赤いランプが点滅しだす。
流石に立て続けの戦闘なのでシールドエネルギーも半分を切っている。
これはさすがにまずい。
苦し紛れの中エネルギーを絶対防御のほうに優先的に回すように設定するが、その間にふと全身に掛かっていた重みがなくなる。

「しまった！　うわあああああああ」

「「春樹っ！！」」

エネルギー優先順位変更のほうに気を取られていたせいで、相手のさらなる一撃を回避することができず、がら空きだった横腹、そこに一閃が入りアリーナの壁へと吹き飛ばされてぶつかる。

「がはっ・・・！」

背中から豪快に壁にぶつかり、体が大きく跳ねる。
そして背中から何かで殴られたような痛みが伝わってきた。

～一夏Ｓｉｄｅ～

「「春樹！」」

俺とシャルルの声が重なる。
壁に吹き飛ばされた春樹は、顔を前にして倒れていく。

「・・・くそったれ」

白式が表示するエネルギー残量のパラメーターが残り少ないことを表す赤に変色する。
どうでもいい――――今の俺には・・・エネルギー残量なんて・・・

「この・・・くそったれがあああああっ!!」

激しい怒りに突き動かされ、俺は握り締めた拳を武器に黒いＩＳへと向かう。
――――許さねえっ！　許さねえっ！　許さねえっ！　許さねぇぇぇぇ!!

「うおおおおおおっ!!」

黒いＩＳに触れるそのギリギリで、突然俺の体が逆方向へと引っ張られる。
背中に何か衝撃を感じるが関係ない。
俺はあいつを許さねえっ！

「馬鹿者！　何をしている一夏！　死ぬ気かお前は！」

「おりむー危ないよ！！　危険すぎるよ～！」

ふと横をみると打鉄装備の箒とのほほんさんがいた。
そして二人は俺を両サイドから捕まえ静止させようとしてくる。

「離せ！　あいつだけは！！　あいつだけはぶっ飛ばしてやる！！」

あの剣技・・・
最初に俺に向かってきたときの一撃。
そして春樹に向かって放った横一閃も、あれは全て俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だった。
初めて見たことを今でも正確に思い出せる。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。　振られるようでは、剣術とは言わないし、一歩間違えば周囲の者にまで危害を加える』

初めて手にした鋼鉄で出来た真剣は、その重大さを俺に教えるかのようにずしりとしていた。

『重いだろう。　それが、人の命を絶つ武器のその重さだ』

人を斬るために生まれ、作られ、鍛えられた、その業物。
ただ単純に重いだけでなく、その存在理由さえも重い。

『この重さを振るうこと。　それがどういう意味を持つのか、考えてみろ。　それが強さと言うことだ』

――――――意味、そして強さ

俺はそれ以来少しでも千冬姉の力になりたくて、そのために強さを追い求めた。
ずっと、そう・・・ずっと・・・

「どけっ、二人とも！　邪魔をするならお前らも――――」

「っ！　いい加減にしろ！！」

バシーン！

「う、うわあ・・・」

のほほんさんが目を覆い隠す。

箒に頬を思いっきりひっぱたかれて、飛び出そうとしていた体が横へと傾きそのまま地面に体を打ち付けた。
頬から感じる痛み、そして触れた地面の冷たさによって怒りに身を任せていた俺に冷静さが戻ってくる。

「なんだというのだ！」

「あいつ・・・　あれは、千冬姉のデータだ。　それは千冬姉のものだ。　そしてそれを使って春樹を傷つけた。　見ろっ！！」

俺は人差し指を立て倒れている春樹を指差す。

「お前はいつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえ。　あんな、わけわかんねえ力に振り回されているラウラも気に入らねえ。　ラウラとＩＳ、どっちにも春樹の分も合わせての一発をいれねえと気がすまねえ」

力は・・・　強さは・・・　攻撃力じゃない。　そんなものは本当の強さじゃなくただの暴力にしかすぎない。

「とにかくあいつをぶん殴る。　そのためにまず正気に戻してからだ」

「理由はわかった。　だが今のお前に何が出来る。　白式のエネルギーも残ってないのだぞ」

「そうだよ～、おりむー。　ほら、エネルギーの残量みてみなよー」

「くっ・・・」

二人の意見はもっともだ。
今の白式には一撃を入れることなんて出来る余裕が無い。
装甲展開するエネルギーも残ってはいない。

『緊急事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDへと認定、鎮圧のために教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はただちに避難すること！　繰り返す！　ただちに――――――』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は収集される」

「そうだよ、わざわざおりむーが危険なことする必要なんてこれっぽちも・・・」

「違うんだ二人とも。　俺がやりたいんだ。　他の誰がどうだとかそんなのまったく関係ないし、知ったこっちゃ無い。　ここで引い

たらそれはもう俺じゃねえよ」

「この馬鹿者がっ！　ならばどうする！　エネルギーはどのみち――――」

「無いのなら他から持ってくればいい。でしょ？　大丈夫、春樹？」

「「「春樹っ（くーよ）！」」」

シャルルに肩を貸してもらいながら春樹が俺たちのところへやってくる。
だが春樹はさきほどの衝撃で体が痛んでいるのだろう。　顔が痛みの所為でゆがんでいる。

「そ、そう、使えばいいんだよ。　僕の唐梅からと――――――」

「僕のリヴァイヴからね、けど！」

びしっとシャルルが指を指して言う。
その言葉は強く、そして有無を言わせないものだった。

「けど、約束して。　絶対に負けないって」

「こ、ここまで無茶するんだから・・・　いっくん・・・　ごほっごほっ・・・　負けたら、女の子が大浴場使ってるときに強行突破してきて恥さらししてもらうから・・・」

春樹は痛みに耐えながらそう言った。
女子が大浴場使用中に強行突破・・・つまりは侵入ということだろう。
これで負けたらもう人生が終わったようなものだ。

「もちろんだ。　ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。　負けたらもう男じゃねえよ」

「じゃあ、春樹のに付け加えて明日から一夏は女子の制服で通ってね？」

満面の笑みのシャルル。
だ～～！！　わかったわかった！
もう俺は男をやめてやる！　というか負けたら人生に幕を閉じてやる！！

「い、いいぜ？　なにせ負けないからな！　見てろよ！」

軽いジョークを交えた会話にいい感じに緊張感がほぐれる。
いつの間にか血が上っていた頭も冷えていた。

「はぁ・・・はぁ・・・　くっ・・・」

春樹は目を閉じながら何かを考え、そのまま俺のガントレット状態の白式に手を乗せる。
そして唐梅から白と赤の粒子が散布しだし、機体が赤く染まり始めた。

「おおっ！！」

春樹が乗せた手から次々にエネルギーが供給されるのがわかる。

「リヴァイヴのコア・バイパスを開放。　エネルギー流出を許可」

春樹が終わった次はシャルルが手を伸ばした。
シャルルはリヴァイヴからケーブルを伸ばしさきほどと同じようにガントレットにそれを繋ぎ、そこにエネルギーを流し込む。
さっきと同じような湧き上がる力・・・
俺は不思議な感覚を受け止めていた。

（これは・・・初めてＩＳを動かしていたときと同じ感じだ）

まるで、ずっと昔から知っているかのような、不思議な感覚と懐かしさ。
そしてさっきと違いどこか生まれ変わったかのような鮮明な視界、
周囲全てを感じられる感触。

「こ、これで再展開が・・・　か、可能になったはずだよ・・・
いっくん・・・」

「春樹」

「ご、ごめんねシャルルくん・・・」

「わ、私も肩を貸そう」

二人のＩＳは俺にエネルギーを渡したせいで解除された。
ふらふらになっている春樹はシャルルだけでなく、箒にも肩を貸してもらう。

俺は白式を再展開する。
シールドエネルギーは春樹とシャルルのお陰で半分より少し上まで戻っていた。
だがこれも《零落白夜》を使えばあっという間になくなる。

「か、彼女を・・・ボーデヴィッヒさんを・・・　助けてあげて」

「一夏、後は任せたよ」

「負けるな・・・　絶対に負けるな！」

「おりむー・・・　この学園には男子が3人必要なんだよ～」

春樹、シャルル、箒、のほほんさんが順番に声をかけてきた。
ここまでみんなに信頼してもらってるんだ。　この期待に応えなくして、千冬姉の弟が勤まるはずが無い。

「じゃあ、行ってくる」

俺は視線を目の前の相手・・・　黒のＩＳへと向きなおす。
ちらりと春樹とシャルルを見ると、二人は静かに笑みを浮かべていた。
そしてさらに春樹は、テンションが上がっているときによくやる行為、指でピースしてる。
絶対に勝って帰ってこなくちゃな。

「じゃあ、行くぜ偽者野郎！」

俺の右手、そこに握り締めた《雪片弐型》が俺の意思に共鳴して刀身を開く。
零落白夜――――発動。
ヴンと小さく反応する《雪片弐型》。全てのエネルギーを消し去る絶対無敵の力を持つ刃が、通常の二倍の長さとなり姿を現す。

（これだけあるんだ。　速度と鋭さ、それにでかいのも一発入れれる）

意識を集中させ頭を中を空っぽにする。
人間は集中したときその本来の力を発揮することができると聞くが、おそらくこれがそうなのだろう。
周りは走馬灯のようにゆっくりと動き、進む時間のスピードが遅く感じられる。
その間、俺はさらに意識を研ぎ澄ませ洗練された刃を想像する。
細く・・・鋭く・・・尖らせて・・・光のように早く、鉄をも斬ることの出来る刃。

その集中が頂点に達し、それに応えるかのように俺の雪片は形を変貌させた。
ただ膨大なエネルギーを解放するのではなく、零落白夜の刃が細く鋭いものへと結束していく。

俺はその結束した刀を腰に添えて、千冬姉に習い、箒の姿から学んだ『一閃二断の構え』・・・

居合いの構えで黒いＩＳへと向かう。

『いいか、刀とはその重さを利用して振りぬくのだ。手にするのではなく、自分の体の一部と思え』

『ええい、どうしてわからんのだ！　やってみせるからちゃんと見ていろ！』

千冬姉、そして箒の姿と言葉が頭の中で蘇る。
あの二人容赦なかったな、そういえば。

距離が近づくにつれて黒のＩＳは上段に構えていた刀をタイミングを合わせるかのように振り下ろす。
それは千冬姉と同じモーション・・・　速く鋭い。
けれどな・・・

「それは、ただの真似事だ」

ギンッ！

腰から雪片を抜き放って横一閃、相手の刀を弾き、そしてすぐさま頭上に構え縦に１ミリもずれることなく直線に振り下ろす。
これが一閃二断の構え。　一足目に閃き、二手目に断つ。

ジジジッと紫電が黒のＩＳの体に走り、真っ二つに割れる。
そしてその中心からラウラが出てきて、気絶するであろう前に目があった。
彼女の片目にあった眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と・・・

「まぁ・・・　ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ。　春樹にも助けてあげろって言われてるしな」

気を失い重力にまかせて倒れてくるラウラを抱きかかえて、俺は一人そうつぶやいた。

エピソード１８　【探して、進むんだ、自分自身の道を】

～ラウラＳｉｄｅ～

「一つ忠告しておくぞ。　あいつに会うことがあれば、心は強く持て。　あれは未熟者の癖にどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると惚れてしまうぞ？」

教官はそんなことを言いながらひどく嬉しそうで、照れくさそうでいた。その時にあったモヤモヤ・・・きっとあれは――――『嫉妬』だったのだろう。教官のその言葉の後についついあんなことを訊いてしまった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れると思うか？　そう言えば・・・　実はもう一人いるな、面白いやつが」

もう一人？　教官は弟が二人いるんだろうか。
ニヤリと楽しそうな顔で言われたせいで、ますますモヤモヤが広がり気持ちが落ち着かなくなる。

「これは誰にも言うなよ？　そいつの名前は春樹・・・九曜春樹だ。
ふっ、私の知り合いの弟みたいなやつなんだが、なかなか面白いやつだ。　ヘタをすれば私の弟並に強力だな」

九曜、春樹・・・
そうだ、確か教官はそう言っていた。　今、思い出した。

『転校初日から乱暴はいけないと思うな。　ボーデヴィッヒさん』
『1度ならず2度までも友達に手を出すんだったら、いくら僕でも黙ってられないからね』

貴様がそうだったのか。織斑一夏に会うだけでなく、私はいつの間にか教官が言っていたもう一人の人物に会っていたのか・・・

そして私は出会ってわかった。　戦って理解した。
強さとは――――――なんなのか。
きっとその答えは無数にあるのだろう。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと俺は思う』

――――――そういうものなのか？

『そりゃあそうだろ。　自分がどうしたかもわからねーやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

――――――歩き方・・・

『どこへ向かうか。　ボーデヴィッヒさん、それは自分自身で見つけるものなんだよ』

――――――どこへ向かうか、自分自身で・・・

『そうだよ。　いっくん曰くやりたいことはやったもん勝ちらしいからね？』

『おう、つまんねー遠慮とか我慢とかしてたら、後々損するぞ？』

そいつらはお互いの顔を合わせ笑みを浮かべる。

『自分が行きたい道。　もしかしたらそれはイバラの道、崩れかけている道、もしかしたらその道すらないかもしれない。　でもね、本当にその道に行きたいんだったら、ちゃんとその道が見えてくるはずだよ？』

『だな、もうやりたいようにやっちまえ。　じゃないと人生じゃねーよ』

――――――では、お前は・・・　お前はなぜそんなに強くあろうとする？　どうしてそこまで強い？

『強くねぇよ。　俺はまったく強くない』
『強くないよ？　僕はまったくね』

その二人の言葉を聞いて思わずポカンとしてしまう。

未知数の敵相手に危険を冒してでも向かってくる。さらに味方のために身を挺してでもそれを守る行為。
力を持っているからこそできるが、まだ強くないというのか。

『けれどな、もし俺が強いって言うんだったら――――』

――――――――。

『強くなりたいから、強いのさ』

――――――理解が出来ん。

『それに、強くなったら、やってみたいことがあるんだよ』

――――――やってみたいこと？

『そうだね、いっくん。　きっと僕といっくんは同じところを目指していると思う』

『春樹もか？』

『うん、それは――――――』

『『誰かを守ってみたい。　自分の全てを使って、ただ誰かのために・・・』』

二人の声がシンクロし、まるで一心同体かのようだった。
それにそれは、まるであの人ようだ。

『そうだな。　だからお前も守ってやるよ。　ラウラ・ボーデヴィッヒ』

『あはは、僕も守れるように精一杯頑張るよ。　ボーデヴィッヒさ

ん』

言われて、私の胸は始めての衝撃に強く揺さぶられる。
破裂するかの如く、速いスピードで脈打つ心臓が何かを言っている。
こいつらの前では、戦闘のスペシャリストでもなんでもない。　ただの１５歳の女なのだと。

――――――織斑一夏、そして九曜春樹。

教官、たしかにこの二人は強敵でしたよ。
惚れてしまいそうだ。

「う、う、うぅ・・・」

気がつくとラウラはベッドの上に寝かされていた。ぼやっとした薄暗い光が天井から彼女を照らしていた。

「気がついたか」

その声には聞き覚えがあった。いや――――覚えがあるどころではなく自らが一番尊敬している人物、織斑千冬　その人だった。

「私・・・は・・・」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労、そして打撲がある。しばらく動けないだろうから、無理はするな」

千冬は何が起こったかそれとなくはぐらかそうとしたが、そこは流石はかつての教え子。　他の人と違い簡単に誘導はされなかった。

「何が・・・起こったのですか、教官?」

無理をするなと言われても、無理やり上半身を起こすラウラ。　だがやはり全身の疲労と打撲により激痛が走り顔が歪む。顔を歪ませながらもなお、ラウラの目は千冬をまっすぐ見つめていた。治療のために眼帯が外されていて、右目の赤色とは違い、金色の目をした左目が露出している。　そのオッドアイが体の激痛に耐えながらでも、真っ直ぐ純粋に千冬を見つめる。

「ＶＴシステムは知っているな？」

「はい・・・　正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きをトレースするシステムで、確か・・・」

「そう、ＩＳ条約で現在ではどの国家・組織・企業においても研究、開発、使用の全てが禁止されている。　そのシステムがお前のＩＳに搭載されていた」

「・・・」

ラウラは自分自身のＩＳにまさかそんなものが積まれていることなんて知らなかった。

「巧妙に隠されてはいたがな、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意思・・・正確に言うと欲望か。　それらすべてが揃い、操縦者が願うことにより発動するようになっていたらしい。　現在ドイツ軍に問い合わせている」

千冬の口からその言葉を聞き、ラウラはぎゅっとベッドのシーツを握り締めた。

いつの間にかラウラの目はうつむいていて、先ほどの真っ直ぐな視

線はなくなっている。

「私が・・・望んだからですね」

ラウラは望んだ。　強くありたいと・・・　誰をも屈服させることの出来る最強の力を・・・　千冬のようなトップに立てるほどの力を・・・
そのことを口にしなかったが、千冬にはなんとなく伝わっていた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

とつぜんの千冬の大きな声が保健室の中でこだまする。
うつむいていたラウラはその声に驚くと同時に顔を上に上げた。

「お前は誰だ？」

「わ、わ、私は・・・私・・・は・・・」

シャッ！

ラウラが寝ていたベッドの丁度隣のカーテンが突然開いた。
その瞬間千冬がふっと笑みを見せたのはラウラも気がつかなかった。
カーテンが開き、そのベッドに腰掛けている・・・　世界の男でＩＳを唯一動かせることの出来る人物、その二人のうち一人、九曜春樹が優しい笑みを浮かべてラウラを見つめる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・でいればいいと思うな？　ごめんね、大体のことはちーちゃんから聞いたよ」

「お前は良い所ばかりとっていくやつだな、九曜」

「あははは、ごめん。　ボーデヴィッヒさん、特記事項第２１知ってるよね？」

「あ・・・」

――――特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない　本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする

「３年間は猶予があるんだ、それだけ時間があるんだよボーデヴィッヒさん。　そしてその後もまだ時間はあるんだよ。　つまり考える時間があるってこと。　いっしょに・・・悩もう、ボーデヴィッ

ヒさん？　いっくんも、僕も力になるから」

「あ・・・あああっ・・・・」

この瞬間、ラウラの中にあった一つの線が切れた。
暗闇と言う殻が割れ、光が差し込んだのだ。　夕暮れを背景に彼女のオッドアイが綺麗な宝石のように輝きを放ち始め、そこから流れ始める涙。
このときラウラは生まれて初めて『少女』になったのかもしれない。
春樹は立ち上がりラウラの隣に行き、そっと抱きしめる。　昔、束が春樹にやったこと、今度はそれを春樹がやる番だった。手をラウラの頭に丁寧に乗せて、ゆっくりとその綺麗な銀色に輝く髪に沿うように撫でる。

「まったく、お前は・・・　束に女は泣かせるなと言われていると聞いているが？」

「ち、違う！　違うんだよちーちゃん！」

「織斑先生だ馬鹿者。　まったく・・・」

流石に今回ばかりは千冬は出席簿で頭を叩かなかった。
椅子から立ち上がり、保健室の出入り口へと向かう。
保健室のドアを開けた瞬間、何かを思い出したようでそこで一度立

ち止まる。

「ああ、それから」

千冬はそのまま振り向くことなく、ラウラに言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ、アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ」

そして、千冬が部屋を立ち去ってから数分が経ち、ラウラが泣き止み落ち着きを見せてきたころ、

「だってさ、ボーデヴィッヒさん」

「ふ、ふふ・・・ははっ・・・　揃ってズルい姉弟だ」

ラウラは春樹の肩を借りながら、痛みが走るのを我慢しながら震えて笑った。

（どこへ向かうか・・・それは自分自身で見つける・・・か）

今回ばかりは完膚無き敗北。　だけどそれが今はとても心地がいい。

そう、ラウラ・ボーデヴィッヒは、これから始まるのだから。

～ラウラＳｉｄｅ　ｏｕｔ～

～春樹Ｓｉｄｅ～

『トーナメントは事故により中止となりました。　ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。　場所と日時の変更は――――――』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。

「ふむ、シャルルの予想通りになったな」

「そうだねぇ。　あっ、春樹、七味とって」

「ふぁ～い」

「ありがと」

僕は天ぷらうどんのうどんを口に咥えながらシャルルさんに七味を回した。
それにしても今日は疲れた。
あの戦闘が終わり僕は身体検査をしたんだけど、あれだけ痛かったのに骨折じゃなくて打撲だから良かった。
それからボーデヴィッヒさんのことをちーちゃんから聞いて、疲れきったボーデヴィッヒさんを寝かしつけ、それから今回の事件について教師陣からの事情聴取。
やっと終了～と思って時間をみたら食堂の閉館時間ぎりぎりという・・・
3人で急いで食堂に向かって待っていたのは女の子たちが今回の出来事について聞こうと陣を張って待っていた。
夕飯を食べてからということで、一度退いてもらうことが出来たからゆっくりとご飯を食べることが出来ている。

「ふー、ごちそうさま。　学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ。　それより春樹、お前相変わらずよく食うな」

「ん～？　普通じゃない？」

「う、見てるだけでもたれてきそうだよ春樹」

シャルルさんが口とお腹を抑えて僕をおかしいんじゃないかなみたいな目で見てくる。
僕の前には天ぷらうどんが入っていた器が４つ、そしてさらに単品の天ぷらが乗っていたお皿が２つ重なっているんだけど、これ多いのかな？　僕お腹へってたんだけど・・・

「・・・ん？」

いっくんが何かに気がついたようで、その視線の先を見てみると女の子の一同がひどく落胆している。

「優勝・・・チャンス・・・私の・・・華やかな人生・・・」
「交際・・・結婚・・・子供は・・・　全部、全部」
「・・・ママぁぁぁぁぁぁ！！」

泣き声、叫び声、バタバタと地面を走り回る音。　そしてその中の数十人が食堂からもうダッシュで出て行く。　結婚？　子供？　先生の誰かが有名人と結婚でもしたんだろうか。

「シャルルくん、先生の誰か結婚するの？」

「違うと思うけどなぁ・・・」

僕、いっくん、シャルルさんはちんぷんかんぷんだ。　僕なんてうどんの入った器を持ち上げてうどんを咥えながら首をかしげている。

「・・・」

結局その女の子達は全員半泣き（たぶん）状態で出て行き、その中の一人が憮然と立ち尽くしている姿を見つける。
それは見慣れた女の子、束さんの妹、箒ちゃんだった。
なぜか死にかけているけど、ゆっくりとスローペースで箒ちゃんは僕らのテーブルまでやってきた。

「そういえば箒、先月の約束だが――――」

「ああ～、そうだそうだ」

「びくっ」

体をびくっと跳ねさせ、両つま先をなぜか揃える。

「付き合ってもいいぞ」

「うん、僕もいいよ」

「――――――。　――――――――。　――――――――悪いがもう一度言ってくれ、私の聞き間違えかもしれん」

「だから付き合ってもいいぞ」

僕はとなりで最後の海老の天ぷらをかじりながら顔を縦に振る。
すると突然、生き返ったかのように顔が輝いた箒ちゃんは、僕といっくんに向かって飛び込んできた。
そして僕たちの首を締め上げる。
ぐ、ぐるじい・・・　で、でんぶらだべでるおに！　（く、くるしい・・・　て、てんぷら食べてるのに！）

「ほ、ほ、本当か！　本当に、本当なのだな！？　それも二人ともいいのだな！？」

「お、おう」

「僕でいいのならよろこんで付き合うけど・・・」

「な、なぜだ？　り、理由を聞こうではないか」

ぱっと首を離し、こほんと咳き込んでから綺麗な姿勢で僕といっくんの間に座る。
そしてなぜか微妙に頬が赤い。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。　付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「えっ？　それは僕でしょ？　てっきり僕はいっくんと箒ちゃんが恋人同士になって、なぜか僕が買い物の荷物持ちを任されると思ってたんだけど、邪魔にならない？　本当はこんなことやりたくないけど・・・　二人のためだから！」

当ってるよね？　でも何で僕が二人のための荷物持ちの役なんてしなくちゃならないんだろう。
箒ちゃんいっぱい買うのかな？　いっくん一人じゃ持ちきれない位

買うのかな。

ものすごい妄想が働いている春樹がいるのだった。

「・・・」

ぴきぃっ！

と箒ちゃんの表情がこわばる。

なんだか箒ちゃんというガラスが割れたかのようだった。

「・・・だろうと・・・」

「お、おう」

「ふぇ？」

「そんなことだろうと思ったわ！！　一夏はまだしも春樹はわかってくれていると信じていたのだぞ！」

ガンッ！

「ぐはぁっ！」

「あべしっ！」

箒ちゃんはうどんの器を使い、僕といっくんの顔面を殴る。
こ、これ・・・プラスチックだから良かったものの・・・焼き物だったら死んでたよ箒ちゃん・・・

「ふん！」

そしてその直後に今度は手の甲で顔面を殴られる。
は、鼻血！　鼻血！　・・・　違う、よかった鼻水だった・・・

ずかずかと去っていく箒ちゃんを視線で追うことも出来ず、僕たちはテーブルの上に屈服する。
さ、さすが剣道全国トップ・・・　力が半端ないよ。

「一夏ってわざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね。
春樹は半分当たってるような間違っているような・・・」

「な、なにどういう意味だそれは・・・」
「ま、間違ってたの？・・・」

「さぁ～、僕はし～らない」

シャルルさんはぷいっと頬を膨らましながら視線を逸らす。
ま、まあ確かに普通に考えたらカップルの荷物持ちなんておかしいけどさ・・・　考えた結果これだったんだよ！

「あっ！　織斑君、九曜君にデュノア君。　やっと見つけました！」

僕といっくんがテーブルに顔を押し付けてもがいているところに山田先生がやってきた。
やってきたと同時に僕らが屈服している姿をみて疑問に思っているけど気にしなくて大丈夫です・・・
さっきダブルダイレクトアタックを食らっただけなんで。
正直滅茶苦茶痛かったけど。
だけど僕たちに来るのは災難ばかりではなかった。

「朗報です、朗報！　ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

この瞬間僕といっくんは天使が目の前に舞い降りてきたかの様な錯覚に襲われた。
大浴場・・・　ボクノダイヨクジョウガ、カイキン・・・

エピソード19　【大浴場　＝　ジャングル？】

「それじゃあ早速お風呂にどうぞ。　今日の疲れも肩まで浸かって百数えたら疲労もスッキリ！　ですよ」

今まで時間の調整の所為で入ることの出来なかった大浴場。
それが今夜解禁となる。　別にシャワーがいやだと言っているわけではないんだけど、せっかく大浴場と言うものがあるのだから僕は一度でも入ってみたかった。　その念願の大浴場を今日ようやく拝むことができるんだ。　やばい・・・　なんだかテンションが上がってきたよ！

「「はい！　じゃあ早速、風呂（お風呂）に！！　――――――あ」」

僕といっくんの声が重なり、さらに同じタイミングで何かに気がつく。
そうだ・・・　シャルルさんは女の子なんだ。　男の子じゃないんだよ山田先生！

別々に入るのは明らかに不自然すぎるし・・・　無理を通して大浴場を使わせてもらうんだから、そんな無駄な使い方をするわけにもいかない。
どうしよう・・・

「え、えーと・・・　あの・・・　その・・・」

だめだ、言い訳が思いつかない。

「どうしたんですか？　ほらほら、早く着替えを取りに行ってください。　大浴場の鍵は私がもっていますから、脱衣所の前でまってますね。　じゃあ」

山田先生はそう僕たちに言うとすたすたと歩いていってしまう。
これは、一体どうしたらいいのだろうか。

「シャルル」
「シャルルくん」

「う、うん。　困った・・・ね。　どうしよう。　と、とりあえず、着替え取りに部屋に戻ろう二人とも」

ともかく自分の着替えを取りにいくために僕たちは部屋に戻った。
部屋に向かっている最中、着替えを取り出している時にもいろいろ案を考えていたのだけれど結局何も思いつくことなく、黙々とお風呂の準備だけが進んだ。
そして最終的には――――

「来ましたね。　それじゃあどうぞ！　大浴場を堪能してください

！」

「ど、どうもです、山田先生」

テンションの高い山田先生に見送られ、脱衣所のドアが勢いよく閉まる。
そして勿論そのまま僕たちは沈黙タイムの到来。

「「「・・・・・・・」」」

沈黙タイムがスタートをきってから数秒後、３人は顔を見合わせて全員同時に少しずつ口元を歪ませていく。

「「「・・・あは・・・あははは」」」

な、何やっているんだろう僕たちは！！
もう気が狂った感じだよっ。

まあ、そんなことより流石にまずいよね。　きっとここにいるみんながお風呂に入りたい。　だけど、シャルルさんといっしょにというわけには・・・
一度部屋でシャルルさんの裸を目の前で拝んでしまったけど、あのことと今回はまったく別だ。

それにシャルルさんは年頃の乙女・・・　よって僕たちのような男に肌を見せていいはずが無い。

そしてもちろん、逆に僕といっくんが女の子の裸を見るわけにはいかない。

男同士で見せ合うのは別に問題ないかもしれないけど・・・
いや、見せたいってわけじゃないよ？　断じて違うからね？

「まあなんだ・・・　えーと・・・　シャルル」

「は、はいっ！」

いっくんがシャルルさんに声を掛けたら何でか敬語で返事をした。

「シャルルも今日は疲れたろ？　風呂入ってこいよ。　俺は脱衣所で時間潰してから、頃合を見て部屋に戻る。　春樹はどうする」

そ、そんな～・・・
まあ、でもそうだね。　シャルルさんがそれで喜んでくれるなら僕はかまわないな。
ほら、今は女の人が男よりも権力強いし？　まあ、僕の中では正直な話あんまりそういうことは関係ないんだけどね。

「僕もそうするよ。　いっくんも僕といっしょに出て行ったら誰かに見られても不自然に思われないだろうしね。　シャルルさんはゆっくりしてきてよ」

「で、でも・・・」

「一緒に入るわけにはいかないよシャルルさん」

「まあ、そういうことだシャルル。　俺たちは部屋のシャワーで我慢するさ」

そう、男は我慢しなくちゃダメな時がある。　まさしくこれがそうだろう。

「女の子にはやさしくするんだよハルくん」僕が束さんに言われ続けたこと、それを僕は今実行する！

「い、いいよ。それなら僕が脱衣場で待ってる。　その・・・お風呂ってそんなに好きじゃないし。　でも二人は好きなんだよね？　特に春樹なんて子供が喜ぶときの顔してたよ？」

「好きだ！」

「大好きだよ！」

だってお風呂だよ!?　大浴場だよ!?　シャワーは束さん『作ってくれた』んだけど、お風呂は作ってくれなかったんだよね・・・だから最後に湯船に入ったのは・・・いつだっけ？　とりあえず覚えてないくらい前の話だ。

それにしてもなんでシャルルさんは顔を赤くしてるんだろ？

「ど、どうかした、シャルルさん？」

「なんだかお前顔が赤いぞ？」

「ど、どうも!?　と、とにかくっ、一夏と春樹はお風呂にどうぞ！　僕のことはきにしないでいいから、ねっ？」

「でも・・・　本当にいいの？」

「じゃあ入るか、春樹。　このままだと時間だけが過ぎてくだけだ。シャルル、サンキュー！」

「う、うん」

僕はいっくんに引っ張られてシャルルさんの視界に入らない場所まで移動、それから二人で服を脱ぎだす。もちろん背中を向けながら

ね。
でも男の子の場合脱ぐのは本当に簡単だ。　ぱぱぱっと脱いで後は腰にタオルを巻くだけだから、ものの数秒で終わってしまう。

「じ、じゃあ入ってくるね？　シャルルさん」

「う、うんっ。　ごゆっくり」

大浴場に入る前にシャルルさんに一言声をかけておいた。
いや～、なんだか本当に悪いことをした気分だな・・・
そんな悪者にでもなった感じの中僕といっくんは大浴場のドアを開けた。

「うお！」
「こ、これはすごい・・・」

口にも出たけど、ただすごいの一言。　広いよっ、とにかく広いんだよっ。　何これ！？

大浴場に一歩足を踏み入れ何があるか見渡してみる。
巨大湯船が一つ、ジェットとバブルのついた湯船が二つ、それに檜風呂が一つ・・・
さらにはサウナ、全方位シャワー、打たせ滝となんとも豪勢な大浴場。
もう見た瞬間に気分はハイ。　なんせこのとてつもなく広い大浴場

を僕といっくんだけで使いたい放題なんだから。

僕たちはとりあえず体を流して、お互い顔を見合わせる。
そして大浴場の出入り口であるドアにバックステップを踏みながら下がっていき、ニヤリと笑みを浮かべる。

「準備はいいか春樹」

「あははっ、いつでもいいよいっくん」

二人はうなずき、そして――――――

「「あ～、あぁぁぁぁぁぁ！！」」

同時に濡れている床を蹴り、ターザンのような声を上げながら巨大湯船の中にダイブ・イン！【注意：実際にこんなことやってはいけません。　周囲に迷惑をかけると同時に怪我をする可能性があります】
ザッバーンと水しぶきを立てて湯船に入る。
う～ん、気持ちいいよ～！

そして数秒後、同時に立ち上がり湯船から飛び出し石鹸で体を洗い、それからシャンプーで頭を洗ってから流す。

「「わはははははは！！」」

もう気が狂ったかのように奇声を上げながらまた巨大湯船に突撃、
そして飛び込む【注意：危ないのでやっちゃだめです！】

「「ふうぅぅぅぅぅ」」

ようやく落ち着き、僕は口まで浸かる。
いや～・・・　大浴場・・・　すごすぎるよぉぉぉぉ・・・

「春樹・・・　お前、打撲とかは大丈夫なのか～？」

「え～？　いっくん何も聞こえないよ～」

「お～う？　なんでもね～」

意味深な会話をしながら湯船に浸かり今日の疲れを落とす。
いや～、もうさっきまであった痛みなんて全部なくなっちゃったよ。
大浴場・・・いいね～。

カラカラカラ・・・

「いっく～ん、何か動かした～？」

「あ～んだって～？」

ぴたぴたぴた・・・

なんなんだろうこのペンギンが一人で行進しているような音は。
タイルの上に水のしずくがリズムよく着地していく音みたいな感じで和んでしまう。

（だめだ・・・寝てしまいそうだよ～）

「お、お邪魔します・・・」

「どうぞどうぞ・・・　って・・・　！？」

ゆっくりと頭が沈んでいきそうになっていたのが一気に飛び上がる。
いっくんも僕と同じように顔を飛び上がらせた。
湯気の向こうから現れたのは、スポーツタオルで前を隠しているシ

ャルルさんだったんだ。

「ち、ち、ち、ちょっと待ってシャルルさん！！　なんで！」

「な、なっ、なぁっ！？」

「・・・あ、あんまりみないで・・・　一夏と春樹のえっち・・・」

「「！　す、すまん（ごめんっ）！」」

こ、これはどういう状況！？
さっきまで寝かけてた頭が一気に起きてしまったよ！

僕といっくんは勢いよく回れ右。
さすがにずっとシャルルさんを見てるわけにもいかない。

「ど、どうした？　どうしてここにいるんだ？　確かに俺は入浴を勧めたけど、あれは俺が入浴しないこと前提でだな」

「ぼ、僕がいっしょに入りたい・・・じゃなくて！　なんでもない！！　違うんだよ！！　もう僕の頭今おかしいんだよ～！？」

もう自分が何を発言しているのかわからないほど混乱している。
だって、さっき適当に時間を見て自分の部屋に戻るって予定だったよね？　あれ？　僕どこか聞き逃してたりした!?

「ぼ、僕が一緒だと・・・イヤ？」

「決してそうではないが！」

「ぼ、僕といっくんと違ってシャルルさんは女の子であってね!?　男の子じゃなくてだねっ！　その・・・まあ・・・いやじゃないけどさ・・・」

だって・・・僕たち１５なんだよ？
５歳とかそんな年齢だったら遠慮なく普通に入っている可能性もないとも言えないけど・・・
流石に困っちゃうよ。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。　め、迷惑なら上がるよ？」

「う、ううん!!　上がるんなら僕といっくんが上がるから！　もうね、奇声上げるくらい堪能したから！　そ、それにさ――」

「ま、待って！」

上がるために腰を上げた僕といっくんは、急に大声で呼び止められて動作を止めた。

「そ、その・・・話があるんだ。　大事なことだから、二人に聞いて欲しい」

「わ、わかった・・・　いっくん？」

「そ、そうか・・・」

ちゃぽんと音を立ててまた腰を湯船の中に下ろす。
もちろん背中を向けて。

「その・・・前に言っていたこと、なんだけど」

「前って言うと・・・学園に残るって話か？」

「もしかして、やっぱり残らないって・・・そんなこと言わないよね、シャルルさん」

「残るよ。　ここにいようと思う。　僕はまだここだって思える居場所を見つけられてないし、それに・・・」

そこから沈黙タイムに入る。
会話が止まり、大浴場はシャワーから落ちる水滴の音だけ響き渡る。

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ

どれくらい時間が経ったんだろう。
いっくんも僕もシャルルさんもそこから何もしゃべらない。

「？　シャルル？」

湯船の中を動く水の音が聞こえて、いっくん疑問に思って反射的に音源のほうに顔を向けてしまう。
僕もそれにつられて向きそうになるけど、

「こっち見ちゃダメ！　あっち向いてて！」

「「は、はいっ！！」」

元気良い返事を返して顔の向きを戻す。

あ、危ない・・・　本当に見そうだった。
だけど、そこから予想も出来ないことが起こった。

ぴとっ

「えっ？　えっ！？」
「お、おい、しゃ、シャル――――」

背中が合わさり、その直後に後ろから手を握られる。
肌と肌が密着し、お互いの体温がわかるほど近くに・・・
口から出てきそうなくらい跳ねている心臓を落ち着かせ、何とか正気に戻った。

「二人が、ここに居ろって言ってくれたから。　だから僕はここにいたいって思えるんだよ」

「そ、そうか」

返事を返すいっくん、僕はその隣でコクンと顔を縦に振った。

「それに、ね。　もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？・・・」

今度は僕が質問する。

「そう、僕のあり方。　二人が教えてくれたんだよ？」

「「そ、そうだっけ？」」

「そうだよ、ふふっ、一夏って自分に関することはどこまでも鈍感だね。　最初春樹はそんなことないって思ってたけど勘違いだったみたい。　憎たらしい」

鈍感・・・もしかしたら僕は生まれて初めて鈍感って言われたかもしれない。
いや、箒ちゃんもそれっぽいこと言ってたような気がするな～。

「そ、そうかな～？　とりあえずごめん・・・」

「それは・・・すまん」

「いいよ、許してあげる。　ただし、誰もいないときだけ僕のことをシャルロットって呼んで？」

「もしかしてそれが本当の？」

「そう、僕の名前。　お母さんがくれた、本当の名前」

シャルロット。　それが彼女の本当の名前。
親からもらった大切な・・・大切な・・・

「わかった――――――シャルロット」

「シャルロット・・・さん、でいいかな？」

「ん」

表情まではさすがに見えないけど、嬉しそうにシャルロットさんが返事をした。
シャルロット・・・さん、か。
彼女は普通に生きていくことを選んでくれたんだ。それにまだ、時間はいっぱいある。
『特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない　本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』・・・
そう、時間はたっぷりとあるんだ、これだけあるんだからたくさん

方法が見つかるはずだよ。
そうだよね？

エピソード２０　【きす、キス、Ｋｉｓｓ？】（前書き）

２巻終了～！

エピソード２０　【きす、キス、Ｋｉｓｓ？】

初大浴場に入った翌日。
朝のホームルームにシャルロットさんの姿がない。
『先に行ってて』と言われたから食堂で別れたんだけど、何かあったのかな？
とりあえずいっくんと二人で教室に来てぐるりと見渡してみるけど、シャルロットさんの他にボーデヴィッヒさんもいない。
怪我の治癒と事情聴取があるだろうし、仕方が無いか。

「まあ、とりあえず席に座るか」

「そうだね」

一番窓際のその一番後ろ・・・
太陽が力いっぱい当たる、僕の席に腰をつける。
座ると共に教室のドアが開き、山田先生がふらふらと入ってきた。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

いつものテンションと違う山田先生。
一体何があったのだろうか。

「今日は、ですね・・・　みなさんに転校生を紹介します。　転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか・・・　ええと・・・」

ん～？　転校生？
最近転校生が多いような気がするけど、山田先生の説明がいまいちよくわからないな。
転校生だけどすでに紹介が終わっている？　どういう意味かさっぱり理解が出来ない。

クラスのみんなも山田先生の言葉に対して疑問に思ったらしく、一斉にざわざわと騒がしくなる。
僕が頭の上にはてなマークを浮かべていると、いっくんがこっちに振り向いてきて「どうなってるんだ？」みたいな表情をしてくるけど、僕にもさっぱり・・・

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

幾度か聞いたことある声・・・　すごく身近で毎日聞いていた声が耳に届く。

「シャルロット・デュノアです。　皆さん、改めてよろしくお願いします」

ペコリ、と短めのスカートを履いたシャルロットさんがみんなの前で礼をする。
僕といっくんはもちろんのこと、クラスのみんながぽかんとしたまま固まってしまう。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。　ということです。
はぁぁ～・・・　また寮の部屋割りを組み立てなおす作業がはじまります・・・」

山田先生のテンションの下がりようは部屋割りの組みなおしが原因だったみたいだ

ちょっと待って・・・　これって大分やばいんじゃないかな？
いっくん、これやばそうだよ・・・

向こうも何かに気がついたかのようにバッと僕に振り向きなおし、僕が言いたいことが伝わったかのように顔をがくがくと揺らす。

「え？　デュノア君って女？」
「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「ちょっと待ってや！　昨日って確か、男子が大浴場使っとったはずやんな！？」

――――――やばい・・・やばいよ～！

クラスは一気に喧騒に包まれる。

ガァァァンッ！

教室のドアが壊れるのではないかと思わせるほどの音を立てて勢いよく開く。
そしてドアの向こうに見えるのはツインテールの女の子。　ツインテールと言ったらおそらく予想がつくんじゃないかな？

「一夏ぁっ、春樹ぃっ！！」

鳳鈴音さんが登場。
鈴音さんの顔は鬼の形相で、なんとさらにＩＳ『甲龍』を展開している。

「死ねぇぇ！！！」

両肩の衝撃砲がフルパワーで火を噴いた。
ターゲットは僕といっくん。

――――あっはっはっはっはっ！　もう笑うしかないよ～！！

いっくんも諦めたかのようにどことなくすっきりとした顔をしている。
もうまさに死を覚悟している顔だ。

ズドォォォォォォン！！

――――終わっちゃった・・・僕の人生・・・　束さんごめんね・・・

「・・・　あれ？　生き・・・てる？」

ゆっくりと目を開くと鈴音さんの前に立っていたのはなんとボーデヴィッヒさんだった。
その体には漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っていてるところを見てたぶんＡＩＣで衝撃砲を相殺したんだろう。
それに機体を良く見てみるとあの大型のレールカノンがないことに気がついた。

「助かったぜ、サンキュ。　っていうかお前のＩＳもう直ったのか？　すげぇな」

「あ、ありがとうボーデヴィッヒさん。　間一髪だったよ」

ボーデヴィッヒさんがいる逆サイドからとりあえずお礼を言う。

「・・・コアはかろうじで無事だったからな。　予備のパーツで組みなおした」

なるほどね～。　それならこの短時間である程度修復が済んだのも納得がいく。

「へー、そうなん――――――むぐっ！」

「い、いっくん!?」

突然の出来事だった・・・
ボーデヴィッヒさんがふわりといっくんの所まで行き、胸ぐらを掴んで何をするのかと思ってみていたらいっくんの唇を奪ったんだ。

え、え～と・・・　いつからいっくんとボーデヴィッヒさんはそんな関係に?

その光景を見ていた人たちは全員唖然としている。
なんせいきなりのことだったから誰でもこうなるだろう。　もちろん僕も目が点の状態だ。

「お、お前は私の嫁にする！　後は・・・」

唇を離したボーデヴィッヒさんは僕のほうに振り向き、そのまま突撃。
さっきと同じように僕の胸ぐらを掴む。

「お前もだ！」

「えぇぇぇぇぇ！？」

顔がどんどん近づいてくる。
ぼ、ぼ、僕のファーストキスが・・・　奪われちゃうっ！？

ピシュンッ！

二人の間にレーザーが割り込む。
それは誰によって放たれたのか・・・　ゆっくりとそっちに顔を向けるとオルコットさんが《スターライトｍｋ？》を構えていて、今まさにＩＳのアーマーが展開されていく。

「は、春樹さんの唇まで奪わせませんわっ！　一夏さんは後からお話がありましてよ？」

「ちっ・・・　まあいい。　この二人は私の嫁だ。　これは決定事項であり反論は認めん！」

そう言い少しむすっとした顔をしながら僕を解放する。
解放された瞬間に僕はいっくんの所へと移動して二人で身をかがめる。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。　故にあの二人は私の嫁だ」

誰だい？　そんな間違った情報を与えたのは。
女の人が言うときは嫁じゃなくて婿が正解なんだけど・・・
そんなことよりもとりあえずここからいっくんと逃げよう。
じゃないといつ殺されてもおかしくない。　地雷原の中に男の子二人で突っ立っているようなものだ。

「い、いっくん逃げるよ！」

「お、おい！　待てよ！」

いっくんの手を掴み窓に向かって走り出す。
ここは二階だし、窓から飛び降りると同時に唐梅を展開すれば問題

ないはずだ。

「ふ、ふふ・・・　どういうことか説明してもらおうか二人とも？」

「「ほ、箒（箒ちゃん）・・・」」

非常口である窓の前に立ちふさがったのは、黒いオーラを放ちながら敵意アンド殺意むき出しの箒ちゃん。　手には木刀が握られていて、頭には血管が浮かんでいる。

（窓はダメ・・・　ならっ！）

１８０度反転して教室のドアを目指そうと思ったけど、鈴音さんが立っていた。
そしてその手には青龍刀《双天牙月》がある。
これ、もしかしたらじゃなくて、本当にシャレにならないよね？
後ろにじりじりと下がり始めその間にどうするか頭の中の全神経を使って考える。

ぼすっ

背中が何かにぶつかった。

「お、おい・・・　春樹」

いっくんが隣で怯え出す。
僕の肩に誰かの手が乗り、急に体がぶるぶると警告、もとい拒否反応を起こし始めた。
がくがくと震えながら後ろを振り向くと・・・　オルコットさんが天使・・・ううん、悪魔の笑顔をしていた。

「春樹？」

「は、はい！」

「いつからあの子とキスまでしそうな関係まで進んだの？　僕、知らなかったな～・・・　にこり」

「に、にこっ」

僕はその笑顔に対し、引きつった笑顔を返すしかなかった。
パァーとシャルロットさんの体が光り、ＩＳ装甲が展開されていく。
だけどその手には何も装備していない、理由はすぐに思い浮かんだ。
第二世代型最強と謳われた武器、パイルバンカー・・・　《灰色（グレー）の鱗殻（スケール）》、通称『盾殺し』はアーマーといっしょに展開されているから呼び出す必要が無い。

丁寧に解説してるけど・・・　これも死を覚悟しているからこそ詳

しく、非常に詳しく解説が出来てるんだ。

パシンッ！

左腕にあった盾が弾け飛び、姿を見せたのは予想通り《灰色の麟殻》。

終わった・・・　完璧に終わってしまったよ。

ドガァァァァァァン！

その日のホームルームは轟音と爆音。

教室では勉強する場から一変し、戦場となっていた。

そこは一つの暗い妙な部屋。
至る所に機械の備品が散らばっていて、さらにはケーブルとケーブルが交差しあい、どれがどのケーブルか検討もつかなくなっている。
そしてその暗い部屋の中で一人の女性がモニターに向かいひたすら指だけを動かしている。

そう、ここは篠ノ之束の秘密ラボ。

「・・・ハルくん。　これ・・・」

モニターにはグラフ、パラメーター、何十万桁もある数字、そして一つの立体的な設計図が表示されている。それを束は何やら難しい顔をしながら見つめる。
その顔には、わからない、一体どうなってるの、みたいな疑問に満ちた表情がくっきりと現れているのがわかる。

ヴヴヴヴ・・・ちゃらら～♪　ヴヴヴ・・・ちゃらら～♪

バイブレーションと共に携帯の着信音が鳴り出し、束はその動いている手を止めて自分の携帯に飛びかかる。まるで肉食動物がエサを見つけて、襲うシーンを見ているかのようだった。
束は携帯を取るといそいで耳に当てる。

「もひもひ、ぼぎ、束たんだよぉ？」

「・・・　――――姉さん」

電話の相手・・・　それは自分の妹である箒からだった。

「おー、箒ちゃん！　久しぶりだねぇ！　ずっとずぅぅぅぅぅと待ってたよ！　ハルくんは元気にやってる？」

束は春樹のことをハルくんと呼ぶ。
昔はまた別の名前で呼んでいたが本人はこれが一番しっくりと来たようでそれ以来この呼び名で春樹のことを呼んでいる。

「ハルくん？　春樹なら元気ですが・・・」

「そっか～、良かった～。　それより用件はわかっているよ。　欲しいんだよね？　君だけのオンリーワンにして、世界に二つとない、箒オンリーＩＳが。　もっちろん用意はしてあるよ。　最高性能にして規格外仕様。　――――――『紅椿』がね」

束は携帯を持っていない方の手で、モニターのボタンをぽちっと押すと背後がライトアップされる。
そして現れたのは、ＩＳ・・・　白式の対となる存在、そして唐梅の元となった機体である紅椿が光り輝く。
さらにその横にもう一つ機械の塊が何本ものケーブルに繋がれて置

いてあるのがわかった。
その機械の塊は先ほどモニターに表示されていた設計図の物とまったく同じ。
だが、それには一つの問題がある・・・
――――――――――『一度も起動したことがないのだ』

エピソード２１　【現実？　いいえ、それは夢です】

～シャルロットＳｉｄｅ～

「ゴメンね手伝ってもらっちゃって」

「あははっ、困ったときはお互い様だよシャルロットさん」

放課後の廊下、すでに空はオレンジ色に輝いていて、赤い夕日が差し込んでいて、その中を春樹といっしょに歩いていた。
手には今月の学校行事である『臨海学校』と言う文字が書かれているプリントが山のようにある。

「でも、よかったの？　今日はセシリアたちと街に行くって・・・」

「うん、でもシャルロットさんがいなかったら・・・　行っても・・・楽しくないし」

「えっ！？」

「う～んとね。　好きな人のためなら何でも力になりたい。　これが理由じゃダメかな？」

春樹は少し照れながら微笑んだ。彼の頬はわずかに赤く染まっている。
夕日が原因で赤くなっているのではないことはすぐにわかった。

「春樹？・・・」

「シャルロットさん・・・」

手に持っていたプリントが全部床に落下する。春樹は僕の肩を掴んできて、さらにどんどんと顔を近づけてくる。
誰もいない廊下・・・　二人だけの空間・・・　そして近づいてくる顔・・・
ここまで条件が揃っていてすることと言えば一つしかない。

「――――あ、れ？」

気がつくと口をゆっくりと何も無い天井に突き出していた。
ぼっーとした頭で状況を確認する。
場所はＩＳ学園１年生寮の自室。　時計を確認すると時刻は６時。

「・・・」

かぁぁぁと顔を赤くしながら布団で顔を覆いかぶせる。
それからもぞもぞとベッドの上で動き回る。

「はぁぁぁぁぁ・・・」

動きが止まった数秒後に長いため息が自室の中に静かに響く。
全部夢・・・
夕暮れの中を二人っきりで歩いていたことも、口づけを交わそうとしていたことも全て。

「せめて続きまで見てればな～・・・」

そうつぶやくとくるくるとまたベッドを回り転げる。
夢は目が覚めるて気がついていると内容を忘れていることが多いが、この夢だけは残っていてもらいたいと思った。忘れないように脳内で何度も夢の映像を再生、巻き戻し、再生、巻き戻し・・・を繰り返す。

「・・・」

ぼっと顔を赤くする。
さっきまで意識は朦朧としていたが時間が経つにつれて意識ははっきりとしてきて途端に恥ずかしくなってきた。

「が、学校の廊下でなんて・・　春樹・・・」

今は一夏よりも春樹のことが頭の中に鮮明に浮かぶ。
あのやさしい笑み、言葉・・・何から何までが頭の中に出てくる。

春樹の姿を想像しながら、視線を隣のベッドに向けるとルームメイトがいない。
先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻ったから今はもうあの二人と同じ部屋ではなくなっている。

「あれ？　どこに行ったんだろう」

起きてどこかに行ったというのではなく、最初からそのベッドは使った形跡がない。
つまりは昨日の夜から？・・・

「・・・まあ、いいや」

夢の続きの方が大事。
今からまた眠りについたら続きが見れる・・・かも？
そう期待しながら目をゆっくりと閉じる。

（せっかくだからあのキスの続きも・・・　なんてね）

～シャルロットＳｉｄｅ　ｏｕｔ～

ちゅんちゅん・・・

「ふ～、着替え終了っと」

外からはスズメの鳴き声とともに朝日が流れ込んできている。
朝が苦手な僕だけど、今日は珍しく早く起きれて頭もすっきりとしていた。

「いっく～ん、そろそろ起きないとだめだよ～」

クローゼットの前からまだベッドの上で寝ているいっくんに話しかけるが起きる気配がまったくない。
もう少し寝ていても問題は・・・ないことないか・・・

とりあえず起こそうと思ってベッドに近づいたけど、実は一つだけ疑問に思ったことがあった。

「昨日寝る前にいっくん見たけどこんなに大きくなかったよね？」

いっくんの丁度お腹から下半身にかけてがものすごい膨らんでいるのだ。
人間、一日でこんなに急激に太るはずもないし、一体どうしたんだろうか。
顔をゆっくりと近づけて耳をすませる。

「・・・誰か寝てる？」

そう、耳をすませて聞いてみるとその膨らみの部分からすーすーと寝息が聞こえてくるのだ。
ごくっと喉を鳴らせて、勢いよく布団をめくり上げる・・・

「え、え～と・・・　見なかったことにしよう。　うん」

僕は何事もなかったかのように布団を掛けなおす。
うん、何もなかった・・・
『あんなこと』ありえない。　うん、ありえないんだよ。

「う、う～ん・・・　春樹・・・　ちょっと動きにくいんだが足元のやつどかしてくれないか？」

「そ、それは無理だよ。　自分で確認してみてよ」

いっくんが目を覚ましその膨らみをどかして欲しいことを言ってくるが、正直に言っちゃおう。
無理です。
だって・・・

「ん・・・　なんだこの膨らみは・・・　ッ！？」

どうやらようやくわかったみたいだ。
自分の布団の中に何が入っているのか・・・　きっと気分的にはパンドラの箱を開けた気分だろう。

「ら、ら、ラウラ！」

ばっと布団が空を舞い、床に着地。
そして、現れたのは・・・

「ん・・・なんだ・・・？　朝か・・・」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒさん。
なんと彼女がいっくんの布団の中にもぐりこんでいたんだ。
まだ百歩、いや、一億歩譲ったとしてベッドに潜りこんだ事はいいとしても、それ以外にもまだ問題があった。

「あ、あの～・・・　ボーデヴィッヒさん・・・　服は？」

ボーデヴィッヒさんは服を着ずにベッドへと侵入していたのだ。つまり現状を詳しくしてみると、いっくんがパジャマ姿で、ボーデヴィッヒさんがすっぽんぽん。
こんなのどこの誰が見ても事後にしか見えないけど、まあそれはありえないだろう。

「おかしなことを言う。　夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ。
そうではないのか一夏？」

な、何か猛烈に勘違いしている人がここに一名いるような・・・
正直、夫婦とは包み隠さぬものというセリフは・・・ん～、でも当たってるのかな？

「それはそうかもしれんが・・・って違うわ！　服着ろ、服っ！」

やっぱり違うんだ。

いっくんは目を隠しながらボーデヴィッヒさんに服を着るように要求する。
もちろん僕も背だけを向けて声だけを聞いている。

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。　将来結ばれる者同士の定番だと」

「それって何か絶対に違うよねっ！？」
「絶対違うだろっ！！」

あ、危ない勢いに乗って振り向きそうだった。

「心配するな春樹。　明日はお前にしてやろう」

「明日も来るの！？」

あ、明日は僕の布団が膨らんでいるの・・・
明日は寝る前にバリケートでもつけておかないとダメなような気がしてきた・・・

「それにしても、朝食までにはまだ時間があるな」

シーツを自分の体にくるくると巻きつけて後ろ髪を散らす。
トーナメントが終わってからボーデヴィッヒさんは今までと正反対・・・いや、まったく違った行動をするようになってしまっていた。
食事中に同席はまあぜんぜん良いとしても、入浴中、さらにはトイレの中まで現れたり本当にビックリすることばかりだ。
そのたびに僕といっくんは心臓発作でも起きて死にそうになるくらい、心臓の鼓動が早くなる。

「どうした？・・・あ、あんまりそう見つめるな。私とて恥じらいはある」

いや～、いっくんのえっち・・・

「ラウラ」

「なんだ？」

「俺は奥ゆかしい女が好きなんだ」

真剣な顔をして何を言うのかと思えば、なるほどさすがはいっくん。
土壇場でナイスアイデアを閃くね。
ボーデヴィッヒさんは驚いたようにわずかにだけど目を開く。そして彼女の前でいっくんは言葉をかみ締めるように二回顔を縦に振りうなずいた。

「だが、それはお前の好みだろう？」

「え？」

「私は私だ」

しっかり自分の意思を持ち、それを伝えるかのように瞳がまっすぐいっくんを見つめる。
自分を見てくれと言わんばかりに胸に手を当てるその姿がさまになっていた。

「大体お前らが言ったことではないか、好きなようにしろと」

「「ぐっ（うっ）・・・」」

僕といっくんはその返答にカエルが潰されたときのような声を出すしかなかった。
で、でもここまで好きにしていいって意味じゃないと言うか・・・
困ると言うか何と言うか・・・

「春樹はどうなんだ？　私のようなやつは好かんか？」

「う、ううん・・・　そんなことないけど・・・」

「ふむ」

満足そうな笑みを浮かべて頷くボーデヴィッヒさん。
ここまで言い寄られてイヤという男の子がいるのかな・・・　そんなことがふと頭の中で思い浮かんだ。

この後突然いっくんとボーデヴィッヒさんは取っ組み合いをベッドの上でぎしぎしと音を鳴らしながらし始めた。
僕は巻き込まれるのがいやだったから一人で先に食堂に向かうために部屋から脱出。
廊下を歩いている際、後ろから誰かの怒声と共にいっくんの悲痛な叫び声が聞こえてきたけど、自分の命にかかわると思って戻らなかった。

「あれ？　シャルロットさん？」

一年食堂で自分の朝ごはんと頼んでどこに座るか探していると、ふ

と視界に入ったのはシャルロットさんだった。
よく見ると何かため息がついていけど何かあったんだろうか。

「・・・結局見れなかった・・・むしろ眠れなかった・・・」

シャルロットさんの近くまで行くとそんなことを言っているのが聞こえた。
見れなかった？　眠れなかった？　どういうことなんだろう。

「シャルロットさん、何かあったの？」

「は、春樹！？」

隣の席に朝御飯をテーブルの上においてから着席する。
ちなみに今日の朝御飯は、焼き鮭の定食と別で頼んだうどんだ。
シャルロットさんの前には、パン、チキンサラダ、後はコンソメスープが置いてある。

「おはよ～、昨日眠れなかったの？」

「そ、そんなことないよ？　ちょっと夢の続きを見ようと思って二度寝をしようと思ったんだけど」

「夢？　二度寝？」

「あっ！！　な、なんでもないよ！　気にしないで？」

あたふたしながら両手を前に出してぶんぶんと振り回す。
ま、まあ気にしないでって言うんだからそこまで心配しないでも大丈夫かな？

「おい春樹、お前は私と一夏をなぜおいて行った？」

突然機嫌が悪そうな声が聞こえてきた。
見てみるとボーデヴィッヒさんが片手にいっくんの腕、そしてもう片方に朝御飯が乗ったおぼんを持っている。
いっくんの隣にはボーデヴィッヒさんだけでなく箒ちゃんもいた。
何よりも気になるのは朝からすでにいっくんがぼろぼろだと言うことだ。

あ、あの場所にいなくて良かった。　もしいたら僕もいっくん見たいにぼろぼろだったかも・・・

「おいていった？　どういうこと春樹？」

「うん、朝からねボーデヴィッヒさんが僕らの部屋に来てたんだよ。
それも服着てなかったからさ～」

「ば、バカっ！　春樹っ！」

「はっ」

シャルロットさんの質問に素直に答えてしまった。
いっくんが止めに入ったがそれも手遅れ、すでにシャルロットさんの耳に入ってしまった。
僕が言った事を聞くとシャルロットさんは顔を下に向けてどんどん黒いオーラを帯びていく。
あ、あははは・・・　もうこれは笑うしかないよ。

「へ～・・・　ということは体を見たわけ？　それも服着てなかったんだよね？」

「二人とも私の体に見とれていた」

ボーデヴィッヒさんが火に油を注いだ。
あ～・・・　終わった。　また《盾殺し》のときみたくぶっとばされちゃうよ。
と言うより、僕は見とれてないんだけどな。

バシィィン！！

「痛ッ！！　箒、食堂まで木刀持って来るなよ！」

「お前は本当に信じられんやつだ一夏っ！　フンッ！」

いっくんが木刀で思いっきり殴られる。
僕も今まさに吹っ飛ばされるところだけど・・・

「春樹の・・・　バカぁぁぁぁ！！」

部分展開により出現した第二世代最強・・・《灰色（グレー）の鱗殻（スケール）》が火を噴いてしまい僕はその日・・・　お星様になった。

キーンコーンカーンコーン・・・・

学園内にＳＨＲが始まるチャイムの音が鳴り響く。
これが予鈴だとかなりうれしいんだけど、そんなはずがない。

「やばい、やばい、やばいよぉ！！」

ちなみに僕は食堂でシャルロットさんにぶっ飛ばされて今急いで帰ってきたところで、もうダッシュで自分の教室に向かっている最中なんだ。
ＩＳを展開して行けば楽勝じゃないって言われるかもしれないけど、このＩＳ学園では敷地内であっても許可なくＩＳの展開は許されない。
だから遅刻しそう（現状は完璧に遅刻）だったんで展開しましたなんて言ったら、ちーちゃんに一発《黒の出席簿（ブラックアテンデンス）》をお見舞いされてしまう。
なんてきれいごと言ってるけど、僕は内心かなり展開したかった・・・

そんなことを考えているとあっという間に教室前まで到着。
勢いよくドアをスライドさせて中に飛び込む。

「ごめん！遅れちゃったぁぁぁ！！　ぶへらっ！」

「九曜、遅刻だ馬鹿者」

教室に入るとちーちゃんが待ち構えていたかの如く立っていて、入ると同時にあのお堅い出席簿で叩かれた。

「いつつつ・・・　ちーちゃんひど――――――」

ドガンッ！

「織斑先生だ。　まったく・・・」

またもや出席簿で頭を叩かれた。
それにしてもあの薄い出席簿でなんで電話帳で殴られたみたいにドガンなんて音するの？
それに、それ相応の痛みまで・・・　痛いよ～・・・

「織斑とデュノアは校舎内でＩＳを無断で展開して放課後に掃除の罰を与えた。　お前もだ九曜」

「え～・・・」

なんていやそうな声を上げた瞬間にちーちゃん・・・　ううん、織斑先生の目がギロッ、さらにピカッと背景が光ったような気がした。

「な、なんでもないよ～・・・あは、あははは」

笑いでごまかし、急いで自分の席に座る。
クラスのみんななんてクスクスと影で笑っていたので自分の席に向かっているとき、滅茶苦茶恥ずかしかった。
もう、穴があるのならその中に飛び込みたいくらいだったけどそんな穴あるはずないよね。
あるのは窓・・・　窓を開けて飛び込んでもいいけどどうだろうな～・・・
骨折くらいで済めばいいけど、下手なことを打ったら確実に死んじゃうよね。

「これで全員集まったな。　今日は通常授業の日、ＩＳ学園とはいえお前たちも高校生扱いだ。　赤点なんて取ったらどうなるかわかってるな？」

そう、ＩＳ学園では授業自体は少ないんだけど、普通の高校のように一般科目もある。
中間テストはなくて、期末テストのみがある。この期末テストで赤点を取ってしまえば大事な大事な夏休みが補修という監獄が待っている。たぶん、僕の場合は問題なく夏休みはもらえるだろうけど気を抜いたらだめだね。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、この年齢にもな

って忘れ物などするなよ。　3日間だが学園を離れることになる。
自由時間では羽目を外し過ぎないように」

校外特別自習期間――――――来た・・・　ついに来たんだ・・・
僕が長い間楽しみにしていた『臨海学校』が！

この臨海学校は3日間あって、その3日間の日程のうち初日は自由時間をもらえるので、みんなももちろんのこと僕もテンションがかなり上がっている。
しかし、そこには一つだけ問題がある。
僕は水着を持っていないんだ。
いっくんも僕と同じみたいだけど、彼の場合は買うのがめんどくさいとか言っていた。
それをオルコットさんと鈴音さんに言ったらものすごい文句を言われていたな～。

「それではＳＨＲを終わる。　各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。　今日は山田先生お休みですか？」

クラスのしっかり者こと鷹月静寝（たかつきしずね）さんがちーちゃんに質問する。
確かに教室を見渡しても山田先生の姿が見えない。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。
なので山田先生の仕事は私が今日一日変わりに担当する」

なるほど・・・　って、ええ！？
現地視察ってことは一足先に臨海学校なるものを満喫してるんじゃないのかな山田先生は！
うらやましいよっ！

「ええっ！？　山ちゃん一足先に海に行っているんですか！？　いいな～」
「ずるい！　ずるいよ山田先生！！」
「うちも行きたかったわ～・・・　ええよ・・・向こうに行ってから山田先生にはいっぱいなんか奢ってもらうから」

みんなも僕と同じように口に出して妬み始めた。
ちーちゃんはみんなの声を聞いて眉間にシワを寄せ始める。

「あー、いちいち騒ぐな鬱陶しい。　山田先生は、仕事で行っているんだ。　お前らの考えてるように遊びに行っているわけではない」

はーい、とみんな元気よく返事を返す。
いや～、でも仕事でも一足先に現地にいけるのはやっぱりうらやましい。

そしてその日の放課後。
夕焼けによって教室内はオレンジ色に染まっている。
その中には3人の人影が見える。
僕、いっくん、そしてシャルロットさんの三人だ。
言われたとおり、教室の掃除をしているわけだけど3人だとやはり時間が掛かってしまう。
このＩＳ学園では、普通生徒は掃除をしない。
普通の学校なら生徒が掃除するのが普通と聞いていたけど、ここでは専属の清掃業者の人が毎日教室、廊下、天井に至るまで全てピカピカに掃除してくれるんだ。

「うーん、楽しいな」

「掃除は別に嫌いってわけじゃないけど、流石にこの大きさの教室を3人って言うのはちょっと・・・」

「ふ、二人とも変わってるね、掃除が嫌いじゃないなんて。一夏の場合好きなんでしょ？」

無言のままの掃除よりこうやって話をしながらの方がはかどる。

まあ、束さんが散らかした物を掃除するより大分楽だけどね。
シャルロットさんは不思議な顔をしながら手を動かす。

「ん、んん～」

「いいよいいよ、シャルロットさん。　女の子には重たい物を持たせられないよ」

「それにそれたしか岸里さんの机じゃなかったか？」

岸里さんの机――――――
教科書を全て置いていっているのでかなり重くなっている。
本人は『フルアーマー机』と笑いながら言っていたけど、ある意味本当にフルアーマーだ。
なんせ全教科書が入っているのだから。

「へ、平気だよ。　一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに・・・」

そのままシャルロットさんがかなり重いであろうフルアーマー机を持ち上げるが、重量に負けて足を滑らせる。僕はそばについていたので、急いで彼女を後ろから支えた。

「あ、ありがとう春樹」

「っと。　ほら、流石に無理があるんじゃないかな？　僕といっくんが後はやっておくからシャルロットさんは椅子に座って待っててよ」

「えっ？　で、でも・・・」

「春樹の言うとおり座っとけって」

「はい、じゃあ交代」

抱きしめるかのような格好から離れてシャルロットさんから机をとる。

う・・・何これ本当に重いんだけど・・・

こんなの女の子に持たせられないよ・・・

「あっ・・・」

「うん？」

僕がシャルロットさんから離れた瞬間彼女は声を上げた。

「な、なんでもないっ」

「そう？」

それにしてもようやく半分か・・・
時間掛かりそうだな～これ。

～シャルロットＳｉｄｅ～

（は、春樹が後ろからっ！　後ろからっ！）

まさか後ろから抱きしめられるような感じなると予想してなかったから、バクバクと高鳴っている心臓を押さえる。
このとき頭の中をよぎったのは今朝見た夢の内容。
廊下ではないけど夕暮れとオレンジ色に染まっている景色・・・
夢の中の背景と重なっていた。

「あ～、そういえば」

「ん？どうした？」

「ひゃいっ！？」

とっさに返事をしてしまったがために変な声を出してしまう。
自分で言うのも変だけど、あまりにもおかしな声だったので、放ってすぐに自分の口を覆った。

「ど、どうかした、シャルロットさん」

「熱でもあるのか？」

「な、なんでもない！　なんでもないよっ！？　ち、ちょっと考え事してたから、それだけ」

「そう？」

特に疑問に思われなかったから良かった。
春樹はまた机を運び出す。

「その僕ね？　てっきりシャルロットさんはしばらく男の子のフリをするのかなって思ってたんだけど、翌朝あっさり女の子になってたからなんでかな～って」

「あ～、俺もそれ気になったんだよな」

「あ、えっ？　えっとね、その・・・　それはね、えと・・・」

そのことについてはちょっと事情があったから、正直それを聞かれると痛いところではあった。
いつもはきはきと受け答えしてきたけど、この質問ばかりはずばっと返事を返すことができない。
言葉に詰まっている所を見た春樹は、首をかしげながらまた口を開いた。

「え、え～と・・・　言いたくなければいいんだよ。　ただ気になっただけだから」

「気になってたの・・・？」

「そりゃあ、気になるだろ？　なあ春樹」

「うん、でも本当にいいんだ。　無理に話そうとしなくても」

二人に女の子として見てもらいたかった・・・からなんて口が裂けても言えないよ～。
それに今朝の夢の所為でなんだか春樹ばかり意識しちゃうし・・・
あうぅ・・・

「あと思ったんだけど」

「えっ？　う、うん」

「シャルロットさんて女子制服可愛いね、あはっ」

ズキュゥゥゥン！　バキュゥゥゥン！　ドガァァァン！

ライフルで二発撃たれた後に、ハートのバズーカが飛んできた。
もしＩＳのようにシールドエネルギーがあったとしたら０を通り越して、人体に影響を及ぼすほどのダメージ。
もう僕のエネルギーという心は一気に持って行かれた感じがした。

「お、おいおい春樹」

「いっくんも可愛いと思わない？」

「ま、まあ可愛いけどさ、いきなりすぎじゃないか？」

い、いきなりすぎだよ～・・・
もうっ・・・
きっと今頃顔がさくらんぼみたいに赤くなってるんだろうな、と思いながら両手で顔を隠す。

「う～ん、せっかくだからニックネーム考えちゃおうか」

「に、ニックネーム！？」

「うん。　いやかな？」

「い、いやじゃないよ！！　全然大丈夫っ」

うん！　むしろ嬉しいよ！
僕は嬉しさのあまりスカートを何度も整えたり、髪に手をやったりそわそわしてしまっていた。
だって・・・だってこんなうれしいこと・・・　春樹・・・もしかして僕のこと・・・す、す、好き？

「シャー・・・う～んなんかのアニメで聞いたような感じだし・・・
シャロは・・・なんだか違和感があるな～・・・」

「じゃあ春樹、シャルはどうだ？」

「おお～、いっくん今日は冴えてるね」

「いや、いつも冴えてるだろ？」

「ってことで、いっくんの案でシャルはどうかな？　シャルさんって感じになるけど」

「シャル・・・　うん！　いいよ！　すごく良い！！」

大好きな人に呼ばれる名前はまた一味違っていた。
呼ばれるとこう・・・なんていうんだろう。
何もなかった野原に一気に花が咲き誇るって言うか、そんな感じがした。

「あっ！　後、シャルさん」

「な、何？」

浮かれていた時にいきなり話しかけられたから、いつもより少し声のトーンが上がってしまった。

「つ、付き合って欲しいんだけど・・・」

「――――――――えっ・・・？」

そういわれた瞬間、僕の体内時計が止まってしまった。

エピソード22　【一つの空間に男女　＝　それはそれは面白いことが起こるよ】

「うんうん、晴れてよかった」

週末の日曜日。天気は、もういやだってくらいの快晴。
来週からいよいよ臨海学校が始まるので準備のために、街に繰り出しているんだけど、僕の隣にもう一人いる。

「・・・」

シャルさんといっしょにいるわけだけど、なぜか不機嫌そうな顔で僕を見てくる。
う～ん・・・　なんだろう。

「・・・僕はね夢が砕け散る音を聞いたよ・・・」

な、何？　夢が砕け散る音って一体何を聞いたんだろうシャルさんは。
朝からずっとこの調子なんだよね。
もう、ずーん・・・というか、どよよーんっていうか・・・　出来たと確信していたテストが返ってきて、ルンルン気分の中そのテストの点数を見た瞬間にあまりにひどい点数で崖から突き落とされた感じなんだ。

ちなみにシャルさんの格好は、半袖の薄い黄色のブラウス。そしてその中に白のワイシャツを着ている。
下はふんわりとしたティアードスカートを履いていて、丈が短い。
この姿をみると本当にシャルさんは女の子なんだなと再認識してしまう。
つまり何が言いたいかって言うと可愛いと言うことだね。

「そういえば一夏は？」

「最初は来るって言ってたんだけど、今日になってやっぱり面倒だから俺の分も買ってきてくれって」

「い、一夏らしね・・・それよりも春樹」

「ふぇ？」

シャルさんは急に止まって背後から何かどす黒いオーラを出したので、それを感じた僕は思わず変な声を出してしまった。

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

ふんっと鼻を鳴らしテクテクと僕を通り過ぎて歩いていく。
な、なんだか今日はものすごい不機嫌？　ううん、なんだかって言

うよりあれ確実に不機嫌だよね。
でも確かに純情をもてあそんじゃダメだね。
『女の子に対してはやさしくしないとだめなんだよ～』これ束さんの名言。

「うん、僕もそれに同感だよ。　誰が純情もてあそんだの？　話なら聞いてあげるよシャルさん」

「はぁ～・・・　春樹の場合恋愛対象に関して付き合ってくれなのか、買い物に付き合ってくれの方かわからないんだもん。　はぁ～・・・　ちょっと期待してたんだけどな・・・」

何を言ったのかはよく聞こえなかったけど、盛大にため息をついたのは聞こえた。
えっ？・・・　これって僕の所為？　違うよね？　違うと言ってよ！！

「え、ええと・・・　僕じゃあダメかな？　話すだけでも気が楽になると思うけど」

立ち止まったシャルさんの肩の上に優しく手を置いてそういったけど、シャルさんは振り向いて、

「・・・はぁ～・・・」

今度はさらに長い長いため息をつかれた。
う、う～ん・・・

「あっ、そうだ！　何かご馳走してあげるからさ、元気になってよ！！　ほ、ほら、シャルさんは笑わないと可愛い顔が台無しだよっ！？」

「か、かわいっ――――　ご、ごほんっ。　な、何ご馳走してくれるの？」

うっ・・・そこまで考えてなかった・・・
たしか女の子はスイーツ系統が好きだったはずだし、後は服・・・
とか？

「え、えーとね・・・　あ、あの噂の駅前のパフェ・・・とかじゃだめ？」

「パフェだけ？」

シャルさんは子犬が何かをねだるようにきらきらと目を輝かせながら僕を見てきた。

「えっ？　じ、じゃあ・・・　とりあえずシャルさんが食べたい物ご馳走するよ？」

「ん。　あとは・・・」

ムギュッ

僕の腕に突然抱きついてきた。
その瞬間僕の思考回路は停止。
そして再起動と同時に体内温度が上がってきたので、瞬時に体内に内蔵されている冷却ファン（ないけどね・・・）を起動させるけど熱は上がる一方。

「あの～・・・　シャルさん？」

「き、今日一日こうさせて？　そうしたら元気になるかも」

シャルさんが元気になるんだったら・・・
仕方がない、頭の中の冷却ファンの冷却レベルを上げてでも・・・
落ち着け僕、落ち着け僕、落ち着くんだ！

こうやって立ち止まっている間にも心臓はバクバクと動きまくる。
外気温、自分の体温、そしてシャルさんの体温とトリプルアタック

が僕を襲う。
う～ん・・・今日生きて帰れるのか心配だ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「「・・・・・・」」

駅前へと向かって歩き出す春樹とシャルロット。
その姿を物陰から目を光らせて見張る二つの・・・いや、二人の人影があった。
ふたりが横断歩道の信号が青になり、歩き出すと同時にその二つの影もゆっくりとしたスピードであとを追う。
その二人の人影、一人はツインテール、そしてもう一人はブロンドヘアー。
そう、鈴とセシリアその二人である。

「・・・なんですのあれ」

「・・・腕・・・組んでる？」

「組んでますわね」

誰が見てもそういうであろう言葉を発して、セシリアはどこか羨ましそうな表情で二人の腕を組んでいる姿をしぶしぶと見つめる。
その隣で鈴は何やら二人の腕を組んでいる行為に納得がいかないのか不満そうな顔をしている。

「そういえば鈴さん？　あなたどうしてここに？　一夏さんの所へ行ったと思っていましたのに」

「そっちこそ何でここにいるのよ」

バチバチと歩道のど真ん中で闘争心を燃やす二人。
周囲の人はそれを避けるかのように二人から1メートルほど離れて通りすぎさっていく。
迷惑なことこの上ない。

「ほう、楽しそうだな。　私も交ぜるがいい」

「「！？」」

いきなり背後から聞き覚えのある声が聞こえてきて、驚いて振り返る。
そこに立っていたのは、先月鈴とセシリアが敗北した相手、ラウラ・ボーデヴィッヒ本人だった。

「あ、あんたいつの間に！」

猫のようにそのツインテールを立たせながらラウラを威嚇する鈴。

「そう警戒するな。　今のところ、お前たちに危害を加えるつもりはない」

「し、信じられるものですか！」

前にあった草試合で鈴とセシリアは2対1という圧倒的有利の立場で負けてしまっている。
それのせいでこの二人は懐疑心を強くしていた。

「あのことは・・・まあ許せ」

さらりと言うラウラに対し、一瞬何を言われたのか理解できずに呆けてしまう。
まさかラウラからそんな言葉が出てくるなんて誰が思ったであろうか。

「ゆ、許せって・・・あんたねぇ・・・」

「そんな簡単に・・・」

納得が出来ない鈴とセシリア。

「そうか。　では私は春樹という嫁を追うので、これで」

「あ、あんた一夏は・・・」

「今頃、ベッドの上でじたばたしているはずだ」

一夏、春樹の自室では・・・

「ど、どうなってるんだぁぁぁ！！」

ベッドごと縄でくるくると巻きつけられ身動きが取れなくなっている一夏の姿があった。
左右交互に体を動かすがただベッドが揺れてガタンゴトンと音を立てるだけで、縄が解ける気配がない。
何があったかというと春樹を見送ってからベッドの上でいると気がついたら寝てしまっていて、目を覚ますと何者かによって体を縄で縛られていたという。

「くっそぉぉぉぉ！！」

ガタンゴトンと音を立てながら一夏の声が自室の中に響き渡った。

「な、縄で縛る必要性ってあるの？」

「余計なことをしないように身動きを封じさせてもらっただけだ」

余計なことって何、と疑問に思う鈴とセシリアだったがそこは声に出して質問しなかった。
二人が気がつくとラウラは一人でテケテケと春樹とシャルロットの後を追っていることに気がつき、慌ててそれを止める。

「ま、待ちなさいよっ！！」

「追ってどうしようといいますの！？」

ラウラはその問いに首をかしげながら純粋に答える。

「？　決まっているだろ、私も交ざる」

その目は何の冗談も言っていなくて、さらにはその回答した内容を直ちに実行するという目だった。
何がおかしいと言っている目をしているので怯んでしまう二人。
こうまではっきりと言われてしまうと、その躊躇ない発言、そしてその行動に対して羨ましさと悔しさが同時に襲ってくる。

「あ、あんたはねぇ・・・　未知数の敵と戦う場合はまず情報収集が先でしょ？」

「そ、そうですわ！　追跡ののち、あの二人の関係を見極めて模索するべきですわ」

「ふむ・・・なるほど。　その考えには同感だ」

三人は建物の影に隠れ、こそこそと話を始めた。
はたから見たら怪しいこと極まりないのであった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～春樹Ｓｉｄｅ～

「春樹、水着売り場はこっち」

「ち、ちょっと待って！？　何で女の人用の水着売り場に連れてくるのっ！？」

駅前にあるショッピングモールに到着。
市のどこからでもアクセス可能なこのショッピングモールは週末ということもあってかなりにぎわっている。
そして僕たちは今二階の水着売り場にいるわけなんだけど、なぜかシャルさんは僕を女の人用の水着売り場まで引っ張っていった。
てっきり水着売り場で一度別れて、自分の水着を買ってからまた集合と思っていたのがとんだ予想外の展開だ。
ちなみに男の人用の水着は今いる場所のちょうと逆サイドに位置している。

「春樹は・・・その・・・僕の水着姿見たくない？」

突然ものすごい質問がやってきた。

「そ、そりゃあ・・・見たいか見たくないかって聞かれると見たいけど・・・」

そう答えるとシャルさんはパァッと顔を明るくしてそのまま僕をずるずると引っ張りながらレディース水着売り場の最深部へと向かう。
流石にここまできて抵抗しようとは思わなかった。
だって・・・　ねえ？　ここで騒いだら僕子供っぽいじゃん。

ようやく立ち止まり、数秒間どれがよさそうか悩むシャルさん。
そして二着の水着を手に取った。

両方ともビキニだけど、柄がまったく違う。

「春樹、どっちが似合うと思う？」

そういいながらその手に取った水着を僕に見せる。
一つは黄色と黒のしま模様のやつ、そしてもう一つは黄色の生地の上にハイビスカスのシルエットがついているやつだった。
正直どっちでも似合うと思うな。
なんせシャルさん可愛いし、体も引き締まってるし・・・って僕は何を言ってるんだろ。恥ずかしい

「う～ん・・・どっちでも似合うと思うよ？　シャルさんの好きなほうはどっちなの？」

「どっちもいいと思うけど、は、春樹に決めて欲しい・・・だめ、かな？」

「えっ？　う、う～んと・・・」

上目遣いで僕を見つめるシャルさん。
な、なんか滅茶苦茶まぶしいよ！！　なんだか目元がきらきら光っているように見える！！

「じゃあね・・・　こっちがいいと思うけど一度着てみたら？」

そう言いながら指を指したほうは、黒と黄色のしま模様の奴。
もう片方のも嫌いではなかったけど、気分的にこっちにしたんだ。
でも着てもらってから本人に最終判断をしてもらわないとね、流石に。

「こっちか～、じゃあちょっと着てみるからついてきて」

「わかった、それじゃあ待ってるね・・・って・・・ついてきて？」

「だ、大丈夫。　時間はかからないからっ！！」

いきなり近くにあった試着室に連行。
そしていきなり上着を脱ぎだすシャルさん。

「ち、ちょっと、シャルさん！？」

あたふたしながら両手で目を隠して後ろを向いてからしゃがんだ。
もう何がどうなっているのかわからなくなって今僕の頭の回路は高温になって冷却装置最大稼動している。

「し、シャルさん？」

「ん・・・ち、ちょっと待って？」

ぱさりと衣服やなんやらいろいろ置かれたような音が聞こえる。
絶対脱いじゃってるよ！　脱いじゃってる！！

カサ、カサ

そして衣服が擦れ合う音が耳に入ってきて余計の僕の緊張が高まり始めた。
この間までは男の子として認識していたから問題はなかったけど、今は女の子だから・・・

「い、いいよ・・・」

もう混乱しすぎて何をいいよって言っているのか理解不能になってしまっている。
だけどここでいいよって言われると、見てもいいよと言っている他ない。
僕は両手で覆い隠している目を開けて、ゆっくりとびくびくしながら後ろを振り向く。
目線を上に上げてみると、そこには・・・美人さんが立っていた。

「・・・・」

「春樹・・・？」

ずっと黙っていたからシャルさんが頬を赤くしながら心配そうに見つめてくる。

正直に言っちゃうね？　――――――可愛すぎて言葉が出ないんですけど・・・

「い、良いと思うよ？　うんっ！　良い！！」

「一応もう一つのも・・・」

シャルさんはハイビスカスの絵がプリントされている方の水着に手をかける。

「それで良いと思うよ！？　うん、それにしなよ！！」

また着替え始めようとしているので反射的に、そう言ってしまう。

別にそのもう片方の水着がイヤってわけじゃないけど、また着替え始めたら正気を保てる自信がない・・・

「じゃ、じゃあ、これにするね？」

「うん！　僕は出て待ってるから！」

この空間にいるといろいろとまずいと思って勢いよく試着室から脱出するけど、そこで新たな問題が発生した。

「え？」

「「えっ？」」

カーテンをジャッと音を立てながら試着室から出てみると、鈴音さん、オルコットさん、ボーデヴィッヒさん、ちーちゃん、そして山田先生がいたんだ。
山田先生は口をぽかーんって感じで開けて、ちーちゃんは僕の姿を見て頭を抱える。

「馬鹿者が・・・」

「春樹っ！」
「春樹さんっ！！」

「春樹！」

獲物を狙うかの用に三人・・・ううん、三匹の肉食動物が襲い掛かってきた。

エピソード23　【叩かれすぎるとつるぴか】

「水着を買いに来たにしても、試着室に二人で入るのは感心しません。　教育的にもダメです！」

「「すみません・・・」」

僕とシャルさんは頭を下げて謝る。
引っ張られて入ったとしても、すぐさまそこから出なかった僕も悪い。

「あの～・・・　山田先生とちーちゃんはどうしてここに――――」

バシンッ！

「織斑先生だ。　何度言わせれば気が済むんだお前は」

背後に立っていたちーちゃんに切れがある手刀で頭に一発もらう。
よく頭を叩かれすぎるとはげると聞くけど、あれって本当なのかな？
なんかどこかのテレビの人が頭叩かれすぎて毛が生えてこなくなったって聞いたような気がする。

「私達も水着を買いに来たんですよ。　あ、それと今は職務中ではないので無理に先生と呼ばなくてもいいですよ？」

「ちーちゃん？・・・」

「だとしてもそう呼ぶな。　せめて千冬さんだ」

どうしてもちーちゃんと呼ばせてくれないらしい・・・
束さんがちーちゃん、ちーちゃん言ってるから僕もその影響を受けてしまって直すことができない。出来ないと言うよりすでに身についてしまっていることだから直すのが難しいと言った方が正しいかもしれないね。

「そう言えば・・・」

僕が振り向くとそこにいる『二人』はギクッと音を立てるかのように体を震わせる。
そしてその二人は隠れていた柱からゆっくりと出てきた。
鈴音さんとオルコットさんだ。
あれ？　ボーデヴィッヒさんもいたと思ったんだけど・・・　いや、いたよね？

「僕らが怒られてる間ずっと隠れてたから気になってたんだけど」

「あ、あんたには関係ないでしょ！！」

「そうですわ！　春樹さんはデリカシーがなさすぎです！！」

で、デリカシーがなさすぎ・・・
こんなこと言われたの初めてだから少し・・・ううん、大分内心傷ついた。
でも確かに今回ばかりはいろんなところでデリカシーがなさすぎた部分があったから反論ができない。

「九曜、少しいいか」

いきなりちーちゃんに呼ばれて人気がないエリアへと移動する。

「一夏はどうした？」

「いっくん？　本当は今日僕とシャルさんと一緒に水着を買いに来る予定だったんだけど、今日になって面倒だから行かないって言われて」

「そうか・・・　では九曜に決めてもらおう。　本当ならアイツに決めてもらおうと思っていたが、まあいいだろう」

決めてもらうって一体何を・・・

「ち、ちーちゃん、それは？」

「公共の場ではせめて千冬さんにしろ。　どっちの水着がいいと思う？」

なんだかさっきのシャルさんの時と状況が似ている。
ちーちゃんが僕に見せているのは専用のハンガーにかけられた水着二着。
片方は黒のスポーティーなもので、さらに後ろでクロスした部分がセクシーな水着。
もう片方は、無駄な部分を省いたかの様な機能性重視である白水着。

う～ん・・・ちーちゃんは白っていうより黒のイメージなんだよね～・・・

怖いとかそういう意味での黒じゃなくて、なんというか私服とか黒が似合うイメージというかなんというか。

「じゃあ・・・黒かな～？」

「黒か」

「でも僕の判断で決めちゃっていいの？　シャルさんにも水着のこと聞かれたけど、僕ファッションとかそういうのには疎いんだけど」

「似合う似合わないそういうのは問題ではないんだぞ九曜。　男に決めてもらうからこそ意味がある」

そういうものなのかな？
よくわからない・・・

「そういえば束から伝言だ」

束さんから？
そういえば学園に行くから別れたとき以来連絡もしてないな～。
ちゃんと寝て、ご飯たべてるんだろうか。

「彼女はできたか・・・だとさ」

「か、彼女っ！？」

「実際はどうなんだ？　お前の周りは織斑以外女なんだ、より取り見取りだろ」

確かにＩＳ学園は僕といっくん以外女の子ばかりだけど、そんな関係になった女の子なんて一人もいない。
そしてさらに僕のことを詳しく言っちゃうと彼女いない暦＝自分の年齢だ。

「彼女はいないよ・・・　でもね、大切な人ならいっぱいできた」

大切な人・・・
いっくん、箒ちゃん、オルコットさん、鈴音さん、シャルさん、ボーデヴィッヒさん・・・
そして他にも大勢の人々・・・
この短期間でこんなに・・・　こんな僕にも・・・

「ふっ・・・　束といた頃よりどこか少しだけ逞しくなったんじゃないか？」

「前からじゃなくて少しだけ？」

「私から言わせてみればあと１０年ほど修行が足りんな」

目を瞑りどことなく笑みを浮かべるちーちゃん。

１０年か・・・長いようで短いんだろうなきっと。
でもなんだかちーちゃんに認めてもらえたら本当に大人になったって意味なのかもしれないね。

ちーちゃんは僕が言った方の水着を手に持ち、レジのほうに歩いていった。

用事も全て終え、僕は今自室に戻るために廊下を歩いている。
僕といっくんの水着もちゃんと買って、例のパフェもシャルさんにご馳走した。
なぜか鈴音さん、オルコットさん、そして急にふと現れたボーデヴィッヒさんにもご馳走するはめになったけど。

「まあでも、楽しかったから・・・」

気がつくと自分の部屋の前に立っていた。
ドアを開けようとしたときに、何か異変を感じ取った。
中から何か聞こえてきているんだ。
がたんごとんと物が揺れている音、そしてうめき声・・・

「い、いっくん？」

ドアをゆっくりと開けて中へと進むと、僕の目に飛び込んできたのは・・・

「は、春樹！！　これを解いてくれぇぇぇ！！」

自分の体をベッドにクルクル巻きにしているいっくんの姿。
一体何がどうなっているのかさっぱり理解することができなかったから、僕の目は点になる。
いっくんにこんな趣味があったなんて・・・僕・・・

「お前絶対違うこと考えてるだろ！！　俺は決してＭなんかじゃない！！」

いつの間にかちーちゃんみたいに人の心を読めるようになっていた。
きっとたまたまだろうけどね。

僕は手に持っていた荷物を床に置いて、とりあえず縄を解く。
縄を解いてあげると、いっくんは背筋を伸ばしたり、肩をクルクル
と回したりして体をほぐしていく。
一体なんであんな自分を縛り付けるようなことをしていたんだろう。

「俺は何もやっていないからな。　気がついていたらああなってい
たんだ」

「ま、まさか・・・自分でも気がつかないくらい自分を痛みつけた
い――――――」

「違うからな!!　いい加減に俺がMという発想から離れろ!!」

「ちぇっ・・・　おもしろかったんだけどな～」

「お前が楽しんでいる間苦しんでいた俺の身にもなってくれ・・・
そういえば水着は？」

僕は床に置いた袋の中から一つの包みを取り出して渡す。
もちろん中身はちゃんとした水着だ。

「はい、とりあえず似合いそうなの買ってきたよ」

「おう。　ありがとな」

「うん・・・」

「どうかしたか？」

「ふぇ？　う、ううん！！　なんでもない！」

顔に出ちゃってたか・・・
実はちーちゃんと別れる際にこそっとあることを言われたんだ。
束さんからのもう一つの伝言。
内容は束さんに預けてある唐梅のパーツのことだった。

（やっぱり・・・　起動できなかったか。　一体・・・どうして・・・）

「海っ！　海が見えたでぇぇ！！」

クラスの女の子の大きな声が響く。
薄暗い消灯がついているトンネルを抜け、光がバスの中を差し込む。
そして窓の向こうには太陽の光を反射して宝石のように光り輝く海が見えている。

そう、今日は臨海学校当日、天候にも恵まれて快晴だ。

「海だぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「お、おい春樹、少し落ち着けって」

バスで隣の席に座っているいっくんが僕を抑えようとする。
なんせいっくんが窓際に座っていて、それを無視するかのように僕が身を乗り出しているからだ。

「春樹さんは海が好きなんですの？」

通路を挟んで向こう側に座っているオルコットさんが僕に質問してきた。

「うんっ！　見るのも遊ぶのも大好きだよって・・・　ボーデヴィッヒさん？」

「・・・」

オルコットさんの隣でずっと黙り込んでいるボーデヴィッヒさん。
そういえば今日は一回も話を交わしたことがない。
顔色が悪いわけでもないから体調不良ってわけじゃないみたいだけど・・・
でもさっきからなんでか周囲を警戒するようにキョロキョロと見ている。

「ボーデヴィッヒさ～ん。　大丈夫？　もしかしてバスで酔っちゃった？」

話しかけてもまったく反応がない。
一体どうしたんだろうか。

「おい、ラウラ。　おーい」

いっくんは席を立ち上がり彼女の顔を覗き込む。

「!?　なっ、なんっ・・・なんだっ！　ち、近いぞ！　馬鹿者！！」

「ぬあっ」

鼻を思いっきり押し返されて、変な声を上げながらいっくんが退却。
ボーデヴィッヒさんは顔を赤くしながら、息を荒くする。
ん～・・・　風でも引いてるのかな？
でもボーデヴィッヒさんに限って体調管理は怠るようには見えないし・・・　無理そうなら自分から言うかな？

「いっくん、今はそっとしておこう？」

「そうするか。　そう言えば春樹は泳げるのか？」

「うん、向こうに着いたら泳ぐ？」

「おう。　後、箒も誘っておくか、箒～」

いっくんは顔を出してオルコットさん達の後ろの席に座っている箒ちゃんに声をかけた。

「箒、泳ぐの得意だったよな？」

「そ、そう・・・だな。　昔はよく遠泳をしていたものだな」

あり？　なんだか箒ちゃんも様子がおかしいような・・・
いっくんも何かおかしいと思ったみたいで、僕の顔を見て二人で首をかしげる。
今の箒ちゃんは何て言うんだろう、落ち着きがなくてそわそわしているって感じがしている。

「シャルさんも泳ぐ？」

箒ちゃんの隣に座っているシャルさんにも声をかけてみる。

「うん、僕もそうしようかな」

にこっと笑いながら返事をするシャルさん。
う～ん、声をかけてよかったって気持ちになるよねっ！！

「そろそろ着くぞ。　全員ちゃんと席に座れ」

ちーちゃんの言葉で全員がさっとそれに従う。
まあなんたってあの鬼教官こととちーちゃんだから従わないと海で遊べないってこともありえる。

言葉通りすぐに旅館に到着。
四台のバスからＩＳ学園の一年生がぞろぞろと出てきてそして整列した。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。　全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「よろしくおねがいしまーす」」」」

ちーちゃんの言葉の後に、一年生全員挨拶をする。
聞いたところこの旅館は毎年お世話になっているみたいだ。
僕達が挨拶をした後、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。　今年の一年生も元気があってよろしいですね」

歳は・・・　う～ん、大体二十歳前半から後半くらいかな？

「あら、こちらが噂の・・・」

僕といっくんを交互に見てちーちゃんに尋ねる。

「ええ、まあ。　今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」

「いえいえ、お客様のご要望にお答えするのもこちらの仕事なので気になさらないでくださいな。　それよりいい男の子ではありませんか」

「挨拶をしろ、馬鹿者」

バシンッ！

僕は頭を叩かれ、いっくんは頭を押えられる。

「お、織斑一夏です。　よろしくお願いします」

「痛っ・・・　く、九曜春樹だよ・・・　よろしくね？」

バシンッ！！

「敬語はどうした」

つい今までと同じ口調で言った所為で、頭をまたひっぱたかれる。
これ他の人からすれば笑って終わりかもしれないけど、叩かれる側からしてみれば本当に痛いんだよ。

「く、九曜春樹です。　よろしくお願いします・・・」

「うふふ、ご丁寧にどうも。　清洲景子です」

そういって女将さんは再度丁寧なお辞儀をする。
その動きはとてもお淑やかな動きで、さっきの頭の痛みを忘れさせるほどだった。

「不出来な弟と生徒でご迷惑をおかけします」

「あらあら、織斑先生ったら、ずいぶんと厳しいんですね」

うん・・・

厳しさがなかったら今よりもっとモテると思うんだけどな～・・・

バシンッ！

「ふんっ、九曜にはもっと厳しくする必要があるみたいだな」

何で僕の心が読めるの・・・
それにいっくんなんて僕の叩かれる姿見て笑ってるし。
ひどいよ・・・

バシンッ！

「お前もだぞ織斑」

笑っていることがバレていっくんも僕と同じように叩かれる。
そして僕達のその姿を見ているクラスの子、そして別のクラスの子達は大きな声を上げながら笑っていた。

エピソード２４　【ウサミミとにんじん】（前書き）

タイトルどおりです。
いよいよあの方が表舞台に登場！！

いえ～い、田村ゆかりさんいいよっ！！

エピソード２４　【ウサミミとにんじん】

「ねー、ねー、ねー。　おりむーとくーよ」

旅館の従業員の人たちに自分の部屋に案内されている時に後ろから声が聞こえてきた。
この声はきっとのほほんさんだろう。
後ろを振り向いてみると予想通り、眠そうな顔をしている（たぶんだけどこれは素）のほほんさんがゆっくりととてつもなくゆっくり僕といっくんの方へと向かってきていた。

「二人の部屋ってどこ～？　一覧に書いてなかったー。　遊びに行くから教えて～」

そう質問してくると、周囲にいた女の子達が急に耳をこちらに向ける。
正直な話僕も自分の部屋がどこにあるのかわからない。
たぶんいっくんと同じ部屋になるだろうけど、どことは決まってないみたいだ。
山田先生曰く、部屋はどこか別の場所が用意されてるらしいけどね。

「ん～？　いっくん知ってる？」

「俺も知らないな。　廊下にでも寝るんじゃねえの？」

ろ、廊下・・・？
流石に旅館に来て廊下で寝るってことはありえないと思うんだけど、もしかして男の子だからってそこらへんなんともならなかったのかな・・・

「わー、それはいいね～。　私もそうしようかな～」

のほほんさんが起きているのか寝ているのかわからない表情で腕をブンブンと振り、どことなく喜ぶ。

「織斑、九曜。　お前達の部屋はこっちだ。　ついてこい」

ちーちゃんのお呼びが来た。
もう頭を叩かれたくないので呼ばれると同時に行動に移す。
話の途中で悪かったけど、のほほんさんとは「後からね」と言って別れた。

「えーっと、織斑先生。　俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか？」

「もしかしてちーちゃんと一緒ってことはないよね？　あははは」

「・・・」

無言のまま歩くちーちゃん。
笑っていた僕は笑いを止めて、顔を青くする。
適度に効いているエアコンがこのときだけ妙に寒く感じた。

「ここだ」

「「・・・・・」」

ドアに張られている紙は『教員室』と書いてある。
図星だった・・・
いっくんも隣で、「マジか・・・」みたいな顔をしている。
まさか本当に同じ部屋で寝ることになるなんて思いもしていなかった。
これだと資料で読んだ消灯時間を過ぎてもみんなでわいわいすることが出来ない。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけてくるだろうということになってだな」

はぁ、とため息をついてちーちゃんが説明する。

気持ち的には僕もため息をつきたかったけど、ここではしなかった。

「結果、お前達は私と同室ということになった」

「そりゃあまあ・・・」

「でも、ちーちゃ～ん・・・」

「反論は聞かん。　あと織斑先生だ九曜。　また叩かれたいのか」

あきれた声を漏らしながら注意される。
はぁ～・・・　なんだか部屋の件で臨海学校の楽しみが半減したような気がするのは気のせいだろうか・・・

「あと織斑には一応言っておくが、あくまで私は教員だ。　それだけ忘れるな」

「はい、織斑先生」

「九曜、お前は敬語を・・・」

「お～、広～い！！」

「・・・あいつは本当に束に似ている奴だ・・・」

ちーちゃんの言葉を聞かずに部屋へと入ってくるくると見て回る。
後ろから何かため息が聞こえたような気がするけど、今の最優先事項は部屋がどんなものかを探ること。
結果はかなり広くて、３人で寝るにしてもそれはそれはかなり広いもんだった。
これが教員室じゃなかったらどれだけよかったか・・・って文句言っても仕方がないけどね。

「さて今日は一日自由だ。荷物も置いたし、好きにするといい」

「えっと、織斑先生は？」

「何々？　ちーちゃんといっくんてそんな関係だったの？」

ガンッ！！

「春樹悪い。　よく聞こえなかった」
「もう一度言ってみろ、次言ったら明日の日のでは見れないぞ」

姉弟二人に息の合った拳骨が飛んできた。
冗談で言ったのに・・・　これ本当に禿げちゃうんじゃないのかな？
僕は頭をさすりながら涙目になる。
だけど泣かないよ！　男の子だからね！！

「一応軽く泳ぐくらいはする。　水着もそこの馬鹿者に選んでもらったのだからな」

「そうなのか春樹」

「うん。　変じゃないといいけど」

コンコン。

この部屋のドアがノックされる。

「織斑先生ちょっとよろしいですか？」

この声は山田先生に違いない。

「ええ、どうぞ」

ちーちゃんが返事したらドアが開いて予想通り山田先生が部屋の中に入ってきた。
そして直線上に立っていた僕といっくんと目が合い、なぜか先生はぽかんとする。
そして何かを思い出したかのように慌てだした。

「わあっ、織斑君と九曜君！」

「ど、どうかした、山田先生？」

「そんなに驚かなくても・・・」

見た感じ教員同士の確認に来たみたいだ。
手には書類を持っていたからたぶんそうだと思う。
この部屋に入ってくるときに書類に目を通していて、顔を上げたら僕といっくんがいましたと。

「ご、ごめんなさい、忘れていました。　そういえば二人とも織斑先生と同じ部屋でしたね」

「山田先生。　確かこれはあなたが提案したことだったはずだが？」

「は、はいぃっ！　そうですっ！　ごめんなさい！！」

ちーちゃんの視線を受けた山田先生は急に慌てだして、ぺこぺこと頭を下げる。
う～ん、この部屋割りの提案は山田先生だったのか。

「さて私達はこれから仕事だ。　二人ともどこへでも遊びに行って来い」

「うん、それじゃあさっそく海に行ってくるっ！！　ほら、いっくん行こう！！」

「お、おい春樹待てって」

「羽目を外しすぎんようにな」

ちーちゃんの注意にいっくんは返事を返したが僕はそのままもうダッシュで部屋をでた。
荷物から取り出した水着、タオル、スポーツドリンクやその他もろもろが入った袋を持っている。
やっとこのときが来たんだ・・・
長い間待ち望んだ海がぁぁぁ！！

「「「・・・・・」」」

更衣室に向かう途中で箒ちゃんと出くわした。
別に箒ちゃんに会うのは問題ない、むしろ一緒に行けるから良いんだけど、今この沈黙の状況を作っている原因は目の前の変な物体だ。
道ばたにね・・・　それも地面にね・・・機械のウサミミが突き刺さってるんだ。
これは明らかに束さんが頭につけているやつといっしょ。
それに『引っ張ってねっ』と最後にハートマークまでつけて張り出し紙がしてある。

「あははは。　これがあるってことは近くにいるのかな?」

「・・・これって・・・あの人のだよな?」

「知らん。　私はまったく知らん。　関係ない」

箒ちゃんは何も見なかったかのように振舞う。
これはたぶん・・・ううん、絶対に束さんだ。
ＩＳ開発者、箒ちゃんのお姉さん、そして僕の面倒を見てくれた人、
篠ノ之束さんに間違いないっ！！

「えーと、抜くぞ・・・」

「好きにしろ」

「あっ、ちょっと待って！」

いっくんがそのウサミミに手をつけ抜こうとするが、僕は一度止めてその場から離れて待機する。
一方箒ちゃんはというとすたすたと先に行ってしまった。

「いいよ～！」

「・・・なんで離れるんだ？」

何でって言われても・・・　ねぇ？

束さんのことだから絶対何か「危ない」ことを仕掛けてるに違いない。
そしていっくんは勢い良くその地面に突き刺さっているウサミミを引っ張った。

すぽん

「ぬわっ！？」

ウサミミの下に何かあるのかと思っていたらしく、結果的に何もなかったので余った力をどうすることもできなかったいっくんはそのまま豪快に後ろにこける。

「あれ？・・・　何もこないね」

僕はてっきり爆発でもするのかと思ったけど何もない。
おかしいなと思いながら待機していた場所から立ち上がる。

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。　いやな、今このウサミミを――――――あ」

ガスンッ！

「い、一夏さんっ！！」

オルコットさんの声がしたかと思うと急に風が吹き、その・・・
ねっ？　スカートが捲り上がって・・・
それを間近で見たいっくんはかかと落としを喰らう。

「春樹さん・・・　見ました？」

「え～？　何のこと？」

オルコットさんは両手でスカートを押さえながらそう言う。
正直に言うと・・・　見ました。
遠くからだったから生地まではよくわからなかったけど、青と白ってのは見えた。

「すまん・・・　その、だな。　ウサミミが生えていて、それで・・・」

「はい？」

「そうなんだよ、オルコットさん。　ウサミミを抜いていただけなんだ」

この説明の仕方だと明らかに何を言っているのかわからないだろう。
ウサミミを地面から引き抜いていましたと説明されれば誰の頭にもきっとはてなマークが浮かぶに違いない。

「いや、束さんが・・・」

キィイイイン！！

いっくんが更なる説明を付け加えようとしたときにいきなり何かが高速で接近してくる音が響き渡る。
とりあえず身の安全を――――――

ズガァァァン！

身を守るところを探す前に謎の飛行物体が地面に激突。
そして煙が立ちこもるが一瞬にして風に流される。

「に、にんじん？」

「にんじんだね」
「にんじんですわね」

いっくんが疑問に思ったことを僕とオルコットさんはのん気に返事する。
そう、目の前に突き刺さった謎の物体、それはアニメでウサギがかじっている様なにんじんなんだ。
それもかなり大きい。

「あっはっは～！！　引っかかったね、いっくん、そしてハルくん！！」

ぱかっとその大きなにんじんが割れて笑い声を上げながら出てきたのは予想通りの人物・・・ラブリー束さんだった。ラブリーかどうかは人それぞれだと思うけど、束さん結構美人の部類に入ると思うけどな？　個人的にだけど。

「いやー、前はミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。　私は学習するんだよ、ぶいぶい！」

「いえ～い、ぶいぶい」

こっちを向いて両手でピースを作ってそう言ってきたので僕も反射

的にそう返してしまう。
束さんの格好は青と白のワンピース。　もっとわかりやすく説明すると不思議の国のアリスが着ているような感じのものだね。
束さんはいっくんに近づいて手に持っていたウサミミを受け取ってそれを頭に装着する。

「お、お久しぶりです。　束さん」

「うんうん、おひさだね。　本当に久しいねー。　ハルくんも元気にしてた？　連絡くれないからさびしかったんだよ～」

いっくんと軽い挨拶を交わした束さんは僕のところへうさぎのようにジャンプをし、そして抱きついてきた。
なんだか懐かしいな・・・　これ・・・
落ち着くというかなんというか。

「ごめんね、いろいろこっちも忙しかったんだよ」

「そっか～、でも元気そうで安心したよ。　ところで箒ちゃんはどこかな？　さっきまで一緒だったよね？」

「う～んとね・・・」

束さんを無視してどっか行きましたと言えないしな～・・・
どうしよういっくん！
僕は束さんに抱きつかれながらいっくんに視線を送る。
いっくんは数秒考えたのち、「わからん」と目線を返してきた。
だよね～・・・

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。
じゃあねいっくん、ハルくん。　まったね～」

ぴょんぴょんとスキップのようなジャンプをして去っていった。
うん、束さんまったく変わってなくて安心したよ。
ちなみにその箒ちゃん探知機という機械は原始的にもダウジングロッドみたいなものだったのが驚きだ。

「あ、あの～、春樹さん、一夏さんさっきのは・・・？」

「束さんだよ？」
「束さん。　箒の姉さんだ」

「え・・・えぇぇぇぇ！？　い、今のがあの篠ノ之博士ですか！？
現在、行方不明で各国が必死で探している、あの！？」

「そうだよ～。　でも国々から逃げるのも本当に一苦労なんだよ？
うんうん」

僕は束さんと何度も場所を移動しまくっていたからどんな感じかわかる。
まあ詳しいことは言えないけどね。

そういえば、この臨海学校は『ＩＳの非限定空間における稼動試験』というのが主題なんだ。
だから、各国から代表候補生宛に新型装備が山ほど送られてくる。
でも、一応部外者は参加できない決まりになっているから、装備だけがどかっと運ばれてくるらしい。

束さん来たってことは、紅椿が完成したってことかな。
それに僕の『あれも』・・・　起動できなかったみたいだけどね・・・

エピソード２５　【糸水着って本当に着てる人っているのかな】（前書き）

すいませんタイトルは適当です。

エピソード25　【糸水着って本当に着てる人っているのかな】

「わあっ、見てみて織斑君と九曜君よ」
「うそっ!?　うちの水着変やない？　大丈夫やんね?」
「九曜君って草食系であんまり筋肉質じゃないイメージだったけど、こうやってみると結構あるね。　きゃぁ～」

水着に着替えて、ようやく念願の海に到着。
もちろん僕といっくんは水着姿だ。
いっくんは白メインで黒のストライプが入っている奴で、僕はその色違いの赤メインで白の線が入っている水着。
本人がいなかったから好みまでわからなかったけどとりあえず見た感じは変じゃない・・・むしろ僕的に似合ってるみたいだから安心した。

浜辺に着くとさっそく女の子達が目に入るわけだけど、来ているのはもちろん水着だ。
それも露出度の高い物（主にビキニ）が多いような気がする。
若干数名だけど布がものすごい少ない人もいるんだけど、何それ・・・　水着なのかな?
なんだかもう太さが紐というより糸なんだけど・・・　お尻隠れてないんだけど、大丈夫なの!?

「あちちち」

「あれ、いっくんはサンダル持って来なかったの？」

「いらないと思ってたんだが持ってこればよかったな。　それに対して春樹は用意周到だな」

いっくんはどうやら何か履く物を持ってこなかったみたいだ。
僕は浜辺が熱いってことを計算してとりあえず、ボロックスのサンダルを持ってきたから正解だった。
まあ、たぶん気がついたらその辺に脱ぎ捨ててしまうかもしれないけど。

「よっと……」

「いっくん？」

「ほら春樹も準備運動しようぜ」

隣で急に準備運動をし始めた。
たしかに足がつる可能性もないとも言えないけど、こんな人がいっぱいいるのに体操するのは流石に僕としても抵抗がある。

「お～～い！！」

「おう？」

「ふぇ？　この声って鈴い――――――――　うわぁっ！」

「あんた真面目ねぇ、一生懸命体操しちゃって。　ほらほら終わったんなら泳ぐわよ」

声のする方向を向こうとした瞬間に突然僕に飛び乗ってきた鈴音さん。
ちなみに鈴音さんが着ている水着はオレンジ色のタンキニタイプ。

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって」

「あたしが溺れた事なんてないわよ。春樹、あんた少し背がちっさいんじゃない？」

背が小さい……
確かに男の子の平均身長と比べると小さいかもしれないけど、伸びないんだもん。

「な、な、何をなさってますの？」

「あ、オルコットさん」

手にパラソルとシート、それにサンオイルらしき入れ物をもってオルコットさんが登場。
水着は綺麗な青のビキニで、腰からパレオを巻いていてなんだかとても大人っぽい。
ビキニを着ている人みんなそうだけど、視線がついついその大きく開いた胸元へといってしまう。
やっぱりこれは健全な男の子というからなんだろうか……

「何っておんぶ？」

その質問に素直に答える鈴音さん。
オルコットさんが来てもなお彼女は背中に乗っている。
そして布地の上からその発育途上中の膨らみかけている胸が僕の背中に密着する。

「春樹、あんた今失礼なこと考えてなかった？」

「うぇ？　き、気のせいじゃない？」

最近僕の心の中の声が予測されまくりなんだけど、怖いな～。

「とにかく！　鈴さんはそこから降りてください！」

「ヤダ」

「な、何を子供みたいなこと言って……」

ざくっとオルコットさんが砂浜に持っていたパラソルを突き刺す。
突き刺すときの感じ……なんだか怒りがこもっていたような。

「何なに？　あ～、九曜君がおんぶしてるっ！！」
「え～、それって私もしてもらえるの！？　あっ、織斑君空いてる！！」

「い、いや、これは空いているわけじゃなくてだな……」

「うっ……　みんなちょっと落ち着いて。　ねっ？」

騒ぎを聞きつけた女の子達が一気に詰め寄ってきた。
もちろん自分と同じクラスの子だけじゃなくて、他のクラスの子も混じっている。
おんぶしてと言わんばかりに押しよってきているので、肌と肌が密

着。
それの所為で女の子のあんなところやこんなところが僕の肌に当たるわけで……

「り、鈴、そろそろ春樹から降りないと誤解が広まってしまう」

「ん、まあ……　仕方がないわね」

いっくんに言われて僕から飛び降りる鈴音さん。
空中で一回転してそのままバランスを崩さずに着地。
うお～、すごいな～。

「ずるいですわ、鈴さんだけに……」

オルコットさんが羨ましそうに見つめてくる。
ぼ、僕に何をしろと……

「そうですわっ！　一夏さん、春樹さん、私にサンオイル塗ってくださいな」

「「えっ（ふぇ）？」」

「ち、ちょっと待ちなさいよ！！　二人をいっぺんに使うなんてそんなのずるいっ！」

せっかくいっくんと二人で必死に誤解だよって説明してるのに、オルコットさんがものすごい発言をしてしまったから、僕達は声をそろえて変な声をだしてしまった。
サンオイルッテナンデスカ？　ガソリンノナカマカナ？

「わ、私サンオイルとってくる！」
「うちは塗ったサンオイル落としてくるわ！！」
「じゃあ私はパラソルとシートを」

ち、ちょっと待って！？
何で僕といっくんが塗るって前提になっているの？
って言おうと思ったけどすでに女の子達は走り去った後……
すでに遅し。

「コホン。　そ、それでは、お願いしますわね」

パレオを脱いで、ブラを結んでいた紐を解いてシートに寝そべる。
ち、ちょっと待って？　本当にやるの……

「さ、さあ、どうぞ？」

オルコットさんは準備万全に対して、僕といっくんは拍子抜けしてしまうけどここまで来たんだから塗れませんなんて言えない。
渡されていたサンオイルの蓋を開けて、いっくんの手に透明のどろどろとした液体状のものを出す。
そして僕もオイルの入れ物を持っていないほうの手に適量取り出す。

（こ、これって確か手のひらでまずのばすんだっけ？）

テレビで見たことがある。
たしかまず両手でこのオイルを十分に手のひらに広げてから使っていた映像を見た気がする。

「い、いっくんからどうぞ？」

「な、何を言っているんだ……　ここは春樹が……」

「「ふふふふ（あははははは）……」」

二人でにらみ合ってどこか不適な笑みと共に声を漏らす僕達。
もう、笑うしかないよこの状況。
結局二人同時に塗ることになって、オルコットさんの両側に座ってゆっくりとその無防備な背中に手を伸ばす。

「ひゃっ！　お、お二人ともサンオイルは手で温めてから塗って下さいな」

「「わるい（ごめんっ）！！」」

すぐさま背中から手を離す僕といっくん。

「し、知ってた？　温めるってこと」

「し、知らなかった。　自慢じゃないが、俺はこんなことするの初めてなんだ」

僕もそれは同じことだ。
なるほどテレビでやっていたあの理由はオイルを温めるためだったのか。
確かにこの液体手のひらに乗せた時妙に冷たいと思っていたけど、塗るときは温めないとだめなのか。
結果的にサンオイルを塗るだけに２０分少々掛かってしまった。

「あっ、待ってくださいな」

「な、なんだ、まだなんかあるのか？」

「ぼ、僕もう精神的に無理だよ～」

もう僕は我慢ならず弱音を吐いてしまう。
だって……だって……女の子の体をあんなに触ることなんて今までなかったから精神的に無理があった。

「せっかくですし、その……　お尻のほうも……」

「ひゅるるるる」

「は、春樹！」

体を塗るだけでも限界突破しそうなのにお尻……　ヒップ……
今日僕は生きて帰れないかもしれない。

「私がやってあげるわよ。　ぺたぺた～」

「きゃぁぁ！？　ち、ちょっと、鈴さん！！」

「ほらほら遠慮しないで」

突然鈴音さんが登場そして手にサンオイルを乗せて温めずに一気に下の水着に手を突っ込む。
お尻がものすごい変形していて妙にえっちぃ……

「ああっ、鈴さん！！」

怒って体を起こすオルコットさん。
だけど、彼女は一つだけ忘れ物をしていた。
それはブラの紐を解いていたこと。
結果的にどうなるかはみんな想像できるよね？
そう、体から離れていた水着はシートの上に残って……

「あ」

「きゃあああああっ！」

ぎりぎり見えるか見えないかの瀬戸際だったけど、結果的にその……ねっ？　大事な部分は見えなかった。

「あー、ごめん」

「謝ったって……謝ったって……　絶対に許しませんわ、鈴さん！！」

「じゃあ、逃げる。　じゃね」

顔を真っ赤にしたオルコットさんは鈴音さんを追いかける。
だけど、僕といっくんを巻き込むのはどうかと思うけどね。

ぐいいいって感じで鈴音さんに引っ張られながら僕といっくんは宙を浮かぶ。

「何で俺らまで巻き込むんだよ！！」

「オルコットさん、見えてないからっ！　ぎりぎり見えなかったから！！」

「あ、あ、あ……」

僕がそういうとポーと赤くなったオルコットさんは追いかけることを止めてその場で身を縮めてしまう。
きっと今彼女の中では羞恥心と怒りが混ざり合っているに違いない。

そんなことを考えている間に僕達三人は海の中に飛び込んだ。

「ごほっ、ごほっ。　り、鈴音さん急すぎるよ。　ごほっ」

「ぶはっ！　鈴、お前なぁ！！」

「二人とも、向こうのブイまで競争ね。　あたしが勝ったら一夏と春樹、二人に一つずつ『@クルーズ』の1個５０００円するやつおごってもらうから」

ご、５０００円って確かあの一番高いやつだよねっ！？
それもバケツのような大きいやつ。
まずい、おごるのだけは回避しなくちゃ！

「よーい、どんっ！」

「お、おい、卑怯だぞって春樹お前、俺を置いていくなよっ！」

「ごめん、流石に財布の中身失いたくないからさっ！」

スタートの合図と同時に僕は勢い良く水を蹴る。
目指すはゴール、とりあえず鈴音さんに負けるわけにはいかない。

～鈴Ｓｉｄｅ～

（っ！　春樹早い）

一夏は一歩出遅れてドベ。
鈴は春樹との攻防戦を続けていた。
春樹の場合最初から飛ばしていたので後半かなりスピードが落ちると予想していたが、そのスピードはいつになっても衰えることはない。

（勝って二人にいいところ見せようと思ったのにこれじゃあ……）

だけどこんなところで負けるわけにはいかないと鈴は一気にスピードを上げて春樹に並ぶ。

（それにしてもサンオイル……　セシリア中々ずるがしこいわね）

急に別のところに意識が行ってしまう鈴。
セシリアがまさかあんな大胆な行動をとるなんて誰が考えていたことだろう。
実際やったもの勝ちだろうし、きっと一夏と春樹の中ではセシリアの株が上がったに違いない。

（あたしも後からやってもらおうかな。で、でも体触られちゃうし……）

海水が蒸発するのではないかと言うほど鈴は泳ぎながら顔を赤くする。

「!?　ごぼぼぼぼ」

突然の異変。
足が急に動かなくなり、痛みが伝わってくる。

（あ、足つった！　や、やばい）

気が動転して水中でバタバタと暴れる。
本来動かず、そのままの体勢でいることが適切な判断なのだが冷静さを欠いてしまった。
ついには海水を吸ってしまい、本格的に危険になる。

けれどそれを力いっぱい引っ張って水面まで上げてくれた。
一夏、彼だった。

（一夏……　一夏……）

一夏の体に鈴は体をあずけてながら水中を浮く。
気がつくとつった足は治っていた。
どこか懐かしい感覚に身を任せながら鈴は一夏に浜辺まで引っ張っていかれた。

～鈴Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～一夏Ｓｉｄｅ～

「鈴！　鈴！　足つったのか！？」

「がはっ、ごほっごほっ……　だ、大丈夫……」

「ったくだから準備体操しろと」

「ふ、ふんっ」

「とりあえず、砂浜に戻るぞ」

一度陸に戻って安静にしたほうが良い。
春樹にはてタオルやシートの準備をしてもらうために先に戻ってもらった。
俺は溺れかけていた所為で体力を失っている鈴を背負って陸に向かう。
水に入っているせいか鈴の体は軽く感じた。

「あ、あのさぁ……　一夏」

「喋ると、水が口に入るぞ」

「大丈夫よ。　それより、その……」

力ない声だったが最後の部分だけ聞き逃さなかった。

「あ、ありがとう」か……
なんだかその言葉が無性にむず痒かった。
俺はただ笑うしか出来なかったが、なんだかとてもうれしかった。
ようやく砂浜に着くと春樹がタオルを持って急いで駆けつける。

「いっくん、鈴音さんは！？」

「ああ、大丈夫だ。　ちょっと海水飲んだみたいで体力は削られてるみたいだけどな」

とりあえずここでおろすわけにはいかないので春樹が敷いてくれたシートの上まで背負っていき、そこで鈴をおろす。
おろすと同時に鈴のクラスの女子達が声をかけ始める。

「良かったいっくんが鈴音さんより後ろにいて。　僕は前にいたから気づくの遅れてたから」

春樹はタオルを俺に渡してそんなことを言った。
こんなこと言っているが気づくのは俺とあんまり大差なかった。
きっと後ろを気にしながら泳いでいたんだろう。
まったく心底お人よしなやつだ。

「あ、一夏と春樹、ここにいたんだ」

呼ばれた方に振り向くと、そこにはシャルともう一人いるんだが……

「あり？　シャルさんと……　そのミイラさんは？」

春樹が目を点にしながら問う。
そう、今俺たちの目の前にはシャルとミイラ人間がいるのだ。
バスタオルで体中をぐるぐる巻きにして誰がどう見てもミイラにしか見えない。
たしかワイワイ動画で似たようなことをやっている人がいたような……　まあいっか。

「ほら、出てきなって。　大丈夫だから」

「大丈夫かどうかは私が決める」

おう？　この声色からしてこのミイラ人間はラウラなのか？
だがいつもの自信に満ちた声ではなくどこか恥ずかしそうでさらには弱弱しい声だった。
シャルは隣で何かを説得するかのごとく声をかけている。
一体何があったのだろうか。

「ほーら、せっかく着替えたんだから二人に見てもらわないと」

「ま、待て、私にもちゃんと心の準備というのものがあってだな。しばしの時間をくれ」

「も～、さっきからそんなこと言ってずっと待ってたよ？」

今まで言ってなかったが……

まあ俺Ｓｉｄｅが少ないのもそうだが（申し訳ない）、この二人は同室になった。

先月はライバルという関係だったが、今では普通にルームメイトとして日常を送っているらしい。

昨日は敵でも今日は味方ってやつだ。　あれ、なんか違うような……

「う～ん……　ラウラが出てこないんだったら僕、二人と遊びに行こっかな～」

「な、なに？　ま、まてっ！」

「うん、そうしよ。　先にどっちと遊ぼうかな～。　最初に春樹が泳ごうって誘ってくれたし……」

そう言いながらシャルは俺と春樹の顔をニコニコしながら見つめる。

「ま、待てと言っている！　私も行こう」

「その格好のまま？」

「脱げばいいのだろう、脱げば！！」

ついにミイラ人間はその身を剥いだ。
ぐるぐるに巻かれたバスタオルは空を舞い、中身が太陽によって照らされる。

「わ～、ボーデヴィッヒさんどうしたのそれ？　可愛いね」

「か、かわいっ！？」

「ちょっと驚いたけど、似合ってると思うぞ？」

ラウラの水着……
これはきっと俗に言う大人の水着というやつだろう。
それにいつも何もつけずに流していた髪も今日はセットされていて、左右でテールになっている。
簡単に言うと鈴のツインテールを短くしたような感じだ。

顔を赤くしながらもじもじとするラウラが妙に可愛かった。

「おかしなところなんてないよね？」

「うん、この髪はシャルさんがやったの？」

「そうだよ。　可愛いでしょ？　でもね、いくら可愛いって言ってもラウラが信じてくれなくって」

「いやいや、似合ってるぞラウラ」

「しゃ、社交辞令なんぞいらん！」

きっぱりと言われた。
社交辞令でもなんでもなく、本心で似合ってると思うけどな。
ついにはう～、といいながらテール状の髪をいじる姿に心をうたれそうになる。
あ、危ない……

「社交辞令じゃなくて可愛いと思うぞ？　なあ春樹」

「うん、可愛い可愛い」

俺の意見と同意して笑顔のまま顔を縦に振る春樹。

「もう……だめだ……」

バタンッ

「「「ラウラ（ボーデヴィッヒさん）！？」」」

顔をトマトみたいに赤くしながらバタンと砂の上に倒れるラウラ。
いそいで駆け寄ると、顔を両手で隠してまるで小さな子供でも見ているかのようだった。
あれ？……　今ふと思ったんだが箒は？……

エピソード２５　【糸水着って本当に着てる人っているのかな】（後書き）

う～ん、みんなの水着姿可愛かったな～。
ぐへへへへ・・・

話は変わりますが、もうそろそろヒロイン達を一夏、または春樹・・
・どちらかに配置しようと思うのですがどうしましょう・・・
一応自分の中では誰がどちらにつけようか決めているのですが、みなさまの意見も聞いてみたいです。
一夏：春樹　＝　３：２　または　２：３　でヒロインをつけようと思うのですが如何でしょうか？

ヒロイン投票の例
一夏に箒、セシリア、鈴
春樹にシャル、ラウラ

のような感じで。

感想ブースでお待ちしておりますので、意見よろしくお願いします！

期限は　３／３０の２２時までで！

エピソード26　【本わさっておいしいよね】（前書き）

前回の後書きに書かせてもらったヒロイン投票・・・
すでに活動報告にて結果は発表させてもらいましたが一応こちらにも、

1位　ラウラ・ボーデヴィッヒ

2位　シャルロット・デュノア

3位　セシリア・オルコット

4位　凰鈴音

5位　篠ノ之箒

となりました。
作者の予想とぜんぜん違っておもしろかったです。
自分の予想だと1位にシャル、2位にセシリア、3位にラウラがくるとばかり思っていましたw

それで割合のほうは、一夏：春樹＝3：2で行きたいと思います。
ちーちゃんこと千冬姉も含めて3：3だぁぁぁ！
と面白い意見もありましたが、流石にちーちゃんを入れるとごったがえしてしまうので・・・w
仮にちーちゃんを入れるとなったら束さんも入れて　3：4じゃあああ・・・って違うか。

結果的に春樹サイドのヒロインは接戦を繰り広げた1位と2位のラウラとシャルでいきたいと思います。

ヒロイン投票アンケートにお答えくださった
闇の皇子さん、天照大神さん、快さん、闇水さん、沢庵さん、悠翼の風さん、カケラさん、神楽要さん、ご使用ポン酢さん
ありがとうございました！！

エピソード26　【本わさっておいしいよね】

～春樹Ｓｉｄｅ～

「あー、おったおった。　織斑君、九曜君、ビーチバレーしやへん？」

「おりむーとくーよと対戦だ～。　ドドドドドドッ・・・　どか～ん」

倒れたボーデヴィッヒさんに近寄って様子を見ていると、のほほんさんとその友達が来た。

のほほんさんは何で銃の構えをしながらエアマシンガンをやってるのかな？

それより、ビーチバレーか～。

僕、スポーツ全般やったことないからな～・・・　とりあえず映像とかでは見たことはあるけど実際にやったことがない。

なんせ束さんとずっと一緒にいたわけだし、二人でバレーなんてやっても虚しいだけじゃない？

とまあ結局はビーチバレーをやることになったんだけど、

「それっ、織斑君にパァースッ！！」

ものすごい勢いで加速したビーチボールがいっくんめがけて飛んでいく。

な、何？　こんなに初弾から激しいスポーツだっけ？
これって遊びだよね、公式試合とかじゃなくて。
いっくんはそれを驚きながらなんとかキャッチする。

「ふっふっふっ・・・　ここに丁度６人いるな・・・」

いっくんが黒いオーラを出しながら今ここにいる面子を確認する。

「春樹、お前はシャルとラウラで１（ワン）チームな」

「えっ？　てことはいっくんは」

「おう、俺はこっち組だ。　さっきの水泳勝負、俺を置いていったことを後悔させてやる」

い、いっくん、あのことを根に持ってるの！？
確かにあの時放っていったのは悪かったけど賭け事だから仕方がなかったじゃない、と春樹は言い訳をしてみたり～ってこれなんかのキャラだったよね？　あえてどのキャラとは言わないけど、この語尾につけるやつ気に入ってるんだ。

いっくんが黒いセリフを吐いたあと、のほほんさんと友達は手早く

ネットを広げ、すぐに準備が終了した。
それぞれのチームは自分の場所に行きポジション、セェェェトッする。
なんかテンション上がって来たよ?

「んじゃあ、お遊びルールで行くで? タッチは三回までで、スパイク連発禁止、ほんで先に十点先取で一セットでいこか」

「オッケー、オッケー僕は何でもいいよ?」

やるの初めてなのに少しだけ調子に乗る。
う~ん、これ僕の悪い癖だな~。 直さないと。

ぽーんとビーチボールが宙に投げられて、

「ひっひっひっ・・・ 冬のビキニ剥ぎと言われたこのうちの実力とくと見せたる!!」

いきなりのジャンピングサーブ。
って何、冬のビキニ剥ぎってわざわざ冬にビーチバレーやって他人のビキニ剥ぎ取ってたの!?
もうビーチバレーじゃなくなってるよね!?
ツッコミどころ満載なんだけど!

「はっ！　そんなこと考えてる場合じゃなかった、シャルさんっ！」

「任せてっ、とりゃっ！」

ダイビングして何とかぎりぎりにボールを上に上げる。
まず一回タッチしたから後二回だけ触ることができるから、僕はボールを追いかけてパスをつなごうと試みた。

「ボーデヴィッヒさん！！」

「えっ？　た、たぁぁ！！」

バンッ

ボールを叩いた音じゃない。
なんとボールをスマッシュしようとしたボーデヴィッヒさんが空振りして、そのままボールは頭に激突。
そして二、三回くるくると回転して砂浜の上に倒れこんだ。
まさかボーデヴィッヒさんに限ってこんなことになるなんて思ってなかった。
きっとこのビーチバレーを見ていた人たちだって同じことを思っていたに違いない。

「だ、大丈夫!?」

いそいで安否確認のために近寄る。
なぜか近寄るとぼっと顔を赤くするボーデヴィッヒさん。
一瞬日射病でもかかったのかと思ったけど、どこか違うような気がする。

「可愛い・・・可愛いと言われると・・・　私は・・・　はうぅぅぅぅ」

「うーん、これって一夏と春樹の言葉攻めの所為じゃないかな～?」

シャルさんが僕の隣でそんなことを言った。
言葉攻めって・・・　何か言ったかな?
今日会って言った事は、似合ってる・・・可愛い・・・　それくらいだったような?

ボーデヴィッヒさんダウンしたけどこのまま続行することになった。
つまりは二対三でこっちが不利のように見えるけど、向こうのチームにいるのほほんさんが足を引っ張っているみたいで結果的に数は変わらないみたい。
まあのほほんさんが着てるのが水着じゃなくて着ぐるみなのがたぶん原因の一つだろう。
なんせ上から下まですっぽり隠れるようなやつだ。
う～ん、なんていうんだろう・・・　パジャマ的なやつでフード的

なものがついてるやつ。
ちなみに見た目は色が黒のクマだ。
この天気でよくそんな熱そうなの着ていられるよね・・・　感心しちゃう。

ただ、まあ勝負の結果はボロ負け。
いっくんはよほど僕に勝ちたかったらしくて、いっくんを見るたびに威圧で押されて負けた感じだ。
恨み・・・恐るべし。

「疲れた～・・・　お疲れはる――――　わっ！」

「っと・・・　大丈夫、シャルさん？　ちょっと休もうか」

「う、うん、ありがと春樹」

試合が終了して僕のところに来てくれたシャルさんは、疲れが原因でふらっと倒れそうになったところをキャッチする。
僕がやるの初めてだから、後ろでほとんどカバーさせてしまったからな～・・・
本当に悪いことをしてしまった。

「う？　なんか僕の顔についてる？」

「えっ！？　な、なんでもないよ！」

なんなだろう妙に僕の顔を見てくるし、シャルさんの顔が赤いし・・・

う～ん・・・　わからない。

それに観客席の方を見てみるとボーデヴィッヒさんが僕を思いっきり睨みつけていた。

今日はみんな顔を赤くしたり、睨んだり、機嫌悪くしたり大変だ。

シャルさんを座らせてから僕も隣に座る。

「春樹、俺の力を見たか」

いっくんが僕の隣にやってきて腰を落ち着かせた。

「いっくん手加減してくれないんだもん。　ひどいよ」

「気にするなって。　今回は鈴みたいに賭け事してたわけじゃないんだし」

「そうだけどさ～。　男の子としては勝ちたかった！」

そうだよ、男の子なんて勝負に勝ってなんぼ。
うん、なんだか僕カッコいいこと言ったような気がする。

「春樹、そろそろお昼の時間だけど午後はどうするの？」

シャルさんがツンツンと肩をつついて聞いてきた。

「う～ん、何も考えてなかったりして・・・　いっくんどうする？」

「そうだな～、もう少し泳ぎたいんだが食べた後だとつらいだろうし、ちょっと休んでから海に出るなんてどうだ？」

「そうだね、そうしよっか。　ってことでシャルさんそういうことみたい」

「わかった、じゃあ先にお昼に行こっか。　そういえば一夏と春樹って結局どこの部屋だったの？」

えっ、ちーちゃんと一緒だった・・・なんて即答できるはずもない。
せっかくの消灯時間の後のパラダイスが・・・僕のパラダイスが・・・

「そうそう、うちもそれ気になっとったんよ」
「私も私も！」
「冷たい床情報は共有しよ～」

最後ののほほんさんの言った事は他の人たちは頭をはてなにした。
冷たい床情報・・・　廊下で寝るの？　違うかな。

「えーとな・・・　織斑先生の部屋だ」

いっくんが質問に答えた。
するとこれまで目をきらきらさせながら返答を待っていた女の子一同はいっくんの言葉によって一瞬に凍った。
夏で暑いはずなのに、この瞬間だけ周囲の温度は一気に下がった感じだ。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

「そうだね～。　僕、夜中出てこっかな？」

「春樹、お前千冬姉に殺されるぞ」

いっくんが顔を引きつりながらツッコんだ。
たしかにちーちゃんならやりかねない・・・

「ま、まあ織斑君と九曜君とは食事時に会えるしね」

「そやね、わざわざ悪の住む巣に危険を冒して行かんくても・・・」

「誰が悪だ、誰が」

ピシィィィ！

再度の絶対零度。
この瞬間さっきよりも周囲の温度は下がった。
もう氷点下行ったんじゃないのかな？　あははは。
女の子達は固まった首をぎぎぎ、と音を立てながらその重たい首を動かす。

「お、お、織斑先生・・・」

「おう」

悪魔を統べる女王・・・違うか、ちーちゃん登場。
あ、僕が選んだ水着着てる。
昔から鍛えられているスタイルの良い体にとても合う黒の水着。

スタイル抜群でさらに雑誌で載るような格好良さを兼ねていて、女の子一同はちーちゃんのその姿に圧倒されていた。
たしかにこのときは妙にドキドキしてしまった。
いっくんも隣で目を開ききっているので僕と同じような感じなんだろう。

そして男の子が必然的に吸い寄せられてしまうのが、その大きな胸。
僕が選んだ水着は谷間を大きく露出させるタイプだったので、普段着ているスーツからではわかりにくかった大きな胸に僕といっくんは半強制的に見とれてしまう。

「・・・二人とも鼻伸びてるよ」

「ふぇ！？　し、シャルさん気のせいじゃない？」

「そ、そうだぞ。　何を言ってるんだよ。　は、はは・・・」

「えっちな視線を送ってた・・・」

うぅぅぅ、ごめんなさい。　否定できないよ・・・
だってあんな立派な物見せられたら、誰だって・・・　ねぇ？

「そら、お前達は食堂に行って昼食でもとってこい」

「ちーちゃんは？」

「わずかばかりの自由時間を満喫させてもらう」

ちーちゃんの言っているとおりたぶん教師陣には自由時間なんて限られているんだろう。
限られているというよりほとんどないのかもしれない。
それに対して僕達はたっぷり時間を与えてもらっているんだから、先生方にはとても悪いことをしている気分だ。

「じゃあ俺たちは昼飯に行って来ます。　行こうぜ」

「うん」

僕、いっくん、シャルさん、ボーデヴィッヒさんはその場を離れた。
時間は十二時を過ぎたところなので僕達のほかにも移動する生徒は大勢いた。

お昼ご飯、楽しみだな～。

～春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～一夏Ｓｉｄｅ～

千冬姉が着てた水着、春樹が選んだって言ってたけど似合ってたな。
春樹はいまどきの流行とかよくわからないとか言っているけどなかなかいいものを選んでる。
現に今俺が履いている水着だって、個人的にはかなり好きだ。

「一夏と春樹は・・・教官のような人が好みなのか？」

「ふぇ！？　ど、どうしたのボーデヴィッヒさん」
「え！？　な、なんだよ急に」

ラウラが急にそんなことを聞いてきた。

「いやそのだな・・・　私達の水着を見たときと反応が違ったような気がしてな」

うぐっ・・・なんだか鋭いというか何と言うか。

たしかに千冬姉のあの姿には見とれていた自分がいた。

「ぼ、僕は・・・そうだな～・・・　シャルさんとかボーデヴィッヒさんみたいに世話を焼けそうな人かな～」

「「「えっ」」」

春樹が突然ものすごいことを言い出した。

「う～ん、でもなんだかんだ言って僕の周りにいる人みんな好きかな～」

ち、ちょっと待て、こいつはいきなり何を言ってるんだ！
俺はすぐさま春樹の口を押さえ数メートル移動した。
なんか今の春樹は変な気がする。　いや、変だ。

「お前どうしたんだ急に？」

「ふぇ？　僕本心言っただけなんだけど」

うわぁ・・・　そんな純粋な目で言われたら、もう疑う余地がない。

「とりあえず、そういう発言は自重しとけ。　わかったか？」

「う？　うん」

俺はため息をついてラウラ達のほうに振り返ると、魂を失ったような顔の二人がいた。
こっちはこっちでどうしたんだ・・・

時間はあっという間に過ぎた。
やっぱり遊んでいると時間なんてあっという間だ。
現在の時刻は・・・　七時半。
今は大広間三つをつなげた宴会場で夕食と食べている。

「うまい！　昼もだったけど夜も刺身なんて贅沢極まりないな」

「そうだな。　それにとても新鮮だ」

そう言いながら箸を動かしているのは箒。
今日は一体どこに行っていたんだと問いたくなるほど見ていない。
いや、実際更衣室に向かうときに会ってから一回も顔を合わしていない。

しかし箒浴衣似合うな、流石としか言いようがない。
なんせ箒のパジャマはもう少し大人しめの浴衣だからな。
ちなみに今はみんな浴衣だ。
春樹も俺も含めてみんな同じ浴衣。　この旅館では食事中では浴衣着用が義務付けられているようだ。
そして縦に一列に並んで座っているんだが、みんなちゃんと正座でその前に食事が乗った膳が置かれている。

メニューは刺身と小鍋、山菜の和え物、そして味噌汁とお新香。
かなり豪華だ。

「うまいな～。　それにこのわさびは本物のわさびをすりおろしたやつじゃないか。　こんなの俺らが食ってもいいのか？」

「・・・・ッ・・・！！」

右に箒がいるのに対して左側にいるのはセシリア。
さっきからずっとうめいているのだが、理由はきっと正座に慣れていないからだろう。
まったく箸が動いていない。

「大丈夫かセシリア？」

「こ、これく・・・らい・・・ッ・・・大丈夫・・ですわ」

ぜんぜん大丈夫じゃねぇぇ・・・
もう顔色がかなり悪くなっている。
無理せずに崩してしまえばいいのにと思うが、セシリアのプライド上それは無理なのだろう。

プルプルと体を震わしながら箸に手を掛けて米を一口分口に運ぶ。
そして味噌汁のお椀をもってずずずと音を立てながら飲んだ。

「お・・・おいしい・・・ですわね」

ニコリ

ぜ、絶対ちゃんと味わえてないだろそれ。

～一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～春樹Ｓｉｄｅ～

「すごいな～。　これ本当に食べていいのかな～・・・」

お昼もそうだったけど、夜ご飯もかなり豪華だった。
何これ・・・　神様にバチ当たるんじゃないんだろうか。
僕は一つ一つの料理をしっかりと味わいながら口に運ぶ。

「このわさびもすごいな～。　おろしたやつじゃないかな？　本わさ、本わさ」

「本わさ？」

僕の左手側からひょっこりと顔を出したのはシャルさん。

「う～んとね、僕も食べるのは初めてなんだけど本物のわさびをすりおろしたやつのことを本わさって言うんだ」

「えっ？　じゃあ学園の刺身定食についてるのは・・・」

「あれは練ったやつだね。　あれはまたべつのやつなんだよ」

「ふ～ん・・・　はむ」

えっ、待って!?
今、親指くらいあるわさびの塊を口の中に放り込んだような気がしたんだけど!?
だ、大丈夫なの？

「はむはむ・・・　む？　ひっ!?　ッ～～～～～～～!!!!」

鼻を押さえて涙目になりあたふたしだすシャルさん。
そ、そりゃあそうだよ。
あれだけの量のわさびを食べるなんて罰ゲームじゃないんだからさ。
僕はお茶が入った湯飲みを渡すとそれを一気に飲み干す。

「だ、大丈夫？」

「ら、らいひょうふ、えへ・・・（大丈夫、えへ）」

にこっと笑顔を作るが、なんだかいつもと違うな～。

涙目になって顔がぐちゃぐちゃだ。

「よしよし、辛かったね～」

「は、春樹っ！？」

僕は自然にシャルさんの頭を撫でていた。
束さん・・・こんなことしてくれてたな。　結構前の話だけどね。

「これはこうやって食べるのか？」

そして僕の右側からそんな声が聞こえてきた。
ボーデヴィッヒさんだ。
今は海にいたときと違って髪を結んでいなくていつもどおり流している。

彼女が指差している方向をみるととんでもない事になっていた。
お刺身の上にわさびを山盛り乗せているのだ。

ど、どうして全部乗せちゃうかな～・・・

「ち、違う違う。　これだけで十分だよ」

口をつけていないほうにお箸を持ち直して、その山盛りの量のわさびを少量に減らす。
あれだけの量のわさびを食べたらシャルさんの二の前だよ。

「なるほど。　はむ・・・　ふむ、なかなかのものだな」

どうやらお気に召したみたいだ。
一つ一つのお刺身をゆっくりと口に入れていく。

「は、春樹っ!!　お前は何をしている!」

「うん？　何って・・・　頭撫でてるだけだけど？」

「だからなぜっ!!」

「なんだか子供みたいで可愛かったから・・・かな？　あはっ」

「かわいっ・・・」

僕がそういうとボーデヴィッヒさんはお箸を口に入れたまま固まってしまった。
あり？　僕なんか変なことやったかな？

「「「きゃあああああ！！！」」」

突然の黄色い声。
みんなの視線はいっくんの方に向いていた。
何をしているのかと思えばいっくんがオルコットさんにご飯を食べさせているんだ。
一体いっくんは何をしたの・・・

「セシリア羨ましい～～～」
「ずるいわっ～、うちがじゃんけんで勝っていれば・・・」
「九曜君の両側の席も負けちゃうし・・・　私・・・臨海学校の楽しみがなくなったかも・・・」

ん～？　じゃんけん？
ということは僕の両側はじゃんけんで決まったのか。

「は、春樹？」
「春樹、私もあれをやってくれ」

両サイドからシャルさんとボーデヴィッヒさんがそれぞれ自分のお箸を渡してきた。
ぼ、僕もあれをやってと？
こんな大勢の前だと流石に・・・

「お前達は静かに食事をすることができんのかっ！！」

襖を勢い良く開けて顔を出したのはちーちゃん。
もちろんちーちゃんも浴衣姿だ。

「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ。　後、九曜お前もだぞ」

ギクッと肩を揺らした僕の両側に座っている二人。

「ご、ごめんね？　また今度、機会があれば」

そういうとシャルさんはふくれっ面、そしてボーデヴィッヒさんはどこか納得できない顔をしている。
でもここで僕が食べさせちゃうとまた騒ぎが大きくなって頭叩かれちゃうから・・・
将来禿げるのだけは勘弁だ。

エピソード27　【勝負下着ってたまに紐って言うより糸だよね】（前書き）

今回はピンク回です

エピソード27　【勝負下着ってたまに紐って言うより糸だよね】

～一夏Ｓｉｄｅ～

「いや～、いい湯だったな」

「そうだね～。　もう学園に戻らなくていいんじゃないかな？」

食後に温泉に入って、今は軽いジョークを交わしながら春樹と部屋に戻る。
飯が飯だけに、露天風呂もすごかった。
春樹と静かに海を一望できてもう大満足だ。
そんな上機嫌の中部屋のドアを開けて中に入ると、千冬姉の姿が見当たらない。

「ちーちゃんいないね。　温泉かな？」

「たぶんな」

「私がどうした？」

話題に上がったと思ったら千冬姉登場。
それも気配も感じさせることなく現れたので少しだけ驚いてしまっ

た。
なんせあの千冬姉なのだから、後ろから気配もなく近づかれたら何をされるかわからない。

「ほ～、なんだ男二人で待っているということは何だ？　私を襲うつもりでいたのか？　女を一人も連れ込まないとは面白みがない」

「えっ？　僕は連れ込むんじゃなくて、今から夜這いに行くんだけど？」

春樹がにしし と作り笑いをする。
どれだけ教官室で寝るのがいやなんだよ。
それを聞いた千冬姉は頭でも叩くのかと思いきや、ほ～とスルーするだけで終わった。
ツッコミが入らないとそれはそれで悲しいな。

「あっ、そういえば」

俺はふと何かを思い出した。
食事のときにとある人物と約束したことを思い出したのだ。

「一人来るんだけど」

～一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

食事後にセシリアは風呂に一回浴び、それからもう一度シャワーを浴びた。
今の彼女の機嫌を天気で表すと雲ひとつない快晴、何が言いたいかというと上機嫌ということだ。
身に纏うのは旅館の浴衣だが、実はその下に男を虜にするようなものすごい下着を着用している。
準備万端で、戦闘に望むつもりだ。

（まさか、一夏さんがあんなお誘いをしてくださるなんて……）

そう、それは千冬が食事をしているときに注意をしに来た後のこと。
一夏はセシリアに料理を食べさせてあげられなくなった変わりに部屋へと誘ったのだ。

セシリアが上機嫌な理由はこれだ。
もう幸せオーラを周囲の人がわかるくらいオーラを放出している。
もちろんそれを感じ取ったクラスメイトが声をかけた。

「セシリアどうしたの？」
「何かいい事でもあった～？」

「いえ、何も？」

「……あのね～、女にはね、匂いでわかるものなのよ。　あんた何か隠してるでしょ？」

「うふふふ」

返答の仕方からして明らかに何かを隠していますと言っているようなもの。

「良いわね～上機嫌で。　あ～あ・・・せっかく織斑君、九曜君といっしょにドキドキするようなことしたかったのに、まさかあの織斑先生と同じ部屋だなんて」

まさかあの鬼畜で鬼教師である千冬と同じ部屋だと誰が予想したであろうか。

あの人と同じでは誰も行こうとは思わない。
女子たちは自分のかばんの中に入っている、この臨海学校中に一夏と春樹と遊ぼうと思ってきた遊び道具そしてお菓子を見て嘆き始める。
そのかばんから一枚の紙がひらりと床に落ちる。
紙には文字がずっしりと書いてあって、上のほうには「織斑君と九曜君と遊ぶこと」と書いてある。
ポッキーゲーム、王様ゲーム、ツイスター……その他諸々……

（今日は……今日は……ようやく大人の女になれますわ）

クラスメイトの悲痛な声を気にもせずセシリアは一人これから起こることを想像しながらコロンを吹く。
もう頭の中ではピンクな想像……いや、妄想が飛び交っていた。

「あ～……。　せっしーがえっちぃ下着つけてる～」

半開きの目とのほほんとした雰囲気を持ち合わせているのほほんさんが唐突にそんなことを大きな声を上げて通達する。
その言葉を聞いて、セシリアはどっきり　アンド　のほほんさんによって捲られた浴衣を急いで整えた。

「な、なんて？……　セシリアまさか……」

「ものども、脱がせぇぇぇ！！　遠慮はするな、身包みを剥いですっぽんぽんじゃぁぁぁ！！」

とても女子が発言するとは思えない言葉が部屋中に響き渡る。

「きゃぁぁぁぁぁ！！　やめっ、あっ……　だめぇぇぇぇ！！」

男子二人と遊ぶことが出来ないので、エネルギーを持て余している女子達に抵抗することが出来ずに、されるがまま浴衣を脱がされるセシリア。
折角整えた身だしなみが台無しである。

「うわぁ……　本当にエロ下着つけてる」

「えっちぃ～、せっし～」

「勝負下着つけてどうするの？　あの二人のところにいけないのに」

順番にそう言った後に、最後に女子一同、

「「「「セシリアってエロいな～！！」」」」

部屋の中が笑い声に包まれる。
確かに何の用もないのに勝負下着をつける必要があるのだろうかと思うが、今回は一夏に呼ばれているからとは流石に言えない。

「エロくなんてありません！！　これは……　そう！　身だしなみですわっ！　身だしなみっ！！」

身だしなみで勝負下着をつけるのもどうかと思うが、即興で考えて出てきた理由としてはこれが精一杯だろう。
セシリアはぐちゃぐちゃにされた浴衣を直しながら心の中でどうか一夏のところに行くのがばれてませんようにと願うばかりだった。
だが、

「そういえば～、セシリア念入りに体洗ってたわね～」

ぎくりっ

「なんかシャワーも浴びてたし、いい匂いするし、メイクしてるし……　うん？」

ぎくりっ　×2

「なんかあやしいね」

鋭いツッコミがセシリアを襲う。
ここまで的確に当ててくると流石に内心焦って来る。

「これは女のして、と・う・ぜ・んの身だしなみですわ！！　これからやることがありますので失礼します！！」

ふんっと言って立ち上がり、すたすたと部屋を出て行くセシリア。

「危なかったですわ……」

身体的にも精神的にもすでに参ってしまっていた。
戦闘に入る前に疲れているところを見せては、と思い一度自分の身だしなみを確認し立て直す。

（そうですわ、今からが本番っ！　こんなことで……）

少し緊張しながら歩いていくが、次第にスピードが上がっていきついにはやや早歩きになっている。
そして一夏の部屋があるであろう、最後の曲がり角を曲がると数人の影が目的地の扉の前で固まっているのが見えた。

「あれは……」

そう、扉の前に張り付きながら耳を澄ましている影。
それは箒、鈴、シャル、そしてラウラだ。

「……」

「……」

セシリアは思わずその光景を見た瞬間固まってしまった。
明らかに不気味かつ、やっている行動が意味深。

「あなた達は一体何を？……」

「「「「しっ～！！」」」」

質問すると全員同時にセシリアを向き人差し指を立てて静かにするように言ってきた。
セシリアはそう言われると急いで両手で口を塞いで、女子四人が固まっている空間へと仲間入りする。
状況がわからないままとりあえずみんながやっているように自分も耳をドアへと寄せる。

「千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？　まあ今回は二人だから仕方がないか」

「馬鹿者、私がこれごときで緊張するわけ……　んっ」

「ちーちゃん、もうちょっと力抜いて」

「あっ！　そ、そこはだめっ――――　ッ！」

「ほらほら千冬姉、すぐに良くなるって」

「はぅ――――――あ、あんっ」

……明らかにおかしい。

一体何がこの部屋の中で行われているか想像がつかない。
いや、きっと盗み聞きしている人たちの頭の中ではいろいろな妄想が飛び交っていることだろう。

「こ、これは……　何が一体起こっていますの？」

セシリアが眉と体を震わせながら小さな声を上げる。

「「「「……」」」」

あのラウラも含む箒、鈴、シャルはずーんと沈んで体の力が抜け切っている。
沈むついでにその大きく開いた口からは魂が出てきそうな勢いだ。
やはりこの集団の全員は自分の妄想で何が起こっているのかを理解したらしい。
ただその仮説はあっているのかどうかは定かではない。

「ち、ちょっと、そんなに押されると」

急にセシリアの体に４人の全体重が乗っかってきた。
全員分の体重を抑えることの出来なかったセシリアはそのまま扉にもたれかかってしまい、ついにはその扉までもが倒れていく。

ドガドガドガァァァンッ！

夜なのに慌しいこと極まりない。

「馬鹿者どもが……」

部屋の中では千冬が横になって一夏そして春樹に体のあちこちを揉まれている最中だ。
揉まれている――――つまりはマッサージをされていた。

「は、はは」

「こんばんは、織斑先生」

「教官、私はこれで」

「さ……さようなら、織斑先生っ！」

「わたしは何も見てませんわっ！　ええっ！　何も」

上から順番に、鈴、シャル、ラウラ、箒、最後にセシリアだ。

みんなかなり慌てている。
そりゃあそうだろう。なんせあの鬼教官の部屋に無理やり押し入った感じになっているのだから。

５人は同時にその場から逃走を試みるが、すぐに捕まった。
首根っこをつかまれたり、こかされたり、浴衣の裾を引っ張られたり・・・
ＩＳの操縦はもちろんのこと、肉弾戦ですら勝てない。

「盗み聞きは関心しないが、まあいい。　入っていけ」

そう千冬が言うとみんな目を丸くする。
まさかあの千冬がこんなことを言うと誰が想像しただろうか。

「おおセシリア来るの遅かったな。　とりあえず、始めようぜ」

ぽんぽんと先ほど千冬が横になっていたベッドを叩きセシリアを呼ぶ一夏。
それを見たセシリアは顔を赤くしてもじもじとしだす。

「あ、あの一夏さん？　流石にこの状況下ですし……それにほかの方々も」

「？　別にいいじゃないか、俺はウォーミングアップ終わってるし、いざとなれば春樹も手伝ってくれる」

「さ、三人！？　で、でも……こういうのにはちゃんと雰囲気がありまして」

一夏は疑問に思いながらでも真剣な眼差しでセシリアを見つける。
覚悟は出来ている……そうその目は言っていた。
ドクンッドクンッとセシリアの胸の鼓動は高鳴っていく。

（お、女は度胸ですわっ！　ええっ！）

一夏が叩いていた敷布団の上に上向きに寝転がる。
やはり本人は緊張しているみたいで両手をぎゅっと握り締めて胸元まで持っていく。
そして目を力強く閉じる……が、何も起こらない。

「オルコットさん、うつぶせにならないといっくん出来ないよ？」

春樹が声をかけた。

「え？　え？　うつぶせで……しますの？」

「？　まあ、うつぶせだな基本は」

一夏がうなずく。
セシリアは一度本を読んだことがあった。
もしかしたら日本では上向きではなくてうつぶせでするのが一般的なのかもと心の中で納得する。
一般的ではないにしろ、一夏がうつぶせにならないと出来ないというのであればならないわけにはいかない。
セシリアはゆっくりと緊張の解れぬままうつぶせになった。

「じゃあ、始めるぞ！」

「ひ、ひゃい！！」

緊張のしすぎで返事がついおかしくなる。
普段ならこの裏返った声が出た瞬間恥らうはずが今のセシリアにはそんな余裕がない。
一夏の手がゆっくりと……ゆっくりと迫ってくる気配。
もうセシリアの心臓は破裂寸前まできて、そして――――

「ういっ……しょっと」

ぶみ～～～！

「!?　いたっ！　い、い、いつつつつつ、一夏さんっ!?　こ、こ、これは一体――――　痛いッ！　痛いッ!!」

圧迫される感覚とともに激痛が体を走る。

「何って指圧」

「し、し……あつ？　ッ!!」

「そう、腰の」

キョトンとしたセシリアは自分が想像していたことと違い一瞬だが痛みがどこかへ飛んでいった。

「あ、あの……もしかして一夏さんが部屋にお誘いした理由ってもしかして」

「ああ、マッサージをしてあげようと思ってな」

今のセシリアが何と勘違いしていたかは言うまでもない。

「シャルさん気持ちいい？　ごめんね、僕いっくんよりうまくないから」

「う～、ぜんぜん気持ち良いよ春樹……　なんだか眠くなってきた」

セシリアの隣ではシャルが春樹によってマッサージされていた。
シャルの目は半開きで、もうおねむモードに入ってしまっている。

「春樹次は私だぞ。　わかっているのか？」

その後ろではラウラが睨みつつ、羨ましそうな視線を送っていた。
もちろん箒と鈴も順番を待っている状態。
なんせ気になっている男子にマッサージをしてもらえる機会なんてそうそうないだろう。

気がつくとセシリアも痛みから解放され、いつの間にか快感に変わっていて口からは暖色のため息がもれる。

「はぁぁ……お上手ですのね一夏さん」

「まあ……昔から千冬姉にしてたしな」

ムニュッ！！

（！？　い、い、一夏さんっ！？　マッサージと言えどそんなところを……　大胆……）

マッサージのおかげで半分寝かけそうになっていた意識が一気にさめる。
なんせ突然お尻を鷲づかみされたのだから誰もがそうなるだろう。
セシリアの形の整ったお尻はむぎゅむぎゅと揉まれて形を変形していく。

「おー、マセガキめ」

「え……キャァァァァァ！！」

てっきり一夏が掴んでいるのかと思っていたセシリアは実際に誰が掴んでいるのか確認すると自然と口から叫び声が出てきた。
掴んでいた人物――――ニヤリと不気味な笑みを浮かべながら、今もまだ触り続けている鬼教官……そして《黒の出席簿（ブラックアテンデンス）》の使い手こと千冬だったのだ。
千冬がセシリアのお尻をすくい上げるように掴んだせいで、まくれ上がった浴衣の裾からお尻があらわになってしまっている。
そして今夜のために気合を入れて履いてきた、いわゆる勝負パンツ

というものも丸見えになっていた。

面積の少ない『特別なときのための下着』――――勝負パンツ。
両サイドを紐で縛ってある部分は、解かれて脱がされることを前提にして作られているもの。

「「……」」

一夏、さらに隣でシャルのマッサージが終わりラウラのマッサージをしている春樹までもが顔を赤くしながら目をそらす。

「せ、先生っ！！　早く隠してください！！」

「お、オルコットさんって結構大胆なんだね」

「わ、悪い、俺は今の記憶を忘れよう。　うん、俺は何も見ていない」

もうセシリアは穴があれば隠れたかった。
いや、もう死んでしまいたいと思ったに違いない。

「ふっ、教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

エピソード28　【オーバースペックって響きがカッコいい】（前書き）

更新遅れてしまいました。
もう春休みも終わってしまうので、学校が始まるとさらに更新スピードが落ちてしまいます……
申し訳ないです…

エピソード28　【オーバースペックって響きがカッコいい】

「「つ、疲れたぁぁぁぁ！！」」

一夏と春樹は全員のマッサージを無事に終え、畳の上に横たわる。
一夏は箒、鈴、そしてセシリアをマッサージ。
そして春樹はシャルロットとラウラだった。
流石にぶっ続けでやったおかげで二人とも体中が痛くなってしまった。
今の二人の心境は何十キロもの長距離マラソンを無事完走した感じだろう。

「二人ともう一度風呂に入って来い。　寝る前に汗かいたのだからな」

「そうだね～。　行こっか」

「そうするか」

千冬の言動に二人は頷き、タオルと着替えを持って部屋を出る。
一夏と春樹が出て行ってしまうとさっきまでにぎわっていた部屋が急に静かになり、取り残される５人と鬼教官。

「「「「「……」」」」」

もちろんどうすればいいかわからずこの女子5人はその場で座り込んで黙ってしまう。
場の空気がかなり重いに違いない。

「さっきまでのバカ騒ぎはどうした、私では不満か？」

「い、いえ、決してそんなことは……」

セシリアがそう言うとほかの4人、つまりは箒、鈴、シャルロット、ラウラが顔を急いで縦に振る。
5人ともこうして千冬と話すのは初めてで体がギシギシで、さらにかなり緊張している。

「まあいいだろう……。　そうだ、飲み物を奢ってやろう」

何かを思い出したかのように立ち上がり千冬は部屋に備え付けてある小型冷蔵庫を開けた。
そしてその中から人数分の飲み物を取り出す。
コーラ、紅茶、コーヒー、ウーロン茶、スポーツ飲料……それぞれを取り出して全員に渡していく。

「他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言われるものの誰も交換しなかった。
千冬から手渡しでもらった物を交換するなんて怖くて出来ないというのが全員の心の中の声だ。
それに渡されたもので満足というのもあった。
全員が「いただきます」と言葉を口にして、自分の手元にある飲み物を口にする。
ごくっと喉を鳴らして飲む姿を見た千冬はニヤリと不気味な笑いを見せた。
その瞬間、５人全員に悪寒が走る。

「飲んだな？　では私も飲むとしよう」

千冬が冷蔵庫から新たに取り出したもの、それは銀色に輝いている缶で星マークがついている。
プシュッといい音を立てながらその缶を開けて、千冬はごくごくと飲んだ。

「「「「「「……」」」」」」

それを見ていた5人は唖然としてしまう。
千冬はそのままぐびぐびと缶の中身を飲みながら、夜景が見える位置に置いてある椅子に腰掛けた。

「ビール、夜景、あとは一夏の一品があれば問題ないのだが……
まあいいだろう」

あの鬼教官と呼ばれ、規則と規律に厳しいお方が今の千冬と一致せずにあっけにとられてしまっている5人。
特にその中の一人、ラウラは今まで見たことのない『教官』なので一番唖然としてしまっている。

「なんだ、そんなに私が酒を飲むのがおかしいか？」

「いえ、そうでは……」

「ないですけど……」

「今は……その」

「仕事中なんじゃ……」

そう、教師が仕事中にアルコールを飲んでいる。
これは明らかにやってはいけないことだ。

「お前らには口止め料は払ったぞ？」

千冬はまたもやニヤリと笑うと、ビールを持った手の人差し指を立たせて渡した飲み物を指差す。

言われるまでその意味がわからなかった女子一同は言われてからハッとする。

ただ彼女達の場合千冬が適当に脅せば、人に話すとは思えないが……

「さて、そろそろ本題に移るか」

ビールを片手に千冬は真剣な表情になる。

「お前ら、あの二人のどっちがいいんだ？　先に言っておくが一人だけだぞ」

あの二人――――　つまり一夏と春樹ということはすぐに全員がわかった。

そう問われると5人は顔を下に向けてなにやら考え出した。

先ほどまでいつもの千冬とのギャップの激しさに魂が抜けそうになっていたラウラも今は真剣に何かを考えている様子が伺える。

「ふむ、まあ悩むのは今のうちだぞ。　問題はあいつらに好きな人が出来ないかという問題だけだがな」

「「「「「「！？」」」」」」

千冬の言葉に女子全員に緊迫が走る。
自分が思いを寄せる男に好きな人が出来る……　たしかに普通の男子と比べると女子との接触の多い二人。
ＩＳ学園は９９％が女子。その女子だらけの中でたった二人の男子なのだ。
つまり接触が多い分、ときめくチャンスが多いということで正直自分以外はすべて敵と一緒。
それよりも今この恋焦がれる乙女達が悩んでいるのは、果たして自分は一体どちらが『本当に』好きなのかということ。

「まあ、あいつらがすぐに恋に目覚めるとは思えんがな」

千冬は夜景と……そして座りながら悩み続けている乙女達の姿を見てどこか楽しそうな表情を浮かべた。

翌日・・・
午前中にＩＳの各種武装試験運用とデータ取りに時間をとられるわけだが、それからＩＳの専用機持ちのメンバー……　いや、性格には一夏、春樹、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、そしてなぜか専用機持ちではない箒が別の場所へと呼ばれた。
呼ばれた場所は森林の奥で、海が見えるとても静かな所で人気がまったくない。

「よし、これで専用機持ちが全員そろったな」

千冬が腕を組みながらそう言う。

「ちょっと待ってください。　箒は専用機を持っていませんけど」

鈴がそう質問した。
今さっき千冬は『専用機持ち』と言ったがこの場には専用機を持っていない箒がいる。
本人はそう言われると少し焦りが見え始めた。

「そ、それは……」

「いや、私から説明しよう。　実はだな――――「やっ……ほぉぉぉぉ～！！」　はぁ……」

千冬が説明するのを妨害するかのようにナイスタイミングであるお方が崖を突っ走って下りてきた。
その人は……

～春樹Ｓｉｄｅ～

「いや、私から説明しよう。　実はだな――――「やっ……ほぉぉぉぉ～！！」　なっ……」

ちーちゃんが話している最中に突然大きな声が聞こえてきた。
この声……忘れるはずがない。
いっくん、箒ちゃん、それにちーちゃんが良く知っている人物。

「ちーちゃ～～～～～～～～～ん！！」

束さん、その人だった。
崖をものすごい勢いで駆け下りている途中に飛び上がり、ちーちゃん目掛けてダイブする。
本当なら立ち入り禁止なんだけど、束さんにとったらそんなのぜんぜん関係ない。
そしてちーちゃんに抱きつこうとしてダイブしたものの、惜しくも一歩手前で束さんは顔面を片手で掴まれた。

「やあやあ！　会いたかったんだよちーちゃん！！　さあ、私達の愛を確かめ合おうよ！　――――げふっ！」

「うるさいぞ、束。　まだ説明もしてないというのに」

「ぐぬぬぬぬぬ……　相変わらずの鋭いアイアンクローだね。　ハルくん、手伝って！！」

「ふぇ！？」

急に僕の名前を呼ぶから思わず変な声出しちゃったよ～……
それにちーちゃんなんて怖い顔してみてくるから手伝いたくても手伝えないし

「うむむむむ…！　とりゃっ！！」

愛の抱きつき攻撃をするのは諦めたみたいで、拘束から瞬時に抜け出す束さん。
そしてクルッと空中で一回転してから着地、今度は箒ちゃんの方に向いた。
箒ちゃんはというと頭を抱えて姿勢を低くしている。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。　何年ぶりかな～？　おっきくなったね！　特に……」

両手をわきわきさせながら箒ちゃんの胸に近づくけど、

がんっ！！

どこからか木刀を取り出して突き一発。

アニメでも見ているかのように束さんは空を舞い地面に這いつくばった。

「殴りますよ？」

「うぅぅぅ。　ハルく～ん！！　箒ちゃんがいじめてくるよ～」

涙目になりながら僕の胸へと飛び込んできて顔をこすりつけて来た。
ま、まあ、さっきのは流石に束さんが悪いんじゃないかな～？
でも、別れたときと変わってないみたいだし良かったよ本当に。
とりあえず頭を撫でているとちーちゃんが口を開いた。

「まったく……　おい束。　自己紹介くらいしたらどうだ」

「ふぇ～、メンドクサイな～」

そういうと束さんは僕から離れてクルッとその場で一回りする。

「はろー、私があの天才の束さんだよー。　終わり」

な、なんて中途半端な自己紹介の仕方……

まあ、僕もこんな感じで転入するときに自己紹介したような感じがするけど。

隣で苦笑いしているいっくんだったが、そのほかの女の子達はぽかんとしているだけだった。

だが束さんが自己紹介し終わると、ようやく今目の前にいる人物がＩＳ開発者にして、あの天才科学者・篠ノ之束と気づいたみたいで、いっくん、箒ちゃんと僕を除いて驚きの表情を見せる。

「束って……」

「ＩＳの開発者にして天才科学者の！」

「篠ノ之束……」

ちなみに上から順に鈴音さん、シャルさん、ボーデヴィッヒさんだ。

それに加えてオルコットさんはただ目の前の人物のすごさに圧倒されているだけだった。

「ふっふっふっ……　それでは空をご覧あれ！」

目をきらーんと輝かせてから急に束さんが空を指差した。

うん？　一体なんだろう……

いっくんも疑問に思ったらしく聞いてくる。

「一体なんなんだ？」

「う～ん。　もしかしたら箒ちゃんの――――――」

ヒュウウウウウ～……　ドガァァァンッ、ドガァァァンッ！！

僕達の目の前に銀色の金属の塊が『２つ』落下してきた。
そして、すぐにその銀色の壁が消えていき中から現れたのは、

「じゃじゃーん！！　これぞ箒ちゃんの専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製のＩＳだよ～。超無敵のオーバースペック！！」

真紅の装甲に覆われたその機体は見覚えがあるものだった。
僕がまだ束さんのところにいた時に箒ちゃんのためにと二人で考えまくったＩＳ。
今、目の前にその完成品がある。
そして束さんはもう一つの方を指差す。

「あとは～、ハルくんの『唐梅』のメインスラスター　アンド　いろいろなものを兼ねている、《春風（しゅんぷう）》……」

束さんは説明をしているうちにだんだん声のトーンが下がっていき、ついには顔を伏せてしまった。
理由はわかってる。
束さんでもわからなかったんだ。
《春風》が『起動しない理由』が……

「束さん、大丈夫。　何とかなるよ、きっと」

「ごめんね。　まさかこんなことになるなんて……」

「うん、仕方がないよ。　それより早く完成した紅椿見せてよ！　威力がどんなものか見てみたいな」

僕がそういうと束さんはパァっと明るくなりいつも通りの表情に戻る。
早く《春風》をいじりたいけど、それと同じくらい紅椿の性能が気になって仕方がない。
たしかに束さんと悩んで悩みまくった結果、オーバースペックになってしまったけどどれくらい今のＩＳを上回るのか知りたかった。

「よしっ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズ始めようか！　ハルくんサポートよろしくぅ」

キラッと小さな星が零れ落ちるくらいのウインクをした後に、小走りで紅椿に駆け寄る束さんとそれをゆっくりと追いかける箒ちゃん。

「サポート？　春樹、お前手伝えるのか？」

「うん、本当に小さなサポートだけだけどね」

いっくんにそう答えると僕は先に準備をし始めてしまっている束さんの隣に並び、彼女と同じように空中投影のディスプレイを呼ぶ。
そして空中投影のキーボードを次々と叩いていく。
こうやっていっしょのことをやるのって久しぶりだな。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ？　あとは自動支援装備もつけておいたからね。お姉ちゃんが！！」

「それはどうも」

う、う～ん。
なんなんだろうな～、このそっけない箒ちゃんは…　僕、苦笑いするしかないよ。
姉妹なんだから仲良くすれば良いのにと思うのは僕だけだろうか。
でも前に束さんが言ってたな。
確か束さんがＩＳを発表したときに転向しなくちゃならなくなって

その所為で、箒ちゃんが束さんを嫌いになったとか……
悲しげな顔をしながらそのことを言ってた時の束さんの顔がふと思い浮かんだ。

「あっ、ハルくんそっちのデータもらえるかな？」

「大丈夫、もう送ったよ」

「お～、流石ハルくん。　よく私のお手伝いをしていただけはあるね～、えへっ」

僕達は互いに笑いながらキーボードを叩いていった。

～春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～一夏Ｓｉｄｅ～

「は、早いね、あの二人」

シャルが隣でそう声を上げる。

「あ、あの手さばき……　異常じゃない？」

鈴が化け物でも見ているかのような目をしながらそういうが、確かに早い。
ディスプレイに表示されている画面が次々と変わっていっていて俺達の目じゃ追いついていけない。
束さんと春樹、恐るべし。

「よしっ、ここまできたらあとはオートでやってくれるね。　ハルくんお疲れ～」

「ふ～、じゃあ僕は春風見てくるね？」

春樹は自分がいたところを離れて唐梅のパーツ《春風》の傍へと行

ってまたディスプレイを開けると難しい顔をしだした。

「いっくん、ちょっと白式見せてもらえるかな？　束さんは興味津々なんだよ～」

「あ、はい」

俺は右腕に装着してある白のガントレットに左手を乗せて意識を集中させた。
そして強い光を放ち始めて、俺を包み込み専用機である『白式』を展開させる。

「データをっと……とりゃぁ！」

白式に束さんはケーブルをブッ刺すと、さっきみたいに空中にディスプレイが広がる。
俺には何が書いてあるのかさっぱり理解できないディスプレイを見ながら束さんは人差し指を顎に添えて眉をひそめた。

「う～ん……　この変なフラグメントマップなんだろう。　見たことのないタイプ。」

フラグメントマップというのは、ＩＳがパーソナライズによって独

自に発展させていくその道筋というものらしい。人間で言う遺伝子だそうだ。
うーむ、よく俺覚えてたな。　自分で自分を抱きしめたいくらいだ。

「束さん、どうして男の俺とか春樹がＩＳを使えるんですか？」

ふと思ったことを聞いてみる。
女しか使えないといわれていたＩＳがなぜ、俺や春樹が使えるのか……
恐らく世界の人々がそう思っているに違いない。

「ん？　ん～……　どうしてだろうね？　私にもさっぱりなんだよ」

束さんにもわからないのか……

「もうそろそろ紅椿の自動処理が終わるころかな？」

おっ、もう終わるのか。

「うん、終わってる感じだね。　んじゃ、試運転も兼ねて飛んでみ

よう。　箒ちゃんのイメージどおりに動くはずだよ？」

「ええ。　それでは試してみます」

箒がそういうとフワッと機体が地面から浮いた。
それから意識を集中させるためかまぶたを閉じて、意識の高まった瞬間目を開くと紅椿はものすごい勢いで飛翔した。

「うわっ！？」

あまりにもの大きい加速で衝撃波が発生し周辺の砂や小石が舞い上がる。
しかし早い。
こんなに早く動く物体を俺は見たことがなかった。
今、上を見上げると赤い流れ星のようなものが動き回っている。

「ま、まさかここまでだなんて……」

「おっ、春樹」

春樹が苦笑いしながら隣にやってきた。
ん、ここまでってどういうことだ？

「それじゃあ刀使ってみよー。　右が《雨月（あまつき）》、左が《空裂（からわれ）》だよ～。　データ送るよん」

束さんがキーボードの上で指を滑らせる。
武器データを受け取ったらしい箒は、その二刀の刀を抜き取った。

「箒ちゃん！雨月は刺突攻撃の際にレーザーを放出、空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出することが出来るから～！！」

「ハルくんのアイデアを組み込んだんだよう～。　イエイ！」

「春樹のアイデア？」

「うん、あの二つの刀の性能は僕のアイデアなんだ。　中距離戦闘にも対応できるようにってね」

いや～、なんだか話だけ聞いてると春樹が束さん第二号に見えてきたんだけど！
次からは春樹にも敬語を使わなきゃいけないんじゃないの！？

「じゃあこれ打ち落としてみてね。　ほほいのほいっと！」

いきなり束さんは十六連装ミサイルポッドをどこからもなく召喚。
そして一斉にミサイルを空へと向かって放った。
試運転でここまでする必要があるのかって突っ込みたくなってしまう。

「――――やれる……　やれるぞ、この紅椿なら！」

～一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～春樹Ｓｉｄｅ～

すごい……　まさか僕と束さんが出し合ったアイデアをここまで現実にするなんて……

箒ちゃんの紅椿は一瞬にしてミサイル１６発を撃墜。
設計に携わった僕でさえその目の前にある圧倒的なスペックに驚い

てしまった。
もう言葉すら出ない。

「それより……」

僕は紅椿から目を離して、展開した唐梅とケーブルで繋がれてセッティングをしている最中の春風を見る。

「起動……してくれるかな？」

動かない原因がわからない。
でも……　春風がないことには唐梅は１００％の力を発揮できない。
だから……

僕は願うしかなかった。

「たっ、大変です！　お、おお、おり、おり、おりっ！！」

突然の声。
山田先生が大分あわてた様子で駆けてきた。
でもちゃんとちーちゃんの名前を言えてないけど大丈夫かな？
それにしてもここまで山田先生が慌てるなんて一体何が起こったん

だろう。

「どうした？」

「こ、こっ、こっ、これをっ！！」

ちーちゃんに渡される小型の電子端末。
その画面を見たちーちゃんの目は鋭くなる。

「特命任務レベルＡ……　現時刻より対策をはじめられたし……か」

「ハワイ沖で試験稼動していた――」

「山田君。　機密事項をあまり大きな声で口にするな」

「す、すいませんっ…」

特命任務レベルＡ？
そこの部分しか聞こえなかったけど、なんだか胸騒ぎがするな。

エピソード28　【オーバースペックって響きがカッコいい】（後書き）

唐梅のパーツ《春風》その能力……　効果……
それ以前に起動することが出来るのか……
次回は外見も説明できたらな～

エピソード29　【海でのショウタイム　前編】（前書き）

更新遅れました……
受験生というものはこんなに忙しいんですね。

エピソード29　【海でのショウタイム　前編】

「状況を説明させてもらう」

千冬の声が薄暗い部屋に響き渡る。

紅椿の試運転が強制的に終了させられ、専用機乗りメンバーは旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷に緊急招集された。

この大座敷――風花の間の室内には大型の空中投影ディスプレイが設けられてそれを中心に専用気乗りは座っている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ……『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』になんらかのトラブルが起こり暴走。　監視下にあった空域を離脱したとの連絡が入った」

春樹の胸騒ぎは当たっていた。

一夏はいきなりの説明にぽかんとしてしまうが、春樹を含めて女子全員は真剣な顔つきになっている。

「その後、衛星で追跡したところ、福音はここから二キロ先の空域を通過することが判明した。時間にしておよそ５０分前後だろう」

「織斑先生、その通達がこっちに来たってことはもしかして……」

いつもちーちゃんと呼んでいる春樹がこの時だけは珍しく織斑先生と呼んだ。

「そうだ九曜。　我々がこの事態に対処することになった。　教員全員が空域及び海域を封鎖する。　つまり本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

その千冬の言葉に対して一夏はかなり驚くが他の面子は顔色一つ変えなかった。

いや……　影で一人だけ強く拳を握り締めて、唇を噛んでいる人物がいたのだった。

春樹……　彼だ。

～春樹Ｓｉｄｅ～

まさか……　こんな緊急事態に限って……

僕のＩＳ、『唐梅』は今手元にない。

さっき束さんが持ってきた春風をセッティングしようと思って唐梅

にリンクさせたのが間違えだった。
唐梅が『起動しなくなったのだ』。
起動しなくなっただけじゃなくて、待機状態である指輪にすらならないという前代未聞の異常事態。
今は束さんがどうなっているのか情報収集をしているが、あの顔つきから見るにいい方向には進展していない。

「どうした九曜。　問題でもあるのか？」

ちーちゃんがそう聞いてくると同時に、みんなが僕を見てきた。

「僕は……　ここで待機になっちゃう……」

「どういうことだ？」

僕の言葉を聞いてちーちゃんの持っている鋭い目がさらに鋭くなる。
そりゃあそうだよね。

「唐梅が……　動かないんだ……」

「う、動かないってどういうことだ？　さっきの……なんだっけ…
…春風？　あれをつけてパワーアップするんじゃなかったのか？」

「いっくん……。　春風は唐梅の第二形態で発現した武装。　だけど発現したときから起動してないし、それにどういった性能があるのかすらもわからないんだよ」

そう、春風は第二形態に移行したときに発現した武装。
実際に武装かどうかもわからないけど、今わかっているのはあれが推進力になるということだけ。
だから起動しない原因を追究するために今まで束さんに預けてたんだけど、原因がわからないまま帰ってきたんだ。
それを試しにもう一度唐梅に取り付けたら、なぜかＩＳ本体も動かなくなってしまった。

「……とりあえず作戦を立てとこうよ。　もしも起動した時のことを考えて僕も作戦考えるから」

「仕方がない…　春樹は最初からいないものと考えておけ。　では作戦会議を始める。　質問があるものは挙手しろ」

「はい」

真っ先に手を上げたのはオルコットさんだった。

「目標ＩＳの詳細データを要求しますわ」

「わかった。　だがこれは2カ国の最重要軍事機密だ。　情報が漏れた場合、諸君らには裁判と最低でも2年の監視がつけられる」

「了解しました」

オルコットさんが了承し、僕を含めてみんな顔を縦に振る。
データを見せてもらい、福音のデータを元に相談し始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……　わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体。　それにあたしの甲龍のスペックを上回ってる…」

「この特殊武装が危険だね。　本国から防御パッケージが着てるけど流石に連続は……」

「こんなデータでは格闘性能が未知数だ。　もっているスキルもわからんし、情報不足すぎる」

『ブルーティアーズ』と同じオールレンジ、スペックは甲龍を上回

っていて、危険な特殊武装、そしてそれに加えての情報不足。
正直、今の段階だとこの任務の成功率は皆無だ。

「お、おい春樹」

「うん？」

さっきまでぽかりとして混乱していたいっくんが正気になった。

「お前、会話についてけるのか？」

「ん？　うん」

「ま、まじか……」

みんなの言葉を聞きながら頭を抱えるいっくん。
ん～、どうやら会話についていけてないみたいだ。
仕方がないよ、僕もまさかこんな緊急事態になるなんて思っていなかったし。

「やはり、一撃必殺ほどの攻撃力を持った機体で当たるしか……」

「だったら一夏。　あんたの零落白夜で落とすのよ」

「は！？　ちょ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「だって春樹の唐梅が動かないんだから仕方がないじゃん」

気がついたらかなり話が進んでしまっていた。
目標である福音は時速２４５０キロオーバーとかなりの速度で飛行しているから、できてもアプローチは一回だけ。
そこから考えるのはそのアプローチ一回で確実に大きな打撃を与えてしまおうという考えだ。
今いる専用機持ちの中でトップクラスの攻撃力を誇っているのは、白式の《零落白夜》、そして唐梅の《雪消月》だ。
だけど唐梅が動かない今の状況では白式しかないという結果になったんだろう。

「織斑、これは訓練ではない。　実戦だ。　無理だと自分で思うんだったら、無理はするな」

ちーちゃんが腕を組みながらいっくんに伝える。
いっくんは数秒考えた後……

「やります。　俺が……　やってみせます」

「流石いっくん。　そういうと思ってたよ」

「よし。　この場にいる専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それならわたくしのブルー・ティアーズが。　本国から高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますわ」

パッケージというのはいわゆるＩＳの換装装備のことだ。
すべてのＩＳはこのパッケージと呼ばれるのがあって、追加アーマーや増設スラスターなど豊富な種類がある。
それを装備することによって個々の機体性能を大幅に変更、または上昇させることができるんだ。

「ふむ、九曜どう思う？」

「織斑先生、僕は「ハルくん、その先は私が言うんだよ～！！」」た、束さんっ！？」

僕が言葉を口にする前に、どこからもなく束さんが割って入った。
それもその声は意外なところから聞こえてきている。
なんと今僕達がいる座敷の天井を一部外してそこからひょっこりと

顔を出しているんだ。

「とぅりゃっ！」

クルンと空中で忍者のように一回転しながら着地。
束さんなんだかんだいって運動神経かなりいいんだよね。

「ここは紅椿のショウタイムなんだよっ！」

「何？」

「織斑先生、僕は紅椿にこの任務をやらせてみたいんだ。　紅椿ならパッケージなしでたぶん問題なくこなせると思う」

僕がそう言うとちーちゃんの周りに詳細データが表示されているディスプレイが次々に展開されていく。

「そうなんだよ～、この天才束さんが作った展開装備を装備している第四世代型ＩＳならちょちょいのちょい！！」

「「「「第四世代！？」」」」

その場にいる教師陣を含めてみんながあっと声を上げた。
そう、紅椿はＩＳの第四世代型。
ようやく世界は第三世代型の一号機の試作機が出てきているけど、僕と束さんは第三世代型が研究されている真っ最中にはすでに第四世代ＩＳの設計を済ませていた。
僕の場合、少しのアイデアとお手伝いをしただけだけどね。

「ちょっと解説しちゃうと、第一世代はＩＳの完成を目標とした機体。　第二世代は後付武装による多様化。　次が操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器武装。　ようするにＢＴ兵器やＡＩＣとかその辺のことだね。　で、気になる第四世代型はパッケージ換装を必要としない万能機、今の世界じゃあ空論の産物だけど束さんはハルくんのサポートを得ながら作ったんだよ。　あっはっはっはっ」

まあ正直な話パッケージ換装を必要としないというよりスロット的に無理というほうが正しいのかも……
束さんがいろいろ説明しているうちにみんなは何か変なものでも見たかのような顔になっている。
仕方がないと言えば仕方がない。
なんせ各国がものすごい軍資金を使って必死に第三世代の開発に取り組んでいるのにとあるところでは第四世代が現れたのだから。
といっても紅椿は完成体じゃないらしい。

「あっ、後第四世代型は紅椿だけじゃないんだよ。　白式と唐梅もそうなんだよ、えへへへ。　ぶいぶい」

「そ、そうだったのか春樹？」

「一応そういうことになるのかな～？」

いっくんの白式の武器、《雪片弐型》の機構に第四世代型ＩＳの特有である展開装甲が使用されているから白式も一応ニュージェネレーションの仲間ってことかな？

僕も詳しい詳細まではまったく知らないけど、束さんが言うんだからきっとそうなんだろう。

「――束……　言ったはずだぞ、やりすぎるなと」

「えへへへ、熱中しちゃったんだよ～。　ハルくんがいた時なんて仕事がはかどり過ぎて手が止まらなかったんだよね～」

呆れた声を漏らすちーちゃんに束さんはニコニコと笑うだけだった。

「まあいい、紅椿の調整にはどれくらいの時間を有する？」

「お、織斑先生っ！？」

声を大きく上げたのはオルコットさんだった。
専用機持ちの中で高機動パッケージを所有しているのが自分だけだったために、てっきり自分が指名されると思っていたのだろう。

「わたくしのブルー・ティアーズなら必ず成功させて見せますわ！」

「そのパッケージはインストール済みなのか」

「そ、それは……まだですが……」

オルコットさんは痛いところを突かれたみたいで、さっきまでの勢いがなくなっていった。
さっきからずっとニコニコしている束さんが横から割ってはいる。

「紅椿の調整時間は私一人で7分、ハルくんといっしょなら3，4分ってところかな」

「よし、では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による追跡と撃墜を目的とする。作戦開始は３０分後、全員すぐに準備にかかれ。　九曜は束と調整が終わり次第自分のＩＳをいち早く元に戻せ」

「紅椿は精一杯やるけど……　唐梅はどうなるかわからないよ」

そういい残し僕と束さんは紅椿の調整へと向かう。

束さんはＩＳアームアーマーによく似ている前腕部だけのパーツ、それを計４つ使い紅椿の内部の機械部分をものすごい早い手つきでいじっていく。
ちなみに僕は紅椿のシステムデータを触りつつ、束さんによって更新させられていく部分の再調整と圧縮、その地道な作業を浮遊ディスプレイを見ながらキーボードに手を滑らせる。

「ハルくん、後はそっちだけだよ～」

「うん、こっちもすぐに……」

どうやら束さんの仕事は終わったみたいだ。
僕も最後に束さんが触っていたところを最終チェックして、動かしていた指を止める。

「お、終わった～……　束さん、唐梅のことも手伝ってくれる？」

「もちろんだよ」

束さんと一緒なら心配ない！　と行きたい所なんだけどな～……
今回ばかりは二人で頭を抱えそうだよ。

～春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～一夏Ｓｉｄｅ～

時刻は１１時半、作戦開始時間だ。
砂浜は夏の太陽からの太陽光を浴びて大分温度を上げている。
その砂浜で俺と箒は少しだけ間をあけて並び立つ。

「こい、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身に光を帯びて、ＩＳのアーマーが俺達の体を包み込む。

「じゃあ箒、よろしく頼む」

「本来、女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが今回ばかりは特別だぞ」

セリフ的にかなり拒否しているように見えるが、なぜか本人はどこかうれしそうな表情を浮かべる。
作戦上、移動のすべてを箒の紅椿に任せてしまうので、俺は紅椿の背中に乗ることになった。
箒の紅椿は稼動からまだ２４時間すら経っていない。

（何かあったら、俺がフォロー入れないとな）

とまあ気を引き締めるものの、心のどこかで逆にフォロー入れられたらどうしようかと思ったのは内緒だ。
そんな微妙な心境の中俺は箒の紅椿の背中に乗る。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

オープンチャンネルで千冬姉の声が聞こえる。
俺達は無言で顔を縦に振る。

『今、九曜から連絡が入った。　唐梅が起動不可らしい。　一応バックアップとして他の専用機乗りをつけておくが、あくまで主体はお前達二人だ。　短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいのでしょうか？」

『そういうことになる、だがあまり無理はするな。　お前は専用機を使い始めてからの実戦経験は限りなくゼロに近い』

「わかりました。　できるだけの範囲で援護します」

箒はそういい終わるとどこか気持ちが緩んだのか、浮ついた印象を受けてしまう。
気のせいだといいのだが、たいてい人間は浮ついているとどこかで必ず失敗をする。

『織斑』

今度はオープンチャンネルではなく、プライベートチャンネルが開いて千冬姉が声をかけてきた。

『どうやら篠ノ之は浮かれているようだ。　あんな状態では何か損をしてしまうやもしれん。　そのときはお前がカバーしてやれ……わかったな』

「わかりました。　ちゃんと意識はしていますから」

『頼むぞ』

どうやら千冬姉も箒が少し浮かれているのに気がついたみたいだ。だから念のためにということで確認しておきたかったのだろう。

『では、作戦開始！』

ドゥウウウンッ！！

「うおっ！！」

千冬姉の合図が出た瞬間、紅椿はものすごい勢いで上空を飛翔した。
こ、このスピードはなんだ!?　白式の瞬時加速と同じくらいか、それ以上じゃないか！
春樹のやつどこかで調整ミスったんじゃいんかと疑いたくなるくらいの超スピード。
そう思っている間にも、俺を背負った状態にも関わらずどんどんとスピードを上げていき、ものの数秒で目標の５００メートルに達した。

「衛星リンク確立……情報照合完了。　目標の位置を確認……一夏、一気に行くぞ！」

「お、おうっ！」

箒の返事に返答するとまたもやスピードを上げる紅椿。
脚部、そして背部装甲から展開装甲の名にふさわしいばかりと開いて、強力なエネルギーを排出する。
きっとこれが《雪片弐型》と同じ展開装甲の完成型なのだろう。
後から春樹から聞いたことなのだが、展開装甲は攻撃、防御、機動のすべてにおいて即対応ができるように設計されているらしい。

「見えたぞっ！」

ハイパーセンサーに表示される目標。
全身が銀色をしていてまさしく『銀の福音（シルバーゴスペル）』と言う他ない。
銀色の他に印象付けられるのが頭部から生えている一対の巨大な翼。
情報によると、機体の色と同じ銀色に輝くその翼は大型スラスターと広域射撃武器を融合させたものらしい。

「加速するぞ！　目標に接触するのは１０秒後だ！」

「ああっ！」

俺は雪片を握り締めて構えた。
そしてスラスターと展開装甲の出力をさらに上げる箒。
高速で空を飛翔している福音の距離をぐんぐんと狭めていく。

「うおおおおっ！！」

零落白夜を発動して、さらに瞬時加速を行って一気に間合いを詰める。

「だぁぁぁぁぁ！！」

―いけるっ！　と、そう思った。
だが、福音は高速で動いているにもかかわらず瞬時に反転、後退の

姿を取る。

（一度体勢の立て直しを……　いや、むしろこのまま！）

この短い間合いでは、すでに遅し。
それだったら相手が反撃に移る前に一気に勝負をつけたほうが手っ取り早い。

「接近するＩＳを確認。　迎撃モードへとシフト。　《銀の瞳（シルバーベル）》稼動開始」

「なっ！？」

オープンチャンネルで聞こえてきたのは機械音声。
機械音声なだけに俺の背筋は一瞬ぞくっとしてしまう。
向けられた零落白夜の刃は、いきなり一回転を繰り出した福音によってわずか数ミリの精度で避けられる。

「ッ！　あの翼が急加速をしているのか！　箒、援護を頼む！」

「任せろ！！」

一撃で決めるはずだったが失敗。
とにかく、一刻も早く終わらせる必要があった。
時間がかかればかかるほど、こちらは圧倒的に不利な状況に置かれるからだ。

「くっ、このっ！！」

何度も何度も福音に斬りにかかるが、ひらりと容易に回避されてしまう。
まるでどんどん攻撃してこいと言っているかのような動きだった。
まんまと相手の術中にはまってしまった俺は、零落白夜発動限界時間が迫ってきていることもあって勢いあまり大振りをしてしまった。
福音はこの出来上がった大きな隙を見逃さなかった。

「しまった！　これは――――」

頭部についている銀色の翼。　その装甲の一部が翼のように広げられて、開いた。
そう、銃口だ。
翼を前へとはためかす福音。
その刹那、複数の羽のような弾丸が射出された。

「ぐぅっ！」

高密度に圧縮されたエネルギー弾丸、さらに高性能な連射性。
まだ高い精度ではないが、直撃と同時に爆発する爆発弾だ。
当たってしまえばそれだけでかなりのダメージを負ってしまう。

「箒、左は頼んだ！」

「了解した！」

そのまま連射を繰り出している福音に、俺と箒は回避運動をとりながら左右から接近して攻撃をしかける。
だが、その同時攻撃すらかすりもしない。
回避運動をとりながらの、反撃……　不気味な外見をしていながら、その裏に恐ろしい性能が隠されているその翼が可能にしている。

「一夏！　私が動きを止める！！」

「わかった！」

箒は二刀流で斬撃と突撃を交互に繰り出しながら福音を攻め込む。
腕部の展開装甲が開いてそこからエネルギー刃が斬撃にあわせて射出される。
機動力と展開装甲によるそのときの状態による転換、その驚異的な猛攻によって、反撃と回避だけだった福音がついに防御の姿勢を見せ始めた。

「はぁぁぁ！！」

（行けるか！？）

箒の勝利を思ったが、福音の反撃がまだ隠されていた。
福音はその翼についている砲門をすべて開いたのだ。
その数は全部で３６。
さらには全方位に向けての一斉射撃。

「押し切る！！」

箒はその雨のように降り注ぐ弾丸を紙一重でかわし、さらなる攻撃。
その瞬間、福音に隙ができた。

「！！」

だが、俺は福音とは真逆のほうに全速力で向かう。

「一夏！？」

「くそおおおおお！！」

瞬時加速をフル稼働。　なんとか福音が放った光弾に追いつき、最大出力の零落白夜でそれを防ぐ。

「何をしている！　せっかくのチャンスが――」

「船だっ！　先生達が封鎖したはずが……　くそっ、密漁船か！！」

こんなときに密漁船が……。
雪片弐型の光の刃が消えて、展開装甲が閉じる。
そう、エネルギー切れ。
最大のチャンスを逃し、作戦の要だった一撃必殺の武器までなくしてしまった。

「馬鹿者っ！　そんなやつらを庇って……　そんなやつらなんて「箒っ！！」　ッ――――」

「そんなこと言うなよ。　力を手にした瞬間、弱いものが見えなくなるなんて……　らしくない。　どうしたって言うんだよ箒」

「わ、私は……　私は……」

箒は刀を下げた。
表情までは見ないようにしたが、どんな顔をしているのか大体予想がつく。
そして刀を下げた、その瞬間俺に悪寒が走った。
刀が粒子化して消えたのだ。

（ま、まずい、具現維持限界か！）

エネルギー切れ……
よって具現化できなくなって消えてしまったのだ。

「箒ぃぃぃぃぃ！！」

最後のエネルギーをすべて使い瞬時加速。
無我夢中に箒へと向かう。

（頼む、間に合ってくれっ！　頼む！！）

福音はまた一斉射撃モードへと入っていた。
しかも今度は全砲口を箒へと照準を合わせている。
エネルギーなしのＩＳはもろい。
よってあの驚異的な連射を喰らってしまえば……

次の刹那、福音から光弾が次々に箒に向かって放たれるのが見えた。
走馬灯のように世界はゆっくりと動き、そんな中なんとか俺は間に割って入ることができた。

「ぐあああああっ！！」

箒を抱きしめたのち、爆発弾が次々に俺の背中で爆発する。
エネルギーシールドで相殺しきれないほどの威力で、それが弾十発も続く。
アーマーが破壊されて、体が悲鳴をあげ、熱波で皮膚が焼ける。
激痛が永遠と続き、俺は朦朧とした意識の中一度だけ箒の顔を見た。

（ぶ、無事か……　な、何を泣きそうな顔に……なってんだ……よ……）

「一夏…？　一夏っ！　一夏ぁぁぁぁぁ！！」

視界がゆらゆらと揺れる。
そのまま体は傾き、海へと重力により落ちていく。
箒の頭を抱きしめたまま……

〜一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ〜

エピソード３０　【海でのショウタイム　中編】

「「「「……」」」」

外はすでに夕暮れ。
夏の日差しを照らしていた太陽も半分隠れてしまい外の世界はオレンジ色で一色だ。
そんな幻想的な雰囲気をかもし出している中、旅館の一室では暗い空気が飛び交っている。
負傷した一夏がかれこれ三時間以上も目を覚まさないまま。

一夏の周りには専用機持ちのメンバーが心配そうに見つめている。

（私の……　私の所為で一夏は……）

その中でも一番暗い人物、箒は力なくベッドの上で横たわっている一夏を見つめていた。
ＩＳの絶対防御機能を貫通して熱波により人体に影響を及ぼした。
影響と言っても火傷だが、一夏の体のいたる所に包帯が巻かれており、かなり重症と見える。

（私が……　もっと……　もっとちゃんとしていれば一夏はこんな目にっ！）

歯を食いしばりながら箒は両手から血がひいて白くなるまで握り締めた。

『作戦は失敗だ。　今後状況に変化があれば招集する。　それまで全員待機していろ』

バックアップで控えていたセシリア、鈴、シャルロット、ラウラ達によりすぐに一夏と箒は回収。
後退して旅館に戻った箒を待っていたのは千冬のその言葉だけだった。
千冬は一夏の手当てを指示するだけで、どこかへ行ってしまう。
箒は目じりに涙を溜めながら千冬が現場から去る姿を見守るしかなかった。

「いっくん……」

春樹がぼそっと一夏の名前をつぶやく。
彼も箒のように手を強く強く握り締める。
もし、自分も参加していたなら……　唐梅が動いていたなら……
どうしようもないことだったが、春樹は何度も自分を心の中で責めた。
大切な友を守れなかった。
自分が傷つくことよりも春樹はそれが一番つらかった。

ガタッ！

春樹は突然立ち上がり部屋を出て行った。
箒を除く、そのほかのメンバーは声をかけようと思ってもなぜか口から声が出てこなかった……
いや、今は何も言わないほうがいいと思ったのだろう。

～春樹Ｓｉｄｅ～

僕は走った。
ただただ走り続けた。
自分がどこに行きたいかもわからないけど、走るだけで気分が紛らわせるのであればどこへ行ってもいい。
そう思いながら走り続ける。

「はぁ…はぁ……」

気がつくといつの間にか唐梅の前まで来ていた。

春風をインストールした瞬間に動かなくなった、今ではただの鉄の塊。
唐梅を見た瞬間浮かび上がってくるのはベッドの上で包帯を巻かれて目を閉じているいっくんの姿。

ドスンッ！

「うわあああああああああ！！」

両足を地面にひざまずき、ありったけの力で地面を殴りつける。

ドスンッ！　ドスンッ！　ドスンッ！……

血が滲んでも何度も何度も殴った。
僕は何であそこでいっくんを止めなかったんだろう…　何でもっと他の作戦を思いつかなかったんだろうか。
ＩＳが動かないから僕は行けない？　友達を…大切な友達を向かわせておいて自分だけ安全地帯で待機だって？
いっくんが負傷して帰って来て、何もできない自分がどうしても許せなかった。

「僕はっ…　僕はっ……！　僕はっ！！」

「もう十分だ。　落ち着け」

皮が破けて流血し始めている手を誰かが抑えた。
ボーデヴィッヒさん、彼女だった。

「春樹が自分を責めたって仕方がないよ」

その後ろからシャルさんが現れて血で赤く染まった手を手当てするために救急セットを取り出し、消毒、包帯を巻いていく。

「あは…あははは……。　なんで僕はもっといい策を思いつかなかったんだろうね。　唐梅が動いていたならこんな任務……　こんな任務……」

二人に僕の顔を見られないように唐梅の方を見ながらそう言う。
気がついたら頬に涙が流れていた。
唐梅のシルエットが涙によって歪んで行き、ついにはその原型すらわからなくなる。

（いっくん…　僕は……　僕は、どうすればいい？）

返答が返ってくるはずもないとわかっていながら僕は心の中でそういっくんに問いかける。

『…春樹。　あとのことは頼むぜ』

「っ！？　いっくん！？」

確かにいっくんは今負傷してベッドの上で寝ている。
でも、今の声は明らかにいっくんの声……　今は眠りについているはずのいっくんの声。

「そうだね……　何もできなくても……」

たとえさっきのが錯覚だったとしても関係ない。
おかげで僕の中で一つの決心がついた。

「シャルさん、ボーデヴィッヒさん」

「ふっ、言わなくてもわかるぞ春樹。　私の嫁のことなんぞすべてお見通しだ」

「戦うんだよね？　僕も……　もちろんみんなも力になるよ。　というより元からそのつもりだったしね」

ボーデヴィッヒさんとシャルさんは僕が何も言わずとも理解したみたいだ。
今度こそ任務を成功させる。
唐梅は動かないとしても、それでもできることはあるはず。
現場に向かわないんだったら、任務が確実に成功するように作戦を立てればいい。

「きっとあの落ち込んでいる奴も今頃喝を入れられている――――いや、来たか」

後ろからオルコットさん、鈴音さん、そしてさっきまでものすごい落ち込んでいた箒ちゃんが今ではいつも通りの表情で向かってきた。

「すまない、遅れた」

「大丈夫、箒ちゃん？」

「戦って勝つ！　今私が言えることはそれだけだ」

今まで見たことのない強い視線と覇気。
さっきまでの落ち込みようはどこに行ったのだろうかという勢いだった。
一体どんな喝を入れられたのか気になったって言うのは内緒だ。

僕は集まってくれたみんなの顔を見渡す。

「わかってる通り僕はみんなと行けない。　だけど１００％成功させれるような作戦を練るから……　僕のわがままに付き合ってくださいっ！！」

今僕の心の中で思っている本音、それを口にしてから深く頭を下げる。

「あんたに言われなくても、もとからあたし達はやるつもりだったわよ」

「わがままでも何でもないですわ」

鈴音さん、そしてオルコットさんがそう言うと他のみんなも顔を縦に振る。
やるんだ……
いっくんのためにも……　絶対に。

～春樹Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

海上から２００メートルほどで、静かに静止をしている『銀の福音（シルバリ・ゴスペル）』。
膝を抱えるように丸めた体を、その奇妙な翼で体全体を覆う姿はまるで卵の中身を守っている殻のようだった。
だが福音は何かに気がついたかのように顔を上げる。
そして次の刹那、どこからもなく飛来してきた砲弾に直撃し、爆発。
福音が静止していた周辺を黒煙が舞う。

「初弾命中を確認、続けて砲撃を行う！」

声の主は漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開しているラウラ・ボーデヴィッヒ。
初弾直撃を確認すると同時に、さらなる砲撃を行う。
だがこのシュヴァルツェア・レーゲンはいつもの姿と異なっている。
八〇口径レールカノン《ブリッツ》を左右の肩に装備、さらに砲撃と狙撃から身を守るために四枚の物理シールドを正面に展開しているのだ。
これが砲撃型パッケージ『パンツァー・カノーニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンの姿であった。

（接近まで、４０００……　３０００……　くっ、春樹が予想し

ていたより速いっ！！）

接近してくる福音を砲撃し続けるものの、翼から放たれるエネルギー弾により半数以上を落としながら接近してき、あっという間に距離を縮められる。

「だめかっ！　頼むぞ！！」

砲撃タイプの装備は反動が強いために瞬時に移動することが難しい。数百メートルに接近した福音は敵ＩＳ抹殺のために腕を伸ばす。

ガンッ！ガンッ！

シュヴァルツェア・レーゲンに伸ばしていた福音の手が空から急に下りてきた青の機体によって弾かれる。

鮮やかな青の機体――セシリアのブルー・ティアーズがぎりぎりの距離で腕を弾いたのだ。

気づかれないようにステルスモードからの強襲だった。

セシリアのＩＳも今までと異なり、６機のビットはすべてスカート状に腰部に接続、さらに砲口が塞がれていてスラスターとして使用されている。

手にしている武器も変わっており、その全長は２メートル以上――大型ＢＴレーザーライフル《スターダスト・シューター》となっていた。

これぞ最初本人が騒いでいた、強襲用高機動パッケージ『ストライ

ク・ガンナー』だ。
セシリアの頭部には時速５００キロを超える速度下での反応を補うためにバイザー状のハイパーセンサー《ブリリアント・クリアランス》が装着されている。
それを通して送られてくる情報で最高速の状態から反転、そして福音を狙い打った。

『新たなる敵機確認。　排除行動へと移行』

さらなる敵と認識した福音はセシリアの攻撃を避け、その２機とも排除しようとするが、

「遅いよ」

回避した直後に福音は背後から至近距離の射撃が直撃する。
セシリアと同様にステルスモードで待機、タイミングを待ち構えていたシャルロットだ。
手にはショットガン二丁……　春樹が指定していた位置からの射撃だった。
直撃した福音はバランスを崩し、落下。
だが海面すれすれのところで体勢を立て直しすぐさま《銀の鐘（シルバーベル）》による反撃を行うが『カーテン』によって防がれた。

「残念だけど、そう簡単にこの『ガーディアン・カーテン』は崩せないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージ、『ガーディアン・カーテン』二枚の実体シールドと、さらにもう2枚のエネルギーシールドがカーテンのように展開され盾の役割を果たしている。
ガーディアン・カーテンによって防いでいる間、シャルロットは高速切替（ラピッド・スイッチ）ですぐさまアサルトカノンにチェンジ、反撃を開始する。
その後に続くかのようにラウラとセシリアも援護射撃を行う。
一夏、箒の時と違い福音は回避行動だけで精一杯の状況に追い込まれた。

『優先事項変更。　最優先を離脱に』

流石に分が悪いと認識したのだろう。
翼を大きく広げ、その場からの離脱を試みる福音。
だが、離脱しようとした瞬間に海面が持ち上がり大きな水柱が上がった。
現れたのは紅椿、そしてその背中に乗った甲龍だった。

「離脱する前に――――」

「叩き落とすっ！！」

福音へとものすごいスピードで接近し、ある程度の間合いになると鈴が背中から飛び降り、甲龍に付けられたパッケージ『崩山』を戦

闘状態に移行させる。
両肩にある衝撃砲が開き、増設された2つの砲口が姿を現し、計4つの砲口が福音を狙い一斉に放たれた。

前までの衝撃砲なら不可視という長所を持っていたが、このパッケージにより赤い炎を纏っていて目で見ることが可能になった。
しかし、不可視という長所がなくなった代わりに威力が上がっている。
その威力は福音にも勝っており、それが雨のように降り注ぐ。

ザバァァァンッ！

直撃を喰らった福音は海に落下。

「やった？……　あたし達やったの？」

「あらあら、あっけなかったですわね。　こんなに早く終わるのでしたらやはりわたくしが――――」

セシリアの言葉を遮る様に福音が落下していった周辺が急に吹き飛んだ。

「「「「「！？」」」」」

周辺の海水が蒸発していき、まるで海水が福音の周辺に寄るのを拒むかのように大きな穴を開けている。
福音は自らを抱くかのようにゆっくりと中に浮かんでいき、体中に紫電がほとばしり始めた。

「これは……　一体何が起こっているんだ」

「まずい……　これは『第二形態移行（セカンドシフト）』だ！」

『みんなそこから離れてっ！！　まさかセカンド・シフトをするなんて……　一刻も早く撤退を！！』

箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの全員に春樹から通信が送られてくる。
春樹の作戦にはこの形態移行の予定は入っていない。
ここから先はノープラン……　いわゆる予測外だ。

『キャアアアアアアアア！！』

福音が不気味な奇声を上げる。
まるで狂った人間が叫ぶような声で……
咆哮を発すると、福音はラウラに飛び掛った。

「ッ！？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれてしまう。
破壊されてしまってなくなったはずの頭部の翼がエネルギーの翼となっている。

「その手を離せっ！！」

箒がラウラを助けに斬りにかかるが、さらりといとも簡単に避けられてしまう。

「っ！？」

「早く春樹の言うとおり撤退しろ！　こいつは――――　ぐあああああっ！！」

福音はラウラを翼で抱きしめるかのように覆い、そしてあの高い威力を誇るエネルギー弾をゼロ距離で喰らわせた。
爆発音と共に聞こえたのはラウラの悲痛の叫び。
全身ぼろぼろになったラウラは海に墜ちた。

「ラウラ！！　……よくも、よくもラウラをっ！！」

シャルロットは高速切替でショットガンをコール。
福音に至近距離からの射撃を狙うが、

「なっ！？」

まるで相手が自分に寄って来る事を予想していたかのように、いつの間にか福音がシャルロットの背後に回っていた。
シャルロットは肩を掴まれ、セシリアへと投げ飛ばされる。
二人はそのまま衝突してしまい、福音はその隙にエネルギー弾の雨を降らせた。

～一夏Ｓｉｄｅ～

（ここは……　どこだ？）

波の音が聞こえる中、俺はどこへ向かっているのかもわからないまま足を進めた。

一歩一歩前に足を進めるたびに、砂が澄んだ音を立てる。
さっきまでＩＳスーツを着ていたはずなのだがいつの間にか制服に変わっていて、ズボンの裾は折られており素足のまま砂浜を歩く。
そして手にはいつ脱いだのかもすらわからない靴が握られていた。

「――――――♪　ラ～♪　ラララ～♪　ランラ～ン♪」

気がつけば一人の少女が立っていた。
綺麗な、どこか心地のいい感覚になり、ぼーっと意識が朦朧としてくる。
どこからもなく現れた白いソファに腰掛けて、その少女を眺め続けた。

（……　あれ？）

気がつけば少女は空を見上げて、歌うことをやめた。
辺りはざぁ…ざぁ…と波の音が響く。
俺も少女が見ている空を同じように見上げる。

「呼んでる……　行かなきゃ」

「ん？」

振り返るとそこには少女の姿はなかった。
辺りを見渡すが、人っ子一人見当たらない。
残っているのは波の音だけ。

「う～ん……」

座っているソファから立ち上がり、とりあえず背伸びをする。
するといきなり背中に声が投げられた。

「力を欲しますか？」

それは唐突な質問。
俺は思わず「え……」と戸惑いながらその声のするほうへと振り向く。
そこには先ほどの少女ではなく、白い甲冑を纏った女性が立っていた。
大きな剣を自らの前に立たせ、その上に両手を乗せている。
見た感じ古代の騎士だろうか？
古代かどうかはわからないがとりあえず騎士という言葉が一番合っているかもしれない。

「力を欲しますか？　何のために？」

「そ、そうだな～……」

何のために……　か。
自分の中でその質問の答えはすぐに思い浮かんだ。

「友達を……いや、仲間を守るためかな」

「仲間を…　そう……　だったら行かなきゃね」

「えっ？」

目の前からその白い騎士の女性の姿が消え、またもや後ろから声を掛けられる。
振り向くとそこにはさっきの少女が立っていた。
無邪気な顔を向けられ、その澄んだ目で俺を見つめいる。

「ね？」

その少女は俺の手を取りちょこんと首を少しだけ傾けながらそう言った。

「そうだな」

頷くと少女は微笑み、世界が目を開けられなくなるほど輝きだした。
夢の終わり――そう感じざる終えなかった。

（ああ……）

夢が覚める前に思った。
あの女性、誰かに似ていたな。

～一夏Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

唐梅の傍で一人、春樹は映像を食い入るように見る。

「みんなっ！！」

浮遊スクリーンに映し出されているのはボコボコにされているみんなの姿。
また何もできずに終わってしまうのか……

また自分だけ無傷で、周りの人だけ傷つけて終わってしまうのか……

「そんなの……　いやだ!!」

春樹は無意識に唐梅に乗り、動かそうと試みる。
もちろん動くはずがない。
何度も何度も再チェックを行ってもなお動かない春樹のＩＳ。
原因はあの束ですらわからない。

「動いてよ……　もう…　いやだよ」

泣きながら唐梅に言う。

「もう……　誰も傷ついて欲しくないよ……」

春樹の頬から一滴の涙の雫が唐梅に零れ落ちた。

『咲き誇りなさい。　仲間を守るのでしょう?』

「えっ?」

どこからもなく聞こえてきた女の人の声。
そして突然とてつもない量の光が春樹と唐梅を包み込んだ。
温かい、そしてやさしい。
光が少しずつ消えていき、この瞬間一つの奇跡が起こった。

ヴゥゥゥン……　ピ、ピピッ、ピピピピッ……

響き渡る電子音。
唐梅が再起動したのだ。
春樹は何が起こったのかわからずただただ驚くことしかできなかった。

ＫＡＲＡＵＭＥ　Ｒｅｓｔａｒｔ．．．

Ｓｈｕｎｐｕ　Ｅｎａｂｌｅ

Ｃｈｅｃｋｉｎｇ　Ｆｕｌｌ　Ｓｙｓｔｅｍ．．．　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ

Ｆｏｕｎｄ　Ｎｅｗ　Ａｂｉｌｉｔｙ．．．

（唐梅　再起動…

春風　有効

すべてのシステムをチェック……　コンプリート
新しいアビリティーを発見）

春樹は再起動された唐梅の情報を瞬時に確認、そして数箇所でいろいろな変更が入っていることを確認する。
その中でも一番大きかったのがワンオフ・アビリティーが変わっていたことだった。
いっくんの《零落白夜》と同じ効果を持つ《雪消月》……
だがその《雪消月》がなくなり、新しく別のワンオフ・アビリティーになっていたのだ。

「これは一体どうなってるんだろう」

なぜ変わったのか理由がわからない。
突然の唐梅の展開不可といい、ワンオフ・アビリティーが変わるといいわけのわからないことばかりだが今はそんなことを考えている暇がない。
春樹は一通りすべての変更点をチェックし終わるとすぐさま全てのシステムに異常がないか最終チェックに入る。

「……行けるよね？　唐梅」

ヴゥン…

春樹の言葉に返事するかのように電子音をたてて唐梅が起動する。
両肩の横に浮いている『春風』も問題なし。
今までサブスラスターのみで推進力を補っていた唐梅はメインスラスターを得たことにより、１００％のスピードを出すことができるようになった。

「よしっ、行こう。　みんなを助けに」

「ハルくん！！」

最高スピードで飛翔しようとした瞬間、ある人から名前を呼ばれた。
ハルくん……　こう呼ぶ人物はこの世に一人しかいない――束である。

「頑張って～！」

ニコッと言うよりニマーという感じで笑う束。
春樹は頷き、完全復活した唐梅と共に勢い良くその場を後にした。

「キャアアアアア！！」

ザバァァァンッ！

福音よって鈴はものすごい勢いで海に吹き飛ばされる。

「ぐっ……うっ……」

途中まで少しだけ箒が有利になっていたが、エネルギーの消費が激しい紅椿はエネルギー不足により一気に有利の立場からひき下ろされてしまった。

福音は箒の首を掴んで離さず、止めを刺すためにエネルギー状になった『銀の鐘（シルバーベル）』を覆いかぶせる。

体力と共にＩＳのシールドエネルギーすらない箒は絶体絶命。

（情けない……　こんなところで……）

光の翼が輝きを増していく。

一斉射撃へと秒読みが開始されている中、箒は心の中である人物の名前を呼んでいた。

（い、ちか……　一夏……　最後にもう一度……　会いたかった、
そして…　謝りたかった）

さらに翼は光を増し、もう駄目だと思い目を瞑った瞬間だった。

「……？」

突然、箒を掴んでいた福音の手が離れる。
ゆっくりと目を開けると、目の前に映ったのは荷電粒子砲により吹き飛ばされる福音の姿。
そして……

「あ、あ……　ああっ」

じわりと涙が浮かび上がる。
涙が溢れて来たおかげで姿形は歪んでしまったものの、その人物が誰かはしっかりとわかった。
白式の第二形態、雪羅を纏った一夏だった。

～一夏Ｓｉｄｅ～

「はぁぁぁぁぁ！！」

《雪片弐型》を片手だけで構えて福音に斬りかかる。
それをひらりとかわした福音を、俺はさらに左手の新武器《雪羅》で追った。
《雪羅》――――　状況に応じていくつかのタイプへと変えることのできる第二形態に移行したことによって現れた新武器。
俺のイメージに答えるかのように、指先からエネルギー刃のクローが出現する。

「逃がさねえ！！」

1メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。
シールドエネルギーに阻まれたものの、一撃は完璧に通った。

『敵機の情報を更新。　攻撃レベルAで対処』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体の隙間から生えた翼を伸ばす。
俺の追加攻撃をかわした福音は、反撃に移った。

「そうなんども――――」

「僕に任せて、いっくん」

ドガドガァァァンッ！！

雪羅をシールドモードへと切り替えようとした途端、聞き覚えのある声が俺を守るかのように割って入りエネルギー弾が爆発する。
綺麗な白と赤でコーティングされたＩＳ……
そのＩＳは見覚えがあった。
両肩に新装備が付けられているが、見た瞬間すぐにわかった。

「なかなか洒落た登場の仕方じゃないか、春樹」

「どうだろうね～、いっくんとなかなかいい勝負だったと思うよ？」

起動しないと言っていた新装備、《春風》を装備した唐梅…そしてその操縦者、春樹だ。
そして俺達を守ったのはビットから展開されているエネルギーシールド。
これは恐らく春樹のものだろう。

『新たな敵機を確認。　危険度を最高位へと認定。　最大攻撃力を使用する』

福音が機械音声でそう言うと、エネルギー翼を体中に巻きつけて繭にくるまれた状態へと変わった。

エピソード３０　【海でのショウタイム　中編】（後書き）

春風のイメージとしては劇場版　機動戦士ガンダム００　で登場するダブルオークアンタの肩に装備されているＧＮシールドですね。
春風の場合はそれが左右両肩に装備している感じです。
それで色はもちろん唐梅の色に合わせて、白と赤でしょうか。

しかしここまで出してしまうともしかしたら唐梅の新ワンオフ・アビリティーが予想ついてしまうかもしれないですねｗ
まあ、いいでしょう！　あはっ！

エピソード３１　【海でのショウタイム　後編】（前書き）

皆さんお久しぶりです……
作者のことを覚えてくださっている方はいますでしょうか……（。´Д⊂）

更新遅くなって申し訳ございません＞＜

何分センター試験が……　ががががが

ゆっくりですが更新頑張っていこうと思います～……

エピソード３１　【海でのショウタイム　後編】

～春樹Ｓｉｄｅ～

『新たな敵機を確認。　危険度を最高位へと認定。　最大攻撃力を使用する』

福音が機械音声でそう言うと、エネルギー翼を体中に巻きつけて繭にくるまれた状態へと状態変化し謎の挙動をし始めた。
僕は正面に展開していたシールドビットを一度戻す。
いっくんと僕はその福音の挙動不審な行動にいやな予感を感じ取っていた。
次の瞬間、その繭のように体に巻きつけた翼を勢い良く回転させながら広げ３６０度全方向に向かってエネルギー弾を雨のように降らした。
それもこっちだけに向けてじゃなく、全方位という驚異的な範囲だ。
だから僕達だけじゃなくて、まだダメージから回復しきれていないみんなにも影響があるということだ。

「くっ、春樹あいつらを――――「ううん、いっくん僕が全部片付ける」ま、マジ？」

僕はその場で再度ビットを起動させた。
さっきはシールドビットだったのものが今回はソードビットとして

の役割をしている。
両肩についている春風から計１２基のビット達が一斉にエネルギー弾の豪雨の中へと勢い良く飛び込んで行き一瞬にして全てを切り刻んでいった。
圧倒的なその性能を前に福音が一瞬だけ怯むのが目に見えた。

「いっくん、今！！」

「うおおおおおっ！！」

すべてのエネルギー弾を片付けると同時にそう合図すると、いっくんは《雪片弐型》を構え福音の迎撃へと向かう。
そしてこっちに来て気がついたけどいっくんの白式の形状が大きく変わっている。
たぶん、セカンド・シフトによって大きく変更が入ったのだろう。
進化した白式には強化された大型四機のウイングスラスターが備わっていて、それを使うことにより今まで以上の最高速度を出すことを可能にしている。
あれだけの速度を出すことが可能となれば複雑な動きをする福音も十分追撃可能だろう。
だけど、

「ぜらあああっ！！」

いっくんの零落白夜が片方のエネルギー翼を断つが、留めのもう一

打を直撃させれずにいた。
やはり両方の翼を斬るのは至難の業のようで、何度も二撃目が回避されてしまう。
そうしている間にもすぐさま福音の失った翼は再度構築されてしまい、射撃によって反撃されてしまっている。

「くっ！　まだまだぁぁぁぁ！！」

いっくんの咆哮が響き渡る。
その顔からは苦し紛れながら必死に持ちこたえている様子がわかった。
恐らく。白式のシールドエネルギー残量も限界が来ているはず。

「使うしかない。　ここで……使わなかったら」

頭の中でいっくんが横たわる姿が浮かぶ。
もう、あんな思いはしたくない……　あんな気持ちになりたくない。
覚悟を決めて、ある言葉を口にする。

「唐梅、使うよ。　新ワンオフ・アビリティー、桜吹雪」

～春樹Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～箒Ｓｉｄｅ～

（一夏……　無事だったのか。　本当に良かった、本当に……）

心の中は安堵とうれしさでいっぱいだった。
身を挺して守ってくれた一夏。　胸の辺りが熱を帯び、跳ねる。
そして戦う姿を見て何よりも強く願った。

（私は、ともに戦いたい。　あの背中を守りたい！）

強く、強く願った。　自分が思っている人物が体を張って戦っているのに自分だけこんなところで休んでいるなんぞできるはずがない。
そして、その願いに答えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が散布される。

「こ、これは？　一体何が」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のシールドエネルギーが見る見るうちに回復していくのがわかった。
――『絢爛舞踏』発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了
項目にはワンオフ・アビリティーとの文字が表示されている。

（まだ、戦えるのだな？　ならば、行くぞ！　紅椿！！）

赤い光に黄金の輝きを備えた機体は、空を駆けていった。

～箒Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

（く、くそ……　このままじゃ……）

一夏は白式のシールドエネルギー残量を確認するが、表示されている数字はあまりに低い数字を指していた。
――シールドエネルギー残量２０％、予想稼働時間３分。
今度こそはと思っていたが現実はあまりに厳しく、このままではま

たやられてしまうということは一夏も雪片を振るうたびに感じていた。

「いっくん、下がって！」

「春樹！？　お前それは――」

「唐梅の新しい力……　これで……」

一夏の目の前に色が真っ赤に染まったＩＳが現れた。
もちろん、それは春樹の専用ＩＳ唐梅だが今までとどこか様子が違う。
一度の戦闘に数回しか使用することのできない百花繚乱を使ったときのように細かな紅色の粒子を散布していて、シールドエネルギーを回復させているのかと思いきや否、雰囲気がまったく異なっているのだ。

「後は僕が――」

「待て、春樹」

「「箒ちゃん（箒）！？」」

大きなダメージを受けて安静にしていたはずの箒が急いで駆けつけてきた。

「お前、ダメージは――――」

「大丈夫だ！　それよりもこれを受け取れ！　二人で、決めて来い！」

そう言うと箒の――――紅椿の手が、白式へと触れる。
その瞬間、全身に電流のような衝撃と温かい感覚が一夏を包み込んだ。

「な、なんだ……？　エネルギーが――――回復!?　これは春樹のあれと同じ――――」

「今は考えるな！　言って来い一夏！　春樹、お前も後のことは任せたぞ!!」

「うん！」「おう！」

春樹は白鷺を、一夏は雪片弐型を構える。
何が何でもこれで終わらせる……　二人の間では言葉を交わさずと

もその気持ちでいっぱいだった。

「いっくん……　僕が攪乱させて隙を作る。　だから決定打は」

「任せろ。　早く終わらせて風呂に入ろうぜ」

お互いに頷き、準備は万全である。

「桜吹雪の稼働時間にも限りがあるから、もう行くよ！　四重瞬時加速（クワトロフル・イグニッション）！！」

「「は、早っ！！」」

一夏と箒が驚くのも当然だ。なんせただの瞬時加速ではなく、四重（クワトロ）……　通常の四倍以上の速度が出ている瞬時加速で福音を襲う。

そう、唐梅の新ワンオフ・アビリティーは一時的にＩＳの機動性能を大幅に向上させるという能力だったのだ。

「はあああああっ！！」

ほとんど残像しか確認できないスピードで次々に福音を切り刻んで

いく。
春樹の猛攻を喰らいながらカウンターを返そうとがむしゃらにエネルギー弾を振りまくが残像に当たるだけで当てることができない。
さすがの福音もこの加速に反応できないと判断したのか、一度その場からの離脱を試みる。
だが、そんなことを春樹がさせるはずがなかった。

「まだまだぁぁぁっ！」

春風から機体と同色になった真紅のソードビットが全基射出されると、逃げ腰になっている福音の翼をビット達が無数の斬撃となり両翼とも木っ端微塵に切り刻む。
これで相手は完璧に丸裸の状態だ。

「これで、ラストォォォォ！！」

二度目の四重瞬時加速。
驚異的な速度で一気に福音の背後に回り、唐梅の二刀が並び一断の斬撃を生み出し春樹からの最後の一撃を受け取る。
バランスを崩した福音は重力に身を任せ、海を目掛けて真っ逆さまに落下していく。

（春樹が作ってくれたチャンスだ！　ここまで来たらやるしかねえっ！！）

待機していた一夏は春樹が作ったチャンスを見逃すはずがなかった。
いくら翼がなくなったといえどまだ福音の暴走は完璧に止まっていない。
全ブースターを最大出力まで引き上げ、そのまま落下している福音に零落白夜の刃を突き立てる。

「おおおおおおおっ！！」

押されながらも最後の力で一夏を掴みかかろうとする福音。

「行けえええええっ！！」

その指先が喉元へ食い込もうとする瞬間にその銀色のＩＳはようやく完全に停止した。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

ＩＳのアーマーが粒子のように消え去り、スーツだけの状態になった操縦者が海へと堕ちて行く。

「しまっ――――」

「ったく、相変わらず最後のツメが甘いのよ。最後のツメが」

ようやくダメージから回復したらしい鈴が、海に激突する寸前で操縦者をスライディングキャッチ。

セシリア、シャルロット、ラウラもダメージを受けながらもどうやら無事のようだ。

「終わったね、いっくん」

春樹がゆっくりと一夏の隣に並ぶ。真紅に染まっていた唐梅も気がつけば通常の状態に戻っていた。

「ああ……。　やっと、な」

そう、終わったのだ。　二人は肩を並べて真っ暗になった夜空を見上げた。

何もない背景に無数に広がる光り輝く星たちが今までないほど輝いているような気がしていた。

～春樹Ｓｉｄｅ　Ｉｎ～

「作戦完了――――と言いたい所だが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。　帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「ち、ちーちゃん！　今回の独断行動は全部僕がリーダーとなってやっただけだよ！　責任は全部僕にある！」

「たとえそれが事実だとしてもお前に協力したことには変わりはない。　よって全員同罪だ」

「うっ……　は、はい」

僕たちを待っていたのは冷たいことばだった。
腕組みで待っていたちーちゃんにきつく叱られ、せっかくの任務成功の喜びさえどこかへ消えていきそうだ。
むしろ、冷たい言葉のほうが重量ありすぎてすでに勝利の感覚を忘れちゃったよ……
ちなみに今は全員大広間で絶賛正座中。　体力を使い果たした僕たち戦士達にとってはこれまでにないほどの地獄だった。
なんせ、もうかれこれ三十分はずっとこの状態が続いているような気がする。　いや、むしろ三十分なんてすでに通り過ぎているのかもしれない。

正座が苦手なオルコットさんなんて最初は顔が真っ赤だったのに、今なんて真っ青だ。

「あ、あの、織斑先生？　もうそろそろそのへんで……。　け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

さっきから救急箱やらスポーツドリンクやらを持ってきたりと忙しい山田先生が口を挟んだ。

怒っているちーちゃんにあわあわしながら説教終了の提案をしてくれた山田先生に本当に申し訳ないと思った。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。　み、みなさん任務終わってからまともに休憩していないですし。　ちゃんと服を脱いで全身みせてくださいね？　――あっ！　もちろん男女別ですよ！　わかっていますか、織斑君、九曜君！！」

……わ、わかっているよ～。　もう、疲れ果てて僕もいっくんも突っ込む気にもなれなかった。

それよりも山田先生が『服を脱いで』って言った時に女の子たちがそっと自分の体を隠したのがなんとも言えない。

僕、そんな変態さんの行為なんてした覚えがないのに。

「それじゃあ、ちゃんと水分補給してくださいね？　夏なので水分不足になって倒れられても困りますから」

はーいと全員で返事を返し、スポーツドリンクを受け取りゆっくりと飲んでいく。

「ってて……。　うあ、口の中切れてるな」

「ぼ、僕なんて足腰筋肉痛が……」

いっくんが口の中を切るに対し、僕は全身筋肉痛。
運動をしていないからとかではなく、何か別の理由があるような気がする。例えばあの四重瞬時加速（クアトロフル・アクセル）とか……　むしろそれしか思いつかない。
正座状態から体を崩したいが何分筋肉が悲鳴を上げる所為でどうにもならない。　温泉につかったらゆっくりと体を解さないとだね。

「……」

「な、なんですか？　織斑先生」

「ち、ちーちゃん？　そんなにじっと見られるとなんか監視されてるようで……」

じっーとちーちゃんが僕といっくんを睨んでいたので、僕たちはほとんど同じタイミングで口を開く。

「……しかし、まあ、良くやった。　全員、よく無事で帰ってきたな」

「「あっ……」」

どことなく照れくさそうな顔をしていたような気がしていたけど、すぐにそっぽを向いてしまったので良くわからなかったが褒められた。

キツイ言葉を言った後にこれは卑怯だよ～。　まさに飴と鞭とはこのことである。

ちーちゃん……なんだかんだ言って心配してくれてたんだ。

「「「「「……」」」」」

「ど、どうしたの、みんな？　なんでそんなに僕たちを睨んでるの？」

視線があったのでふっとみんなの方へ視線を移すと、見つめられて――もとい睨みつけられてる？

「え、え～と……　いっくん？」

「お、俺は何もしてないぞ？」

「あの～……　織斑君、九曜君、みんなの診断しますから、ええとですね」

「「「「「とっとと出てけ！！」」」」」

五人に大広間から追い出され、ピシャッと襖が閉じられる。
待っていたのは冷たい冷たい廊下だった……
うん、冷たいよ本当に。

「ふう……」

いっくんの安堵のため息の後すぐにその場に静寂が訪れた。
終わったんだ……　全員無事に帰ってきた。
大切な人を『誰も失わず』帰ってきたんだ。

「……春樹」

そっといっくんが拳を僕に向けてきた。
それに僕も拳を合わせる。

「俺達守れたんだよな。　みんなを」

「うん、目標は達成だよ、いっくん。　お疲れ」

本当に……本当にお疲れ様。

エピソード31　【海でのショウタイム　後編】（後書き）

～～《皆さんお久しぶりコーナー》～～

Ｍｉｔｓｕ「みなさん本当にご無沙汰しております。　作者のＭｉｔｓｕです！」

春樹「久しぶり～！　主人公の春樹だよ～」

Ｍｉｔｓｕ「一体何ヶ月ぶりの更新だろうか……　長らくお待たせしてしまって本当に申し訳ございません。　受験生とスランプが重なってしまい最悪な状況となってしまいました」

春樹「そっか～……　そうだよね、作者さんももう受験生なんだよね。　ちなみに今中間試験の真っ最中だとか」

Ｍｉｔｓｕ「うん、そうなんだよな。　でも2学期以降の成績はまったく関係ないから頑張らなくて大丈夫なんだよ。　うん……　単位さえあれば」

春樹「そ、その最後の単位さえあればって……　なんだかとても心配だよ？　大丈夫？」

Ｍｉｔｓｕ「だ、大丈夫さ！　は、ははは！」

春樹「う、う～ん。　作者さんがそういうなら……　それより今回は僕の新しい唐梅についてだけど」

Ｍｉｔｓｕ「うんうん、前回からようやく唐梅がフルパワーで稼動

できるようになったからね。　それにいろいろあってワンオフ・アビリティーまで変更かかってるし」

春樹「あれってどうなってるの？」

Ｍｉｔｓｕ「詳しい詳細はまた本編でって感じかな。　というわけで今日はこれくらいで……」

春樹「え～……　まあ、仕方がないねっ！　それじゃあ、感想待ってま～す！」

エピソード32　【それぞれの夜　ＳＩＤＥ　ＩＣＨＩＫＡ】（前書き）

夜……　といえばどことなくピンクの香りがしますが、全然普通ですよ？ｗ

エピソード32　【それぞれの夜　ＳＩＤＥ　ＩＣＨＩＫＡ】

～春樹Ｓｉｄｅ　Ｉｎ～

「それでそれでなんだったの？　教えてよ～。　ねっ、お願い？」

「ダメ、機密情報だから」

それは夜ご飯を食べている最中だった。
僕のとなりでパクパクと夜ご飯を食べながらシャルさんが一年の女の子数人に囲まれ質問攻めを受けている。あのメンバーの中でシャルさんが一番絡みやすいとの判断から彼女を選択したんだろうけど、それはそれは大きなミスだった。
彼女は専用機持ちの中だと一番責任感が強いからね。

「ちぇ～……　シャルロットってばお堅いな～」

「それじゃあ、九曜君に聞いてみよっ！」

「ふぇ？」

まさかの僕に回ってくる質問バトン。

ちょうどご飯を口に含んだときにそう言われたから変な声が出てしまった。

「それでそれで何があったの？ね～、ね～」

「九曜君、教えてよ～。　ね、ね、ね？」

教えてはいけないと言われたら人間教えたくなるのはどうしてだろう。
でもここは心を鬼にしても――

「ほらほら、楽になっちゃいなよ。　ほら、ほら」

ぽよんぽよん。

「そのお堅い口をあけてくださいまし、お代官様ぁ～」

ムニュムニュ。

向こうがワザとやっているのか定かではないが僕の体のあちらこちらに女の子の柔らかい部分が押し当てられる。柔らかい部分って何かって？　そ、それはみんなの想像に任せるよ……

兎に角、うん、負けそうだよ。理性という糸が軽く引きちぎれそうだよ。

「春樹～……？」

「ひ、ひゃい！　え、え～と、言いたいのは山々なんだけどね、なんせ聞いたら制約がつくみたいだから……　ごめんね？」

シャルさんの怖いジト目と背筋がゾクリとするような声によって正気を取り戻した僕はみんなにそう説明した。

「あー、制約つくのは困るかな」

「だったら、はい。　それじゃあこの話はこれでおしまい。　もう何も答えないよ」

「「「「ぶーぶー」」」」

僕を囲んでいた女の子達をいとも簡単にあしらう姿はどこか年上を思わせた。

う～ん、流石はシャルさん。　きっと彼女がいなかったら僕はさっき、事の始末を全て大っぴらに説明するところだった。

「どうかした？」

ご飯を頬張りながらそんなお姉さん風を吹かせているシャルさんの姿を見ていると、視線を感じたらしい彼女はそう尋ねて来た。
正直な話し、そのときは何も用事はなかったけど何か言わないとまたジト目を貰いそうだから何か言わないと……僕が必死にシャルさんを見ながら思考錯誤していると、

「シャルロット、浴衣の胸元ゆるんでる」

彼女の隣に座っている女子がなにやらボソっを何かを呟いた。
内容まで聞こえなかったけど、嫌な予感しかしない……嫌な予感しかしないよっ！

「っ……！？」

言うまでもなくなぜか顔を真っ赤にし、なぜかすぐさま胸元を腕で覆い隠す。
思わず僕が何かをしてしまったかのような状況。　というより、僕、何もしてません。　指一本振れてないよ！
そう考えている中シャルさんは一方的に目を使って抗議をしてくる。

「さ、さっきもそうだったけど春樹って胸……好きなの？　えっ

ち……」

「ふぇっ！？」

いきなり罪を擦り付けられた気分である。
た、たしかにさっきの女の子達の猛攻には思考回路がオーバーヒートして大変なことになりそうだったけど……
良く考えれば言い逃れができない現実に気がついた。
はー……　変態さんの行為だけは絶対にしないと思っていたのに……

「というのは、うっそー。　浴衣はゆるんでません」

「えっ！！」

僕がお箸を加えながらガックシとしている最中にまた何やら隣の女の子がシャルさんに呟いた。
きっと僕に最後の止めを与える何かを言っているに違いない。
楽しい学校生活が終わりを告げると思ったときだった、その女の子の呟きを聞いた途端耳を真っ赤にして突然立ち上がった。
そして何事もなかったかのようにまたその場に座る。

「……あははは、お刺身おいしいなぁ。　あははは、うふふふ」

気がつくとシャルさんの抗議の眼差しは僕から移動して隣の女の子に。
そしてすとんと着席し、ぱくぱくとお膳の上にあるお刺身を口の中へと運んでいく。
一体何が起こっているのか僕にはさっぱりわからなかった。

「それにしてもシャルロットは、えっちぃなぁ～。　それで九曜君を誘惑しようとしてたの？」

「ち、違うよ！？　ぼ、僕は、ただ、そのっ……！」

どうなっているのかと思っていると今度はわたわたと何か慌てふためくシャルさん。
余計にどうなっているかわからなくなる。

「は、春樹？　その……さっきはごめんね？」

「え……？　う、うん」

状況を把握できないままとりあえず返事だけを返す。
ニコリと笑みを浮かべるとなぜかシャルさんは隣の女の子の横腹をつねっていた。
さらに顔には出ていないけどどこか怒っている雰囲気がする。

「でも春樹がだめなんだよ。　すぐに誘惑されそうになってるから……」

何やら最後にまた呟いたけど大丈夫だろう……たぶん。

～春樹Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ざぁん……ざぁん……ざぁ…。

海の静かな波の音が響き渡る。

「っと、ふぅ……」

「もう流石にここまで暗くなると泳げないね。　真っ暗だよ～」

一夏と春樹は海から上がり、一呼吸置く。

食後に少しの間休憩した後に二人は旅館を抜け出して夜の海へと遊びに出ていた。
旅館から出たすぐはオレンジ色だった空が今は黒に染まっており、ポツリと月がさびしそうに輝いている。

「そういえば春樹、夕方に俺の傍についていたか？　その……俺が倒れた後だと思うんだが」

「みんなで容態だけ確認したけど、それからすぐに飛び出して行っちゃったからね～。　そんなに長い間は一緒に居なかったと思うけど」

一夏の心の中でもやもやしていることがあった。
夕方に現実に居たのか、それとも夢だったのかわからない世界。
目が覚めた頃にははっきりと覚えていたような気もしていたが、今はその内容さえほとんど記憶になかった。

「それじゃあいっくん、僕は先に上がるよ。　冷え込んできてるしね」

「おう、俺はもう少しここにいるわ」

「そっか。　じゃあお先～」

タオルを羽織り、春樹は旅館へと戻っていく。
その場に残された一夏はすっと目を閉じ、静かに波の音だけを聴いていた。
どれくらい時間が過ぎただろうか。　その穏やかな波の音を聞いているとふと背後に人の気配を感じ取った。

「い、一夏……？」

名前を呼ばれて、一夏はゆっくりと振り向く。
月明かりに照らされたのは、水着姿の箒だった。

「箒？　そういえば、昨日の海では見かけなかったけど」

「あんまり見ないで欲しい……。　こ、この格好だとなぜか落ち着かないのだ」

「そ、そうか。　それはすまん」

そう言われて慌てて顔を逸らす。
だが、はっきりと見てしまった。
箒にしては珍しいというか意外と言うか……　白の水着だったまでは誰もが普通に思うが、まさかのビキニだったからである。
縁に黒のラインが入っていて、なかなか肌の露出面積が広いという。

（ほ、箒がビキニか……　ま、まあ女だから普通といえば普通か）

そう思うが、実際一夏の中で動揺は隠せなかった。
その同様を振り払おうと別のことを考えようとするが、一夏もこう見えて健全な男の子だ。
鮮明に焼きついてしまった箒の水着姿が頭から離れず、むしろ落ち着かない気分が増してしまうという始末。
さらに追い討ちをかけるかのごとく箒は一メートルほど間を開けて隣にすわり、気分はさらに乱れてしまう。

「……」

「……」

「えーと、だな……」

「う、うん……」

何かを話そうにも緊張で心臓がドキドキしてまともに話せそうにない一夏。
それでも無理やりにでも口を開いてでてきたのは、

「そ、その水着……　似合ってるな、うん。　ぜ、全然良いと思うぞ？」

「っ……！　そ、そうか／／／」

ピクリと箒の肩が揺れる。

「こ、これはだな……　その……　勢いで買ってしまったような感じで……　じ、実際に身に着けようと思おうと心の準備が必要だったりしてだな……」

体育座りをしていた箒はそういうと、ぎゅっと自分の両足を抱きしめた。

一夏に似合っていると褒められ、勢いで買ってしまった事実を伝え、箒の顔は湯気がでるのではないかというほど真っ赤に染まってしまう。

「なるほどな。　初日の自由時間に箒を見かけなかったのはそれが理由だったからか」

月が静かに二人を明るく照らし続ける。

「……なあ、箒」

「な、なん……です、か？」

「その変な敬語は何なんだ？　夕飯からずっと気になっていたんだが。　普通に喋ろうぜ」

実はというと夕飯からずっと箒はこんな感じなのである。
たまにいつもの喋り方と一変して、なぜか敬語で話す場面があるのだ。

「とある筋から、お前が奥ゆかしい女が好きだと聞いてな」

（ら、ラウラかぁぁぁぁ！！）

つまりは気がついたときに一夏の好みの女性のタイプに合わせようとしていたわけである。

「いや、まあ、なんだ。　箒はいつも通りのほうが俺は好きだな」

「す、す、す、好きっ！？」

自分が言ったことを後から再確認し、ハッとする一夏。
だがすでに言ったことであり、もう遅い。
もちろんこと一夏の場合は恋愛の意味で好きと言った訳ではないのは性格的に丸わかりである。

「ち、違うぞ！　その、なんだ、友達として好きというか！　あぁぁぁ、くそっ！」

「わ、わかっている一夏、落ち着けっ！！　ご、ごほん。　こ、これでいいのか？」

ごたついている中、箒は咳払いをしてその場を元に戻し、さらにはいつもの喋り方に戻った。

「お、おう。　それでさっきのはその……」

「だからわかっていると言っているだろう。　す、少し驚いただけだ」

少しどころではなかったような気がするがそこは突っ込まない方が吉と思い一夏は何も言わなかった。

「そういえば、髪大丈夫だったか？　ちょっと焼けてたみたいだが」

福音との戦闘で箒は火傷の怪我を負っていた。
だが幸いなことに軽症で、あとの被害といえば、

「あ、ああ。　リボンがなくなっただけで、大事ない」

そう、リボンが焼けてしまったのだ。
今は代えのリボンで後ろをくくっていると言う状態。

「そ、そうか……　それでだな」

一夏は立ち上がり岩陰に置いてあった自分の着替えのズボンからあるものを取り出した。
『リボン』そう、一夏の手にはリボンが握られていた。
そしてそれを照れくさそうに箒に差し出す。

「こ、これは……？」

「こんなのしか用意できなかったが、誕生日おめでとう、箒」

今日は七月七日。　7月7日と言われて思いつくことといえば七夕

だ。
だがそれだけでなく、本日は箒の誕生日でもある。

「わ、私の誕生日を……」

「ちゃんと覚えてたぞ？」

「そ、そうか。　その……あ、ありが……とぅ」

顔を下に向けながら一夏の手からリボンを受け取る。
そしてすぐさまその新しいリボンで箒は自分の髪をくくり直した。
いつもとまったく同じ髪型のポニーテールだが、自分が買ったリボンをその場でつけてもらったので一夏は恥ずかしさ半分、うれしさがこみ上げてきた。

「一夏、一つ……し、質問してもいいか？」

「おう、今日は箒の誕生日だからな。　答えられる範囲でなら全部答えてやるぞ」

「そ、その、なんだ……　い、意識するのか？」

「意識する？　どういうことだ？」

質問の意味がわからず首を傾げてしまう一夏。

「だ、だからだな！」

勢い良く箒は一夏の腕を掴んで自分の谷間に引っ張る。
緊張しているらしい本人は恐らく自分が何をやっているのかまったくわかってないのだろう。

「わ、私を、異性として意識するのかと訊ているのだ」

そうぼそぼそっと呟く箒はいつもとどこか違う雰囲気を醸し出していた。
その証拠に耳が真っ赤になって、恥ずかしそうな顔をしている。
それはそうだろう、そんな質問なんて勇気がなくてはなかなか言えるものではないのだから。

「う、うん」

勢いに押されて査定してしまっているようにしか見えないが状況が状況だ。
なんせ、静かに揺れる波の音、目の前にビキニの水着を着た幼馴染、

それに二人を照らす月明かりとくれば雰囲気が完璧にあっち方向だ。

「そ、そうか……」

顔をゆっくりと持ち上げ、気がついたら二人は見つめあっていた。
その場の流れのように箒はゆっくりと目を閉じていく。

（嘘……だろ？　やばい……、勝手に体が、引き込まれて――）

箒の肩に振れるとびくんと少しだけ震えた。
だがそれもたった一度だけ……　それから改めて身を預けてくる
箒に一夏はゆっくりと顔を近づけていき、そして、

ごんっ。

（ん、なんだこれ？　額に何か当たってるような……）

額の違和感を疑問に思い、ぱっと目を開ける。　開けてしまえば、
その場は地獄と化す事を知らずに。

「……ブルー・ティアーズ？　なんでこんなものがこんな所に」

そう、青いビットがその咆哮が一夏の額にぶつかっていたのだ。
さらにそのビットはごつん、ごつんと何度もその咆哮を押し当てている。
そして次の刹那、

ズバシュッ！

「ぬおおおおっ！」

間一髪で一夏は突然発射されたＢＴレーザーを回避する。　髪が少し焼けてしまい、まさに間一髪だ。

「ふ、ふふふふ。　一夏さんも春樹さんもいなくて探しに来て、何か声がすると思って駆けつけてみましたら……」

黒いオーラを纏ったセシリアが獲物を狙うかのごとく立っていた。
もちろんＩＳのアーマーを絶賛展開中だ。

ドガンッ！

「そうそう。　まさかこんなことになってるなんてね……　一夏、

いっぺん死んで見る？」

今度は背後に大きな音が起こり、すぐさま振り向いてみるとこちらも狩人へと変貌した鈴が手に携えた青龍刀を岩に叩きつけて粉々にしていた。
こちらも勿論の事アーマーを身に纏っている。

「ほ、箒、逃げるぞっ！！」

「えっ、あっ。　きゃあっ！？」

いきなり抱きかかえられて可愛い悲鳴を上げるが、そんなことに構っているほど一夏に余裕があるはずがない。
さっきまであったピンク色の雰囲気は緊張感と共にどこかへと飛び去ってしまった。
むしろ今はこの二人の狩人から生きて逃げられるのかという恐怖心でいっぱいだった。
一夏は次の朝日を拝むことはできるのだろうか。

エピソード32　【それぞれの夜　ＳＩＤＥ　ＩＣＨＩＫＡ】（後書き）

ＳＩＤＥ　ＩＣＨＩＫＡと来れば次回はもちろん春樹です。
次回は完璧にオリジナルになるので更新に時間が掛かるかも知れないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1245r/

IS〈インフィニット・ストラトス〉　～BLOOM～

2011年10月21日09時15分発行